
異国恋歌 ～ 龍神の華 ～

霜月璃音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異国恋歌 ～龍神の華～

【Nコード】

N0315K

【作者名】

霜月璃音

【あらすじ】

辰南国の景華姫は、国王の一人娘として大切に育てられていた。柳鏡、趙雨、春蘭という三人の友達と共に遊び、成長していった彼女だったが、ある悲劇的な事件がきっかけで、生まれ育った城を追われてしまうこととなる……。

姫と龍神 変化と決意

「母様、まだ眠くならないよ。もっとお話聞かせてよ。」

小さな男の子が、母親を見上げながらこう言った。父親そっくりの深い緑色の瞳に見上げられて、母親は小さく笑みをもらした。その隣では、自分そっくりの娘も期待を込めたまなざしで兄と同じように母親を見上げている。

「仕方ないわね。じゃあ、もうひとつだけ。とっておきのお話を聞かせてあげましょう。」

そう言って苦笑をもらす母親に、子供たちは目を輝かせて大きく頷いて見せた。

「それでは、お話をはじめましょうか。遙か昔のお話です。ある国のあるお城に、お姫様が住んでいました。」

「わあ、素敵！私、お姫様が出てくるお話、大好きよ！」

母親は、その細い指をそつと娘の唇にあてた。

「ほら、お話を聞く時には静かにね。その国は豊かな国で、中央に住む砂嵐族^{サラシ}、北に住む亀水族^{カスイ}、西に住む虎神族^{コシン}、そして南の緋雀族^{ヒジャク}、東の清龍族^{シンロン}という五つの部族で成り立っていました。」

「あつ、待ってよみんな！」

小さな女の子が、慌てて転んでしまった。年のころはまだ五つ、六つ位だろうか、ほんのりと緑色がかった髪を肩まで伸ばした、真紅の瞳のかわいらしい少女だ。

「大丈夫？」

横から手を差し伸べたのは、二つほど年上に見える朱色の髪の少女だった。

「うん、ありがとう、春蘭^{シュンラン}！」

先ほど転んでしまった少女をつかまらせて立ち上がらせると、春蘭と呼ばれた少女はニコツと微笑んだ。

「怪我はしてない？景華？」
キョウカ

銀色の髪を首のあたりで束ねた少年が覗き込んできた。その青い瞳に、彼女はドキリとした。

「あ、う、うん！趙雨チョウウもありがとう！」

四つ彼女よりも年上の少年は、怪我がないことを知ると満足気に笑みを返した。

「まったく、景華は鈍くさいからなあ。怪我でもさせたらこっちが大目玉だっていうのに。」

「ちよつと、柳鏡リウキョウ！鈍くさいってどういうことよっ？」

無造作に切った黒髪の頭をかきながら、少年は深い緑色を宿したきつい瞳でこちらを見返した。よく見れば、柳鏡の瞳の色は、景華の髪の色とそっくりだった。

「そのままだよ。」

少年はそうぶつきらばうに言い放った。

「よくも言ったわね！今日こそぜーったいに許さないわよ！」

景華は、真っ赤な顔をして怒っている。

「そう言っておきながら三日後には寂しくなって遊びに來いって言うの、誰だっけ？」

景華は言葉を失った。今までにもこの二人は顔を合わせる度にこのような喧嘩をしていて、その度にいわゆる絶交状態になるのだが、結局は景華が寂しくなつて柳鏡のもとに使いを送る、というようにいつも解決していた。

「こ、今度は絶対に寂しくなんかならないもん！」

「ああ、無理無理。景華にはぜーったいに無理！」

いつものことだと思つて見物していた二人も、さすがにそろそろハラハラしてきた。

「りゅ、柳鏡、言いすぎなんじゃ……。」

趙雨が止めに入った。

「ほら、景華も。柳鏡は景華の反応がおもしろくてわざとからかつてるんだから。本気にしちゃダメよ。」

春蘭も景華をなだめにかかった。

二人に止めに入られては、景華も戦意を喪失させるほかなかった。

「う……。覚えてなさいよ、柳鏡……。」

「気が向いたらね。」

「ちよつとおー！」

「「はあ……。」「」

事態の收拾がつかないことで、趙雨と春蘭の二人は同時に溜息をこぼした。

「お姫様は、春蘭、趙雨、柳鏡という友達に囲まれて毎日を楽しく過ごしていました。」

母親がそこで話をいったん区切った。

「それで？どうなるの？」

子供たちがまだ起きていることを確認すると、母親はまた話を続けた。

「やがて、お姫様たちはどんどん大人になっていきました。そして、柳鏡と趙雨は立派な青年に、景華姫と春蘭も素晴らしい女性にそれぞれ成長していきました。そしてお姫様は、趙雨に恋をしました。」

「どうして？」

小さな娘が気に入らないというように口を尖らせた。

「どうして柳鏡じゃあないの？喧嘩するほど仲がいいって、私聞いたことあるのに。」

母親は、そつと口元を綻ばせた。

「そうねえ。でも、この時のお姫様は、いつもいつも優しくしてくれる趙雨の方が好きだったの。」

「ふうん。」

まだ納得のいかない様子でいる娘を優しくなでながら、母親は話を続けた。

「そしてお姫様は、十六歳になったある日、思い切って趙雨にそのことを話したのです。」

初夏の風が、森のすがすがしい香りを城の中にまで運んで来た。十六歳になった景華は、少しだけ緑色がかった髪を、背中まで伸ばしていた。それに比べて、瞳の色は相変わらず、不純物の一切混じらない真紅の色だった。

「あ、趙雨！」

彼女が廊下に出たとたんに出くわしたのは、彼女が一番会いたかった人だった。

「やあ、景華姫。今日はお見舞いが上がったのですが、もうお加減はよさそうですね。安堵しましたよ。」

「うん、もう大丈夫よ。」

その答えを受けてより一層嬉しそうに微笑む趙雨に、景華は幸せそうに笑みを返した。

ついこの間まで、彼女は熱風邪で寝込んでいたのだった。

「さっき柳鏡と会いましたが……。」

「あ、うん。お見舞いに来てくれたの。といっても、私専属の護衛に雇われてるとかで、ずーっとそこにいたんだけどね。俺にうつしたらあんたに看病させるからな、とか言いながら。」

趙雨がぷつとおかしそうに吹き出した。

「そうですね、その光景が目には浮かびますよ。あの柳鏡ならそう言うでしょう。」

「本当に。趙雨はこんなに優しいのに。大違いだわ。」

そう言つて景華はつんとふてつたような仕草を見せた。

「当たり前だ。みんながみんなあんたを甘やかすと思ったか。」

背後からの声に、二人が同時に振り返った。

「な、いつからいたのよ！というか、どうして戻ってきたのよ？休みにいったんじゃないかったの？」

「あのなあ、誰かほかのやつに交代してもらってからでないと休める訳ないだろうが。警護っていうのはな、面倒なことに四六時中あんたのそばに控えてないとならないんだよ。……。」

柳鏡は、そこで趙雨をじつと見た。

「そういう訳で頼んだぞ、趙雨。じゃ。」

柳鏡はそう言うとき軽く手を挙げて踵を返して行ってしまった。

『え、今のつて、気を使ってくれたの……？』

景華は一瞬、自分と趙雨が一緒にいるのを見て、柳鏡が気を利かせてさっさとなくなったのかと思った。

『そんな訳ないわね……。あの柳鏡に限って。』

景華がじとーとした目で柳鏡の後姿を見つめていることに気がついて、趙雨は一呼吸置いてから景華に話しかけた。

「そんなに気になりますか、柳鏡が？」

景華の顔が一瞬にして真っ赤になった。

「そ、そんな訳ないじゃない！柳鏡は昔からただの喧嘩友達で……。」

いつもは優しい趙雨の笑顔が少し強張って見えるのは、単なる彼女の思い過ごしかもしれない。でも……。

「ご、誤解しないで……。私が小さな頃からずっと好きなのは……趙雨だから……。趙雨には、誤解されたくないの……。」

言ってしまったあとで、景華はハツとした。自分はなんということ言ってしまったのか！でももう後には引き下がれない。たとえばんな答えであっても、彼なら今までのように優しく接してくれるだろう。

そう思っているながらも、やはり答えの恐ろしさから逃げ出したくない、彼女はギュツと目をつぶった。

ポン、と温かい手のひらが彼女の頭の上に置かれた。

「よく言えましたね。あなたのそういう勇気のある所が、私も好きですよ……。」

「へっ……？」

景華は、状況が飲み込めずにポカンとした顔で、彼女より頭一つ分背が高い趙雨の顔を見上げた。

「私も、姫様を長年お慕いしておりました……。」

「っ……。」

景華は文字通り言葉をなくし、真っ赤になった顔の口元に手をあてた。

「……。」

柳鏡は、景華に薬を飲ませるのを忘れたと思って戻ってきていたが、柱の陰から出るに出られないでいた。

『いつかこんな日が来ることはわかっていたはずだ……。この日が来たら、笑って祝ってやろうと思っていたのに……。』

「ダメだな、まだ自信がない……。」

彼は柱の陰というなんともいたたまれない場所から、景華の幸せそうに輝く笑顔を見つめていた。

「じゃあ、やっぱり柳鏡は景華姫が好きだったのね？どうして早く言わなかったのかしら。」

「さあねえ。でも、言わない方が姫のためになると思っていたのかもしれないわね。だって柳鏡は、子供の頃から景華姫のことだけを想ってきたのだもの、景華姫が趙雨が好きだったことが、わかっていたのかもしれないわね。」

母親は、子供の質問に苦笑しながら答えた。

「柳鏡、かわいそう……。」

子供たちが口々にそういうのを聞いて、母親はそつと自分の唇に人差し指をあて、静かにするようにうながした。

「おしゃべりするようならお話はここでおしまいにしますよ。」

二人は母親を見上げてじつと押し黙った。

「景華姫のお父様も、二人の結婚には大賛成でした。趙雨は優しいだけでなく賢かったので、姫と結婚して立派な王様になってくれると思ったのです。」

「お父様、あのね……。」

小さな頃からしているように、景華は自分の父を見上げた。

「どうした、景華？お前がそんな風にする時は、昔からこの父に願
い事がある時だったな。」

景華は父親の様子に安心して話を始めた。

「私が結婚したいって言ったら、お父様は困る……？」

ガクンッ！

父親の体から急に力が抜けたのが、景華にも伝わった。

「そ、そんなことはないが……。お前もこの前の誕生日で十六歳と
なり成人したことだし、そろそろ縁談について考えなければならな
いとは思っていた……。しかし、まさかそんな言葉がお前の口から
出てくるとは思わなかったよ。」

そう言っ頭をなでってくれる父の手のひらの優しさに、景華は安堵
した。

「ところで、どこの誰なんだ？私のかわいい娘の心を射止めたのは
？柳鏡か？」

景華はふくれっ面になった。

「どうしてそこで柳鏡が出てくるの？趙雨よ。虎趙雨！」

父はほんの少し驚いた顔を見せたが、すぐに満面の笑みを浮かべた。
「そ、そうか……。趙雨なら、この父も異存はない。昔からお前に
優しく接してくれたし、今もその英知で様々な面で私を支えてくれ
ている。しかし、意外だったな。お前は柳鏡の方が合うのではない
かと思っていたよ。」

景華は下からじとーっと父親を見上げた。

「だから、どうして柳鏡なの？いつつもあんなに意地悪ばかりして
お父様がなぜ柳鏡を護衛に選んだのか、私、今でもわからないもの。
強いから？」

柳鏡は十八歳の若さで辰南の国でもっとも優れた武人だと言われ、
他国からは龍神と呼ばれて恐れられるほどの腕前となっていた。

ふっと、珎王^{チン}の目線が遠い彼方を見渡すようなものになった。

「そうだな、確かに、腕が立つというのが一番の理由ではあるが…
…。護衛というのはね、強いだけじゃダメなんだ。その主人を守る

という強い意志と忠誠心が必要なんだよ。その点で柳鏡は、私が求める一番良い護衛だったんだ。」

「ふうん……。」

『そりゃ、お父様には忠誠心も持っていると思うわ。でも、私になんてそんなもの一度も、かけらさえ見せてくれたことなんかないわよ……。』

「難しい話をしてしまったようだ……。いつかはきっと、この意味がわかる日が来るだろう。ところで、趙雨と話についているのか？」

真剣に考え込んでいる娘を見て、玠王は苦笑して話題を変えた。

「あ、う、うん……。今、外で待っているんだけど……。」

「それを早く言いなさい。随分と待たせてしまったではないか。趙雨、入りなさい。」

「失礼します。」

王の掛け声で、趙雨が緑色の飾りがついた入口から姿を現した。銀の髪は腰に届くほどの長さになっていたが、彼は相変わらずそれを肩のあたりで結んでいた。瞳の色も、昔とちっとも変わっていない。

「やあ、久しぶりだね、趙雨。いつも景華が世話になっているよ。」

玠王の言葉に、趙雨は恭しく礼をしてから答えた。

「お久しぶりでございます、陛下。この度は、お話があってお伺いしました。」

「ああ、景華から聞いたよ。おめでとう。いや、よろしく願いますと言った方がいいかな？大切な一人娘だからね、しっかりした男と結婚させたいと思っていたんだが、君なら安心だ。知識も豊富な君にゆくゆくは国王としてこの国も任せられると思うと、私も肩の荷が下りたよ。」

趙雨がニコツと微笑んだ。

「お許しいただけますか。ありがとうございます。」

玠王は満足気に微笑みながら、何度も頷いていた。

「お父様、ありがとう！」

景華は、本当に嬉しそうな、眩しく思える程の笑顔を父に向けた。
「ところで、君は確か長子だったよね？景華と結婚するとなると、虎神族の後は継がないが、弟に継がせるつもりかい？」

趙雨はまた、恭しい礼をしてから答えた。

「はい、虎神族の次代は、弟の英明^{エイメイ}に継がせようと思っております。父も賛成してくれました。」

それを聞くと、玠王は目を細めて笑った。

「そうか、私の元に話をしに来る前にそこまで準備を整えていたのか。何事にも下準備というものは重要になってくる。君に次代を任せられると思うと、ますます安心したよ。」

「光栄なお言葉です。ですが、私がそのような責任ある立場につくのは、まだ何十年も先のことだと思っています。どうぞ、陛下の御代でますますこの辰南国を発展させて下さい。」

ハハハハハ、ハハ……。

明るい日差しが差し込み、夏の香りがする部屋の中から、その日差し以上に明るい笑い声が響いた。

だが、その時誰が気づいただろうか。明るい夏の太陽をも覆い隠してしまうような暗雲が、すぐそばまで迫っているということに……。

「それで？お母様。その後はどうなるの？」

子供たちの興味が話にどんどん引き込まれていることに気づいて、若い母親は少々後悔した。本当は話の途中で子供たちが寝付いてしまふ予定だったのだ。

『困ったわ……。あの人も私が戻るのを待っているだろうし……。』
ホウ、と溜息がこぼれた。

「ねえ、まあだ？お母様。」

兄妹は、小さな瞳をキラキラと輝かせながら、母親の口から話の続きが語られるのを今か今かと待ち望んでいた。

「はいはい、続けますよ。それから一月程経ってから、お姫様は趙雨と婚約の式をあげました。」

「え？結婚式じゃなくて？」

いかにも納得がいかないという顔付をして、子供たちは母親を見上げた。

「その当時は、内乱が頻繁に起きていたの。だから、趙雨とお姫様を結婚させると、虎神族だけを特別扱いしてしまうことになるから、とりあえず婚約だけ、という形になったのよ。」

「ないらん、てなあに？戦争とは違うの？」

妹の方が疑問を差し挟んだ。どうもこの子は小さい頃の母親似で、気になることは口にせずにはいられないようだ。

「国の中で起きる戦争のことよ。五つの部族から成り立つ国だったから、その中で争いが激しかったの。」

「変なの。みんな仲良くすればいいのに。」

「そうだ。僕たちの国だって、お母様が女王になる前まで五つの部族に分かれていたんでしょ？それなのに、今は内乱なんか起きてないじゃないか。」

口々に不平不満をもらす子供たちを、母親は優しくなでた。

「そうね、みんながみんな、いい人だったらいいのにね。とにかく、その時はそうではなかったみたいなの。」

もう秋になるという時期のはずなのに、景華の体には真夏のような熱気が感じられていた。

彼女は今、城の楼閣の上から、広場に集まった国民に向かって手を振っていた。隣には、もちろん趙雨の姿があった。

今日は、彼らの婚約が発表され、きらびやかな式典が行われていた。その中の行事の一つとして、広場に集まって祝福の意を表してくれた国民に手を振る、というものがあり、それが今彼女が楼閣の上にいる理由であった。

「たくさんの人ね。」

景華は、眩しい日差しのをせいで手をかざしながら、広場に集まっている国民の数に感心してそうつぶやいた。

「そうですね。これだけの民がこの都で暮らしているのですよ、姫様。驚きましたか？」

趙雨の優しい問いかけに、景華はコクリ、と頷いた。

「知らなかったわ。考えてみれば私、お城外に出たことなんて、数えるほどしかなかったもの。」

趙雨は、驚いたかのようにほんの少し目を見張った。

「そうでしたか。……いつかもし、お許しができれば……。その時は、私をご案内しましょう。」

「ほ、本当？」

景華が頬をつつすらと上気させて嬉しそうにする様子を見つめて、趙雨がニツコリと微笑んで頷いた。

「ただし、時間があればですけどね……。」

「え？なあに、趙雨？聞こえなかったわ。」

趙雨があまりにも小さくつぶやいたので、景華にはそれが全く聞き取れなかった。

「いえ、なんでもありませんよ。」

趙雨が顔をあげていつもと同じように微笑んだので、景華はそれ以上は詮索しないことにした。

下からの熱気がどんどん上がってくる楼閣で、景華はもう一度都全体を見渡した。彼女が今いるのは辰南国でもっとも高い場所であり、同時に、それまでの人生でもっとも幸せな地点だった。

暗雲が、ついに彼女に追いついた。

昼間の熱気をよそに、夕方からはしとと雨が降り出した。

それでも宴会は続けられていたが、さすがにもう解散したようだ。時刻は、すでに夜中と言ってもいいような頃だった。

景華は、昼間の興奮のせいでなかなか寝付けずにいた。

『ちよつとだけ体を冷やしてこようかな……。』

そう思った彼女は、水浴びの仕度をして部屋を出た。

「どこへ行く？」

部屋を出た所で、柳鏡に声をかけられた。彼は、いつも景華の部屋の入口を守っていた。

「水浴び。ついて来ないでよ。」

ビシッと柳鏡に向かって指をさしながら景華が言い放った。柳鏡は、座ったままいかにもだるそうに答えた。

「あんたについて行っただっておもしろくない。もう少し成長してから言っんだな。」

バサッ！

何か布切れのようなものが柳鏡に向かって投げつけられた。

「なんてこと言うのよ、変態！……風邪引くわよ。」

そう言っただけを向けた景華の姿を見送った後で、何が投げつけられたか確認した柳鏡は、ふっと笑みをこぼした。

それは、贅沢な金糸の縫いとりが施されているもので、彼女の寝具の一つだった。

「あきらめないと……ならないんだよな……。」

彼の脳裏には、今も幼い頃からの彼女のことを鮮明に焼きつけられていた。

「あいつなら、きっと幸せにしてやれるんだろうな……。」

そして、そこには幼少時からの親友だと思っていた少年の姿が常にあった。しとしとと降り続ける雨が、とてもうっとおしく思えた。

「あれ、お父様の部屋、明かりがついてる……。もうお休みのはずなのに……。」

景華は、水浴びに行く途中で父の部屋の前を通り過ぎる時、違和感を覚えた。

「あれ？ 鍵も掛けてない……。さては酔ってるのね、お父様。起こしてあげないと。」

「お父様？ 入るわよ。」

ギィ……。

やけに空気が湿っているのは、先ほどから降り出した雨のせいだろ

うか。気のせいか、床も濡れている。

「やだ、雨漏り？」

そうつぶやいて床を見下ろした彼女は、そこに凍りついた。

雨漏りのそれにしてはやけに温かい水たまりは、真っ赤な色をしていた。あきらかに「血」である。

「景華姫……？」

部屋ついでの奥から彼女を呼ぶ声がして、こちらと奥の空間を仕切っている衝立が倒れた。

「っ……！」

そこにいる人物に、彼女は絶句した。

衝立の向こう側にいたのは、昼間彼女の隣で国民に手を振っていた趙雨と、幼い頃からの彼女の唯一の女友達である春蘭だった。

趙雨の方はその衣に返り血をまだら模様模様に浴び、その手には祭祀用の四神剣が握られていた。その切っ先からは、まだ血が滴っている。そして……。

倒れている人物に、景華はゆっくりと眼を向けた。嘘だろう、と。自分は夢を見ているのだ、と思いながら。

そこにあつたのは彼女の父、玠王の青白く変わり果てた姿だった。

「お、お父様！なぜっ、なぜっ！」

景華は、足元に横たわっている父に取りすがってすすり泣いた。

「忠実な民を欺く不実な玠王は、この虎趙雨が討ち取った……。」

「ど、どういうこと……？」

そう言つて趙雨を見上げた景華は、その冷たい瞳にゾツとした。いつもなら柔らかい光をたたえているはずの瞳は、今は見つめられただけで凍りついてしまふかのような冷たさを内包していた。

「城から滅多に外に出ないあなたにはわからないでしょう。」

春蘭が、こちらにも信じられない程冷たい口調で話を切り出した。

「今年は、麦も米も、何もかもが凶作でした。それはもう、過去五十年の中で最悪と言われる程の……。それにも関わらず、王はあなたの成人の式典があるとか、王妃様の死後十年たったから追悼の式を

行いたいからと言って、苦しい生活をしている民からさらに搾取したのです。」

「……。」

景華には、すでに言葉を紡ぐ気力も残されていなかった。ただ彼女の耳だけが、話し続ける春蘭の声を拾っていた。

「もちろん、陳述だって何回も行いました。それも自分たちが第一だと考える王の前では無意味に終わってしまいました……。あなたは知らないでしょうけど、今もこの城壁の外では多くの人が命を落としているんですよ！」

「っ……！」

声こそは出さないが、景華があまりの事実には驚き、目を見開いたのが薄暗がりの中でもわかった。

「私は、あなたを愛してはいません、姫様。」

さらに衝撃の事実には、景華はついに動くことさえできなくなった。

「あなたと結婚すれば、玠王に直系の男子がいなかったために、自動的に私に王位継承権が与えられる。私はそれに目をつけました。誰か民の暮らしをよく知る者が王位に就けば、このような搾取が行われることはなくなるはずですからね。」

景華は、うまく回らない頭で一生懸命に状況を整理しようとした。

「つまり、王位のため……。」

やっと口について出たのが、その一言だった。

「そうです。私は、小さな頃からここにいる春蘭ただ一人を思ってきました。彼女はいつも周りに対して公平で、思慮深さを持っていた。あなたと丁度真逆ですね……。」

冷たい口調に、冷たい微笑み……。これが、つい先程まで彼女の隣で笑ってくれていた趙雨なのだろうか。

「あなたと遊んでいる内に、本当にあなたが憎らしくなってきました……。望めばなんでも手に入る環境。一人娘だからとことんあまやかされていたことも事実でしたし。城の外の民が明日の糧の心配をしているような時に、あなたは明日のお菓子のことなんかをのん

きに考えていたんですよ！」

春蘭のとどめの一言に、景華は自分の幼く、無邪気な時代が音を立
てて崩れ去っていくのを感じた。

趙雨が、まだ四神剣に残っている血を振り払って囁いた。

「さて、姫様。ここであなたに見られてしまったのは誤算いしずえでしたが、
仕方ありませんね……。よき時代、よき国を創るための礎いしずえとなつて
下さい……。」

趙雨が四神剣を振り上げるのが、目の端にゆっくりと映った。銀色
の切っ先が、室内の小さなろうそくの光をあびて閃いた。

「い、や……。」「

死にたくない！

彼女がその瞬間に唯一考えたのは、それだった。
誰か、助けて！

「柳鏡……！」

その名前を呼んだ瞬間に、彼女の体が何か力強いものに引かれるの
を感じた。

ガシィィィン！ガラン、ガランガラン……。

足元に、何か金属質の物が落ちた音が反響した。

景華は、そこでそつと目を開けた。

彼女を引き寄せた力強いものは、柳鏡の腕だった。彼の利き手であ
る左手には、常に彼が背負っていた大剣が抜き身の状態でしっかり
と握られていた。

「りゅ……きよ……。」

「怪我はないか？」

彼女は声にならない声で、辛うじて彼に呼びかけた。そして、彼か
らの問いに涙をボロボロとこぼしながら頷いた。

「衛兵！」

趙雨がそう号令を発すると、どこにいたのか、バラバラと二十人近
い数の衛兵がその姿を現した。

「どういうことだ、趙雨……？それに、こいつらは虎神族の人間じ

やないか？城の衛兵に化けてはいるが、俺の目はごまかせないぞ……。」

「国家のために不実な王を処刑しただけだ！お前にもわかるだろう？王がいかに国民に苦しい生活を強いていたか！」

趙雨が、今までにないほど語気を荒げた。おそらく、予想だにしかかった柳鏡の邪魔で苛立つているのだろう。

「だからどうした……？王位の篡奪に正統性など主張してどうなる？間違いを正すために間違いを重ねるのか？」

趙雨の表情が変わった。そこには、柳鏡への敵意がむき出しにされていた。

「なぜ他の衛兵は出て来ない？こんな騒ぎになっているのに！」

さすがの柳鏡も、少々焦りが生じているようだ。城の残りの衛兵が全く気配も感じさせないことに、苛立ちを感じているように、あたりを見回した。

「みんな眠っているわ。差し入れの酒に睡眠薬をまぜておいたから……。」

「くそっ……！」

柳鏡の背を、冷たい汗が流れた。

「俺一人なら戦って切りぬけることもできる……。だが……。」

柳鏡は、ちらつと自分の腕の中を見やった。そこには、ただただ震えているだけの景華の姿があった。

「姫を抱えてとなると……。いや、やるしかない！」

「しっかりつかまつてろよ！絶対に離すな！」

柳鏡はそう言いながらすでに地を蹴って飛び出していた。

ザンッ！ザシユッ！

雨の中でも、濃い血の匂いが鼻腔をつく。

柳鏡の動きは、すさまじい速さだった。あっという間に近くにいた三人を薙ぎ倒し、景華を抱えたまま夜の闇に姿を紛れさせた。

「くそっ！追え！城門を閉ざして一步も外へ出すな！」

趙雨が四神剣を拾い上げ、それを振り払って鞘にさや戻しながら怒号を

あげた。

「趙雨……。」

心配そうに眉根を寄せながら、春蘭は趙雨の衣の袖をギュッと握った。

「大丈夫だ……。改革の前に多少の犠牲はつきものだから……。柳鏡に邪魔されたのは計算違いだったけどな……。」

趙雨は、王の返り血を嫌という程浴びた自分の衣装を見下ろした。そして、足元に崩れているその亡骸を……。

「衣替え、しなければ……。」

その言葉の真意は、彼一人にしかわからないだろう……。隣で不審そうに自分を見上げる春蘭の頭をなでながら、なんでもないよ、と自分にも言い聞かせた。

秋の始まりのうっとうしい雨は、いつかは痛みも流してくれるだろう……。

「乗れっ！」

柳鏡は乱暴にそう言うのと、景華を馬上に押し上げた。そして自分もその後ろに乗ると、手綱を握り締めた。

「絶対に落ちるなよ！何があっても離すな！」

馬の横っ腹に強く蹴りを入れると、馬は高いいなきを響かせて走り出した。運よく、彼らが飛び乗った馬は景華の婚約への祝いの品で、軍馬にも劣らないような立派な馬だった。その速さは、疾風が空を翔るようだ。

『おそらく、門はすでに閉ざされてしまっただろう……。残された道はただ一つ……。』

「こいつならやれるかもな……。」

柳鏡は余裕がない中でも、不敵な笑みを浮かべた。腕の中の存在を、彼はなんとしても守り抜かなくてはならない……。それは、彼女のためであり、不遇の死を遂げた彼の主君のためであり、なによりも彼自身のためでもあった。

「この先に、一部だけ大きく城壁が崩れている場所がある。そこを飛び越えて城外に出るからな。合図をしたらしっかりとつかまれ……。怖かったら目を閉じていろ……。」

微かに、彼の言葉に応える感覚が腕の中から感じられた。

彼は、自分が今馬を疾駆させている通りの先に、城壁の崩れている部分を見てとった。

「行くぞっ！」

彼の衣の襟が、ギュツと強く握られた。

『いちかばちかつ！』

いつも競技でやっている乗馬とは違う。障害物を乗り越えなければ待ち受けているのは死であり、失敗は絶対に許されない。ましてや、二人乗りで超えるなど、通常の馬では絶対にできないだろう。

「うおおおおおおおっ！」

柳鏡の体を、浮遊する感覚がとらえた。

馬は見事に城壁を超えた。彼の目線の下で、崩れた石塀が自分の上を飛び越えて行く者を静かに見送っていた。

しかし、その爽快感に浸る暇さえ、今の彼にはなかった。

「もう大丈夫だ。城の外に出てしまえばこっちのものだからな。」

そう言っただけの腕の中を見下ろしたが、返答はない。馬の揺れの他にも、小刻みに彼女の肩が震えているのがわかる……。

「……………」

かける言葉など、彼は持ち合わせていなかった。

その存在の小ささと儚さに不安を感じながら、彼は馬を走らせ続けた。

「景華姫、かわいそう……………」

二人の目から、ぱたぱたと涙がこぼれていた。兄の方は、鼻をグスグスといわせてさえいる。

「そうね…………」。でも、姫の苦勞はここで終わりじゃなかったの…………。

「

柳鏡は、そのまま馬を走らせ続けた。平地を避け、山道を行ったせいでだろうか、彼らが乗っている馬の速度はだんだんと落ちてきていた。

『そろそろ追手をまいたと思ってもいいだろうか……。』

厳しい表情でそう考えていた柳鏡の目に、小さな泉が姿を現した。

『姫にも休息が必要だろうし……。ここで休んだ方がいいかもしれないな……。』

柳鏡が手綱を引くと、その走る速度が緩まり、小さくいなないてから完全に停止した。彼は自分がまず馬から降りると、不思議そうに彼を見つめている景華を馬上から降ろした。

「ここで少し休もう……。こいつが限界だ。」

そう言つて馬の方を顎でしゃくつてから、景華の足をそつと地につけた。案の定、その足には力が入らないようで、彼女は力なくその場に崩れた。

喉が渴いていたのか、馬はすでに泉の水を飲み始めていた。柳鏡は景華をその場にきちんと座らせると、立ち上がつて水を汲みにいった。ちょうど、彼の腰には酒宴の残りの酒が入られていたひょうたんが下がっていた。

しゃがみ込んで水を汲み始めると、ひょうたんから出てくる気泡の、ぶくぶくという耳障りな音が辺りに響いた。

追手は、いっどこから現われるかわからない……。彼は、自分の神経が小さな音も聞き逃すまいと逆立っているのを感じていた。心臓の鼓動が、嫌という程大きく聞こえる……。それは、今にも彼の口から飛び出してきそうな程だ。

「飲んだ方がいい……。」

彼がそう言つて差し出したひょうたんに、彼女は見向きもしない。ただぼんやりとその場に座っているだけだ。

「……。」

仕方なく、彼は自分の口に新鮮な水を一口含んだ。

そして、なんの反応も示さない景華にその水を飲ませるために、その顔を力ずくで自分の方へと向けた。

「っ……………」

ドンッ！

景華は、力一杯柳鏡の胸を押し返した。

「くっ……………」

柳鏡はどうしようもない苛立ちを感じた。今の景華からは、生きようとする力のかけらすら感じられない。

「そんなに嫌なら水位自分で飲め！死にたいのかっ！」

そして、そんな状態の彼女に拒絶されたという事実が、これ以上はないという程、彼の心に重くのしかかっていた。景華は、柳鏡の問いに全力で首を振った。まるで、言葉にできないものを懸命に表現しているかのようなうだ。

柳鏡は、ホウ、と溜息をついた。

「怒鳴ったりして悪かった。大丈夫か？」

柳鏡の言葉に応えようとしたのか、彼女は口をパクパクとさせた。そして、そのあと自分の喉元に手を当てて、再びパクパクと口を開いた。その表情には、焦りの色が見てとれる。そして、何度もその行動を繰り返してからどうしようもなく不安そうな顔をして、不思議そうに彼女を見つめている深い緑の瞳を見上げた。真紅の瞳からは、涙があふれている。

柳鏡は、彼女のその様子から何かを察した。だが、嘘だと信じたかった。

「まさか……………」

自分の仮説が間違っていることを確かめたいという一心で、言葉を紡ぐ……………」

「声が……………出ないのか……………」

「っ……………」

真紅の瞳の持ち主は、涙で顔をクシャクシャに歪めながら、コクツと小さく頷いた。

「そんな……っ。」

柳鏡の驚きを隠せないという表情に彼女は何度も頷いて見せた。その様子に彼自身も絶望を感じ、行き場の無い憤り、そして自分自身の不甲斐なさを感じた。

自分がかもつとしっかりしていれば、趙雨や春蘭の様子にもかつと気を配っていれば、景華をこんな目に遭わせることはなかったのかもしれない、と……。

だが、暗くなっても仕方がない。彼は敢えて前向きに現状を捉えることにした。

「命があるだけマシだ……。先天性のものではないから、なんとかなる……いや、俺が必ずなんとかしてみせる！だからあんたは、今は生きることだけ考えるんだ！先を急ぐぞ。」

今の彼女には、柳鏡だけが頼りだった。いや、今の彼女に残されたものは、もはや柳鏡だけだった。幼馴染の、護衛の青年……。今はその背中がなんと頼もしく見えることだろう。

気を抜けばすぐに真っ白になってしまいそうな頭をなんとかして奮い立たせながら、その背中に向かって大きく頷いた。

「くそっ、まだ見つからないのか！」

一方、辰南の城の中では趙雨が二人の足取りが一向につかめないうちに怒り狂っていた。

「逃げられてもう三日も経った！草の根をかき分けてでも探し出せ！必ず見つける！」

趙雨にしてみれば、景華に逃げられるというのはとんだ誤算だった。本当は、玠王と共に逆賊に襲われたことにして殺し、自分が王位について事態が収拾した頃に春蘭を王妃に迎えるつもりだったのだ。その上、姫が生きているということになれば、王位継承権は婚約者である趙雨ではなく、景華姫のものということになる。彼は、王位に就くことができなくなってしまうた。

「趙雨、各部族や集落に連絡をした方がいいわ。柳鏡と景華を見か

けたら即刻捕らえよ、と。特に柳鏡は、玠王殺しの犯人であり、景華姫をも誘拐した凶悪人だとね……。」

春蘭が、冷たい口調でそう言い放った。そこには、子供のころ景華に向けたような優しさは微塵も感じられない。

「そうだな……。早馬を用意させよう。」

そう言っていると趙雨は、勢いよく戸をあけて出て行った。

その頃、景華と柳鏡の二人は、何度も続けて発射される矢の攻撃を回避しながら馬を疾駆させていた。虎神族の者に違いない、彼らは、柳鏡だけではなく景華をも亡き者にしようと襲ってきていた。

「いいか、振り落とされるなよ！」

彼がそう言って馬の横っ腹を激しく蹴ると、その速度がさらにあがった。

「なるべく俺の陰に隠れている！あんなのにあたりたくないだろう？」

柳鏡は、景華の上に覆いかぶさるようにしながら馬を走らせていた。それでも、景華が自分の胸に懸命にしがみついているのがわかる。

ズドッ！

「ぐうっ……！」

右肩に焼けるような痛みが走った。どうやら、下手の鉄砲ならぬ矢も、数を打たれるとあたってしまうようだ。

「くそっ……！」

体中を何かが駆け巡っている。心臓の鼓動は早くなる一方なのに、手足が冷たくなり、意識は朦朧もろろとしてくる……。

「毒矢を使うとは、いい根性じゃねえか……。あいつら、いつかまとめてぶった切ってやる！」

景華が腕の中で震えている……。彼女を安全な場所に連れて行くまでは、彼は意識を失う訳にはいかなかった。

ドスッ！

二本目の矢が、今度は背中中の丁度真中にあたった。

「チツ、面倒だ！」

そう言つて柳鏡は馬の鼻先を真逆に向けると、背負つていた大剣を抜き放つた。本来、片手で扱えるような重さではないが、馬上であり、なおかつ景華を腕に抱いているということ以利き腕のみで扱うことを余儀なくされた。

『くそつ、重い！』

両腕で扱つていた時にはなんとも思わなかった重みが、今はたまらなく辛い。毒矢に体力が奪われているせいでもあるが、大剣はその左手にズシリと重かつた。

「前言撤回だ！おまえら、今まとめてぶつた切つてやる！」

次の矢をつがえていた一人が、狙いを定める前に柳鏡に叩き斬られた。柳鏡はその隣にもまとめて斬撃を浴びせようとしたが、重みのせいで狙いが狂ってしまった。視界がかすんでくる……。どうやら、毒に対する抵抗力が落ちてきてしまったらしい。

『まずい……。この人数なら倒すことは容易だ。だが体力の限界がくるだろう……。後から第二陣や三陣が来ないとも限らないし……。』

『

ふらり、と馬上の柳鏡の体が、一瞬不自然な揺れ方をした。

「しめた、毒が回ってきたようだ！このまま弱らせて殺せ！」

刺客の一人がそう声をあげた。自分がしがみついている柳鏡の体がだんだんと冷たくなつてきているのは景華にもわかつていた。だが、彼女にはそんな彼を助ける術もなく、ただ邪魔にならないようにしているのが精一杯だった。

「お前らごときに殺^やられてたまるか！」

朦朧とする意識の中で、冷たい汗が柳鏡の背に流れ落ちた時だった。ドクン。

柳鏡の中で、何かが脈打つた。ドクン。

それは、彼の体の中を出口を求めて彷徨っている。解放せよ、と……。

「今が、その時か……。」

彼は、その一瞬の内に迷うことなく自らの運命を選び取った。

「我……龍神の、封印を……ここに解放せり……っ！」

柳鏡が息も絶え絶えにそう呟いた時だった。景華の肌が、凄まじい力の収束を感じ取った。あまりの重圧に、息をすることさえ難しい。そして。

轟音とともに、青白い光の爆発が起こった。景華はあまりの眩しさに目を閉じてしまったが、自分を離さずにいる腕の感覚だけが意識の隅に残されていた。

次に目が覚めた時、彼女は張り出した木の根の下に横たわっていた。柳鏡の姿が見えないことに気づいて慌てて起き上がると、彼女が探していた人物は、すぐ隣に腰掛けていた。

「起きたのか……。」

彼は、ちょうど服を着付け直している所だった。おそらく、毒矢にあたった部分に応急処置を施していたのだろう。傷の具合が知りたくて、深い緑色を湛えた瞳をじっと覗き込んだ。

「俺なら心配ない……。」

ほつと、口から安堵の息がこぼれた。その次に気になったのは、あの瞬間に何があったのかということだった。再び、彼をじっと見上げる……。

「あれか……。敢えて言うなら龍神の呪い、だな……。」

なんとなく言葉を濁すような言い方だったが、もしかしたら彼にもうまく説明ができないのかもしれない、と思つて、深くは追求しないことにした。

「水飲んだら行くぞ……。」

ふい、と背を向けて立ち上がった柳鏡の服は、背中部分が血の色に染め変えられていた。それは、彼が流した血液の量を物語っていた。

「あんなことがあったからには、ここからは休みは取れそうもない

……。覚悟しておけよ……。」

自分につき従って歩いてくる景華に向かって、彼は背を向けたまま声をかけた。

「……。」

気のせいかな、その背中がやけに辛そうに見えた景華だったが、声が出ない辛さを痛感するだけだった。

柳鏡は、景華を乗せたまま馬を走らせ続けてた。途中何度か休憩はとったものの、ほぼ不眠不休の状態だった。

「ハア……、ハア……。」

さすがの彼でも、二日間休みなしでいるのは相当応えていた。

「もう少しの……はずなんだが……。」

腕の中から、景華がその顔を覗き込んだ。どうやら、どこに着くのかということ、彼自身の疲労具合が気になっているらしい。

「清龍の、里だ……。あそこは……青龍の加護を、受けた者でなければ見つけれない……。あそこに入れば……まずは安全だ……。」

そう答えてやっても、景華はまだ一抹の不安が拭えないらしく、柳鏡の方を見上げていた。

「俺は……大丈夫だ……。」

景華は気づいていた。時間が経つにつれて、自分が馬上から振り落とされないように捕まえていてくれる柳鏡の腕が力を失っていくことに……。

それでも、自分のために大丈夫だと答えてくれる柳鏡を早く休ませるために、一刻も早く目指す清龍の里に着いて欲しかった。

その一心で、前方を見つめた時だった。

視界が急に開けたと思うと、緑豊かな木々の合間に、多くの家が立ち並ぶ様子が見えた。中には、木の上に建てられている家さえある。少し離れた場所には畑が見え、清らかな水を湛えた泉も、それを跨いでいる橋も見取ることができた。

「着いたぞ……。清龍の……里だ……。」

柳鏡が、力ない笑みを浮かべた。その時だった。

「柳鏡？ちよつと、柳鏡じゃないの！」

そう言つて干しかけの洗濯物をその場に放り出し、駆けて来る姿があった。ほんの少し年上だろうか、褐色の肌に、柳鏡と同じ真っ黒な髪的女性だ。

「ね……えさん……。あと……頼みますよ……。」

その姿を認めた柳鏡は、そう言い残すとドサリと音を立てて馬上から転落した。

「っ……！」

助けに動きたいものの、景華は一人では馬から降りられなかった。

「いいわ、今降ろしてあげる。」

柳鏡の姉は、景華を馬から静かに降ろしてやると、柳鏡を肩に担いで、景華の方を振り返った。

「手伝つて。その子を連れてくる位なら、できるわよね？」

そう言いながら馬の方を顎でしゃくると、彼女は先に歩きだしてしまったので、景華は恐る恐る手綱を引いた。馬は、疲れ切っていたせいもあつてか、大人しく彼女に従つて歩いた。

「とりあえずここでいいわ。」

柳鏡の姉は、村はずれの一軒の家の前で足を止めた。その家は、村の中心部には程遠く、いかにも疎外されているという雰囲気だった。戸を開けて中へと入っていく彼女に、景華は門前の手ごろな木に手綱をつないだ後でつき従った。

中は、彼女が見たこともない程簡素な造りだった。寝台が一つに、衣装箱が一つ。それに、小さな茶卓と隅に台所がついているだけだった。

不躰だとはわかつていながらも、彼女はあまりの珍しさに辺りをきよきよと見回した。

「ここ、こいつの家なの。随分簡素な造りでしょ？」

気を失っている柳鏡を寝台に下ろしながら、彼の姉は景華に話かけた。初めて見た一般の家というものに戸惑い、彼女はうまく返事を

返せなかった。

「そっか、見たことないのか。」

その言葉に、景華はひどく動揺した。自分の正体が彼女にばれてしまっているということだ。いつでも逃げられるように姿勢を整えながら、景華は油断なく相手を見据えた。

「大丈夫よ、私は味方だから。それに、こいつに後は頼むって言われちゃったしね。とりあえず、そんなに警戒しなくていいよ。」

顔の横で大げさに両手を振って見せながら、柳鏡の姉は一步景華に近付いた。

「私は、ロクメイリン龍明鈴。ここにいる龍柳鏡の姉よ。あなたが景華姫？」

先程の柳鏡の様子からも怪しむ必要がないと判断した景華は、彼女の問いにコクコクと二度頷いた。

「城から早馬が来てたわ。あなたたちを見つけたら即刻捕らえるように。柳鏡、本当にあなたのお父様を殺害して、あなたをさらって来たの？」

景華は、慌ててぶんぶんと首を横に振った。一体、どこからそんな話が出てきたのだろう。

「やっぱりね。柳鏡にそんな度胸あるわけないじゃない。まあ、罪を着せるにはちょうどいい相手だったのかもね。」

少し意味ありげな言い方をしながら、明鈴は手早く柳鏡に布団をかけてやった。

「あーあ、気絶したまま寝てやんの。アホな顔ねえ。で？一体どういう経緯でこの清龍の里に来たの？」

死んだように眠っている柳鏡の頬をつねってから、明鈴は景華に向き直った。

「……。」

声が出ないというのはなんと不便なことか。景華は、一生懸命身振り手振りでそれまでのことを説明しようとしたが、あまりにも複雑なことが多過ぎて不可能だった。そこで、なんとか声が出なくなっただけでも伝えようとした。

喉に手をあてたりしている景華の様子を見て、明鈴は何が言いたいのかすぐに悟った。

「声、出ないの？」

ちようど先程と同じように、景華は首を二回、縦に振った。

「お姫様が声が出ないなんて柳鏡から聞いたことなかったけど……。最近なつたの？」

また、深い緑色の髪が二度、縦に揺れた。どうやら、この動作は強い肯定を表しているつもりらしい。

「そっか……。困ったな。柳鏡が起きるまでは、事情は聞けないわね。いや、たたき起すかな？」

今度は首を横に振ってみせる景華に、彼女は笑いかけた。

「冗談、冗談。さすがに可哀想だからね。起きたら呼んで。今日はこの辺で仕事してるから。」

景華の髪が再び縦に揺れるのを確認してから、明鈴は外に出た。

「やれやれ……。ひと波乱ありそうね……。」

柳鏡が誘拐した、という話は最初から信じていなかったが、姫が護衛である柳鏡ただ一人に連れられてこの里にやって来たとなると、事態が深刻だということは嫌でもわかる。

「まあ、どんなことになっても、私はあいつの味方だけだね……。」

□

小さい頃、兄たちと仲が悪く、自分の母親にも疎まれていた明鈴にいつも味方してくれたのは柳鏡だった。一緒に食事を抜かれたこともあれば、夜の森に二人だけで置き去りにされたこともある。

「姉さん、俺がついているよ！」

その度にそう言って励ましてくれる柳鏡は、明鈴にはこの里の中で一番大切な存在だった。

『あいつは、自分の大切な人を隠すためにここに連れて来たんだから。何があっても、この里に匿^{かくま}ってあげないと……。』

自分でも厳しい顔つきになっていることに気付きながら、明鈴は残っていた洗濯物をあつという間に干し終えた。

柳鏡が目覚めたのは、夕方になってからだ。外で薬草をより分けていた明鈴の元に景華が駆けて来て、その袖をクンッと引っ張った。

「起きたの？」

明鈴の問いかけに答えことなく、景華は踵を返して駆け戻った。

「柳鏡？ やつと起きたの？」

明鈴がそう言いながら開けっぱなしになっていた入口をくぐると、柳鏡はちょうど大きく伸びをしていた。

「ああ、姉さん。おはようございます。」

清龍の里に着いたという安心感からか、柳鏡のずっと張りつめられていた神経は、ほぐれたようだ。

「ほお、こんな時間まで寝ておいて、どの口がそれを言うのかねえ……。さあ、事の次第を説明してもらおうか……。」

最初柳鏡を白い目で見ていた明鈴は、今は真剣な顔をしていた。割と整った顔立ちで、鼻筋がすっと通っている。

柳鏡の方も、急に真剣な顔になった。

「それは父上たちにも話さなくてはならないから、屋敷に行つてから話します。とにかく、最初に俺たちを見つけたのが姉さんで良かった。おそらく、もう一方の里には城からの急使が来たでしょう？」

「ご名答。そこまでわかつてるなら早いわ。私もついて行くから、仕度をしなさい。血まみれじゃあ行けないわよ。」

明鈴は、入口に向かって歩き出した。

「奥方様とは……相変わらず？」

柳鏡は、敢えて明鈴の顔を見ないようにしながら少し重い口調で訊ねた。明鈴の足が、ピタッと歩みを止めた。

「……まあね……。それより、あんたは自分の心配をしなさい……。」

「そうですね……。ほら、あんたも行くんだよ。」

二人の様子を気遣わしげに見ていた景華の手を、羽織だけを着替え

た柳鏡が引いた。

姉弟の父親である清龍の長が住んでいるという屋敷は、里の柳鏡の家とは反対側に位置していた。荘厳な造りで、装飾というものが全くと言っていい程施されていない。

「私が先に行つて父上に用件を伝えてくるから、あなたたちはここで待つてなさい。」

明鈴はそう言うと、古い木の扉をくぐつて奥へと消えて行つた。

気のせいか、景華は里の中を歩いてくる時からずっと人々の冷たい視線を感じていた。それが気になつて辺りを見回している景華に、柳鏡がほとんど口を動かさずにつぶやいた。

「あんたに対する敵意じゃない。俺に対するものだ。気にするな。」景華は気にするなと言われてしまった以上は仕方ないと思い、辺りを見回すのをやめたが、頭の中では考え事を続けていた。

『どうして柳鏡が……？三男とはいえ、長の血を引く直系のはずなのに……』

「父上がお呼びよ。人払いもして、最小限の人数で待つているわ。」ふと耳に入つて来た明鈴の声で、景華の考え事は中断された。

「奥方様は……？」

「あの人もいるわ……。」

「そうか……。」

柳鏡が軽く唇を噛むのが見えた。明鈴も、なんとも形容し難い顔をしている。

屋敷の中は、森の中に建っているにも関わらず天井が高く、広くて快適そうであった。人の気配が全くないのは、先程明鈴が言っていたように人払いがされているせいだろう。足音がやけに耳につく。入口から真っ直ぐに進んだ、一番奥の部屋の前で、柳鏡と明鈴が足を止めた。

「父上、龍柳鏡、只今戻りました。」

柳鏡の声がほんの少しだけ震えているのは、気のせいだろうか。

「入れ。」

短く、入室を促す言葉。その声から、二人の父親が相当厳しい人物であることが窺える。

「失礼します。」

二つの空間を仕切っていた戸が、柳鏡の手によって開けられた。重い音が響く……。部屋の中には、先程の声の主と思われる壮年の男性と、明鈴よりももう少し年上に見える男性が二人、そしてそれらの母と思われる女性の姿があった。みな真つ黒な髪の色で、目の色も同じくらい黒い。どうやら、くせ毛なのは柳鏡だけのようだ。

「よく帰った。まずは、なぜ姫君をお連れしてここに帰ったのかを説明してもらおうか。」

威圧的なその様子は、景華の足をすくませた。

「簡潔にお話させていただきます。虎神族の虎趙雨による玠王の暗殺が起こりました。王位の篡奪を目論んだものと思われます。姫と婚約したことから王位継承権を得たと考えたためにそのような行動を起こしたようで、緋雀族の雀春蘭ジャクとの企てです。姫をも亡き者と企んでいたようなので、ここにお連れしました。」

柳鏡は一礼してからよどみなくそう言くと、口を閉じてぐつと前を見据えた。

「その話、どこまで信じて良い？向こうの里には、城からの急使が入っていたぞ。お前が玠王を殺し、景華姫を誘拐したとな。」

若い男性のうちの一人が口を開いた。明鈴が隣で、アホか、と呟いているのが辛うじて景華の耳に届いた。

「私が申し上げたことは全て真実ですよ、長兄殿。ここにいる姫ご自身が証人となってくださることでしょう。」

いつも景華にしているように不敵な笑みでそう切り返した柳鏡だったが、言葉の端々にいつもとは違うとげとげしいものが感じられた。

「景華姫、お久しぶりです。龍連瑛レンエイでございます。」

柳鏡の父は、椅子から立ち上がって景華に対して礼をとった。

「まずはこの度の父君の御不幸、お悔やみ申し上げます。ところで、只今息子の柳鏡が申しましたように、城では虎神族の趙雨による王

位の篡奪が行われたということですか？」

景華は大きく首を縦に振ってみせた。

「姫君は、事件の恐ろしさからお声をなくしていらっしやるようです。」

明鈴がつけたしてくれたおかげで、なぜ景華が言葉で連瑛の言葉に答えられなかったかを皆一度に理解した。

「それはおいたわしい。姫君は、よき歌い手でしたのに。ですが、どうぞご安心下さい。そのような謀略が巡らされていたことが明らかになった今、私も清龍族は、全力を持って姫君の御身柄の安全を図らせていただきます。」

「あなた、そんなに簡単に柳鏡なんぞの言ったことを鵜呑みにしてよいのですか？」

連瑛が深々と景華にお辞儀をしている時に、今まで後ろで成り行きを見ていた女性が声をあげた。

「どういうことだ？」

連瑛は、後ろを振り返って不愉快そうに訊ねた。

「あのような下賤の者が申す事が、果たして真実でしょうか？あれの母親と一緒に、あなたを騙すのがうまいこと。姫君だって、本物がどうかはわからなくてよ。」

「黙りなさい！私は姫君と城で何度もお会いしている。あの方は紛れもなく景華様だ！」

連瑛の怒声を浴びせられて、女性はさも面白くなさそうに口を閉ざした。

景華は、その様子を睨みつけた。

自分のことは仕方がない。会ったこともない彼女に、自分が本物の姫かどうかなんてわかるはずもないのだから。しかし、柳鏡に対するあのひどい物言いは許せなかった。なぜ母親が自分の息子にあのようなことが言えるのだろうか。その時、あれの母親と一緒に、という言葉が景華の耳に引っかった。まさか、柳鏡とこの女性は親子ではないのだろうか。

「とにかく、姫君の安全は保障いたします。部屋を用意させましょう。」

「お待ち下さい。」

連瑛が立ち上がった侍女を呼ぼうとするのを、柳鏡が止めた。

「姫君は、私の家に滞在していただきます。護衛である私は姫のおそばを離れる訳には参りませんが、私がここに留まるとなると、奥方様のご機嫌を損ねてしまいますから。」

連瑛は、ちらりと自分の妻に視線を当ててから言葉を発した。

「確かにそうかもしれない。だが、あそこは村の外れだし、侍女もないだろう？ 姫君にご不便をおかけする訳には……。」

柳鏡はホウ、と溜息をついてから兄たちをぐつと見据えた。

「正直なことを申し上げます、父上。姫君をここに置くことができないのは、欲深な兄上たちの目にさらすのが恐ろしいからです。」

「なんと！ 自分を！ 自分の兄に向って！」

柳鏡に先程長兄殿、と呼ばれた男が声を荒げた。

「それに姫君は、奥方様に対しても大層ご立腹のようです。とてもここに留まりたいとおっしゃるようには思えません？」

柳鏡が片眉を吊り上げて鼻で笑った。景華は、この位の仕返しは当然だ、と思っていた。隣の明鈴は小さくガツポーズしている。

「姫君、いかがなさいますか。不便ですが柳鏡の下で暮らしますか？ それともこの館で暮らしますか？」

景華は、迷わず柳鏡の袖をつかんだ。それは、今は口がきけない彼女にとつての最大限の意思表示だった。その景華の肩を、柳鏡は不敵に笑って自分の方へと引き寄せた。勝負あった。

「……わかりました。それでは、あの家にお住まい下さい。柳鏡、必要なものがあれば遠慮なくこの館に取りに来るように。」

柳鏡は、それには答えず深く一礼した。

柳鏡の兄たち、母親は、自分たちに向かって不敵な笑みを浮かべた柳鏡を呪い殺すかのような勢いで睨みつけていた。

「父上、最後にもう一つお話があります。」

柳鏡が、真面目な顔に戻って再び口を開いた。

「私は、龍神の紋章の封印を解きました。」

その毅然として言い放った言葉に、明鈴や連瑛はもちろん、彼の兄たちやその母親までもが目を見張った。

「な、お前、本当かつ？」

普段冷静沈着な連瑛も、驚きを隠せずにいる。その様子から、景華は彼が何か重要なことを言ったのだということ把握した。

「はい、姫君をお連れする際に、刺客に襲われて止むなく解放しました……。いずれ試験を受けることになると思います……。」

『封印を解いた……。彼女のために、それだけの覚悟をしたということね……。』

明鈴は弟の横顔をじっと見つめながらその決意を思い、心が痛んだ。そして、そのことについては彼と話す時も景華と話す時も触れないことに決めた。彼が封印を解放しなければならぬような状況、というものは、恐ろしくて想像したくもなかった。そんな事態を、二人はくぐり抜けて来たのである。

「お話は以上です。失礼します……。」

彼がくるりと反転して出口に向かったので、景華はそれに慌ててついて行った。明鈴がその後について出て来た。連瑛はもちろん、その場にいた全ての人が凍りついた。

龍神の紋章……。それは栄光への架け橋でもあり、また、彼に押された凶印でもある……。

「ハッハッハ！しかし、あんたもよくやるわねえ！見た？あの兄さんたちの顔！」

明鈴は、屋敷の外に出るなりに大声で笑いこけた。彼に衝撃の告白を忘れさせ、少しでも明るい気分にしてやろうと考えたためである。柳鏡も、抑えてはいるものの本当は今にも吹き出しそうに違いない。そういった複雑な表情をしていた。

「姉さん、笑い過ぎですよ。あの人たちに聞かれたら呪い殺されま

すよ？」

それでも明鈴の笑いは治まりそうもない。もう涙目で、歩くことさえ辛そうだ。

「だ、だってあの顔……！一生に何回見られるかわからないわよ！姫のおかげね。」

柳鏡の表情が急に引き締まった。

「その呼び方はやめておきましょう。村人には感づかせない方がいい。だから父上も人払いをしたのでしようし。」

明鈴も、急に真面目な顔に戻った。とても三十秒前まで笑い死にしそうになっていた人とは思えない。

「そうね……。じゃあ、景華^{キョウカ}、と呼ばせてもらいましょ。音だけなら割とある名前だし、漢字で書かなければ問題はないわ。」

「名案です。それで村人によって通報されるという危険性は減るでしょう。」

明鈴は、柳鏡たちとは別の小道に向かった。

「じゃ、私はこっちだから。またね、景華。」

そう言うところと背を向けて明鈴は歩いて行ってしまった。

なんだかとても疲れた、と景華は今更思った。今までは、城から逃げ出したり、柳鏡が倒れてしまったり、連瑛に会いに行ったりと忙しくてそんなことを考える暇さえなかったが、安全な隠れ家が確保できたとなると、心が落ち着いたのかもしれない。

だがその落ち着きは、別のことを想起させることにもなった。今彼女の脳裏に浮かんでくるのは、夥しい血、そして凍てついた青い瞳、彼女の心臓に杭を打ち込むかのような言葉……。

「大丈夫か？」

景華は、その声にハツとした。そこはもう、彼女がこれから身を寄せると決めた柳鏡の家の前だった。知らないうちに険しい顔をして歩いていたのかもしれない、それで心配をかけたのではないかと思つた景華は、なんとかして心配ないと伝える手段はないかと考えた。そして、おもむろに柳鏡の手を取った。

「し、んぱ……。ああ、心配するなって言いたいのか？誰があんたの心配なんかするか。」

冷たい指先が、大きな手のひらの上を走る……。その手のひらは、あちこちにマメや切り傷ができていた。そして、懸命にそれらの間を縫いながら、ひどいのね、という文字を記した。

「そりやどーも。」

軽く溜息をついて家の戸を乱暴に開けた柳鏡の手を、再び景華の右手が捕まえた。そして、さらさらと美しい文字が記されては、わずかに残像を残して消えていく……。

「……どういたしまして。」

頭をかきむしりながらぶつきらばうにそう言った柳鏡は、景華と敢えて目を合わせないようにしながら戸口をくぐった。

「じゃあ、景華姫はこれから柳鏡の家で暮らすのね。それなら安心ね。」

小さな娘がほつと胸をなでおろす様子は、母親の目にはとても愛らしく映った。

「そうね、命の危険はなくなったわ。でもね、お城の外の暮らしを全く知らなかったお姫様にとっては、これからが大変なのよ。」

子供たちがなんの合図もしなくても母親の声に聞き入っていることに多少の驚きを感じながらも、母親は続きを話し始めた。

夥しい量の血が、辺り一面を埋め尽くしていた。真っ暗な闇の中にいるのに、その鮮烈な赤い色が景華の瞳を射る。

怖い。

辛うじて彼女の頭が、その言葉を紡ぎだした。恐怖にすくむ足を、逃げなければという意思の力のみで動かそうとする。……やっと動いた。だが、その動きのなんと緩慢なことだろう。

何かが闇の中に潜んでいるのが、空気の流れでわかった。逃げようと懸命に足を動かす自分を、闇の中から嘲笑っている。

ドサッ！

焦りのせいで足がもつれてしまい、その場に転んでしまった。闇に潜む者が、静かにその身を起こした。

彼はどこに行つたのだろう。彼がいてくれれば、絶対に自分をこんな目に合わせることはないはずだ。景華は一縷の望みを託してその名を呼んだ。

「おい、大丈夫か？」

月の光に浮かび上がったのは、彼女が呼んだ人物だった。いつになく気遣わしげな表情で、彼女の顔を覗き込んでいる。ふと自分の顔に触れてみてから、景華はその頬を伝う幾筋もの涙に気がついた。どうやら、眠りながら泣いていたらしい……。

大丈夫。

そう彼の手記してから、小さく溜息をこぼしてまだ溢れてくる滴を拭った。

「あのなあ、大丈夫っていうのは泣きながら言うような台詞じゃないだろ……。」

大きく溜息をつきながら、彼は床の敷物の上にその身を横たえた。急なことだったので寝台の手配ができず、彼はそこに横になって休んでいたのだ。

「無理にでも休めよ。あんただって疲れてるはずなんだから。」

そう言つて自分の右手を枕にして柳鏡はそっぽ向いた。景華は先程の夢を思い出すと、とてももう一度眠るような気分にはなれなかった。恐怖に支配されていた余韻が、まだ彼女の体に残っている。恐ろしさに震える体は、なかなか止まりそうにもない。

「ああ、もう！」

なかなか横にならない景華の様子を見るに見かねて、柳鏡が再び起き上がった。

バサリッ！

乱暴に景華が座っている寝台の上掛けを捲ると、その隣に入って彼

女を強制的に寝かせて自分も横になった。元のように上掛けを掛け直した腕がそのまま細い肩を引き寄せて、景華の右頬は柳鏡の胸に押し当てられた。景華は赤くなってジタバタした。

「小さい頃だつてやってただろ！今更暴れるなよ！」

景華の母親が病気で亡くなった時、柳鏡は趙雨や春蘭たちと一緒によく城に泊っていた。寂しがり屋の彼女が寂しがらないように、と公務で忙しい玠王が彼らの両親に頼んでいたのだ。その時、ときどき景華は夢にうなされて夜中に目を覚ましていた。周りで皆がすすやと寝息を立てている中、自分だけが取り残されていると思うと、とてつもない孤独に苛まれた。

「なんだよ、怖い夢でも見たのか？」

そんな時、必ず柳鏡は起きていた。いや、眠っていても景華が目覚ますと必ず彼も目を覚ましたのだ。景華は必ず涙に濡れた顔でその問いかけに頷いた。

「仕方ないなあ。」

柳鏡はそう言うとき起き上がり、景華の横に移動してギュッと彼女を抱きしめて横にならせた。

「ほら、これで怖くないだろ。」

ぶつきらばうな物言いでも、昼間のように彼女をからかうようなものではなく、優しい言葉……。景華は、涙を拭って笑顔で頷くのだ。

こんなことは、子供の頃には何度もあった。だが今更、まさか成人してからこんな風にして眠ることになるとは景華も柳鏡も思っていなかった。

「ほら、これで怖くないだろ。」

昔と変わらない、少し乱暴で、それでいてとても優しい言葉……。

景華は、あの頃と同じように笑顔で頷いた。

次の朝目を覚ました景華を待ち受けていたのは、山のような衣類だった。

「あんた、裁縫はできるか？」

柳鏡が衣類の山を顎で指しながら景華に訊ねたので、景華は、寝台から下りてその中の一つを手を取った。裾の部分が少しほつれていた。他にも、飾りボタンがとれてしまった物や、布同士の継ぎ目が破れてしまった物もあった。ざっと見まわしてから、なんとか自分の手に負えるだろうと思ってコクリと頷いてみせた。

「じゃあ、それが今日からのあんたの仕事だ。ここでは六歳の子供から七十歳の老人まで皆働いているんだ。あんたも食べて行くためには仕事をしなくちゃならない。昨日の一件でわかったと思うが、俺はあてにならないぞ。もちろん、父上もな。ここに以上、あまり兄さんや奥方様ともめ事を起こしたくない。」

景華は素直に頷いたが、自分の隣に腰を下ろした柳鏡の手を取った。「どうして……か……。そうだな、あんたもここで暮らすんだから知っておいた方がいいかもな。」

柳鏡の目が遙かを見通すような、遠い目になった。何か言いにくいことのような。それでも、景華は聞こうと思った。そして、その答えを受け止めようと……。――

「俺は、昨日会った奥方様の子じゃないんだ。つまり、兄たちや姉さんとは腹違いってことだな……。俺は父上と亀水族の母の間に生まれた子だったんだ……。――」

目をぱちくりとさせている景華に、柳鏡は横向きのまま視線をあてた。

「つまり、愛人の子だよ。そのせいでガキの頃から色々ひどい目にも遭わされた。まあ、あの奥方様は自分の子である姉さんにも平気でひどい仕打ちができるような人だからな、あまり気にはならなかった。」

再び、彼の目が遠くを見た。

「俺は母とこの家に住んでいたんだが、母が死んだ時、俺は追い出されることになった。まあ、五年前のことだな。そこに、陛下があなたの護衛の話を持って来たんだ。」

そつだ、柳鏡が自分専属の護衛として雇われたのは、丁度その頃だった。自分の事のはずなのに他人事のように淡々とした語り口で話す柳鏡に、景華はなんと言葉を掛けていいかわからなかった。

「それに、俺がこの村であまりよく思われていない理由はこれだ。」
柳鏡はそう言つと、彼の着物の左手の部分を肩まで捲り上げた。そこには、くつきりとした青い痣があつた。一目で龍の形とわかるそれを見て、景華はすぐさま柳鏡に訊ねた。

「これが……龍神の……呪い？……ああ、そうか。あんたにはあの時そうやって説明したんだつたな。まあ、呪いじゃなくて龍神の紋章と呼ばれるらしいが……。」

一度そこで言葉を区切つて柳鏡は溜息をついた。この痣の意味まで説明するべきだろうか……。だが、こんな説明だけで誤魔化してもいつかは里の人々からこの痣を持つ意味も、封印を解放してしまうことの危険性も彼女の耳に入れられるだろう。その時に自分がそれを隠していたことを知れば、彼女は今自分の口から真実を聞くよりも深く傷つくはずだ。そう思つた柳鏡は、あまり気は進まないが言葉が続けた。

「清龍の里には、ごく稀にこの痣を持つて生まれる奴がいるらしい。これがある奴は天性の武芸の才能を持つとかで、半端なく強くなると言われている。ようは、村の連中は俺に暴れられたら抑えられないから怖いんだろうな。」

再び、彼は言葉を区切つて息をついた。その様子から、話にくいことだということが感じられる……。

「この痣に掛けられた封印を解放して龍神の試練を乗り越えれば、そいつ自身が龍神となつて永遠の命と巨万の富を手に入れることができると言われている。まあ、たいていの奴が試練とやらで命を落とすらしいけどな。」

彼女が気にかげずに済むように、軽く話したつもりではいた。だが、それでも難しい顔で考え事をしている様子を見て、柳鏡は少し後悔した。自分が冷遇されている理由は話しておくべきだとは思つたが、

やはりショックが大きかったようだ。ましてや、龍神の紋章の真実はなおさら……。

「まあ、あんたが心配することじゃねえよ。幸い、近隣の村から虎や妖あやかしの退治依頼がたくさん来ているらしいからな、それを片っ端から片付けば食いつぶれることもないだろ。」

柳鏡は柳鏡だよ。

景華がとつさに書いたのは、その一言だった。おそらく、自分の言いたいことは半分も彼に伝わらないだろう。それでも、思いつく言葉はそれだけだったのだ。生まれなんて関係ない、ましてや、生まれ持ってしまった運命など。そう言いたかったのだ。

「わかつてるよ、あんたに言われなかったって、そんなこと……。」「ふと柳鏡は、小さい頃のことを思い出した。彼が父に連れられて城を訪れ、初めて景華に会った日のことだ。

なんでも、年が近いので遊び相手になって欲しい、とのことだった。一体どんな子なんだろう。そんな期待に胸を膨らませて城を訪ねたことをよく覚えている。

父親の陰から少しだけ顔を出してこちらを覗いている姿を、彼はよく覚えている。その真紅の瞳に、彼は魅入られた。

「はじめまして。」

柳鏡は、父に教えられたようにそう挨拶をした。景華は、父親の陰からとことこ、と出て来て、じっと彼の目を見つめた。

「おんなじ!」

景華はそう言っただけ嬉しそうにニコニコした。

「あなたのめ、わたしのかみとおんなじ!」

どうやら、彼の瞳の色と彼女の髪の色が同じだということが言いたかったらしい。

「わたし、きょうか!おなまえは?」

自分より二つ年下の少女は、すっかり自分のことが気に入ってしまったようだった。柳鏡は、初めて自分に向けられた無垢な好意というものに恐れを感じた。家では彼の出自のことで疎まれていたし、

村人は彼が背負っている運命のせいで彼を恐れて、近付きもしなかった。

「りゅう……きょう……。」

自分の名前を言うことすら、緊張のせいでおぼつかなかった。

「きれいなまえ！」

そう言っただけで向けた笑顔、彼は今でも忘れられずにいた。

その時、彼は初めて自分が自分という人間であつて良かった、と思えたのだ。そしてその後も、彼女の眩しい笑顔が向けられる度に何度もそれを実感した。

「いや、もしかしたらあんなのおかげで自分は自分だと思えるようになったのかもしれないな……。」

珍しく自分に対して素直な態度を取った柳鏡を訝りながらも、景華は彼が衣類と一緒に運んで来たと思われる裁縫道具の箱に手をかけた。

「ちよつと柳鏡！どういうこと？」

そこに朝一で朝食を運んで来てくれた明鈴が現われて、発した第一声がそれだった。

「何がですか？朝から騒ぎ過ぎですよ……。」

柳鏡はわざとらしく欠伸を試みせた。

「景華になんてことさせてるの！一体どういつもり？」

「外で話しましょう、姉さん……。」

柳鏡は景華の方にチラと視線を走らせてから明鈴を連れて外に出た。

「あんたわかつてるの？景華はお姫様なんだよ？仕事なんて……。」

明鈴は小声でそうまくしたてた。

「わかつてますよ……。でも、仕事はさせた方がいいんです。確かに俺が守って養うのは簡単です。しかし、それじゃあ姫はいつまでたつても人に頼ってばかりで成長できないんです……。それに、忙しく手を動かしていた方が余計なことを考えずに済むでしょう。事実と向き合うには、まだ日も浅く傷も深すぎる……。」

「そこまで考えてたんだ……。」

それは、明鈴の純粋な感想だった。きつと、一晚寝ないで考えに考えた結果なのだろう。

「そうだ、姉さんにお問い合わせがあります。景華に料理を教えてやって下さい。彼女には、少しでも多くのことを学んで欲しいんです。あと、着物も何着か手配して下さい。あの衣装では動きにくいと思うので……。」

「わかったけど……。」

明鈴は、そこで意地悪くニヤツとした。

「本当は、景華の手料理が食べたいだけなんじゃないの？」
ボンツ！

柳鏡の顔が、一度に赤くなった。その様子は、普段の彼からは想像もできない。

「なっ、何を言うんですか、姉さんっ！」

明鈴は、普段あまり表情を変えない弟がしどろもどろするのが面白くて、もう少し意地悪をしたくなってしまった。

「あっそう、ふうん、やっぱりね。昔から柳鏡は景華にゾッコンだったもんねえ。いつも城から帰ってきたら景華のことばかり話してたし。」

「そ、そんな子供の時のことを今更……！」

柳鏡の目が、景華がいる家の方向に一瞬向けられた。どうやら、彼女に聞かれていないことが確かめたかったらしい。

「まあ、頑張つてねえ。じゃあ、邪魔な姉さんは退散するわぁー！」
そう言つて明鈴は踵を返すと、手を振りながら行つてしまった。

柳鏡が、戻つて来るなり乱暴に壁を叩いた。仕事に取り掛かっていた景華は、驚いて顔を上げた。

「あいつ、覚えてるよ……。」

柳鏡の静かな怒りの原因は、景華には全く想像がつかないことだった。

昼が過ぎた。柳鏡は今日は仕事には行かずに家の修復に追われてい

た。

「ちくしょう、このオンボロ！」

そう言つて壁を相手に突きを繰り出す様子は、朝とそっくりだ。そこで、景華の手が止まっていることに気が付いた。ボーッと針を見つめているその姿は、何か別のことを考えているようにも見えた。

「ボヤボヤしてたら危ないぞ。それでなくたって鈍くさいんだから。」

声を掛けられてハツとした景華は、ツンとふてつたようなそぶりを見せた。

「疲れてるなら休みながらやれよ。別に一日で仕上げなきゃならないものでもないんだから。元々、清龍の里には姉さんみたいに繕い物が苦手なやつばかりだから、預けたやつらも仕上がりがきれいなら多少時間がかかったって多めに見てくれるだろうし。」

柳鏡はその言葉を聞いた景華が手を休めるのを見てから屋根に登つて行つた。どうやら、今度は屋根の瓦を直すようだった。

手を止めた景華は、ボーっとしながら天井を眺めた。

『これからどうすればいいんだろう……。城に戻るにしても理由がないし……。趙雨が王になれば、お父様よりもいい政治ができるのかもしれない……。でも、お父様の亡骸はどうなったのかしら……。？』

景華が父を最後に見た時、彼はすでに動かなくなっていた。その情景が、今も頭から離れない……。

手元の衣に、滴が落ちてシミになった。後から後からこぼれてくるそれは、もはや自分の意思で止めることもできなかった。

『私、泣いてばかり……。』

城にいた頃は、彼女は自分の不甲斐なさなど感じたこともなかった。父や柳鏡に守られて平和に暮していればそれで良かった。城の外に出て思い知つたのは、自分がいかに無力な人間かということ……。自分を庇つたせいで、柳鏡は龍神の紋章を解放しなければならぬ程の窮地に陥つた。自分は役に立たないどころか、彼の足手まとい

なのだ。

「おい、泣きながら繕い物するのがあんたの特技なのか？」

いつの間に屋根から下りて来たのか、気づけば柳鏡は彼女の正面に腰をおろしていた。景華は慌てて首を横に振ると、手の甲で涙を拭いた。柳鏡がその様子をじっと見て呟いた。

「不細工な顔。」

「っ……！」

売り言葉に買い言葉、というやつで、景華は頭の中で余計なお世話よ！と返していた。

「いつまでもメソメソしてるから言ってるんだよ！仕事辛いのか？」
ブンブン、と景華の髪が横に揺れた。

「じゃあ何だよ？」

いぶかる柳鏡の手を景華が取った。

「どうして……足手まといの……私を……助けたの？……大怪我……までして……。なんだよ、そんなことでメソメソしてたのか。」
柳鏡がいかに馬鹿らしいという様子でそう言ったので、景華はムカッとした。

「私は……もう姫でも……ないし……何も……持っていない、から……柳鏡に……何も……あげられない……。護衛の……お給金……だ……って……払えない……。だあぁ、くだらねえ！」

柳鏡が、景華の手を振りほどいた。

「あんた、俺がなんであんたの護衛なんか引き受けたり、城だなんて面倒な所まで行ってあんたのくだらない遊びに付き合ってたのかわかってないだろう？」

コクリ、と景華があまりにも素直に頷くのを見て、柳鏡はがっくりと肩を落とした。そのまま不揃いなくせ毛を？き揚げて、景華から視線をそらした。その仕草は、照れ隠しの合図だ。

「まあ、それはいずれ機会があれば話すとして……。」

景華は、きょとん、と彼を見つめた。心なしか、その頬はほんのりと赤い。

「確かに、俺はあんたをここまで連れて来た。途中予期せぬ事態で怪我することにもなった。でも、あんた忘れてないか？俺は国王殺しの濡れ衣を着せられているんだ。つまり、俺にも逃げる理由があつたって訳だ。それにたまたまあんたを連れて来ちまつただけだよ、気にするな。」

景華はしょんぼりと俯いて、一度振り払われた柳鏡の手を再び取つた。

「だけど……私が……足手……まといに、ならなければ……龍神の……封印、を……解放する……こともなかった……でしょう？」

柳鏡が、文字が綴られ終わった自分の手のひらをじつと見つめた。どんな言葉を選べば彼女を傷つけないで済むのか、彼は真剣に考えていた。

「そうだな……ここでそれを否定しても、あんたは信じないだろう……。でも、あの瞬間に封印を解いたのは俺の意思だ。あんたのせいじゃない……。あれのおかげで毒矢でついた傷も一度に癒えたしな。」

唇を噛んで俯く様子を見て、彼は密かに後悔した。あの言葉は、彼の精一杯の優しさから出たものだった。あれ以上、彼女にどう言葉をかければ良かったのだろうか。

「それに、考えてもみるよ？永遠の命に巨万の富だぞ？いらないうて言う方がおかしいだろ？まあ、試練とかいう余計なおまけ付きだけだな。」

目から溢れそうになっている滴をこぼさないように頷くその姿が、柳鏡の目にはとても愛おしく、そして痛々しく見えた。どうしていいのかわからなくなって、彼はその頭を優しく撫でてやった。ポトリ、と滴がこぼれた。

「泣くなよ。」

俺まで辛くなる……。

「不細工な顔、もつとひどくなるだろう……。見るに堪えねえよ。」
これ以上、あんたの泣き顔見るのが嫌なんだよ……。

「笑えよ。」

どうか、笑ってくれ……。

「その顔よりはマシなんだから。」

俺が一番好きな、あの顔で……。

彼の心の声が彼女に聞こえたはずもない。でも、彼女は次々こぼれ落ちる滴を拭って微笑んだ。ほんの少し目を細めるのが癖の、柳鏡が一番好きな表情……。

「やればできるんだろ？ やっぱり不細工だけだな。」

彼はそう言って景華の額をツンと突くと、再び家の外にその姿を消した。先程戻って来たのは、仕事が終わったからではなく、景華の様子が気になって仕方なかったためだった。

「そうだ、一つ言い忘れてた。」

そう言って、柳鏡は戸口に顔を覗かせた。

「姫でなくなつて、あんたはあんただろ……。」

「っ……。」

景華は、一瞬息を詰まらせてしまった。まさか、今朝彼女が彼に向って掛けた言葉がそのまま返って来るとは思ってもしなかった。その言葉に大きく彼女が頷くのを見届けてから、彼はまた、屋根の上へと姿を消した。

秋の始まりの、晴れやかな一日だった。

それからしばらく、景華と柳鏡は平和に過ごしていた。明鈴は毎日のように遊びに来ては、景華と一緒に台所に立ち、包丁すら握ったことがなかった彼女に「から料理を教えていた。」

「うん、いいんじゃない？ 景華は筋がいいね。」

形はまだ不揃いだが、とりあえず危なげなく材料を切れるようになったことで、明鈴は景華を褒めた。嬉しそうな笑顔を返されると、思わず彼女まで微笑んでしまう。そこに、柳鏡が戻って来た。

「ちくしょう、あいつら！ 俺を化け物だとも思っているのかっ？」
ドゴッ！

どうやら、腹を立てた時に壁に八つ当たりをするのは、彼の癖らしい。

「ちょっと、随分物騒なご帰宅じゃない？景華がびっくりして指でも切っちゃったかどうかするのよ！」

そう柳鏡を非難した明鈴を彼はジロリと睨み付けた。

「それは俺のせいじゃなくて、彼女が鈍くさいからでしょう？」

抗議の意を込めて口を尖らせる景華に、柳鏡は冗談だよ、と言って茶卓の前にドカリと座り込んだ。

「指、切ってないのか？」

その問いかけに景華が慌ててうなずくと、明鈴がその陰でニヤニヤしているのが彼の目に入った。

「ところで、あんな物騒な帰宅のしかたをした原因は何？」

明鈴の隣で、景華もコクコクと頷いて、同意の意思表示をした。

「ほら、景華も聞きたいってさ。」

ブチッ！

柳鏡のあまり丈夫でない堪忍袋の緒が不穏な音をたてた。最近の姉さんは、姫のことで俺をからかうことを楽しんでいないか……？それでも彼は努めて冷静に話始めた。

「なんでも、明日の朝のうちに行商人が出発するとかで、今夜中に裏山に最近出没している熊を退治しろと言われましたよ……。全く、俺は昨日虎退治に行っただけなんですよ？」

柳鏡はこのところ里の外に出ることが多くなってきた。景華の様子が落ち着いてきたこともあり、生活のために必要な費用を稼ぐようになってきていたのだ。

「まあ、あんた以外に一人で虎や熊に向かってくような奴、いないからね。隊を組む暇がないから、仕方ないんじゃない？」

明鈴は弟をそう宥めながら、手早く器を並べた。

「それはそうですね……。」

柳鏡は、先程明鈴が並べた器に雑炊を取り分けている景華にチラと視線を走らせた。昼間はまだいいが、夜に彼女を一人にするのがと

てつもなく不安だった。外敵からは守られているが、この前の仕返しに兄たちがよからぬことを考えないとも限らない。それに、夜中に彼女がうなされていても起こしてやることもできなくなる……。

「一晩位なら、一人でも平気か？」

柳鏡の問いに、景華は驚いて目を丸く見開いた。

「はぁん、そう言うこと。景華が心配でグチグチ言ってたの……。」
「姉さん、怒りますよ？」

明鈴の得意げな顔に、柳鏡は間髪入れずに危険な笑顔でそう返した。

「あんたが無理だつて言うなら断るつもりなんだが……。またメソされてると思うと、たまったものじゃないからな。」

運んで来た雑炊を三人分茶卓に並べてから、景華は唯一の意思疎通の方法で自分の考えを彼に伝えた。

「多分……大丈夫……。困っている、人が……。いるなら……。助けてあげて……。本当に大丈夫なんだろうな？」

気持ちよく笑って頷く景華に、柳鏡はほんの少しだけ笑みを返した。

「まあ、もし何かあったら家までおいで。場所は知ってるよね？」

景華は今度は明鈴の方を振り向いて、同じように頷き返した。

「一人なら……。誰の目も気にしないで考え事もできるし……。」

景華は密かにそんなことも考えていた。彼女は、ゆっくりと物を考える時間が欲しかった。

「二人が、私がまだあの時のことを深く考えなくてもいいようにしてくれているのはわかってはいるけど……。迷惑ばかりかける訳にもいかないもの。自分のこと位、自分で考えなくちゃ……。。」

一瞬景華が曇った表情を見せたのを柳鏡は見逃さなかったが、なるべく早く戻る、とだけ告げて、昼食を掻き込んで仮眠に入った。明鈴も、後片付けを手伝うと洗濯物を取り込むから、と言って帰って行ってしまった。

夕方、景華に起こされた柳鏡は、ブツブツと文句を言いながら仕度をした。靴をきちんと履き直す彼の脇に、小さな包みが差し出された。

「なんだよ、これ？」

景華がその隣に座り込んで彼の手に綺麗な文字を書き込み始めた。

「一人で……作った、から……おいしくない……かもしれない、けど……お弁当……。お腹……空くでしょ……？っ……！」

柳鏡はついと顔を逸らして靴紐を結び終わると、その包みを乱暴にひったくった。

「まずかったら許さないからな！」

夕陽の照り返しが、彼の頬が赤く染まっているのを隠した。

「行ってくる。メソメソするなよ！」

いつも以上に乱暴な言い方をして、彼は外へと出て行ってしまった。戸締りをきちんとしてから、景華は寝台に座りこんで膝をギュツと抱え込んだ。

『私、嫌われてたんだ……。趙雨にも、春蘭にも……。』

彼女の頭に真っ先に浮かび上がったのはそのことだった。もしや。

彼女の心に、暗い考えが浮かんだ。

『柳鏡は？柳鏡も私のことなんか嫌いな……。？……。そんなことないよね。怪我までして、こんな遠くまで連れてきてくれたんだから……。』

彼女は、彼に全幅の信頼を寄せていた。それも、この前彼に言われたあんたはあんただろ、という言葉のおかげだった。彼は、姫としての自分ではなく景華としての自分の存在を認めてくれたのだ。ほんの少し心が軽くなるのを感じた彼女だったが、次にまた別の疑問が浮かんだ。

『お父様は、殺されなければならぬほどひどい政治を行っていたのかしら……。だとしたら、一体どんな王が皆に望まれるのかしら……。』

ふと、あの場で投げつけられた趙雨の言葉が蘇ってきた。誰か、民の暮らしをよく知る者が王になれば……。その言葉が、ぐるぐると頭の中を廻る……。抱えた膝に、ギュツと顔を埋めた。

どれくらいそうしていたことだろう。気づけば、窓の外はすっかり

暗くなっていた。柳鏡の家からは、里の家々を見ることができた。あちこちの家から、明かりが漏れている……。

『明かり、つけなきゃ……。』

そう思つて油を探しに立ち上がった時、何か、おそらくは茶卓の脚だと思われるが、彼女は躓いて転んでしまった。暗いということは、なんと不便なことなのだろう。

『お城にいた時は、こんな思いしたことなかったわ……。いつも暗くなる前に篝火が焚かれていたもの……。』

そうか。その時景華の頭に、明白な考えが浮かんた。

『お城での暮らしと民の暮らしは全く違う……。だから、民の暮らしをよく知って、どんな政策をとればその生活が改善されるか民の立場で考える必要があるのね……。』

自分が今しなければならぬことが、景華にもわかつた気がした。まずは、民の暮らしというものをよく理解すること。そして、父親の汚名をそぐこと……。父がどのような政治を行ってきたのか、景華は全く知らない。ただ、自分には優しく、誰よりもかわいがってくれた大切な父だった。その父が、もしも民に恨まれたまま死んでしまったのなら、自分は父の名誉を挽回するために生きるべきだ。

『お父様……。』

たとえそう決意したとしても、やはりその死は彼女の心に重い。まして、父を手に掛けたのはあの趙雨なのだ。

『ごめんなさい、柳鏡……。約束、守れそうにもない……。』

柳鏡の不安は的中して、やはり彼女の目からは滴が溢れた。現実には彼女にはあまりにも残酷だ。認めなければならぬのに、心のどこかでそれを拒否している自分がいる……。

ガタンッ！

戸口の外で物音がして、景華は慌てた。とりあえず涙を拭くと、立ち上がってそちらに向かい、戸を開ける……。

「おいおい、誰なのか確認もしないで開けるなよ……。」

そう言つた長身の陰に、景華はしゅんとして頷いた。その手に、夕

方より軽くなつた包みが乗せられた。どうだった、と彼女は彼を見上げた。

「ああ、まあまあ、かな？」

珍しく褒められたことに驚きを隠せないでいたが、その少し照れたような物言いに、驚きよりも嬉しさが勝った。疲れて帰ってきているのに申し訳ないかな、と思いながら、中央に座りこんだ彼の横にちよこんと座つて、その右手を取った。

「……！」

景華は、思わず目を見開いた。柳鏡の右手に、無数の引つ掻き傷のような物が増えていた。月の青白い光の中で、その傷はよりなまなましく景華の目に映った。

「ああ、熊とやり合つた時に茂みに引つ掛けたんだ。熊にやられたらこれじゃあ済まねえよ。」

その説明を聞き終わるや否や、景華は立ち上がつて明鈴が洗濯を済ませてくれたばかりの布を水瓶の水で濡らし、傷に染みないように気をつけながら血を拭き取つてやった。それでも、あちこちにできた傷は痛々しい。

「別にそこまで痛くはねえよ。」

景華がそんな顔をして彼の傷を拭いていたのか、彼はそのことを強調した。

「それで？あんたは一体何を言おうとしてたんだ？」

柳鏡の言葉にはつとしたが、彼の手は文字を書き込めるような状態ではない。

「ほら、こつちはなんともねえよ。」

その言葉と共に、彼の利き手が差し出された。そしてこちらは、あの紋章がある方の手だ。

「色々、と……教えて……欲しい……。具体的に、何を？」

彼の問いかけに答えるために、再びさらさらと文字が書かれた。

「なん……でも……普通……はど、んな暮らしを……している、のか？それを知つてどうする？それに、ここにいれば嫌でも覚えても

らうことになるぞ？」

だんだんと、文字を綴る手に力が込められて来た。

「おと、うさまの……汚名を……そそ、ぐため……娘の、私が……
良い王、として……国を……治め、たい……。そのため……に民の

……暮らし、を知る……。必要、がある……。なるほどな……。」

柳鏡が、ホウ、と長く息を吐いた。

「あんた、自分の言ったことの重大性がわかってるか？王になるには今の趙雨の政権を倒さなければならぬんだぞ？」

強く頷く様子から、そのことは承知だったようだ。

「それに、反乱を起こすとなればあんただって武器を扱わなければならないし、民の暮らし以外にも、兵法やこれまでの政策、制度までありとあらゆる物を学ばなければならないんだぞ？それでも、王になりたいか？」

さらにもう一度強く頷く様からは、迷いなどは一切感じられない。

「……わかった。あんたがそのつもりなら、俺はそれに協力するし、最後まであんたにつき従う。兵法と武器の扱いなら俺が教える。政策や制度は本を読んで学ぶしかない……。それは姉さんと一緒にするといい。ああ見えて、かなり頭の切れる方だからな、あの人……。」

もう一度強く頷く様子を見て、柳鏡は密かに誓った。この先どんな障害があっても、必ず彼女を守り抜いて、玉座に腰掛けるその姿を見届けると……。そのためには、いつやってくるかわからない龍神の試練も必ず乗り越えようと……。

『あの姫が、泣きながらも考えて、出した結論なんだから……。』
彼女が自分が戻る前まで泣いていたことを、彼はなんとなく感じ取っていた。それがわかっていたからこそ、彼は熊ごときを相手に本気を出し、さつさと片付けて戻って来たのだ。

「どうやら、俺が思ってたよりも遥かに強いみたいだな、あんたは……。」

その意味は景華にはよくわからなかったが、その様子が怒っている

ようでもなく、むしろ彼女を見つめるその瞳は本当に愛おしげで、その視線のあまりの心地よさに深く追求はできなかった。秋も深まり、木々はその色を染め変えていた。その黄金色は、いつか彼女が抱くことになる宝冠の色にも似ていた。

姫と龍神 変化と決意（後書き）

はじめまして、霜月璃音と申します。

今回、初めて小説を投稿させていただきました。ここまで読んで下さった皆様、本当にありがとうございます。続きはもうしばらくお待ち下さい。もしよろしければ、ご意見、ご感想をお聞かせ下さい。今後の執筆活動の参考や励みにさせていただきますと思います。

華と龍神 呪われた運命

すっかり暗くなった窓の外をよそに、室内からは子供に物語を聞かせている母親の声と、その声が止むたびに続きをせがむ子供の声がしていた。

「ほら、そろそろ寝なさい。続きはまた明日ね。」

そう言っただけで自分たちの頭を撫でる母親に、幼い兄妹は口々に抗議の声を上げた。

「まだ眠くないよ、お母様！それに、今止めたら続きが気になって仕方ないじゃないか！」

兄のその言葉に、妹の方も二度、頷いた。これは強い肯定を表す時に彼女が見せる動作で、この娘は姿かたちだけではなく細かな動作まで母親とそっくりだった。

「……仕方ないわね……。じゃあ、続けますよ？」

「「うん！」」

その言葉に声をそろえて頷くと、二人は母親を見上げて押し黙った。
「それから、景華^{キョウカ}姫は柳鏡^{リウキョウ}や明鈴^{メイリン}に手伝ってもらってよりよい国を創るための色々な勉強を始めました。

「ほら、あんた用だ。」

そう言っただけで、景華の目の前に細身の剣が差し出された。剣を差し出したのは長身の青年で、くせ毛の黒髪を無造作に切っていて、深緑の、どこことなく不思議な目をしている。

差し出された剣は練習用ということで装飾などが一切ないものだったが、彼女はそれを手にとってまじまじと見つめた。

「あんたでも扱えそうな物を選んで来た。さすがに、大剣を使わせる訳にはいかないからな。まず構えからだ。」

その声を合図に景華は立ち上がって、一応それらしく構えてみた。
「ほら、違っ違っ。まず、両足を揃えるな。力が入らなくなるから

な。それから、どちらか片方に傾けて持つのもよくない。反対側からの攻撃に対処するのが遅れるんだ。」

コクリと頷いてから指摘された部分を直し、もう一度構え直す……。「うん、今度はまあまあだな。次は振り方だな。」

冬に入り寒さも本格的になってきていたが、景華はこの頃、昼間柳鏡がいる内は彼から剣術を教わり、いない時は明鈴と政策などについて本を読み漁っていた。夜は夜で柳鏡に兵法について教えてもらったり、繕い物の仕事をしたりしていた。もともと、剣術は習う前に体力作りが必要だとかで、今日からやっと本格的に剣を扱うようになったばかりだった。

景華が清龍^{シロン}の里に来てから、二か月が経った。彼女はここの生活にも慣れ、家事全般は一人でできるようになっていた。それも、何もかもを根気よく教えてくれる柳鏡と明鈴のおかげだ。

「疲れたか？休憩にしよう。」

景華の息が上がっていることに気がついて、柳鏡はそう提案するとその場に腰を下ろした。その隣にちょこんと腰掛けて、景華は再び細い剣を見つめた。その研ぎ澄まされた切っ先は、忘れられないあの記憶を呼び覚ます……。一国の姫として城で暮らしていた彼女が、その国の辺境の里で暮らすことになった原因とも言えるあの事件……。そのせいで、彼女は今声を失っていた。

「飲まないのか？」

ハッとなつて目の前に差し出された水筒を手取る。自分が何を考えていたのか、おそらく彼はわかっているだろう。口をきけなくなつてしまつてからでも、彼は自分の言いたいことを常に正確に読み取ってくれていた。

「……また、あの時のこと考えていたのか……？」

さりげない調子で訊ねてくる彼に、黙つて水筒を返して膝を抱える。それだけで、彼の問いかけに対する答えとなる。

「考えるとは言わないが……。あまり深く考え過ぎるのもよくないだろ。あんたは大きなことを決めたんだ。今はそれだけで十分じ

やないか？」

そう、彼女はここでできる限りのことを学び、国民全てに望まれるような王となつて城に戻ると誓つたのだ。それでも。

『私、焦っているのかもしれない……。』

一刻も早く城に戻りたいという心とは裏腹に、彼女のやらなければならぬことはあまりにも多く、勉強もあまりはかどっていないというのが現状だ。もともと頭の悪い方ではないが、今まで何も教えられていなかったようなことばかりで、基礎も何も全くない状態から学び始めていることが原因だった。

『どうして、城にいる時にもっと勉強しておかなかったのかしら……。』

今は、後悔ばかりが募る。最近の彼女は、自分を責めることが多くなっていた。

「ほら、いつまでもウジウジと考えていたって仕方ないだろうが。続けるぞ。」

その言葉に頷いて立ち上がる。柳鏡は、最近の彼女のそんな思考に不安を感じてきていた。彼女の決意は大きなものだった。そして、自分はそんな決断を下した彼女を全力で支えるとも誓った。だが、最近はその自分が彼女の重荷になっているのではないだろうか。そんな気がしていた。

「景華ーっ！」

そこへ、明鈴が走つて来た。柳鏡の腹違いの姉である彼女は、景華に政治について色々と教えてやっていた。

「姉さん、どうかしましたか？」

呼ばれた景華も剣を構えたまま止まっている。

「もうすぐ終わるでしょ？一緒にお風呂に行こうと思って。この冬に汗の始末もしないでいたら風邪引いちゃうからね。ん？なにになに？……ご飯の……仕度、がまだ？大丈夫、柳鏡にさせればいいって。」

「景華が彼女の手のひらに書いた言葉に対しからからと笑ってそう言

う明鈴に、柳鏡が笑顔で答えた。

「姉さん、俺が風邪を引いてもいいと言うんですね……？それに、俺の料理なんか食べたなら再起不能になりますよ？」

「あんたは風邪なんて引かないでしょ？何とかは風邪引かないって言うし。でも、そうか……。あんたの料理が壊滅的だったのを忘れてたわ……。」

明鈴が真剣な顔をして唸った。柳鏡は、ここに来てから一度も彼女たちを手伝って台所に立つことがなかった。だが、どうやらそれは彼の面倒くさがりな性格からではなく、能力の問題からきているようだった。景華が、今度は柳鏡の手を取った。

「夕飯……少し、遅く……なっても、いい？ああ、それは別に構わないが……。」

その答えに、景華がニツコリと微笑んで続きを書いた。

「柳、鏡も……一緒に、行こう？……風邪、引くよ？」

「へえ、景華は優しいねえ。よかったわねえ、柳鏡！よし、じゃあ今日はこれで練習はおしまい！さあ、仕度していらっしゃい！」

明鈴の声でパタパタと景華は家の方へ駆けて行った。その後に、柳鏡がついて行く……。その後ろ姿を見送ってから、明鈴は小さく呟いた。

「景華の声、いつになったら出るんだろう……。」

医者でない彼女には詳しいことはわからないが、事件のショックで声を失ったとすれば、その傷が癒えれば元のように話せるようになるのではないだろうか……。そう思っていた。しかし、二月経って本来の明るさをだいぶ取り戻した今になっても、彼女の声は戻る気配もない。何か他に、彼女の喉を締め付けている物があるのかもしれない……。

「なんか、切ないな……。」

そう言っただけをこぼしたところで景華が家の戸口から顔を覗かせ、またパタパタと駆けて戻って来た。

「おい、走るな！転んだらどうする！」

その後ろから、柳鏡の声が追いかけてくる。案の定、彼女は躓いて
転びそうになった。後から追いついた柳鏡が、その上体を引き戻す。
明鈴から見れば、それはなんと微笑ましい光景だ。

「ま、いつか良くなるよね……？」

いつものようにくだらないケンカをしている二人を見て、明鈴はそ
う願った。放っておけば収拾がつかなくなってしまうので、自分も
そちらへ歩く……。

「大体、あんたは昔からそうなんだよ！絶対に緩い下りで転ぶんだ
！」

冷静に聞けば、彼女の小さな癖も見逃さない程見ていたという台詞
……。口を尖らせて反抗的な目で柳鏡を見ている景華は、そんなこ
とには絶対に気付いていないだろう。

「ほらほら、喧嘩ばかりしてないの。行くよ。」

昔は二人の喧嘩には、別の人間が割って入った。幼馴染の、趙雨と
春蘭だ。しかし、その二人は景華から大切な物をほとんど奪った。
彼女の頭には、今もあの夜の言葉が反響する……。それが、彼女の
焦りに繋がっていたのだ。

「ほら、今度は転ぶなよ。」

柳鏡は、そう言って今までつかんだままだった景華の腕を放した。
余計なお世話、という言葉が彼の頭に浮かんた。おそらく、彼女が
話せる状態だったなら間違いなくそう答えただろう。子供の頃から
一番近くで、一番大切だと思って見守っていた存在だ。好きな物や
嫌いな物、どんな時にどんな言葉を返すかということ、彼女自身も
気付いていないような小さな癖まで、彼は全部知っていた。

「今、余計なお世話、って思っただろ？」

物は試し、と思って、そう彼女に問いかける。ほんの少し目を丸く
して、彼女は頷いた。やっぱり。

「そうだと思った。」

彼がそう言って小さく微笑んだ理由は、景華にも明鈴にもわからな
かった。小さな手に重そうに提げられていた荷物が、大きな手によ

つてそつと奪われる……。今度は、景華は目を大きく見開いた。彼のこの行動は、全く予期していなかったようだ。

「重いだろ？」

ぶつきらぼうにそう言つて視線を逸らす……。そんなに重いと思つていた訳ではないが、彼のその優しさが嬉しくてその手に荷物を預けた。ほんの少し目を細める、独特の笑顔を向けながら……。

「いいなあ、景華。柳鏡、私のも！」

明鈴がふざけて柳鏡の方に荷物を差し出した。

「嫌ですよ。姉さんは怪力なんだから、自分で持つて下さい。」

笑顔で毒々しい台詞を言つてのけた柳鏡の背を、明鈴の平手が激しく打った。柳鏡はむせ込んだ。

「……だから怪力だつて……。」

「もう一回言つたら、今度は地獄を見せるわよ？」

「いえ、遠慮しておきます……。」

兄弟がいない景華は、二人のやり取りを見て羨ましいなあ、と思いつながら小さく笑っていた。

「ふう、最高ね！」

明鈴がお湯につかつて早々、その声を上げた。景華も、ニツコリと笑つて頷いた。清龍の里にはいくつか公共の浴場があり、その内の一番近くの浴場に足を運んでいたのだった。

「柳鏡ー、そっちはっ？」

明鈴が竹垣の向こうにその声をかけた。

「繋がっているんだから、同じに決まつてますよ！」

そして、反対側からも同じように答えが返つて来た。この浴場は竹垣を隔てて男湯と女湯に分かれているので、反対側の会話も聞き取ることができた。珍しく貸切の状態だったので、いつも以上に声が聞き取りやすい。

「景華、体洗っちゃおうか。ついでに髪、洗つてあげる。」

彼女が頷いたのだらう、その数秒後にザバツとお湯からあがる音が

した。続いて、お湯をかける音。

「うわっ、景華肌すべすべ！一体どんな手入れしてたらそうなるの？」

柳鏡の口が湯船の中に沈んだ。空気を長く吐き出して、お湯をブクブクと言わせている。どうやら、隣から聞こえてくる音をかき消すつもりらしい。

「髪もさらさらだし、羨ましいなあ。……え、なにに？」

隣からの会話は、まだ聞こえてくる。

「明鈴、さんは……スタイ、ルがいい……から……羨まし、い……？そりゃもう二十歳だからね、景華も私位の年になればこの位になるよ。え？疑わしい？」

おそらくじとーとした目で明鈴を見上げたのだろう、柳鏡にはそれも予想がついた。

「なによー、信じなさいよ。お嫁さんになる頃にはきつと、ね。まあ、ダメだったら柳鏡のお嫁さんにしてあげるよ！」

明鈴の言葉に、柳鏡は湯船の中に完全に沈没した。

浴場でそのまま明鈴と別れて、景華と柳鏡は家へと戻った。外はかなり寒かったが、湯船からあがったばかりの彼らにはそんなことは関係なかった。帰りも、景華の手には荷物がなかった。

「……。」

ふと景華が立ち止まって空を見上げた。そして、その手をそつと空に向けて差し出した。手のひらに、冷たい物がふわりと乗った。

「どうした？……ああ、雪か。初雪だな……。」

柳鏡も立ち止まって空を見上げる……。真っ暗な空から、白い綿がふわふわと落ちてくる……。じつと空を見つめている景華に、ふと彼は問いかけた。

「そう言えば、あんたひょっとして雪を見るのは初めてか？」

空からほんの少し目線をずらして、すぐ隣に立っている頭一つ半位背が高い彼の瞳を見上げた。それだけで、彼はきつと理解してくれ

るだろう。

「そうだな、城の辺りでは降らないからな……。」

そう言つて空を見上げる柳鏡の息が白く曇った。その光景で、自分たちが寒い場所にいることを思い出す……。お湯で温まった体も、いつの間にかすっかり冷えてしまっている……。景華は、ぶるつと身震いした。

「寒いのか？」

その言葉には答えず、またじつと彼を見上げる……。

「早く言えよ。さつさと帰るぞ。」

やっぱり。彼は、自分が考えていることを言葉に出さなくても簡単に理解してくれる。しかも、おそらくは短い答えなら一字一句違えることなく。それに気付いたのは少し前だったが、もうあまり驚かなくなっていた。そして、その優しさに甘えてしまっている自分にも同時に気が付いた。甘えてはいけない、頼つてはいけないと思いつながら、心の奥底では常に彼の存在を期待しているのだ。

『ダメだつてわかつてるのに……。』

眉根を寄せて、唇を噛み締めて俯く。彼女にとって、彼の存在はいつまで経つても甘えから脱出できない自分の存在を知らしめる物となっていた。もちろん、原因があるのは景華の方だ。

「なんだよ、具合でも悪いのか？」

慌てて首を振つて見せる。そして、彼が珍しく読み違えてくれたことに感謝した。いや、実際には柳鏡は景華が何か考え事をしているのだろつということがわかつていたが、彼女がああいった顔で考え事をする時は触れて欲しくないことについて考えている時なので、敢えて間違つたふりをしたのだった。

「着いたぞ。」

柳鏡の声に、景華は視線をあげた。気付けば、そこはすでに家の前だった。先に戸口をくぐつた柳鏡が、景華も家に入るのを待ってから後ろ手に戸を閉めた。そしてそのまま、明かりを灯しに動く。それを台所の方へ持つて行つてやると、景華がニコリと微笑んで夕食

の支度を始めた。彼の定位置である家の中央の茶卓の前に腰掛けて、その様子をじつと見つめる……。さっき考えていたことはなんだろう、と思いながら……。いくらでも考え付く選択肢はあったが、おそらくそのどれでもない。柳鏡に考え付くものの多くは、彼女がすでに乗り越えたと思われる問題だった。例えば、趙雨チョウウのこと……。

「いや、あれは違うな……。」

小さく呟いて、彼女の耳にその声が届いていなかったことを確認する。どうやら、材料を切る音にうまく紛れたようだ。それに、彼女からそれに対する答えはすでに聞いていた。趙雨に好かれなかったのは自分に悪い所があったせいだ、春蘭が彼の理想の女性なら二人を祝福する、と……。彼女は、ふっきれた顔で彼の手のひらにそう文字を落としたのだ。

「じゃあ、何なんだ……？」

彼女にとつては触れて欲しくないことだろうと思っではいるが、あまり悩むようならそれを吐き出させる必要もあると、彼はよく物思いに耽っている彼女を見て常に感じていた。

「っ……！」

「どうしたっ？」

彼女が急に声にならない声をあげたので、彼は驚いて駆け寄った。原因はすぐにわかった。彼女の指先からは、血が滲み出していた。包丁でほんの少し指を切ったようだ。迷わずにそこに唇を押し当てた柳鏡の口の中に、鉄の味が広がった。

「後は洗うだけだ……。つたく、ボヤボヤしながらやったら危ないだろうが！何を考えていたっ？」

彼の我慢は限界だ。考え事をしていて怪我をされたとあっては、この先も不安で仕方ない。景華はちよつと手がすべっただけ、と言いつて誤をした。柳鏡の右腕が、グツと景華の腕をつかんだ。

「嘘つけっ！最近ずつと何か考えているだろ！さっき外でボーっとしていた時だつてそうだ！」

景華は驚いて顔を上げた。まさか、ばれていたとは……。でも、自

分が何を考えていたのかは言えない。特に、彼には絶対に……。言
つてしまえば、自分を守るためにここまでしてくれている彼の心に
深い傷を負わせるようなことになりかねない。その一心で、本当に
大丈夫、と彼の手に記す……。彼がその嘘を信じてくれると祈りな
がら……。

「どうして俺にも嘘をつくつ？そんなに俺は信用できないかつ？」
懸命に首を振る景華の様子を見て、柳鏡は心が痛んだ。本当は、彼
だってこんな彼女を追い詰めるような真似はしたくなかった。いつ
かは、自分に打ち明けてくれると思っていた。だが、その気配は一
向になく、彼女は自分を責めるようになっていった……。そして、
それを見ているだけの自分にも腹が立っていた。この際、荒療治だ
が仕方がない。

「いつもそうやってあんたは誤魔化すんだ！どうして一人で抱え込
もうとするつ？そんなにあんたの周りは頼りない奴ばかりなのかっ
？」

先程と同じで、景華は力一杯首を振った。頼りないんじゃない、頼
り過ぎて困っているんだ、ということ伝えて……。――

「それとも、周りを頼り過ぎているとでも思っているのかつ？」
ほら。どうしていつも、そうやって……。

『私が考えていること、わかつちやうの……？どうしていつも、甘
えたくなつちやうの……？』

視界がぼやけて、目の辺りが熱い……。それでも、それを見られな
いように俯くことは忘れない……。景華の様子から、柳鏡は自分の
言ったことが図星だったことを読み取った。そして、自分が優しさ
だと思ってやっていたことが彼女をがんじがらめに縛っていたとい
うことも……。

「あんた、本当に馬鹿だな……。――」
自分の右手から、彼女が震えているのが伝わる……。それでも、自
分には決して涙を見せないようにする意地らしさが本当に愛おしく
て……。自然と、彼の二本の腕が小さな背中に回された。

「周りを一切頼らないで生きていける人間がいる訳ないだろうが……。そんなに、俺や姉さんに頼るのが嫌だったのか……？」

ふるふると彼の腕の中で首を小さく振ってから、彼女の右手が彼の左手を探した。仕方なく、彼は背中に戻した腕をほどいた。

「甘え、ちゃいけない……のはわかって、いるのに……すぐに……甘えたく、なる……自分、に腹が……立つ……。誰がいつ甘えちゃいけないなんて決めたんだ？そんな決まりないだろうが。」

続きが、小さく迷いながら綴られる……。

「王様、になっ……たら、誰……にも頼れ……ない？別にそんなことないだろうが。ちゃんとした大臣を選べばいいだろ？」

おそらく、その先を言うべきかどうか戸惑っているのだろう、やけに長く時間を開けてから、細い指が再び動いた。

「それに……柳鏡、には頼……ってばかりで……迷惑、ばかりかけて……いる？ほう、俺に迷惑を掛けているという自覚はあったのか……。」

そのほんの少し嫌味な調子の言葉に、景華は小さく頷いた。

「それなら、もうこんな隠し事は金輪際やめることだな。あんたが一人でウジウジ悩んでいると思うと、こっちも気が気じゃないんだ。大体、あんたが俺に迷惑を掛けるのは今に始まったことじゃないだろうが。今更気にするなよ。」

ぶっきらぼうで、癢に触るような言い方で……。それなのに、とても優しく感じるのはどうしてだろう……。

「それに、あんたに迷惑かけられるのだってそんなに嫌じゃねえし……。むしろ、頼りたい時に頼ってもらえる方が……。その……なんとなく嬉しいし……。」

心に凝り固まっていたしこりが、溶けて行くのを感じる……。

「ありがとう……。」

小さくそう呟いた。

「は……？」

柳鏡がなにやら奇妙な声を上げた。そしてその後、景華の肩をガッ

チリとつかんで揺すった。

「おい、あんた今ありがとう、って言ったよなっ？俺の空耳じゃないよなっ？」

「へ……？」

そしてそれに驚いた自分の声が、確かに景華の耳に届いた。随分久しぶりに聞いた、懐かしい声……。

「声……。声が出る……。！柳鏡、私、声が……。！」

戻った、という言葉をつぐ前に、彼女の体は彼の胸にすっぽりと包まれた。その腕に、先程とは違って強い力が込められる……。景華の目から涙が、ぽとりとこぼれた。

「ああ、戻ったみたいだな……。」

彼の声が、ほんの少し震えている……。彼女の痛みも、喜びも、彼はいつも一緒に感じてくれた……。

「あのね、柳鏡……。ありがとう……。本当に、ありがとう……。

治ったらず、柳鏡にお礼がたくさん言いたかったの……。」

「そりゃ光栄だ。」

いつもと同じ口調なのに、どことなく柔らかい……。

「あの時、私を連れて逃げてくれてありがとう。それから、龍神の紋章を解放してまで私を助けてくれてありがとう。あの時、私は私だって言ってくれたこと、ありがとう……。皆を頼ってもいいんだって教えてくれたこと、ありがとう……。それから……。」

景華は彼の腕をほどかせてその瞳を真っ直ぐに見つめた。それから、小さく目を細めて微笑んだ。

「いつも、ありがとう……。」

大好き、という言葉を中心に呟きながら、彼女はそう言った。柳鏡は照れた時に特有のあの仕草で、景華から視線を逸らして、長い指を黒いくせ毛に絡ませた。

「別に……。礼を言われるようなことはしてねえよ。」

その不器用な言葉の陰に隠された同じ位不器用な優しさは、彼女を何度も癒してくれた。その言葉に小さく微笑み返して、彼女は作り

かけだった夕食を再び調理し始めた。彼女は二度と指を切るような失敗はしないだろう。初雪は本格的な冬を知らせるだけではなく、失った声が戻って来ることをも告げていたようだ。次の朝、明鈴に会ったら最初になんと言おうか。景華は、そのことばかりを考えながら眠りについた。

「お姫様は、また話すことができるようになりました。」

「わあ、よかったあ。」

小さな娘が本当に嬉しそうに笑顔を見せた。兄の方もほっと胸を撫で下ろしている……。そして、どちらもまた話を聞けるように態勢を整えた。どうやら、まだ母親を解放する気にはならないらしい。仕方なく、小さく溜息をもらして話を続ける……。

「それからは、景華姫のお勉強はうまくいきました。自分を責めることをやめたおかげで、心にゆとりが持てるようになったのです。」

それから、三か月以上が過ぎた。景華が話せるようになったということで、明鈴は本当に喜んでいた。景華自身のために喜んだというのももちろんだが、なによりも彼女を命懸けで救い出してきた自分の弟がどれほど安心したかということを見ると、さらに喜びが増した。そして、前まではなんでも一人であろうとしていた景華が、彼女を頼るようになったことも喜ばしいことのひとつとなっていた。清龍の里は、温かくて平和な昼下がりを迎えていた。冬の厳しい寒さはすっかり遠のき、木々も重くなった雪を枝ごと落とし、春を迎える準備を整えている……。

今日は柳鏡も里の外には行かず、近くに借りた畑の土をおこしに行っていて、昼過ぎには戻るということだったので、景華は遊びに来てくれた明鈴の分を含めた三人分の昼食を準備していた。コトコトと鍋が小気味いい音を立てる中、明鈴がふと声を上げた。

「あ、あの子たちまた来てるわ。」

「え？」

野菜を切つて濡れた手を拭いてから、景華は明鈴と並んで彼女が指差す方向に目を向けた。

そこには、少し離れた所で畑を耕していた柳鏡が、二人の女の子に話しかけられて手を休めている姿が見られた。二人とも年の頃は景華と同じ位だろうか、大人しそうなかわいらしい子たちで、小さな包みをその手に提げていた。二人は頬を赤く染めて、なにやら一生懸命彼に話しかけていた。

明鈴が、隣の景華の様子をチラリと確かめてから独り言のように呟いた。

「大人たちには煙たがられているけど、あいつあれで結構モテるのよねえ。清龍の女の子たちは強い男っていうのが好きだし、それに整った容姿もしてるしね。口が悪いのはいただけないけど、性格もそこまで悪いわけじゃないし……。」

「なっ……。」

景華が言葉に詰まっているのを見て、明鈴はさらに続けた。

「本当だよ？ましてや長の息子だからね、正妻の子じゃないとしても家柄はこの里では最高つて訳。上二人の兄はクズみたいな奴だし一応あれで結婚もしているから、柳鏡がいつて言う子は意外と多いんだよ。」

「柳鏡のどこがいいのよ……柳鏡なんて、口が悪くて、意地悪で、面倒くさがりで……。」

そのくせ、とっても優しくて、いつでも心地良い温もりをくれて、いつも私の背中を押してくれて……。

景華の肩が震えている……。見れば、その握り拳が真っ白になるほど強く握り締めていた。泣かせてしまったかな、と思って少し慌てた明鈴だったが、その表情を見てぎよつとした。

「柳鏡の……馬鹿っ……！」

「え？ちよつと、景華っ？」

パンツと勢いよく戸を開けた彼女はそのまま飛び出して行き、二、三歩走った所で足を止め、大きく息を吸い込んだ。

「柳鏡おーっ！」

三つの顔が、同時に彼女の方を振り返った。

「悪い。」

そう言つて踵を返そうとした柳鏡を片方の子が呼び止めた。

「あの、これ……。お弁当なんです……。良ければ、召し上がって下さい……。」

小さな風呂敷包みが、彼の目の前に差し出された。柳鏡は一瞬、どう断ろうかと当惑した。あまり無下に断ることもできないが、最初から受け取るつもりもない……。景華に今呼ばれたことが救いとなった。

「いや、今呼んだのは飯の合図だと思うから。」

『その割には随分怒っているみたいだったけどな……。』

今度こそくると踵を返して、柳鏡は早足で家へと向かった。家の戸口で待ち構えている景華は、あきらかにふくれっ面だった。

「何だよ、飯か？」

「え、うつん、まだ……。」

乱暴にそう訊ねた柳鏡に、景華はきょとんとして答えた。

「じゃあなんで呼んだんだよ！」

景華はハツとした。そういえば、どうして彼を呼んだのだろう？ 特に用事がある訳でもなく、ただ彼女たちと話している彼を見て無性に腹が立ち、思わず外に飛び出して呼んでしまっただけだった。

「あ、えーと……。なんとなく、かな？」

そう言つて苦笑いをして精一杯誤魔化してみるが、我ながらなんとも苦しいな、と景華は思った。

「ふうん……。」

柳鏡は片眉を吊り上げて意地悪に笑った。なんとなく嫌な予感……。

「あんた、ひよつとして妬いてるのか？」

ボンッ！

景華の顔が、一瞬にして真っ赤になった。その頬に、柳鏡の指先が触れる……。

「へえ、意外だな。案外、当たったりするのかな？」

景華に意地悪をする時独特の、嫌味たっぷりの声……。その声に、景華の心臓は爆発しそうになっていた。

バチンッ！

「そんな訳ないでしょ、このエロ大魔神っ！頭冷やしていらっしゃいっ！」

ピシャッ！

彼の目の前で、戸がかなり乱暴に閉められた。

「ちえっ、かわいくねえの。」

そう呟きながら、彼はヒリヒリと痛む頬に左手を当てた。一方家の中では、後ろ手に戸を閉めた景華が窓のそばで明鈴が抱腹絶倒しているのを見つけていた。

「景華もよくやるわねえ……。ククッ、プププッ……。」

「ひどいわ、明鈴さんったら……。」

確かに、柳鏡はどうして自分が叩かれたのかさっぱりわかっていないだろう。ただ彼女をからかったせいだと思っているだろうが、実際には景華の中にはあの瞬間、それ以上の感情があった。柳鏡があのようにならぶ以外の女の子と接しているのが、妙に腹立たしかったのだ。まだ赤い顔のまま、景華は自分の手を見下ろした。

「痛かったかしら……。」

「当たり前だろ。」

いつの間に戸を開けたのか、柳鏡が開けっぱなしの戸口に寄りかかって立っていた。

「あ、あなたが悪いんじゃない！からかったりするから……。」

「はいはい、そーですね。」

柳鏡はそう言うと、戸を後ろ手に閉めて茶卓の前にドカツと座りこんだ。その左頬には、まだ赤く手形が残っている……。

「それで？飯はまだなのか？あんなうまそうな弁当突っ返してあんなのまずい飯食いに戻って来たんだからな、感謝しろよ……。」

そう言っただけを逸らす彼の様子は、やっぱりぶっきらぼうなのにと

ても温かくて……。左頬もまだ相当痛むはずなのに、何もなかったことにしてくれる優しさが本当に心地良くて……。

「うん……。」

二度目の大好き、という言葉を読み込んで、景華はそれだけ答えた。この言葉の意味が前とは少し違っていたことに彼女が気付くのは、まだ後の話だった。

その夜、父親に呼ばれたとかで、柳鏡は家を空けた。景華は一人で繕い物の仕事をしながら、彼の帰りを待っていた。よく晴れていて、彼女は家の窓から星を見上げた。そうしていると、昔はよく父の膝に乗せてもらって一緒に星を眺めていたな、ということが急に思い出された。しかし今、彼女は一人でその空を眺めている……。

「柳鏡、遅いな……。」

月の位置がかなり高くなっていることから、ふとそう思った。真珠のような月は、中空近くまで昇っている……。

「どうしたんだろ……。何か良くない話だったのかも……。」

そう思って不安げに眉根を寄せた時だった。

ガタンッ！

戸口で突然物音がしたので、景華の肩が一瞬すくんだ。慌ててそちらに歩く。

「誰？」

「こんな時間に客が来る訳ないだろ。」

前に確かめろと言ったくせに、と思いながらも、その声に景華はほっとしてかんぬきを外し、戸を開けた。

「随分時間かったのね。」

「ああ、趙雨の奴がとんでもないことやらかしてくれたから……。」

「

「え？」

そのまま彼が定位置に腰を下ろしたので、彼女もその隣に座った。

「あんだ、死んだことになっているぞ。一週間前に川から死体であ

がったことになってる。朽ちていて誰の死体かわからないそうだが、髪の色があんと同じだったのと、あんたの簪かんざしをつけてたとかで断定されたい。あいつら、俺たちが見つからないものだからそんな手に出やがった！」

そう話す柳鏡は、ものすごい剣幕だった。握り締めている拳は、血管が浮き出てぶるぶると震えている……。

「でも……私、生きているのに……。」

「そうだ。でも、見つからないから始末することもできないし、おそらく俺たちには何もできないと思って居やがる。だから、そんな卑劣な手に出たんだろ……。しかも、それだけじゃない！」

柳鏡の話が続けられた。趙雨に対する激しい憎悪が、言葉の端々から感じられる……。燃えたぎる怒りが、彼の全身を駆け巡っている……。

「あいつ、あんたの死体もあがつて王家の直系が絶えたから、法によつて継承権を得ている自分が王になる、なんて言い出したんだ！そして自分の王位継承を認めさせるために各部族長を召喚するそうだ！いいか？陛下を殺害した真犯人でありながら、そんなことを言い出したんだぞ！」

柳鏡は怒り心頭という様子で、そこまで一気に景華に聞かせた。一方の景華はなぜか冷静で、そこまで柳鏡が話し終えてから彼に水を差し出した。

「ああ、悪い……。……おい、どうしてあんたは怒らないんだよ？自分の死体まで仕立て上げられて、死んだことにされたんだぞっ？」景華も、ふとそれを疑問に思った。確かに、その仕打ちは許せるようなものではない。でも……。

「うーん……。なんか、柳鏡が私の分まで怒ってくれているから気が抜けちゃって……。」

「は？」

柳鏡はそんな彼女の発言を訝しんだが、それはまさに彼女の今の心情を的確に表現した物だった。

「それで？連瑛様は趙雨を王に承認されるの？」

景華はうまく話をすり替えて、柳鏡の気を逸らした。

「……ああ、反対したら俺たちを匿っているのがばれるかもしれないから……。あんたが本当に死んでいたら、趙雨の王位継承権は正統な物だし……。清龍の里は外交用の里と、こっちの本当に生活をする里とに分かれているんだが、外交用の里には城からの迎えも来ているしな。」

「そう……。」

景華の表情が曇ったのを見て取った柳鏡は、何か言わなくてはと焦った。その表情が、たまらなく寂しげに見えたからだ。

「ああ、でも、ほら。あんたが生きているのがわかれば、趙雨の罪が少なからずあきらかになる訳だし……。王位の奪還も、少しはやり易くなっただってことだ……。」

「うん……。」

だから、そんな顔をするのはやめてくれ……。彼は、その言葉を辛うじて飲み込んだ。父親を殺し、自分を裏切った婚約者が今度は自分を亡き者に仕立て上げた……。その心情は、柳鏡にははかり知ることでもない。それでも現実を受け止め、耐えている彼女に自分がしてやれることは、安心して泣ける場所を提供してやること位だ……。

「……泣きたきゃ泣けよ……。」

「へ……？」

突如柳鏡が発した不器用な言葉に、彼女はあつけにとられた。

「別に……我慢しろなんて言わねえよ……。辛いだろ？」

そのまま視線を逸らす……。景華はその様子を見て、気弱な笑みを浮かべた。

「うん……。でも、平気だよ？柳鏡、泣かれるの嫌いでしょ？」

その言葉には、彼は答えなかった。確かに、彼女に泣かれるのは嫌いだ。でもそれは、単にメソメソとされるのが嫌な訳ではなく、彼女の心を守り切れなかった自分の不甲斐なさを思い知らされるから

だ。

「それにね……。」

景華の言葉が続いた。今度は、彼女はニコツと微笑んでみせた。

「前とは違って、一人だつて思わなくて良くなつたから、平気なの。柳鏡もいてくれるし、ね？」

「っ……！」

顔が熱い。彼は、夜の闇が部屋の中を支配していることに感謝した。もし、昼間の明かりの中なら、彼女に全て見られてしまったはずだ。自分の頬が真っ赤な色をしていることも、心臓がフル稼働していることも……。それでも……。

「調子に乗るなっ。」

彼は恥ずかしさを誤魔化すために、景華のおでこをピンツと指で弾いた。彼女が痛つと言つて抗議の視線を彼に向けた。彼は、その短い時間で冷静さを取り戻していた。

「とにかく、あいつらの妙な策略はうまく使えばこっちもいいように使うことができる……。あんた、亀水族^{キスイ}の長には会つたことがあるか？」

景華がきよとした。

「おじいさまでしょ？もちろんよ……。」

景華の母は、亀水族の族長の娘だった。彼女の深緑色の髪は、この母親譲りのものだ。

「そうか、そう言えば王妃様は亀水の出身でいらつしやつたからな……。今度の趙雨の即位式が終われば、どの一族の長も里に戻るはずだ……。それが終わつたら、会いに行くぞ。」

景華が、先程の表情のまま目をぱくりさせた。

「どうして？それに、私たちを見つけたら捕まえて命令が出るはずよね……？」

柳鏡がわざとらしく溜息をついた。

「あんななあ……。反乱の際の助力を求めに行くに決まっているだろうが。清龍の兵士たちだけじゃあ全然数が足りねえんだよ。砂嵐^{サラシ}。」

族はどつちに転ぶかわからねえし……。大体、死んだ奴を捕まえろなんて命令がどうして出ているんだよ？あんたが死んだから命令は解除に決まっているだろうが。まあ、俺はまだ危ないからな、変装でもして行くさ。」

「どんな風に……？」

柳鏡が少しの間腕組みして唸った。

「そうだな……髪を染める位かな？目の色は変えられねえし……。あとは、服装だな。異国の商人のふりでもして行くしかないだろ。」
ちよつと考えただけで、彼は綿密な計画を練っていく……。景華は、彼のその力が羨ましいと思ったが、それは彼が今までに数多くの苦難を乗り越えて来た証でもあった。

「よし、それで決まりだな……。あんたも俺も、西の国の商人のふりをする。虎神族^{コシン}の奴らに見つかったら厄介だからな、あんたも念のために変装した方がいい。俺は髪の色も変えるが、あんたはそのままだ。じゃないと、亀水の長に会ってもあんたが誰かわからないからな。」

「うん、わかった。」

景華が元氣よくそう返事をする。

「まあ、もしそれでも俺たちだつてばれたら……。」「
柳鏡の口調が急に暗くなつた。景華もごくりと唾を飲み込んで、続きを聞く態勢を整えた。

「全員俺がぶつた切る。わかつたな？」

「ぶつ……。」「

景華の肩の力が抜けて、思わず笑みがこぼれた。深刻な話かと思えば、彼の解決策はあまりにもあつさりしている。それでも、自分を氣遣つてそんな話し方をしてくれる彼に、景華は内心感謝していた。

次の朝は、早くから来客があつた。もちろん、明鈴だ。ガタン、と勢いよく戸を開けた彼女は、相当息を切らせていた。

「景華、助けて！」

「「は？」」

ちょうど景華と柳鏡が朝食を食べていたところに乱入してきた明鈴に、二人の視線はくぎ付けとなってしまい、奇しくもその反応までが同じとなってしまった。一瞬お互いにチラと視線を走らせてから、元のように朝から騒々しい来客に視線を当てた。

「私、すっかり忘れていたんだけど、今週末に春の祭りがあったの！私も一応名前だけは神殿の巫女だから、巫女の衣装を着なきゃならないんだけど……。」

柳鏡の眉が、ピクリと動いた。本当は、景華に祭りがあることは聞かせないつもりでいた。言えば連れて行けとせがまれるだろうが、彼はこの里の人を極端に避ける性質だったので、そのような人ごみに繰り出すのが面倒だったのだ。

「ふうん、お祭り……。それで？助けて、って言ったのはどうして？」

案の定、彼女は祭りに興味を示した。彼は、明鈴に口止めをしておかなかった自分を呪った。仕方ない、今年はある恐ろしい人ごみに混じるしかない……。

「青龍の神殿に仕える巫女は、衣装を着て舞を舞わなきゃならないんだけど……。」

なんとなく、彼女の言いたいことが読めた。

「姉さん、衣装ができていないんじゃないやありませんか……？」

明鈴がグクツとした。どうやら、凶星だったようだ。本当にこの姉は、どうして裁縫だけできないのだろうか……。いつもとは形成が逆転した。

「姉さん、いい根性ですね。彼女に縫物をさせるとは……。いやいや、恐れ入りましたよ……。」

「うつつ……。」

事が事なだけに、明鈴は黙っている。普段の彼女なら、おそらく彼を今すぐ地獄送りにしたことだろう。しかし、景華の保護者に近い立場である彼に断られてしまえば、いくら景華が承諾してくれても

衣装を任せることはできないのである。普段彼をからかい過ぎたことを、明鈴は今になって後悔した。柳鏡の言葉は続いた。

「大体、他のことはできるのにどうして裁縫だけ……。いや、俺は姉さんがガサツだからだなんて、そんなこと言いませんよ？」

思いつき言っているじゃない、と白い目で弟を見返す……。その顔には腹立たしくも得意気な笑みが浮かべられている。

「じゃあ、衣装を縫うお手伝いを頼みに来てくれたの？わかった、任せて！」

そう言つてニツコリと笑う景華。もちろん、彼女が快諾してくれることは明鈴も計算済みだった。問題は、普段の恨みを今晴らそうとしている弟の方だった。しかし、彼はあっさりと了承した。

「仕方ありませんね。ただ姉さん、俺からもお願いしてもいいですか？」

「何よ？」

明鈴の白い目を受けても、彼は涼しい顔をしている。

「衣装が縫いあがるまでの間、家に泊って行って下さい。実は、何日間か空けようと思っていたんです。姉さんが居てくれるとなれば俺も安心して出掛けられますし。」

「どうしてよ？」

その疑問に、彼は意味ありげに微笑んで答えた。

「まあ、旅行の準備とでも言っておきましょうか。彼女とも昨日相談しましたし。」

景華に顔を向けると、彼女は満面の笑みで頷いた。

「……まさか、新婚旅行……？」

明鈴のその言葉で、柳鏡は口に含んでいたお茶を吹き出してしまった。景華の方も、持っていた箸を取り落とした。柳鏡は、お茶がどこか変な所に入ったらしく、かなりむせ込んでいる……。ようやく冷静さを取り戻した景華が、慌てて彼の背をさすってやった。

「おい、姉さんの衣装なんか絶対縫うなよ！大体、どこをどう取り違えたらそうなるんですか！」

やつと落ち着いた柳鏡が最初の言葉を景華にかけてから、明鈴に向き直った。なるほど、今は大分効いたみたいだ……。

「いや、だって二人で相談したって言うから行き先でも相談したのかなあ、と……。普通そう思っつて。」

いかにも柳鏡の言い方が悪いとでも言うように、明鈴は開き直った。「違うに決まっているでしょう？ 誰がこんなの嫁にしますか！」

「何よ！ 私だってお断りなんだから！」

ワイワイ、キャンキャン……。明鈴はこっそり溜息をこぼした。失敗だった……。この二人に喧嘩をされては、きりがない……。何か話題を変えなければ。

「あ、そうだ景華、やっぱりお祭りには来るでしょ？」

「え……？」

景華の注意が明鈴に向けられた。よし、うまくいったようだ……。景華はじつと考えてから柳鏡を見上げた。

「なんだよ？ 行きたいって言うのか？ 言っておくが、俺は人ごみが嫌いだからな、気が変わったらあんたがわがママを言っても即刻抱えて帰るからな。」

「うん！」

柳鏡が行くと言い出したことになんか驚きを感じた明鈴だったが、軽く微笑んだだけで口には出さなかった。

「じゃあ、祭りまでは勉強は休みだな。休み明けに今まで教えたことが一つでも抜けていてみる、あんたのできの悪い頭に直接本をぶつけるからな。内容がそのまま移るかもしれないだろ？」

「失礼ね！そこまで頭悪くないわよ！」

果てしない言い合い……。明鈴は今度は大きく溜息をついた。

それから三日、明鈴は柳鏡の家に泊って祭祀用の衣装を縫い上げた。と言っても、明鈴が行ったのは主に景華の身の回りの世話で、自分の衣装を縫ってくれている彼女のサポート位だった。

「よし、これで完成！」

景華がそう声を上げたのは、三日目の夕方だった。

「明鈴さん、早速着てみてよ。」

景華に促された明鈴は、ニツコリと頷くと真新しい衣装に袖を通した。青と白が基調となっていて、袖や裾はひらひらとしていて舞台映えがしそうだった。

「さすが景華、ピッタリだよ！明日の祭りにも間に合ったし！本当にありがとう。」

明鈴の笑みに、景華も満面の笑みで返す。気がかりなのは、彼がいつまでたつても帰って来ないことだった。衣装を縫っている時はそこまでひどく気にはならなかったが、常に彼の不在が頭から離れなかったのも事実だ。実際に、彼女は外で足音がしたと思うとすぐにそちらを眺めていた。

「柳鏡、帰って来ないね……。」

景華はハツとした。まさか、明鈴にまで自分の考えが読まれてしまったのか！

「今、そう思わなかった？不安で死にそう、って顔してたもの。」

どうやら、自分の表にそんな表情が出てしまっていたらしい。景華は大人しく頷いた。

「ふうん、私がいるのにそんなに不安かなあ？こう見えて、その辺の奴なんて相手にならない位強いんだよ、私！」

景華がニツコリと、しかしどこか寂し気に微笑んだ。

「柳鏡から聞いたわ。明鈴さんはかなり腕が立つって。だから、私のことは何も不安じゃないわ。」

「じゃあ、どうして？」

明鈴の問いに、景華は目線を窓の外に移してから答えた。

「柳鏡に何かあったんじゃないかと思ったりして、不安なの。そんな訳ないのにな……？」

夕焼け色の空はだんだんとその色を群青に染め変えている……。室内にも、群青色の闇が迫って来ていた。

「いつもそう。柳鏡が狩りの依頼を受けて山に行く時も、いつも。」

私がいるせいで危ない仕事をしてくれているのに、待っているしかできないから、仕方ないんだけど……。」

「景華、いいこと教えてあげようか？」

明鈴の言葉に、彼女は窓の外から視線を戻した。弟の心を捕らえた真紅の瞳が、彼女を射る……。

「もし柳鏡にちよつとでも感謝の気持ちを伝えたいなら……。」

景華はそれに聞き入った。彼に対しては素直になれない彼女だ、どんなアドバイスでも欲しいと思っていた。

「あいつが帰って来た時に、笑顔でおかえり、って言ってやるからね。」

「へ？」

景華がきよとん、と目を丸く見開いて明鈴を見た。どうやら、全く予想もしていなかった言葉だったらしい。

「それだけで、いいの？」

「そうだよ。」

明鈴は、いかにも不思議だ、という顔を自分に向けている景華に笑ってみせた。

「だって、景華がいるから柳鏡はここに帰って来るんだからね。ほら、噂をすれば。どうやら、明日の祭りには間にあつたみたいだね。じゃあ、私は家に帰るから。またね！」

明鈴は衣装をその腕に引つ掛けると、あっという間に出て行ってしまった。明鈴の言った通り、彼女が開けっ放しにしていた戸口から、柳鏡の顔が覗いた。

「衣装、できたのか？」

「あ、うん。さっきできたの。それで、今帰っちゃった……。」

景華は、正直なことを言うと言ったことを疑っていた。それだけで、本当に感謝の気持ちなんて伝わるだろうか。半信半疑のまま、彼女はそれを実行に移した。

「ねえ、柳鏡……？」

「なんだよ？」

気のない返事が返される……。

「……おかえりなさい。」

明かりをつけていた彼の動きが、一瞬止まった。薄暗がりの中で自分の表情まで判別できたかはわからないが、景華は明鈴に言われた通りに笑顔でそう言った。

「……ああ。」

ただそれだけ。たった一言の短い返事……。でもそれは、彼が照れていることを表している。そして、景華にもそれはなんとなくわかっていて。理由はわからないが、どうやら明鈴が言っていたことは本当だったようだ。

「明日、楽しみだね。」

ニコニコとしてそういう景華に、柳鏡は溜息をついてみせた。

「俺には地獄だ……。」

それでもあんな人ごみの中に行こうと思うのは、彼女がそう望むから。夕飯を温め直すその横顔に、彼は小さく微笑んだ。

「そう言えば、何をしに行っていたの？全然教えてくれなかったじゃない。」

そう言っただけの少しふて腐れてみせる景華。柳鏡はその姿に再び笑みをもらした。

「新婚旅行の準備。」

ふざけてそう答える……。

「冗談ばかり言わないでよ！心配したんだから……。」

確かに、彼は本当なら昨日の内に帰って来る予定でいた。しかし、途中で大蛇の妖怪と出会ってしまったので予定が狂ったのだった。だがそれを言えば彼女が不安がるから、言わない。

「亀水の長に会いに行く準備だよ。商人が品物も何も持っていないかったらおかしいだろ？それから、それっぽい衣装も揃えて来て、全部納屋に置いてきた。」

「そうだったの……。てつきり遠くの妖怪退治にでも行ったのかと思っただわ。」

恐るべきは女の勘である。柳鏡は食事を運んで来てくれた彼女に、曖昧な笑みを返した。実は途中で出会った大蛇というのは退治の依頼が出ていたもので、その賞金がまとまった金額だったので、行きかけの駄賃に退治しようと思っていたのだ。だが、予想以上に相手の抵抗が激しかったために、予定が丸一日遅れてしまったのだ。そして、その賞金は旅行の準備に消えた。

「それにしても、よく品物に衣装まで揃えるお金があったわね。どうしたの？」

一瞬たじろいだ柳鏡だったが、うまく切り抜ける方法を見つけた。

「いや、最初の一日は狩りをして、その獲物を売ったんだ。結構獲ったから、それなりの金額になったし。」

「ふうん、そうなの。」

彼は嘘はついていない。最初の日で大蛇を狩ったのだ。そして景華は彼がついた嘘を真実だと思い、疑ってはいなかった。家に帰って、彼女の様子を眺めている時が一番ほっとする……。

「っ……！」

柳鏡の表情が一瞬歪んだ。

「どうかしたの？熱かった？」

景華が茶卓の向かい側で不安げに眉を寄せる。

「いや、なんでもない……。」

そうだ、なんでもないんだ……。彼はそう自分にも言い聞かせた。今痛んだのは彼の左腕、龍神の紋章が刻まれている部分だった。このところ、彼は傷の疼きを頻繁に感じていた。最初は違和感がある程度のもんだったが、最近は先程のように痛むようになっていた。

「何だっけ言うんだよ……！」

龍神の試練が近付いているのかもしれない、と彼は思った。それならば仕方ない、と。しかし、先程のように景華に不安げな顔をさせるのだけは嫌だった。

「なんでも、ないんだ……。」

彼が食事の手を止めて厳しい表情で何事かを考えているのを、景華

には見ていることしかできなかった。もし自分に、柳鏡の考えていることがわかったなら、という願望を持ちながら……。

「すごい、柳鏡って、本当に強いよね！」

妹の方が、嬉しそうに歓声を上げた。兄の方もその言葉に頷く。

「私ね、大きくなったら柳鏡みたいな人と結婚するの！」

「お前、この前まではお父様みたいな人と結婚するって言ってたじゃないか！」

目をキラキラとさせて自分の夢を話す妹に、兄が間髪をいれず疑問を差し挟んだ。妹がふくれっ面になった。本当に、子供の頃の母親とそっくりだ。

「きつとできるわよ。もう少し、大人になってからね。それから、お姫様が待ちに待ったお祭りの日がやってきました。」

母親の声で、兄妹の目には今見えている光景とは別の光景が浮かんで来た。明るい篝火かがりびに、それを囲んで楽しそうに踊る人々、たくさんんの商人の姿……。

「ねえ、見た？柳鏡！見た？」

興奮した声でそう問いかける彼女に、彼はああ、見た見た、と氣のない返事を返した。まったく、人ごみの中に出ることだけでさえ面倒なのに、と思いながら。景華たちは今、明鈴たち青龍の神殿に仕える巫女の踊りを見たところだった。先程から彼女は、人だかりを見つけては分け入って行くのだ。さすがの彼もそれにはうんざりしていた。

「もういいか？そろそろ帰ろう。」

おそらく納得はしてくれないだろう、と思いながらそう提案する……。

「ええ？まだお店見ていないもの。もう少しだけ、ね？」
「……。」

惚れた弱み、とでも言うやつだろうか、彼女に上目づかいでそう言

われては彼もなす術がない……。時々、彼女が計算ずくでそうしているのではないかと思えるほどだ。

「まあ、まだあちこちで催しをやっているから店の方もそんなに混んでいないし……。いいか？混んできたらずくに帰るからなっ。」
「うん！」

明鈴から、彼があまり里の人に近付きたがらないということは景華も聞いていた。景華にもそれはわかる。彼は行く先々であからさまな敵意を向けられているのだ、そんな人々に近付きたい訳がない。それでも自分のわがままに付き合ってくれているのだから、あまり困らせたくはない。

「わあ、見て見て！いろんなお店が出てる！」

景華がそう言つて辺りを見回す様子に、柳鏡は苦笑した。確かに、彼女にしてみればこれはかなり珍しい光景なのだろう。しかし、小さな子供のようににはしゃぐその姿がなんともおかしい。連れてきて良かったかもしれない、と彼は密かにそう思った。人ごみは面倒だし周囲の刺すような視線も痛い、それ以上の価値があった、と。

「あんまりチヨロチヨロとするな！はぐれるだろうが！」

彼のその言葉が耳に入っているかどうかは、疑わしい。

「わあ、綺麗！」

景華が一つの店の前で足を止めて、歓声を上げた。つられて柳鏡もそれを覗きこむ……。

「お嬢さん、お目が高いね！それは上等な珊瑚の首飾りだよ。滅多に見られないような品だ。」

店番の中年の男が、愛想よく笑いながらそう言った。真っ赤な色の珊瑚が、篝火の光を受けてより赤く煌めく……。

「あんだ、こんなのたくさん持つてるだろ？」

柳鏡がこつそりと呟く……。なぜそんな物に惹かれるのか、彼には理由がわからなかった。城では、彼女はよく珊瑚の首飾りを身に付けていた。それも、今眺めているような物とは比べ物にならないほど素晴らしい物を。そして、彼女はそのような宝飾品をたくさん持

つていた。それなのになぜ、こんな物を欲しがるのだろうか……。
景華が寂し気に微笑んだ。

「うん……。でも、もう全部なくしちゃったから……。ちょっと懐かしくなつて見てただけ。さあ、次見に行こう！」

そう明るく言つて彼女は店を後にした。柳鏡もすぐに後を追つたが、あることを考えていた。

『あんなやつ、どこかで見たよな……。どこで見たんだ？』

「おい、柳鏡じゃないかね？」

考え事をしていた彼を、道端の天幕からしわがれた声が呼び止めた。柳鏡の歩みが止まり、景華の足もそれに合わせて止まった。

「婆さん！まだ生きていたのか！」

柳鏡がいつもの皮肉な物言いでそう言つた。どうやら、彼がこんな話し方をすることから考えて、彼を呼び止めたのは数少ない心許せる者だつたようだ。天幕から、腰の曲がつた老婆がその姿を現した。その姿から、彼女がかなりの高齢であることが窺える。

「当たり前だ。お前こそ、まさかこんな所に足を運んでいるとは……。たいした変わりようだな。おまけに、女連れとは……。……ん？娘さん、随分変わった相をしているな……。」

「私、ですか……？」

景華はその言葉に自分を指差した。老婆に下からじつと覗きこまれて、彼女は少々たじろいだ。

「こんな所ではなんだからな、中に入るといい。あんたの運命を見てやろう。」

景華は困つた顔をして柳鏡を見上げた。

「ああ、この婆さん、占い師なんだ。人としてはともかく、占いの腕は確かだぜ。せつかくだから見てもらえよ。」

柳鏡の言葉に彼女は素直に頷いて老婆の後に続いた。その後ろから、柳鏡もついて来た。天幕の中は薄暗く、蠟燭の明かりがちらちらとしている中に椅子と机が置かれており、机の上には怪しげな水晶玉も置かれていた。柳鏡がついて来てくれなければ、彼女はその異様

な空気に恐れをなして、逃げ出していただろう。老婆は片方の椅子にゆっくりと腰掛けると、対面の椅子に座るように促した。

「さあ、これからあんたの運命を見て行くが……。本当に、随分変わった相をしている……。数奇な運命の持ち主……。」

景華が向かい側に座るのを待つて、老婆は語り始めた。数奇な運命の持ち主、という言葉には、景華も柳鏡も驚きはしなかった。婚約者に父を殺されて住む場所を追われ、ついには自分も死んだことにされてしまったのだ、これを数奇と言わずしてなんと言おう。

「ほう……銀髪の男が見える……。こいつが、あんたの運命を狂わせた。まあ、あんたがこれまでに享受していたのはかりそめの平和だ。失った痛みは大きいだろうが、この先の栄光のためには仕方がない……。」

「栄光？」

景華が老婆の言葉に疑問を差し挟んだ。それは、趙雨から玉座を奪還した後のことを意味しているのだろうか。老婆の言葉が続けられた。

「あんたはいずれ、この国の歴史に名を残すような人間になるだろう……。ただ、そのためには大切な物を一つならず手放さなくてはならない……。その覚悟ができなければ、運命はあんたを破滅へと導くだろう……。」

「栄光か、破滅か……。」

景華は、小さく老婆の言葉を繰り返した。手放さなくてはならない物、の内、一つはなにかわかつている。それは、幼い頃から培ってきた友情……。彼女の栄光は、そのまま友の破滅を意味する。しかし、老婆は言った。一つならず、と……。

「ほう、剣が見えるぞ……。あんたは、この剣で自らの運命を切り開くことができるだろう……。」

「剣……。」

彼女の頭に最初に思い浮かんだのは、柳鏡と剣術の練習をする時に用いている細身の剣だった。それにしても、あれが身を守る以外で

役に立つとは思えない。

「婆さん、それだけか？」

柳鏡の顔がひよいと景華の顔を覗き込み、その後老婆に向けられた。
「ああ、その娘さんの運命は大体そんなところだ。柳鏡、少し残れ。ああ、娘さん、あんたはもういいよ。少し席を外してくれるかね？」
老婆の言葉で景華は立ちあがって、他のお店見ているから、と柳鏡に告げた。

「この辺だけにしておけよ。探すのが面倒だ。」

その言葉に頷くと、景華は天幕を出て行った。その背中がどこことなく悲しげなのは、自分の運命に、手放さなくてはならない物があると知ってしまったからかもしれない。だが、彼女はそれと引き換えに栄光を約束されたのだ……。まるで龍神の呪いのようだ、と柳鏡は密かに思った。彼らは、ともに諸刃の剣の上を歩いているのだ。

「お前、知っていてあの娘を側に置いているのか……？」

老婆が、静かな口調でそう柳鏡に問った。

「は？」

彼女が何を言いたいのか全く理解できず、柳鏡は乱暴にそう聞き返した。

「あの娘……。あの瞳の色、間違いない。龍神の華だ……。」

初めて聞く言葉に、彼はほんの少しだけ身を乗り出した。

「何だよ、それ……。」

老婆が、重そうに口を開いた。かなり話にくいことのように……。

「龍神の華……。龍神を誘う、真紅の華……。それは龍神となる者にとつては最大の試練となり、また、その身を滅ぼしかねない毒の華ともなる……。華はどうしようもなく龍神を惹きつけ、また、龍神もどうしようもなく華に惹かれる……。」

老婆が、一度そこで言葉を切った。本当に、占い師という人種はこれだから好きになれない。発言が謎に満ちている……。

「龍神が華に触れようとすればその鋭い爪で華の命を絶ってしまい、我が物としなければ龍神には恐ろしい狂気が待っている……。華に

対する恐ろしいまでの独占欲、執着、そして妬み……。華に憑かれてしまった龍神は自らの欲にその身を蝕まれていくことになる……。そして、その狂気の先には死が待っている……。」

「そりゃ厄介だ。」

柳鏡が、まるで他人事かのようにそう答えた。老婆がキツと目を見開いて、柳鏡を叱りつけるような口調になった。蠟燭の明かりが揺れる……。

「お前、他人事ではないぞ？聞くとところによると、お前、あの娘を家に住まわせてやっているというではないか！悪いことは言わん、すぐに追い出せ。生きたければ……。」

机に頬杖をついて、柳鏡が面倒そうに言葉を紡いだ。

「そんなこと言っただって仕方ないだろ。他に行くあてもないんだから。」

老婆が長く息を吐き出した。どうやら、彼女は柳鏡のことを自分の子供か孫のように思っているらしい、本当に親身になって彼の心配をしているのがその表情からもわかる……。

「……お前、すでにあの華の破滅の美しさに魅入られているな……？」

柳鏡がついと視線を逸らした。それは、心を読まれないようにという彼なりの精一杯の抵抗であり、自分の心を読み切ってしまう老婆への反抗的な態度でもあった。それでも、老婆の視線は彼の心の奥底までを見透かしてくる……。

「……。本当に、昔からあんたには隠し事ができねえな……。」

老婆が、今度ははつきりそれとわかるように溜息をついた。蠟燭の明かりを受けて怪しく輝く水晶を見つめるその目には、憐みの色があった。

「……まあ、龍神の紋章を持つ者が生まれることも稀であれば、龍神の華が生まれることもまた稀だ。ましてや、その二つが出会うことはさらに……。柳鏡、お前への試練はあの者を側に置くこと、そして諦めることかもしれないな……。」

今度は柳鏡の溜息が蠟燭の炎を揺らした。それに合わせて室内の陰も動く……。

「つまり、彼女は俺のものにはならないってことだろ……？」

柳鏡が立ち上がった、先程景華が出て行った天幕の出入り口を見つめた。その瞳は、なんとも悲壮で切ない光を宿していた。

「そんなこと……最初からわかっている……。」

そうだ、最初からわかっていたはずだ……。それなのに、現在の生活が当たり前になり過ぎていた……。当たり前のように彼女がいて、当たり前のようにおかえり、と言ってくれる生活が……。

「お前も、そのような紋章ものを持って生まれたばかりに、辛いな……。」

老婆は、決して彼の顔を見ようとはしない。いや、見ることもできないのだ。彼は、なんと悲壮な運命の下に生まれてしまったのだろう……。その思いに胸が詰まる……。

「いや、紋章これがあつたからこそ彼女を守れた。俺は、そう思っている……。」

左腕に刻まれた呪いの証を服の上からじつと覗く……。本当に、これのせいでろくな目に遭つたことがない……。ただ一度、あの時を除いて……。

「婆さん、話はそれだけか？早く行かないと迷子になられそうで……。」

「ああ、行くと良い……。」

柳鏡が居ても立ってもいられないという様子でそう言ったので、老婆は彼を解放した。少しでも幸せに過ごして欲しい、という願いを込めて……。

「そうだ、婆さん。もう一つ言っておくことがあつた。」

柳鏡がこちらを振り返らずそう言った。老婆は、視線だけを彼の背中に向ける……。

「彼女は俺にとって欲を掻き立てるようなものじゃない……。呪われたこの身でも人であることができると証明してくれる、唯一の存

在だ……。」

「そうか……。」

老婆の短い返答を受けて、柳鏡はその姿を消した。あとに残された老婆の溜息が、室内の陰を揺らした。

「あの娘への想いでのみ、自らを人と位置付けることができるというのか……。」

人として生まれたにも関わらず人外の力を持つてしまった彼が、唯一自己を人だと確信できるもの……それが、感情だった。しかし、それは……。

「悲しい生き方だな、柳鏡や……。」

蠟燭の明かりが、消えた。

「まったく、どこ行っただよっ？」

いつの間にこんなに人が増えたのだろうか、辺りは店の品物を眺める人で溢れている、同時に、冷たい視線にも……。近くにしろ、と言っておいたにも関わらず、彼女の姿はその辺の出店には見当たらなかった。先程珊瑚の首飾りを眺めていた店にもいないし、人々の輪舞の輪の中にも見当たらない。その姿がないことで、彼は焦りを感じていた。こんなことなら離れるのではなかった、と。

「っ……！」

やっと見つけた。彼女は、出店や輪舞の輪から離れた草むらの上に一人で腰を下ろしていた。膝を抱えている様子から、何かを考えているのがわかる。彼女が考え事をする時に特有の体勢だからだ。

「おい、店見てるって言っただろうが。」

そう声をかけてから、隣に腰を下ろす。ふと一瞬視線を上げてから、彼女は元のように足元に視線を落とした。

「うん、そうなんだけど……。なんとなくそんな気分になれなくて……。」

悲しげな微笑を浮かべて、膝に頭を預けたまま彼を見上げた。

「なくさなきゃならない物ってなんなんだろ……？ずっとそれを考

えていたの。柳鏡は？何の話だった？」

胡坐をかいた膝の上に頬杖をついて、足元の草を乱暴にむしりながらその言葉に答える……。

「別に……。龍神についての講釈を色々と聞かされた。試練の話とか、龍神の華っていう奴についてとか……。」

「龍神の、華……？」

聞きなれないその言葉に、彼女はなんとなく心が惹かれた。なんとも美しい響きだ。

「俺もさつき初めて聞いたんだが、そういう奴がいるらしい。なんでも、龍神って言うのは皆が皆そいつに運命を狂わされるとかで、気を付けろとさ……。」

「ふうん、悪い人もいるのね……。」

いつもの調子であんたのことだろうが、と言ってしまいそうになったが、それはなんとか堪えた。聞かせたくない、と思った。聞かせてしまえば、彼女に距離を置かれることとなる……。自分を破滅させないために。彼女なら、きっとそうするだろう……。

「もういいか？帰るぞ。」

「うん。」

柳鏡が立ち上がると、景華も立ち上がって服に付いた草をほろつた。歩き出せば、半歩遅れてついてくる……。彼は、その半歩の距離が愛おしかった。そして、なくしたくないものだった。

「龍神の華なんて、知るものか……。」

小さく呟いたその声は祭りの喧騒に吞まれて消えてしまったが、彼なりの、運命への精一杯の抵抗だった。

清龍の里が豊穰を祈る春の祭りで賑わっている頃、城でも華やかな式典が催されていた。言うまでもなく、趙雨の即位式だった。神官によって、宝冠が銀の髪に載せられる……。それは彼にはズシリと重く、その責務の重さをそのまま意味していた。そして、彼が犯した罪の重さも……。

『重いな……。』

その瞳が伏せられる。あの時の痛みは、未だに癒えていない。最近
は、よく夢に見るのだ。自分がここにたどり着くために犠牲にした
少女と、彼女を守って姿を消した龍神を……。彼の目には、きらび
やかな祝宴も全て色を失って映った。口の中が苦い……。

『改革の前には、犠牲はつきものなんだ……。』

最近、彼は常にこの言葉を自分に言い聞かせてきた。そうでもして
自分を納得させなければ、生きることさえ難しく感じられる……。
あの日、足元に崩れ落ちたその人の表情が、今でも忘れられない……。
そして、彼女の絶望の表情も、彼の軽蔑の眼差しも……。彼は
ふと、ある人を探した。衆目があるのであまりみつともない真似は
できないが、目の端だけで彼女を探す……。いた。彼の心情を、唯
一理解してくれるはずの人……。緋雀族の春蘭……。彼女は、彼の
視線を受けてニコリと微笑み返してくれた。その笑顔が、罪の意識
に苛まれている彼を救ってくれる唯一の物だった。
『大丈夫だ……。必ず、良い時代を築いてみせる……。』
彼女の笑顔にそう誓った彼だったが、この時はまだ気付いていなか
った。玉座に腰掛ける者の素質も器量も、彼は持ち合わせていなか
ったということに……。

「趙雨、本当に王様になるんだね。前の王様を殺したくせに！」
兄の方が憤慨してそう言った。

「そうね……。でも、彼の罪を証明できる人が城にはいなかったの。
それに、お城は彼の味方ばかりになっていたから、本当のことは皆
黙っていたのよ。」

「ずるいわ！悪いことをしたらごめんなさい、って習わなかったの
かしら？」

妹の方もかなり怒っている……。しかし、そのふくれっ面がなんと
もかわいらしい。

「うーん、大人はそれじゃあ済まない時があるの。」

「変なの。わからないよ。」

母親が苦笑する。子供には納得のいかないことだろう。だが、説明するにも方法がない……。

「さあ、続きを話しましょうね。」

結局、母親は話を続けて気を逸らす、という選択肢を取った。好奇心旺盛な子供たちなので、続きとなれば必ず聞きたがるだろう、と思つて……。

「そうだよ、お母様。早く、早く！」

案の定、子供たちは話の続きの方に興味を示した。戻るのがまた遅れてしまうな、と思いつつ、言葉にしてみました以上は仕方がないので続きを語り始める……。

「それから十日して、趙雨の即位の式に出席していた清龍族の長が里に戻つて来ました。」

「柳鏡、いる？」

昼過ぎの柳鏡の家に、明鈴がひょつこりと顔を覗かせた。景華は食事の後片付けをしていて、柳鏡はなにやら書物とにらめっこをしていた。

「なんですか？」

彼は一瞬本から目を上げたが、その後すぐに視線を戻して明鈴に訊ねた。どんな難しい本を読んでいるのか知らないが、眉間にしわが寄っていることから、かなり苦労していることが窺える……。

「何の本？」

何の気なく明鈴が覗こうとしたが、柳鏡がぱつと本を引っ込めた。

「用事はなんですか、姉さん？俺は今忙しいんです。」

隠すところが怪しいな、と思いつつ、明鈴は自分が訪ねて来た理由を話した。

「いや、父上が呼んでるよ。景華も……。」

「え、私も？」

景華が軽く目を見開いて訊ねた。

「うん……。本当は自分が足を運びたい位だけど、景華の身分が露見たらまずいから、二人で屋敷の方に来てくれないか、って……。」

「ちつ、なるべくなら近付きたくない場所なのによ……。行くぞ。」

あきらかに柳鏡は不機嫌になったが、先程まで読んでいた書物からも相当な打撃をくらっていたようだ、いくらなんでも短気が過ぎる……。

「ちよつと、待つてよ！」

景華が慌てて彼の後を追う。その後ろ姿に手を振りながら、明鈴が叫んだ。

「いつてらっしゃい。留守番しているからね！」

くるりと踵を返して、明鈴はニヤリとした。そして家に戻り、先程彼が隠した書物を引っ張り出して開く……。

「へ？何よ、これ？語学？」

柳鏡が隠した本は西の国の言葉について書かれた本で、あちこちのページに折り目があることから、彼がすでに何度か読了していたことがわかる。

「あいつ、こんなもの勉強してどうする気なんだろう……？」

明鈴には全く訳がわからなかったが、誰かに理由を聞く訳にもいかず、なんとも後味が悪い悪戯となってしまうた。

「父上、柳鏡、只今参りました。」

「入れ。」

初めてここを訪れたときと、同じような会話がされる……。景華はふとあの時の緊張感を思い出した。まさか、彼の兄や継母たちもいるのだろうか……。？だが、戸が開かれて室内を見渡した彼女は安心した。そこにいたのは、連瑛のみだった。すでに人払いもされていて、部屋の周りに人の姿はない。

「姫君、このような所までご足労願いましたこと、お詫び申し上げます。」

「いいえ、当然のことですから……。明鈴さんから連瑛様が私たちをお呼びだと伺いました。」

深々と礼をしてみせた彼に、景華は首を振って答えてから用向きを訊ねた。

「はい、城の即位式から今朝方戻ったことをお伝えしたかったので……。おそらく、亀水の長も里に帰りついた頃と思います。会いに行かれるのですよね？」

景華が頷いてはい、と答えた。おそらく、柳鏡は父親には計画の全てを話して聞かせているのだろう。あるいは、助言などをもらっているのかもしれない。

「亀水の長は公明正大な人物と聞いております。姫がお話をされれば、必ず力を貸してくれるでしょう。ましてや、城ではあまりにも無茶な人事がされた後ですから……。」

「無茶な人事、ですか？」

柳鏡が父に訊ねた。景華もそれは気になった。

「王の即位とともに人事の改正はよくあることだが……。趙雨はほとんどの役職に虎神族と緋雀族を起用した。彼が信用できる人物ばかりを起用したつもりだろうが、その偏りはこの清龍族だけではなく、砂嵐族や亀水族が不満を持つ原因となっている。今決起の話を持ちかければ、亀水族は間違いなく乗ってくるだろう。それに、姫が趙雨の罪を明かしてくだされば彼を退位に追い込むこともできるからな、おそらくは砂嵐族も協力を申し出るだろう……。」

「それは、願ってもいない好機ですね……。」

柳鏡がそう呟くのを聞いて、景華は複雑な気分になった。自分たちが好機を迎えているということは、一方の城にいる友人たちは絶体絶命の危機を迎えているということだ。そして、王という立場の複雑さも同時に思い知らされた。部族間の力関係……。そんなもので考慮に入れて人事を行わなければならないのだ。単に信用の置ける人間や、有能な人間のみを登用すれば良いという訳ではない……。それでは父上、明後日の朝には出発したいと考えているのですが、

通行証を発行していただけませんか？」

柳鏡の声で、ハッと現実に取り戻された。彼女は今、自分が王になったらどのような人事を行うべきかを考えていたのだ。いくつかの空気が残ったが、大体の役職は決まっていた。もちろんそれには虎神族や緋雀族の人々もいる。よく知っている分、清龍族の人間が二、三人他の部族よりも多くなってしまったが……。

「通行証のことは心配なくていい。明日にはできるだろうから、取りに来い。」

「それから、決起の際に奥方様や兄上たちに妨害をされる可能性はありませんか？清龍から兵士を出せないなんてことになれば、勝ち目がありませんよ？」

「心配ない。」

やけに確信に満ちた表情で、連瑛が頷いた。どこからそんな自信が来るのだろうか、と景華は密かに思った。あれだけ底意地が悪そうな人たちだ。何をしでかすかわからない……。

「反乱が成功する可能性が高いと考えたのだろうか、清龍からも兵を出せと言っている。そして、姫君にくれぐれもよろしくということだ……。」

「なるほど、これを機に中央に取り立ててもらうつもりですね……。相変わらず考えることがせこい人たちだ……。」

連瑛はそれには言葉を発しなかった。ただ、柳鏡をたしなめることはできず、なおかつ彼に賛同することもできなかったのだ。

「わかりました。即位後の人事のことは姫の胸三寸ですが、邪魔が入らないということには安心しましたよ……。それでは失礼いたします、父上。明日、通行証を取りに伺います。」

柳鏡が礼をするのに倣って景華も礼をして、二人で連瑛の部屋を後にした。半歩の距離は、やはり変わることはなかった……。

そして、彼らは柳鏡の予定通り二日後の朝に明鈴に留守の間のことを頼んで出掛けて行った。荷馬車には象牙や織物など、西の国の特

産品が多く積まれている。たくさん積んでいるという訳ではないが、商人の荷物の量としてはちょうどいい位だった。着なれない西の国の衣装を着て、馬を操る柳鏡の横に腰掛ける……。馬車を曳いている馬は、彼らを城から清龍の里まで乗せて走った馬だった。

「こいつならかなり脚力もあるから、途中敵に遭遇しても二人乗りで逃げられると思ったんだ……。」

景華が馬をじっと見つめていたことに気付いたのだろう、柳鏡は前を見たままそう言った。彼のその髪は、燃えるような赤色に染められていた。本当は茶色にする予定だったのだが、明鈴が面白がつてこの色にしてしまったのだ。黒の方がいいな、と密かに思った景華だったが、口には出さない。

「そうだ、これ……。」

柳鏡はそう言つて懷をゴソゴソとまさぐると、何か赤い物を取り出した。それを隣の景華の手に押しつける……。近くで見ると、それはなんと珊瑚の首飾りだった。祭りで見た物とは違うが、細工が細かくて美しい。よく見て気が付いたのだが、その色は真紅ではなく、ほんのりと桃色がかっている……。

「綺麗……。どうしたの、これ？」

「それで良ければあんたにやるよ。」

「へっ？くれるのっ？」

目を丸く見開いてそう言った言葉の最後は、悲鳴に近かった。いらないのかよ、と不機嫌そうに問う彼に、景華は慌てて首を振ってみせた。

「うっん！欲しいし、すごく嬉しいけど……。高かったでしょう？」

遠慮がちに問いかけた景華に、柳鏡は視線を当てずに答えた。

「いや、買った訳じゃないから値段は知らねえよ。」

「え？じゃあどこで手に入れたのよ？」

「母さんの。」

「へっ？」

柳鏡があっさりと言つてのけた言葉があまりにも衝撃的で、景華は

思わず聞き返してしまった。冗談だろう、と思いながら……。

「だから、母さんのだって言っているだろ！衣装箱の隅に入っているんだよ！」

「……返す。」

景華はそう言つて柳鏡の目の前に首飾りを差し出した。なんだよ、気に入らないのか？という言葉に、景華はブンブンと首を左右に振つて答えた。

「そんな大切な物、もらえないもの……。」

これは、彼の母親の形見なのだ。自分が受け取っていいはずがない……。

「ダメだよ柳鏡。お母さんの物、簡単に人にあげるなんて言ったら……。お母さん、悲しむよ？」

柳鏡の口から溜息が漏れた。音は馬車の車輪の音に掻き消されてしまっているが、肩と口の動きでそれがわかる……。彼は不機嫌そうに眉根を寄せた。

「あんた、本当に鈍いな……。誰にでも母さんの形見なんてやりする訳ないだろうが。あーあ、嫌になるな……。」

景華には、彼の不機嫌の理由はわからない……。ただ一つわかるのは、自分が原因だということ。

「ごめんなさい……。」

しょんぼりとして俯く姿を横目に見て、柳鏡はさらにもう一度溜息をついた。

「俺がどうして怒っているのかもわからないで謝るなよ……。ほら。」

「

彼はそう言つてもう一度彼女の手に珊瑚の首飾りを乗せた。

「母さんだって、衣装箱の中に埋められているよりも、誰か大事にしてくれる奴が身に付けた方が喜ぶに決まっているだろうが……。」

「……うん。」

彼のその言葉に納得して、景華は首飾りを受け取った。ずっと、一生大切にする、という思いを込めて……。それを首にかけて、馬車

の揺れで落したりしないように襟の中にする……。

「ありがとう、柳鏡……。」

その言葉は、馬車の音に掻き消されてしまったかもしれないが、彼は小さく別に、と答えた。

それから三日程経ったある夜のこと、景華たちは見回りの兵士に呼び止められた。景華は慌てて顔を隠し、柳鏡は馬車から下りて行った。

「どこまでいくんだ？」

兵士の問いに、柳鏡が一息置いてから答えた。

「亀水……マデ。商売。」

柳鏡の片言での話し方は非常にうまく、西の国独特の訛までが忠実に再現されていて、兵士たちは彼がそちらの国の人間だと信じて疑わなかった。彼は、このために苦手な語学を一生懸命学んだのだった。

「他には誰がいるのか？」

「妻、一人。話セナイ、カラ待ッテイル。馬車、中。」

兵士の一人が馬車の中を覗きに來たので、景華は少し俯き加減になった。兵士は馬車の中に景華しかいないことを確認して戻って行った。

「通行証は？」

「ココ。妻、ノモ。」

彼はそう言って清龍の里で発行してもらった通行証を見せた。二人が架空の人物であることを除けば正式な物なので、全く問題はなかった。

「よし、行っていていいぞ。最近は山賊なんかが出て物騒だからな、気をつけると良い。」

「ワカッタ。アリガトウ。」

兵士たちが行ってしまうのを見届けてから、柳鏡と景華も出発した。景華の心臓は、緊張のあまりバクバクと激しい音を立てていた。

「良かったあ、無事に通り過ぎることができて。柳鏡の話し方、上手だったわ。練習したの？」

「まあな。」

彼は気のない返事を返す。どれだけ訓練を積んだのかは、彼女には教えてくれないつもりだろう。

「この本で勉強したの？」

そう言つて景華が取り出した本に、柳鏡の顔色が変わった。

「あんた、どこでそれを見つけた？」

辛うじて出たその言葉に、景華は驚いた表情を見せて、明鈴さんがくれたの、と言った。それはまさに彼が勉強に使っていた本で、出掛けに見当たらないのでなくしたと思つていたのだ。

「ちくしょう、姉さんは本当にろくなことしないな……。」

「柳鏡、たくさん勉強したのね。あちこちに折り目があったりして、頑張ったのがわかるもの！」

その言葉通り、本の彼が覚えにくいと思つたページは折られていて、中には紙の隅が破れているところもあった。

「別に……。これ位しておかないと怪しまれるかもしれないからな

……。できることなら、面倒事は避けたい……。」

「明鈴さんに聞いたよ。柳鏡は語学がとっても苦手なんだって。」

ニコニコとしてそう言う景華を見て、柳鏡は誓った。里に戻ったら、明鈴を彼の太剣の錆の一部にしてやる、と……。

「それでもこうやつておじいさまに会いに行くために頑張ってくれたんでしょ？ありがとう。」

その笑顔と言葉が本当に眩しくて……。彼は、一瞬自分が何をしているのかわからなくなった。彼の左手が、彼女の後頭部を捕らえて自分の方に引き寄せる……。そして……。

「ぐっ……。」

彼の顔面は、景華がとっさの判断で二人の間に割り込ませた本にぶつかってしまった。

「……あんたなあ……！」

その頬がヒクヒクと痙攣している……。どうやら、相当怒らせてしまったようだ……。景華は苦笑いして言い訳をした。

「あ、あの、勉強のし過ぎで柳鏡の頭がおかしくなっちゃったんじゃないかなあ、と思つて……。取り返しがつかなくなる前に目を覚ましてあげた方がいいかなあ、と……。」

「ああ、そうだよ！ 苦手な語学なんかやり過ぎたせいで頭がおかしくなっているんだ！ だから……。」

ふてつた時に特有の拗ねたような物言い……。そしてその後、少し乱暴な仕草で彼女の肩を引き寄せる……。景華の頭が、コツン、と柳鏡の肩に当たった。

「少し位、じつとしている……。」

その照れたともふてつたともつかない表情が、月の光に浮かび上がる……。深緑色の切れ長の瞳が、青白い光を受けて不思議な光を放つ……。彼の横顔が、彼女はとても好きだった。

「やっぱり柳鏡、変……。」

照れ隠しに彼女もそう呟く。お互いに本心では話さないのだ、なんとも不器用な二人だ……。

「そりやどーも……。」

景華はその言葉に小さく笑った。そして、心の中で呟いた。好き、と。自分が彼にとってどんなに危険な存在であるか、彼女は知らない。龍神の紋章を持つ者と、龍神の華の呪われた関係を……。

亀水の里は、湿地の中にあつた。さすが、水の神である玄武を祀っている里だ。景華と柳鏡は里のそばにある関所で、商売をしたい、と里への用向きを話し、案内人によつて里の中に招き入れられた。

「亀水ノ長ニ織物、献上スル……。会イタイ……。」

柳鏡がそう言つと、長の館に仕えている侍女がやつて来た。

「長は明日までは予定が詰まっています。明後日以降になりますよ？」

その口調が、暗に彼らを長が歓迎していないことを意味していた。

おそらく、商人などと会うのは面倒だと思ったのだろう。それに、趙雨の人事のせいで虫の居所が悪かったのかもしれない。

「待ッ……。ソノ、馬車。」

柳鏡が乗って来た馬車を指差し、侍女はわかりました、と言って戻って行った。おそらく、商人はどうしても長に直接会いたいらしいと伝えるのだろう。

「まあ、どんなに早くても長に会うのは明後日だな……。」

柳鏡はそう言って馬車の荷台に横になった。荷物の中に、一人が横になれる分の空間があるのだ。いつもはここに景華が横になっていた。柳鏡は御者席に座ったまま眠っていたのだが、それも仮眠程度のものであった。本当に眠るのは久しぶりだ。二人は、里の外れに馬車を止めていた。案内人が指定した場所だ。

「そうだね……。おじいさまに会ったら、まずなんて言えばいいのかしら……？」

景華は、普段柳鏡が座っている場所で膝を抱えていた。今夜はどうしても、そこで休むと言って聞かなかったのだ。

「まあ、あんたは挨拶程度でいいさ。面倒な説明は俺が全部してやるよ。後は、聞かれたことに答えるだけでいい……。」

欠伸混じりの声がそう言った。やはり、かなり疲労が溜まっていたようだ。彼女は、それがわかっていたので荷台の場所を彼に譲った。「うん。ありがとう、柳鏡……。おやすみ。」

春の夜は、まだ相当寒い。荷台は他の荷物があつたりして暖かだったが、御者席はそうもいかなかった。柳鏡は、すでに規則正しい寝息を立てている……。彼女は空を見上げた。今夜も快晴だった。ふと、襟の中から首飾りを取り出す……。それは、星明かりを受けて赤く煌めいた。柳鏡の、母親の形見……。

『どうして、こんなに大切な物くれたんだろう……？』

考えれば考える程わからなくなる……。おそらく彼があの時不機嫌になった原因は、彼女がその意味を理解しなかったことだ。彼女の胸の中に、まさか、と思って浮かんですぐに消えていってしまう

考えがあつた。そんなはずがない。彼は子供の頃から意地悪で、乱暴で……。対する自分も意地っ張りで、可愛げがなかった。それなのにどうしても一つ、都合の良い考えが浮かんでしまう……。

「私、変なのかも……。」

ポツン、と呟いてから、苦笑が漏れた。彼が起きていたらきつと、元からだろうが、と言つに決まっている……。彼は本当に口が悪くて、意地悪で、面倒くさがりで……。明鈴に聞かせた言葉が、彼女の頭に蘇る……。でも、それでも……。

『好き……。』

趙雨のことを聞いた時、明鈴が景華に言つた言葉がある。失恋の傷は、新しい恋で癒せばいいんだよ、と。そんなつもりは全くなかつたが、あの清龍の里で暮らす内に、景華の心に芽生えた感情があつた。それが、先程の柳鏡に対する気持ち……。具体的にいつから、というのは彼女自身も記憶にない。だが、彼の不器用な優しさが彼女の心に残つた傷を癒し、それと同時に、無条件に差し伸べてくれるその手のぬくもりが、彼女自身に何よりも必要だつたということにも気が付いた。

「柳鏡の……馬鹿……。」

ここまで来れば、もはや八つ当たりと言う他ない。ただ、彼が自分の気も知らずに安息を得ているのが妙に腹立たしかった。いつもはこの逆であることを、景華は知らない……。たった一つ、星の明かりだけがそんな彼女に同情を示すかのように、キラリと煌めいた。

二日後になつても亀水族の長の迎えは来ず、景華と柳鏡はその場でもう二晩野宿するはめになった。もちろんただその場にいた訳ではなく、人の集まるような場所に行つては店を広げ、商人らしく商売をすることは忘れなかつた。品物の数も少しずつ減り、帰りの馬車は軽くなりそうだった。柳鏡が言うには、商品の三分の一を売つて、その中で一割増し程度の利益は出ているという。どちらにしろ、最初から赤字覚悟で商人の真似ごとをしているのだ、彼はそのような

ことはあまり気にしてはいなかった。そして、三日目の夜にようつと長の館から迎えがやって来た。

「長がお会いになるようです。どうぞこちらへ。」

柳鏡は織物を献上すると言ったことを思い出し、一番良い物を選んで持った。半歩後ろから、上掛けを深めに被った景華が緊張した面持ちでついて来る……。おそらく、彼女の足は震えていることだろう……。死んだはずの彼女が自分の祖父を訪ねるのだ、どのような対応がされるのか不安で仕方ないだろう……。

「こちらが長のお屋敷です。一番奥の間でお会いになるそうですから。」

そこからは、屋敷勤めの侍女が案内してくれた。祖父とは言っても、その屋敷を訪れるのは景華には初めてのことだった。なにしろ彼女が城から出たのは、この半年間を除けば、近くの離宮に避暑に行く時位だった……。

「長がお待ちです。どうぞ……。」

侍女が戸を開ける……。景華の目に、いくつかの懐かしい顔が飛び込んできた。いとこや伯父伯母、そして祖父……。

「これが、献上させていただく織物です。絹糸でできておりまして、壁掛けとしても衣服としても用いていただくことができます……。」

柳鏡が深く頭を下げて、祖父の前にそれを差し出した。

「ほう、なかなかの品ではないか……。商人、許す。ここに来て詳しく説明せよ。」

柳鏡がまた一礼してから、前に歩み出た。景華の心臓が高鳴る……。彼は、自分が合図するまで正体は明かすなと言った。一体、いつになれば自分は景華として祖父との対面を果たすことができるのだろうか。ふと、柳鏡が何事かを祖父に耳打ちしているのが見えた。そして、その後……。

「皆、少しの間だけ下がってくれないか？ ああ、^{タイコグ}帯黒は残れ……。祖父はそう言つて、伯父だけを残して他の人間を下がらせた。皆、なんとも言えない表情をしていた。祖父がなぜそんなことを言った

のか、腑に落ちないのだろう。そして、全員いなくなったことを確認してから、柳鏡が彼女に合図をした。深く被った上掛けに手を掛ける……。

「お久しぶりでございます、おじいさま。まさか、私を忘れたりはしていらっしゃいませんか？」

深い緑色の髪が、上掛けの下からゆつくりとその姿を現した……。

彼女特有の、毛先だけが丸まっているくせ毛……。そして、彼女自身も知らない運命を表す、真紅の瞳……。

「きよ、景華……？ 本当に、景華なのか……？ お前は死んだと聞かされた……。だがその髪や瞳の色、その面差し……。本当、なのか……？」

伯父の方は、すでに言葉をなくしている。死んだと信じていた人間が目の前に現れたのだ、その反応も当然と言える……。

「はい、おじいさま。私は、こうして生きています……。全て、柳鏡のおかげです……。」

柳鏡が彼女の隣に戻って来て、その場から長を見上げた、それからまた礼をとり、口を開いた。

「亀水の長、^{ジョウゲン}襄蔵様にお目にかかるのは初めてかと存じます。清龍族の長、^{ロン}龍連瑛の三男、龍柳鏡でございます。城では、姫専属の護衛としてお仕えしておりました。このような形で姫をお連れしたと、どうぞお許し下さい。」

「し、しかし景華……。」

祖父が驚きのせいで回らなくなってしまった口でなんとか言葉を紡いだ。

「し、城の話では……。お前は死んだことにな、なっている……。柳鏡君は……。その……^{チン}玃王暗殺の犯人、だとか……。」

景華が握り締めた拳を上下に振りながら、精一杯の力で反論した。

「全部嘘です！ 全ては、趙雨と春蘭の企てなんです！」

「姫、あまりおかしいことをおっしゃらないでいただきたい！」

ようやく状況を飲み込むことができた伯父がそう声を上げた。

「おかしいこと、とおっしゃいますか、帯黒様……？目の前に、こうして死んだという報告がされていた姫君がいらつしやるのに？」
柳鏡が不敵な笑みとともに放った言葉に、帯黒は言葉を返すことができずにぐつと黙り込んだ。

「詳しく聞かせてくれるか、柳鏡君……？」

柳鏡がまた軽く礼をしてから言葉を発した。

「はい、襄殿様。手短に申し上げます。まず、城で現王、趙雨と雀春蘭による前王の暗殺事件が起こりました。姫が趙雨と婚約をしたために、王位継承権を得たと考えたためと思われます。」

景華は、ここまでの言葉を苦く聞いた。何度聞いても、自分の過ちの話には胸が痛む……。

「その時、彼らは姫君をも暗殺の標的としていたようでしたが、姫君は私とともに辛くも脱走し、今は清龍の里に隠れ住んでおられます。」

柳鏡が私、という言葉や、自分に敬語を使うのは少し妙な気分だ。なんとなく、こそばゆい……。

「そして、清龍の里で決起の時を待っています。現在の趙雨の王朝は罪の上に築かれ、不正の上に成り立っています……。どうか、亀水族の皆さまのお力をお貸しください……。現王趙雨の非道な政治については、私たちも色々と聞き及んでおります。」

「し、しかし……。それは、反乱を起こすということではないのか……？」

伯父が、ギリギリのところで言葉を紡ぐ……。祖父は、黙って柳鏡の言葉に耳を傾けていた。

「確かに、今の王朝が正統な理由の元に成り立っているのであれば反乱と呼ばれるでしょう。しかし、こうして姫君が御存命である以上、彼に王位継承権はないのです……。それに、罪が露見することをおそれるか、趙雨は自分の側近ばかりを高官に取り立てている……。このままではこの国は、虎神族と緋雀族だけの物となってしまうすよ……？」

柳鏡の話術は実に巧みで、伯父はすでに彼の言葉に右往左往されていた。一方の祖父は、冷静に話を聞いたようで、目を閉じて何事かを考えていた。

「正直なところを聞かせてくれるかね、柳鏡君？」

「はい、もちろんです。」

祖父がやつと口に出した言葉に、柳鏡がそう答える……。

「勝率は、どの位だ？」

なんともあつさりとした、だが重要で答えにくい質問だ。しかし、柳鏡はおそらく答えを用意していたのだろう、淀みなくこう答えた。「このまま亀水族の皆さまのご助力が得られなければ、間違いなく負けます。しかし、皆さまのご助力を得られれば勝率は九割を超えると確信しております。」

勝率、九割……。柳鏡がそう言ったのは、本当に確信があるからだろう。だが、何を理由にそのような驚異的な数字を弾き出したのだろうか……。

「一日……考えさせてくれないか……？すぐに結論を出すのは難しい……。」

「おじいさま、まさか、城に私たちがいるなんて知らせたりはしないわよねっ？」

景華の目は真剣そのものだった。裏蔵は、それには笑顔で答えた。

「当たり前だ。誰がお前を信用ならない城になど売ったりするものか。それより、側に来て顔を見せてくれないか……？」

景華の足が、ずっと前に進んだ。そのまま、祖父が座っている椅子の元まで歩く……。景華の頬が、ごつごつとした手に包まれた。もう一方の手が、優しく深緑のくせ毛を撫でる……。

「随分と痩せたなあ。手もこんなに荒れて……。たくさん苦労したのだろう……。」

「そんなことないわ。たくさん、色んなことを勉強したの。」

祖父が相好を崩してうんうん、と頷いた。

「そうだろうな……。城にいた時よりも、今のお前の方がよほど輝

いているよ……。さあ、もう休むと良い。部屋を用意させよう。今まで待たせてすまなかった……。」

帯黒に人を呼んでくるように言いつけて、襄蔵は柳鏡にも言葉をかけた。

「孫を守ってくれたこと、本当に感謝しているよ……。ありがとう……。どうか、君も休んでいってくれ。」

「私は姫君専属の護衛ですから、当然のことをしたまでです……。」

「いや、ただの役目だけでは、ここまでできるものではない……。」

良い護衛を持ったね、景華。」

祖父のその言葉に、景華は満面の笑みで頷いた。前にはわからなかった父の言葉の意味が、今ならよくわかる……。柳鏡は、彼女にとって最高の護衛だった。

次の日、景華と柳鏡が朝食を取り終えたところに祖父がやって来た。後ろには、亀水の次代を担う帯黒を連れている……。

「一晩、帯黒や他の一族の者とともに考えたよ……。」

どうやら、彼らの結論が出たようだ。景華はぐつと拳を握りしめた。心臓が、早鐘を打っている……。たとえ祖父や叔父がどのような結論を下したとしても、彼らが自分たち一族のことをよく考えた末に出した結果なのだ、決して責めたり、恨んだりしてはいけ……。

景華は、自分にそう言い聞かせた。そして……。

「私たちも、趙雨の王朝と戦いたいと思う……。彼らの横暴なやり方には納得ができないからね。ましてや、その政権は罪の上に成り立っているんだ。許すわけにはいかない……。」

「ほ、本当？おじいさまっ？」

景華は目を見開いて、ぱつと立ち上がった。興奮のあまり、無意識にしてしまった行動だった。その様子に、祖父は昨日のように目を細めて笑い、頷いてみせた。

「本当だよ、景華。ただし、お前は誰もが認めるような正しい王にならなければならぬ。それが、私たちの条件だ。」

景華は、強く何度も頷いてみせた。その目尻から、熱い物が滑り落ちる……。

「わかっています、わかっています。おじいさま。私、そのために色々と勉強しているの……。王様になつたらまず最初に何をするのか、とかも考えているわ……。」

柳鏡は、その言葉にはほんの少し驚いた。まさか、彼女がそんなことまで真剣に考えているとは思ってもしなかったのだ。彼女は、もう昔の彼女ではない……。昔は持っていなかった、強さや責任感というものを持って、今大きく羽ばたこうとしている……。いつかは自分の助けがなくても歩けるようになるだろう。そうしたら、その時は……。

『不細工な顔……。』

いつものように彼女の泣き顔に頭の中でそう悪態をついて、彼は窓の外を眺めた。桜の蕾が、膨らんでいるのが見える……。いよいよ本格的な春が来るようだ……。

『夏、いや、せめて秋には間に合わせたい……。それまで、持つだろうか……。』

彼の右手が、その左腕をぐつと握り締めた……。

華と龍神 呪われた運命（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。やっと第二話が完成しました。当初の予定よりも大分長くなってしまうましたが、このお話を読んで下さっている皆様、どうぞ今後もお付き合い下さい。

旗印と龍神 守られない、約束

「それで、お母様？^{キスイ}亀水族の人たちは景華姫に協力してくれるって言ったんでしょ？」

布団を自分の口のあたりまで引つ張り上げながら、小さな女の子が自分の母親を見上げてそう訊ねた。面差しは母親そっくりだが、その瞳の色は父親とよく似ている……。隣にいる兄の方は、父親に生き写しだった。だんだんと冷え込んできたので、母親も肩掛けを羽織り直した。

「そう。それで、景華姫たちはいよいよ綿密な計画を練ることになったの。でも、景華姫はまだお勉強がたくさん残っていたから、一度柳鏡と一緒に清龍^{シシロン}の里に戻ることにしたの……。」

クシユン、と兄の方が小さくくしゃみをした。母親が、その襟もとまで布団をかきあげてやる……。

「続きを話して！お母様！」

母親はその言葉に小さく微笑んで応えた。室内の明かりが、少し揺れた。

「柳鏡は、亀水の里からの帰り道は少し遠回りをして、景華姫に色々な物を見せてくれました。綺麗な景色や、珍しい物……。でも、それだけではありませんでした。」

「ここは……？」

景華が、遠慮がちに口を開いた。そこは谷間に沿って造られた暗い街で、異臭が放たれていた。道端には動く気力すらない人々が何人も転がっている……。皆服とも呼べないような物を纏い、子供たちは瘦せた四肢に対して不自然な程に腹部が膨張していた。まるで、街全体が墓場のように静まりかえっている……。

「辰南の国で一番貧しいと言われている街だ……。あんたに、これだけはどうしても見せなければならぬと思うていた……。」

景華にそう説明してくれる柳鏡の方もあまり良い気分ではないようだ、その深い緑色の瞳がなんとも言えない色を宿して、揺れた。手綱を持つ手に、グツと力が込められるのが見えた。

「……こんな街もあったのね……。中央からの支援が行き届いていないのでしょうか？」

その言葉に一度頷いてから、柳鏡は再び口を開いた。

「ここは、元々は鉱山夫たちが家族とともに住んでいた街だった。だが、資源が減ってきたせいで近くの鉱山が閉鎖されたんだよ。そのせいで、多くの失業者が出た。だが、あまりにも膨大な数だったために国も対応しきれなかったんだ。結局、この街は丸ごと国に切り捨てられた……。」

彼が話す口調は真剣そのもので、それを聞く景華の表情も引き締まっていた。とても、半年前まで城にいて、外の世界について何も知らずに遊んでばかりいた姫とは思えない……。彼女は、そこまでの成長ぶりを見せていた。

「他の鉱山を紹介したりはしなかったの？辰南は鉱山資源が豊富だから、他にも鉱山はあるでしょ？」

真面目な顔をしてそう問いかける彼女に、柳鏡は一瞬視線を当てた。勉強する時にだけ見せる、険しくて頼もしい表情……。だが、こういう表情をしている時は物事を真摯に捉えている時なので、彼は普段のように悪態をついたりはずせずにそれに答えた。

「もちろん、何人かはそれしてもらえた。国や地方の役人に、高い賄賂を支払った順にな……。だが、普通に働いて家族を養って来た鉱山夫たちにそんな金がある訳がない。賄賂を支払えなかった人間は、この街とともに犠牲になったんだよ……。」

こう見えて意外と正義感の強い彼だ、賄賂や癒着の類は許せるものではなかった。そして、それは隣で彼の話に聞き入っている少女も同じことだった。

「役人っていうものは、国や地方ごとにその地域の人が不自由なく暮らせるように尽力してくれる人がなるべきものだわ。その当時の

王様は、人選を誤ったのね……。」

「あんたの親だよ……。」

景華の父、つまり、先代の国王……。彼が在位していたのは半年前までで、その政治があまりに非道であつたために彼は暗殺されてしまった。景華の元婚約者に……。そして、今はその彼が王位に就いている……。

「……お父様の代つてことは、まだせいぜい十二年よ？その間にこんな風になってしまったの……？」

彼女は、今の自分の年齢と父が即位した当時の自分の年齢から、琇王の年代を算出した。たつたの十二年で、当時は賑わっていたであろう街が、廃墟のようになってしまったのか……。彼女は、人の営みの儚さ、というものを痛感した。

「ああ、そうなるな……。あんたは清龍の里で生活して、城の外での暮らしに対する知識も持つようになった。だが、あの里に住んでいる奴は皆国民の中では割と裕福な方なんだ……。忘れるな。」

彼のその言葉に、景華は強く頷いてみせた。その姿からは、恐れや迷いという類の物は一切感じられない……。あるのはただ、国造りに燃える強い意志だけ……。真紅の瞳のその奥に、彼女の国への情熱が燃えているのが見える……。柳鏡は、そんな彼女に一瞬笑いかけた。

「あんたがわかったならそれでいい。さあ、これで寄り道は終わりで。清龍の里に帰るぞ。帰ったらまずは試験だな。戦の陣形があるの悪い頭から抜けていなければいいが……。」

「失礼ね！ちゃんと覚えているわ！柳鏡こそ、帰りに巡回の兵士に会った時、また西の国の商人のふりができるかしら？ねえ、語学が苦手な柳鏡さん！」

柳鏡の嫌味な調子に、景華も彼の腹違いの姉である明鈴メイリンから聞いたとおきのおきのネタで応酬する……。柳鏡の片眉が、意地悪につり上がった。

「あんた……ここに置いて行かれないみたいだな……？」

景華がギクリとして固まった。それから、ぎこちない笑みを浮かべる……。

「ほら、そんなこと言わないで。ちゃんと連れて帰ってね、柳鏡様っ。」

そして、猫撫で声でそう言った。胸の前で手のひらを合わせ、お願い、という仕草をすることも忘れない……。

「仕方がないからな。こんな所にこんなじゃじゃ馬置いて行ったら迷惑だろうし、またメソメソと泣かれるのも厄介だからな。」

「ちよっと、じゃじゃ馬って誰のことよーっ？」

この二人の喧嘩には、いつも果てがない……。こんな調子で清龍の里まで、十五日ほどかけて帰った。帰りつく頃には里の桜はすっかり葉桜になってしまっていて、初夏の香りが漂っていた。緑の匂いが濃くなり、森独特の木の香りが辺りに立ち込めている……。

「あつ、景華おかえり！柳鏡も！」

里に帰りついた彼らを最初に迎えてくれたのは、柳鏡が春に借りた畑で野菜を世話してくれていた明鈴だった。少し日に焼けたその顔は、瞳の黒い色をより美しく見せていた。

「明鈴さん、ただいま！お留守番ありがとう！あのね、お土産に……。」

景華が笑顔で手を振って駆けて行く……。緩やかな下り坂を……。柳鏡が、慌てて止めた。

「だから走るな！転んでも助けねえぞっ？」

やはり景華は、足をもつれさせてバランスを崩した。体勢は……もう立て直せない。せめて手をつこうと思って前に出した彼女だったが、地面にぶつかることはなかった。その前に、柳鏡の腕が彼女を受け止めていた。

「アホが……。あんたみたいのを学習能力がないって言うんだ！」

「柳鏡うるさい！そんなにお小言ばかり言ったらすぐにおじいちゃんになっちゃうよ？」

彼の腕にぶら下がった状態のまま、景華は柳鏡に反抗してみせた。

彼の頬がヒクヒクと不穏な動き方をしている……。こいつは、助けてもらっておきながらそんな生意気なことを言うのか、と……。

「俺が早死にしたらあんたのせいだって訳だ、なんなら毎日夢枕にでも立って呪いの言葉を呟いてやるのか……？」

「ひええー、明鈴さん、助けて！」

その一部始終を目の当たりにしていた明鈴は、ある言葉が頭の隅に浮かんだが、ギリギリのところ堪えて口には出さなかった。彼女はあの瞬間に納得したのだ。ああ、これが世に言うバカップルと言うものなのか、と……。よくも人の前でこんなに恥ずかしげもなくイチヤイチャと……と思ったが、それも口には出さない。間違いなく大剣の鎧にされてしまうから。

「ほら、もういいだけ遊んだでしょ。それで？ 亀水の方は？」

そう言いながら景華を柳鏡の腕から引き離し、さりげなく話を逸らす……。景華が遊んでないわ、などと言っていたが、それは無視。

だんだん、この二人の扱いにも慣れてきた明鈴だった。

「亀水の方でも、協力を惜しまないそうです。まあ、これでなんとか成功する見込みが出てきましたよ……。」

「えっ？」

柳鏡の言葉に、景華が妙な声を上げた。明鈴も柳鏡も、その突拍子もない声に驚きの顔を見せる……。

「柳鏡、おじいさまに勝率は九割を超えるって言ってなかったっけ？」

「……。」

柳鏡は、ばつの悪そうな表情で目線を逸らした。

「あの位はったりかまさないと協力してもらえないだろうが……。…… あんた、まさか信じていたのかよっ？」

あまりにも素直に頷いて見せる景華に、柳鏡はがっくりと肩を落とした。そういえば、前にもどこかでこんな光景を見た気がする……。

「…… まあいい。これでまたあんたも一つ賢くなったはずだ……。交渉っていうのはな、時には嘘や見栄が必要になることもあるんだ。

わかったな？」

「うん！」

再び素直に頷いて見せる景華に、柳鏡は本当かよ、と言いながら明鈴の方に視線を当てた。

「父上は屋敷の方ですか？色々と報告をしなければならいのですが……。」

「多分ね。行くならついて行くけど？私も色々と聞いておきたいから。」

柳鏡がほんの少しの間思案顔になってから、景華に向かって話した。
「あんたは家で待っている。連れて歩くのも面倒だからな。いいな？」

柳鏡の隣で、明鈴がニマーツと笑った。

「疲れているだろうから休んでいろ、ってどうして素直に言えないのかしらねえー？」

「姉さん、行きますよ！」

柳鏡が明鈴を引きずるようにして連れて行き、後には景華一人が残った。

『お留守番かあ、つまらないな……。』

景華はそう思つて口を尖らせながら一月ぶりの家に帰った。中の様子は全く変わっていない。明鈴が綺麗に掃除をしてくれたおかげだ。いつも食事の支度をする台所も、柳鏡が座る茶卓の位置も、いつも仕事で泥や血に塗れた彼の服を、洗い終えてからしまう衣装箱も、何一つ変わってはいなかった。これの隅に、彼がくれた珊瑚の首飾りが入っていたという……。そういえば、小さな布袋を見たような記憶もある……。今その首飾りは、彼女の首にかけられ、襟の中にしまわれていた。

『あ、そうだ。ご飯の準備、しておいた方がいいかな……。』

景華はそう思つて台所の隣に置かれている水瓶を覗き込んだ。当然のことながら、空っぽだった。水がなくては話にならないので、家の裏手にある小さな池まで汲みに行く……。清龍の里には、浴場と

同じようにいくつか生活用水を汲むための共用の井戸があったが、柳鏡はその水よりも裏の池の水の方が清潔だと言って、いつもそちらの方に水汲みに行っていた。普段なら柳鏡がやってくれていた仕事だった、その彼が不在であるために、景華は仕方なく自分で水を汲みに出た。とりあえず今必要な分だけを確保できる大きさの器を持って……。

「わあ、すっかり緑が濃くなっている……。」

景華は、昼の日差しを受けながらその葉を輝かせている木々に目を奪われた。むせ返る程の緑の香り……。そして、澄んだ水の香り……。

「よいしょ。」

誰も聞いていないのをいいことに、そう呟いてから池のほとりに腰を下ろす……。水を汲もうと水面に身を乗り出した時だった。

「あれ、この色……。」

一陣の風で、小さな池が波立つ……。彼女がふと気付いたものは、その瞬間に掻き消されてしまった。そして、さざ波が治まるのと同じ時に再び姿を現す……。それは、澄んだ水面に映り込んだ柳の葉の色だった。その色に、景華の鼓動が一つ、高鳴る……。何の色だろう。その色は、大きな安心感をもたらす色なのに、それでいて彼女の心を小さく、だが何度も波立たせる……。……そうか。

「柳鏡の目と、同じ色……。」

自分の口から思わずこぼれた言葉に、彼女は納得した。そして、同時に確信した。これが、彼の名前の由来なのだと……。鏡のような水面に映る、柳の色……。なんと美しく、心惹かれる色だろうか……。

「綺麗……。」

思わずそう言ってニッコリとする。そうだ、この話は、戻ってきたら彼にも聞かせてあげよう……。そう考えた景華は、少し惜しい気もしたが、器に水を汲んだ。水面が揺れて、柳の色が消えてしまった。それでも、彼女の心の中にあるその色は消えない……。もうす

ぐ、その色を瞳に宿した彼が家に戻って来るはずだ。早く食事の支度をしてあげなきゃ、と思つて彼女は家へと急いだ。

一方の柳鏡は、父親である清龍族の長に亀水の里での出来事について大体を報告し終え、景華が待つ家へと向かつていた。

「そう言えば、姉さん、随分と余計なことをしてくれましたね……。」

「その言葉には、静かな怒りが籠っている……。明鈴は、何のこと？と笑つて誤魔化した。」

「とぼけないで下さいよ……。あの本のことですよ……。」

「あつ、ああ、あれね……。いや、柳鏡が忘れたら困るだろうから、景華に預けておいたの。」

苦笑いをしてそう答える……。まだ、錆にはなりたくない……。

「ほう、人が語学を苦手としていることまで話しておきながら、知らないふりをしますか……。」

冷たい微笑み……。景華、そんなことまで言つちやつたのね……。

元はと言えば自分が余計なことを話したことが悪かつたにも関わらず、明鈴は心の中で景華を責めた。ともかく大剣の錆、決定だ……。

「まあ、余計なことをべらべらと話したことは別として、姉さんがあの本を彼女に持たせておいてくれてよかったですよ……。それがなかつたら、あの時……。」

柳鏡の頭の中に蘇るのは、本を間に挟まれた、あの時の記憶……。本当に、あの本があつて良かった。もしもなかつたら、彼女との今の関係が崩れてしまい、顔を合わせることもできなくなつていたかもしれない……。それこそ、龍神の紋章を持つ者と龍神の華の、呪われた関係を証明してしまうことになりかねない……。

「あの時、何なのよ？」

一人で回想に耽る柳鏡を白い目で見て、明鈴が続きを促す……。

「な、なんでもありませんよ！それじゃあ、姉さんはそつちでしょうつ？俺はこつちですから！」

足早に去っていくその背中を見つめて、明鈴が呟いた。

「そこまで言いかけておいて秘密、ですか……。そんなに恥ずかしい目にも遭ったのかねえー。」

まあ、いいか。と心の中で呟いて、彼女も家路を辿った。空は、夕焼けで真っ赤に燃えていた。

「あ、やっと帰ってきた。夕食、できてるよ。」

明鈴と別れて一人で帰ってきた柳鏡を、景華の笑顔が迎えた。食事の準備も整えてくれたらしく、彼女は盛りつけにかかった。

「別に、今日位休んだって良かったのによ……。物好きな奴……。素直に嬉しい、とは言わず、わざわざ自分の本当に言いたいことがわからなくなるような言い方をする……。」

「だって、久々にやりたかったんだもの。ほら、運ぶの手伝ってよ。」

そう言つて調理台の上に並べてあった器を彼女が指差すので、仕方なくそれを茶卓まで運ぶ……。どうやら、肉と青菜が入ったスープのようだ。正直、彼はとても驚いていた。

「材料なんて何もなかっただろ？水だって……。」

「うん、余つてた干し肉全部使っちゃった。後は、明鈴さんがお世話をしてくれていた青菜を少し採ってきたの。」

笑つてそう答える彼女に、柳鏡はそうか、とだけ言つた。彼がそれを口に運ぶ様子を眺めてから、景華も食事に取り掛かろうとした。だが、そこでふとあることを思い出した。

「ねえ、柳鏡。明日は、忙しい……？」

ふと一瞬、視線を上に向けてから彼が答えた。

「別に。帰ってきたばかりだぜ？俺だって休みてえよ……。」

景華がそれを聞いてニツコリとした。何かを企んでいるようだ……。

「ダメ。明日は水汲みに行つて来て。私もついて行くから。」

「なんでついて来るんだよ、面倒くせえな……。汲んで来て欲しいなら、一人で行つて来てやるよ。」

「ダメ！」

面倒そうに答える彼に、間髪入れず景華がそう言う……。

「柳鏡一人じゃ絶対に気付かないから、ダメ！」

一体何に気付けと言うのだろうか。だが、言い出したら聞かないことがわかつてるので、彼は諦めて渋々承知した。面倒だな、と思いつながら……。初夏の夜は、そうして更けて行った。

「柳鏡の名前、そんな意味があつたんだ……。お母様、僕の名前の由来は何？」

息子の方が、母親を見上げてそれを訊ねた。隣で、妹の方も次は私と言っている……。母親が、その様子を眺めて苦笑をもらした。

「二人の名前はね、お父様がつけてくれたのよ。天連テンレンの方は、天に届くほどの徳を積んでくれるように、と言う願いを込めて。蘭花ランカの方は、蘭の花みたいに多くの人に愛されるようにって。」

「へえー、僕、てつきりお母様が付けてくれたのかと思っていました。お父様、そういうのが苦手そうだから……。」

天連の言葉に、母親は微笑して応じる……。

「あら、お父様はちよつと面倒くさがりな所もあるけれど、そういう時には人一倍真剣に考えてくれる人なのよ。」

「知らなかったわ……。」

蘭花の方が、そう言うて溜息をもらした。

「あ、ごめんなさい、お母様。邪魔したりしないから、続きを聞かせて。」

兄妹がそう言うて体勢を立て直したので、母親の方もついに覚悟した。どうやら、彼らは本当に最後まで聞くつもりらしい……。

「それから、景華姫たちは本格的に乱を起こす準備を始めました。武器を揃えたり、兵士の訓練や隊への編成を始めたのです。」

「わあ、いいんじゃない、景華？ すごく動きやすそう！」

外のジリジリとした陽射しをよそに、柳鏡の家には景華と明鈴がは

しゃぐ声が響いていた。今日は彼女のために作らせていた防具が届いたということで、明鈴がやって来ていた。

「うん、これなら鉄のやつと違って軽いから、動きやすいよ！」

景華が笑顔でそう応じる……。鉄製の鎧は彼女には重すぎるのではないか、という柳鏡の意見で、景華には革製の防具が作られていた。その他に、膝のすぐ下まで丈がある布製の靴と、自分で縫ったという戦衣を纏っている。実際に着てみて何か不都合な部分がないか確かめた方がいい、ということで、柳鏡を炎天下の外に放り出して着替えていたのだった。

「柳鏡ー、もういいよ！」

明鈴が戸口を開けてそう彼を呼ぶ……。彼は、少しでも日光を避けようと木陰に腰掛けていた。いかにも面倒だ、という顔をしながら戻って来る……。

「ふうん……。まあ、そんなもんか。」

「ちよつとー。もつと他に言うことはないの？ せっかく着てみたんだから、褒めてよ！」

彼にしたら先程の言葉も褒め言葉なのだろうが、景華は他にも何か言つて欲しい、と思い、ふくれっ面で彼にそう言つた。柳鏡の表情が変わつた。あきらかに、景華をからかう時の表情だ……。

「いいんじゃないか？ 脚が出るところとか……。」

「馬鹿っ！ 一回死んじゃえ！」

景華は、真つ赤な顔になつて戦衣の裾をつかんで下げた。その戦衣は、柳鏡が彼女をここに連れて来た時に、彼女が着ていた衣装の裾を切つたもので、少々切り過ぎたために膝よりも少し高い位の丈になつてしまつたのだった。

「仕方ないよ、景華。あまり長いと、馬に乗つたりする時に邪魔になるよ？」

「だって、明鈴さんー！」

赤い顔で必死に彼女に助けを求める景華だったが、どうやら助けはくれないらしい……。彼女をからかっていたその表情を一変させ

て、柳鏡が険しい顔で言葉を発した。

「大体、あんたがその服にしたいって言ったからそうだったんだろうが。」

本当は、彼はあの当時の服を彼女に着せるのが嫌でたまらなかった。あの時の途方もない怒りが、今もその体を駆け巡る……。

「うん……。戦いには不向きな服かもしれないけど……。でも、あの時に感じた痛みとか、悲しみとか、怒りとか……。そういうもの、全部忘れたくないから……。この服を着ていたら常に思い出せるかな、と思つて……。」

「……勝手にしろ……。」

彼女にそこまでの意思があるというなら、彼の方が折れざるを得ない……。

「言つておくが、あんたの防具は革製だ。軽くて動きやすいかもしれないが、その分強度の面では鉄鎧に劣る……。わかつているんだろうな?」

その言葉には、景華は素直に、そして力を込めて頷いた。

「そんなに気負わなくても大丈夫だよ、景華。いざとなったら柳鏡がちゃんと、景華の盾になってくれるからっ!」

明鈴が明るい調子でそう言う……。いつもなら、誰がそんなことするか、などと言うはずの柳鏡は、今回に限っては黙っている……。おそらくそれは、明鈴が言ったことを彼がすでに決意していたことを意味している……。彼が、ふと皮肉な口調で口を開いた。

「まあ、俺が盾にならなければいけないという時点でこちらの負けは決まりですね。なにしろ、彼女がいるはずの本陣にまで敵の攻撃が及んでいるということですから……。」

「そんなこと言わないの! 景華が不安になるじゃない……。」

明鈴の言葉に、景華は首を振つてみせた。

「大丈夫。だって、柳鏡の言っていることは本当のことだもの……。あつ、そう言えば、そろそろお屋敷まで会議に行かなきゃならない時間じゃない?」

「ああ、そう言えば確か正午から、とか……。」

景華の言葉に、柳鏡はそう答えてから外の陰を見る……。どうやら、太陽は相当高い位置まで昇っているらしい。

「大変！景華、着替えなきゃ！ほら柳鏡、出て行って！」

明鈴がそう言っただけをまた外に放り出した。仕方ないことだが、彼はこの時こう思った。ここは、本当に俺の家なんだよな？と……。なんだか、家主の扱いが随分とぞんざいな気がする……。とも……。

「集まったようですね……。」

そう言ったのは、清龍族の長、連瑛だ。会議室として利用している彼の屋敷の一室には、他に柳鏡の腹違いの兄たちと、亀水族からの代表も何人が集まっていた。ここどころ、清龍と亀水の間では、罪人の引き渡しに難航しているふりをして親密に連絡が取られていた。亀水の代表には、景華のいとこである凌江の姿もあった。

「さて、我々はこれまでに何度もこうして軍議を行ってきました。今日は、来るべき決起の日に備えて、作戦の最終確認をしたいと思います。」

全員で囲んでいる大きな机の上に、辰南国の全図が広げられた。

「まず、私たち清龍族は国の東側にある青谷から進軍し、そのまま南方に向かって緋雀の里と城の間の炎の砦を落とす。ここには現王を名乗っている趙雨に陥れられた有力者が投獄されているから、彼を助け出してその守りにあたらせる……。」

連瑛が手に持った剣の先で、地名を順番になぞった。全員の目が、その銀の切っ先が指し示す物に向けられている……。

「そして、その間に亀水族の方々には、城を挟んで炎の砦と反対に位置している、水の砦を陥落していただく……。ここには北の国の王子が人質として幽閉されているはずなので、彼を助け出して援軍を求める……。北の国には彼の他にも王子がいるが、どうも政務には不向きだと言う話だ。そこに彼を返してやるとなれば多少なりとも協力をしてくれるだろう……。」

ここで一度、剣先が紙の上を離れた。皆の目が連瑛に向けられる……。

「おそらく、この段階までには二度、城の兵と一戦交えることになるだろう……。一度目は青谷を通過する際。青谷には趙雨の息がかかった領主がいるからな、ここでの戦闘は免れないだろう……。二度目は炎の砦を落とす前の話だ。亀水族の方々が先に水の砦を落とし終えるだろうから、その後他の砦の近くには城の警備隊が常駐することになると考えられる。」

銀の切っ先が、再び辰南国の上を走り始めた。全ての目が、それを真剣に追う……。

「こうして城の南北を囲んでしまえば、その中央に住んでいる砂嵐族はこちらの方に寝返るだろう。自分たちの里に攻め込まれる訳にはいかないからな……。そして、西側の虎神族からの援軍を砂嵐族に担当させて、二部族の連合軍で一氣に王都に攻め込む。この際、少しでも進軍にかかる時間を短くした方がいい。城側が砂嵐族の裏切りに浮足立っている内に責め滅ぼすためだ。」

城を、趙雨を責め滅ぼす……。景華の心に、その言葉が重くのしかかった。父を殺され、彼がどんなに酷く自分を裏切ったとしても、幼い頃からよく面倒を見て遊んでくれた彼のことは、未だに嫌いにはなれない……。それは、もちろん春蘭に対しても言えることだ……。机の下で景華の手を、隣にいた柳鏡の手が強く握った。小さく大丈夫、と返す……。

「問題は、いかに我々の乱が正統な物であるかということを証明することです……。」

連瑛のその言葉に、景華が声を上げた。

「あの……、よろしいですか、連瑛様？」

「どうぞ、姫君。」

連瑛に促されて景華は立ち上がり、軍議に参加している面々を見渡してから言葉を紡いだ。大きく、はっきりと……。

「私は、趙雨がお父様を殺害する現場を見ました……。」

誰も息をのむ……。その衝撃で景華がしばらく声を失っていたことは、ここにいる誰もが知っていた。

「ですが、私の証言だけでは証拠が不十分です。そこで、あの夜のことをもう一度よく思い出してみました。そして、彼の罪を暴く方法を見つけました。」

その場にいた皆が目を見張った。柳鏡には前の夜に伝えてあったので、彼だけは驚かない……。彼には、あの夜の記憶を手繰り寄せる手伝いをしてもらったのだ。辛い、苦い記憶を……。

「彼が陛下を殺害した凶器は、祭祀用の四神剣でした。行事の時に国王が身につける、あの剣です。あの剣には、王室の書物にしか残されていない秘密があります……。」

景華はその本を直接読んだ訳ではないが、小さい頃に父が祭りの際に帯びている四神剣について質問したことがあった。それは何？と……。父は娘の好奇心に快く対応してくれた。これは四神剣と言って、不思議な力を持つている剣なんだよ、と……。

「四神剣は、皆さまがご存じのように王族、あるいは婚礼などにより王族として認められた者にしか抜くことはできません。その他にも、四神剣には流した血を記憶するという力があります……。」

景華が明かしているのは、普通なら国民が知るはずもないことだった。だが、ここに集まった協力者たちはそれを知る必要がある……。景華はそう思っこの秘密を明かしているのだ。

「四神剣で流された血はその剣を使用した者とともに記憶され、流された血を再びかけると、その刀身はその人を殺めた人間の部族の色に染まります……。つまり、四神剣に私の中に流れているお父様の血をかけた時に、趙雨が犯人であれば虎神族の白になります……。銀色の刀身が白く染まれば、あの当時私と婚約していた趙雨が犯人だと証明することができます。他に王族に準じると認められていた虎神族の方は、いませんからね……。」

「なるほど。それなら、趙雨の罪を証明することができるでしょう。問題は四神剣がどこに置かれているかということですね。それは城

に入ってから探すしかない……。」

連瑛の言葉に、その場にいた全員が強く頷いた。そして、凌江が言葉を発した。

「では、城に入りましたら四神剣を探す組と趙雨を取り押さえる組に別れましょう。残念なことに、ここにいる全ての人が趙雨の顔を知っている訳ではないと思われます……。隊を編成しなおしますか？」

「趙雨は、姫君に探していただきたい。そして柳鏡、お前もだ。二人は幼い頃から彼と一緒にいたから、混乱の中でも見失うことはないでしょう。城の出口と言う出口は抑えますから……。」

連瑛の言葉に景華は頷き、柳鏡は軽く一礼してみせた。二人とも、承諾したという合図だ。

「わかりました。姫君、四神剣の形状などについて後ほどお話下さい。亀水からも搜索隊を編成しますから。」

亀水族の代表として軍議に加わった中年の男性がそう言った。知らない顔だったが、筋骨隆々とした逞しい戦士だ。彼にわかりました、と答えて景華は連瑛の方へと視線を戻した。全員の視線が、彼一人に注がれる……。

「以上で確認を終えようと思いますが、よろしいですか？亀水族の方々は、戻って長に以上のことをお知らせ下さい。二週間後、夜明けとともに各々進軍を開始しましょう……。御武運を。」

全員が立ち上がって、連瑛のその言葉に深く礼をした。そして、その後口々に相手の武運を祈る……。決起の日は迫っている……。景華が城を出てから、実に十カ月もの月日が流れていた。逃げ水が見えるような熱い夏の日だったが、外では、木々がその枝を絶えず揺らしている程の強い風が吹いてる……。それはまるで、彼女がこれからこの国に巻き起こす嵐の前触れのようなだった……。

「いよいよなんだね、お母様。」

天連の方が、そう口を開く……。彼の口調には、まるで彼自身がこ

れから戦いに赴くような緊張感があつた。

「きつと、大丈夫だよ。だって景華姫はたくさん頑張つて、たくさん勉強したんだもの。」

妹の蘭花の方は、少し眠そうに小さく欠伸をしながらそう言った。それでも、母親の口の動きにはしっかりと注目している……。

「はいはい、続けましょね。そして、ついに兵を起こす前の日になりました。清龍の里は、翌日の出兵の準備でかなり騒がしくなっていました。」

日が落ちるまではまだ間があるが、柳鏡は足早に家路を辿っていた。本当は明日の出兵にあたつて彼が確認しておくべきことがまだ残っていたのだが、全部姉の明鈴に押しつけてきたのだった。いよいよ明日、趙雨や春蘭たちから玉座を奪還するために出兵するのだ……。柳鏡は、いささか複雑な気分だった。彼らが景華を傷つけ、陥れたその罪は、万死に値する。だが、例えどんなことをしたとしても、彼らは紛れもなく幼少期とともに過ごした大切な友人なのだ。その彼らを追い詰めると思うと、どうしても複雑な気分を拭えない……。そして、彼のそんな心情を理解してくれるのはおそらく景華一人だろう……。そう感じる彼の心が、余計にその足を速めていた。

「……。」

そして、彼はもう一つ別の決意もしていた。そちらの方は、景華にも決して打ち明けることはないだろう……。急ぎ足で歩きながらも、彼は左腕の醜い痣を服の上からじつと見つめた。それはおそらく今も、その下で彼の身を蝕んでいるのだろう……。ギュッと、彼の眉根が寄せられた。汚らしい物を見るような嫌悪の光が、その深緑の瞳に宿っている……。

「……着いた、か……。」

すっかり見慣れた戸口の前で一呼吸置いてから、いつものように少し乱暴に戸を開ける……。その視線の先には、いつものように小さな台所に向かって夕食を作っている景華の姿があつた。慣れた手つ

きで野菜を切るその姿からは、約一年前にここに連れてきた時のような頼りなさは感じられない。彼がすっかり慣れてしまったこの日常も、今日で最後だ。いや、どちらかと言うと、こんな非日常の生活も今日で最後なのだ。それが、柳鏡の心を余計に締め付けていた……。

「おかえりなさい。」

いつもの乱暴な戸の開け方で柳鏡だとわかったに違いないが、景華は戸口の柳鏡の方を一度向いてそう言った。そして、切り終えた野菜を鍋の中へと落とす……。柳鏡は、その様子を覗こうと彼女の方へ歩いた。

「何作っているんだ？」

「きやつ！」

まさかそんなに近くに立たれていると思っていなかった景華は、驚いて熱くなっていた鍋の蓋に触れてしまった。

「熱っ……！」

「馬鹿、冷やせっ！」

彼女が慌てて引つ込めた手を掴んで、台所のすぐ横にある水瓶にそれをつけさせる……。水が一杯に張られていたので、腰を屈めなくても水面に手がついた。彼女の手を水につけさせている柳鏡の指先も、冷たい水に触れている……。

「痛くないか？」

「うん、大丈夫だよ……？」

こんな何気ないやり取りも、今日で終わり……。その事実が、柳鏡にはたまらなく切なかった。

「ちよつと柳鏡？もう大丈夫……っ！」

自分でも気付かない内に、柳鏡は彼女を背中から抱き締めていた。その腕に込められている力が相当強いことに、彼は気付いていない……。一方の景華の方は、ともすれば息が止まりそうだった。

「ずっと……あんたところやって、平和に暮らせれば良かったのにな……。」

耳元で囁かれる、柳鏡の言葉……。そのあまりにも切ない響きが、普段心にもないことばかり言っている彼が、この時ばかりは本心を言っていることを伝えている……。

「国も神もない、何もない所で、二人で……。」

『鍋、噴きこぼれちゃうな……。』

景華は、必死でそんなくだらないことを考えようとしていた。そうでもしないと、溶けてしまいそうだ……。全身が熱い。先程の鍋の蓋なんて比にもならない程に……。彼女は、わざと息を止めた。そうしなければ、狂走した心臓が彼女の口から飛び出してきそうだった。そして、しばらくじっとしていよう、と彼女は思った。何より、柳鏡の心が落ち着くまで……。それを、景華自身がそれを望んだのもまた事実だった。その腕の中は、彼女が世界で一番安心できる場所だった……。

「ふっ……。」

どの位そうしていたのだろうか、柳鏡がそう自嘲気味な笑みを漏らした。

「そんなこと……できる訳もないのにな……。」

そう呟いた後、柳鏡の唇が柔らかい髪にそつと触れる……。そして、それと同時に少しずつ解かれていく力強い腕……。景華は密かに名残惜しさを感じていたが、それを誤魔化すために慌てて鍋の方へと走った。熱くなり過ぎたそれを、なんとか竈かまどから下ろそうと奮闘する……。それを見た柳鏡は、本当に愛おしげに目を細めて笑うと、何も言わずに鍋をひよい、と持ち上げ、用意されていた鍋敷きの上に下ろしてやった。

「ありがとう。」

「鈍くさいから、見ていられなくて。」

笑顔の彼女に、いつものように答える……。

「失礼しちゃうわね！」

そう言って答える彼女も、いつものようにふくれっ面……。ここであつたことは、思い出として大切にしておこう。人でいられる内は

……。彼の瞳が不安定に揺れたことに、景華は気付かなかった。

ついに、出兵の朝がやってきた。東の空が、暁色に燃えている……。景華はあの戦衣を纏い、腰に剣を提げた。練習用のそれではなく、彼女のために作られた鉄剣だ。その柄には、赤い宝玉を抱く龍神の姿が彫られている。柳鏡の方も、鉄鎧に身を包んでこの上なく不満気な顔をしていた。彼は重装備で動きにくくなるのが嫌いなのだ。その不満そうな顔を見て、景華は思わず笑ってしまった。

「人の不幸を笑うとは、良い根性だな……。」

「だって、あんまりにも面白くなさそうな顔しているから、おかしくて。」

「なんならあんたも着てみるか？めっちゃ重いんだぞ？」

柳鏡のその申し出には笑顔で丁重にお断りを入れて、景華は兵士たちの前に出た。その横には、連瑛や柳鏡の兄たち、そして、柳鏡の姿がある……。

「姫君、どうぞ一言かけてやって下さい。」

「えっ、私？」

連瑛の言葉に、景華は目を丸くして問いかけた。

「当たり前だろ。あんたはこの軍の旗印なんだ、なんか皆の士気が上がるようなことを言えよ。」

柳鏡のその言葉で景華は一瞬躊躇したが、馬の脚を一步前に進ませ、大きく息を吸い込んだ。

「あの……。本当は戦いに行く人にこういうことを言っではいけないのかもしれませんが、でも、とても大切なことだから、言わせて下さい。」

彼女のその姿に、五千人の目が向けられている……。緊張した面持ちで、景華は話を続けた。

「どうか、命を捨てるようなことはしないで下さい。皆さんには、家族がいると思います。もしも私のせいで皆さんが亡くなったりしたら、私はご家族の方に合わせる顔がありません。」

ザワ、と群衆がざわついた……。自分が、おかしなことを言っていることはわかっている。だが……。

「命を、大切にしてください。皆さんがいてこそその乱です。成功するかどうかは、皆さんにかかっています。そして……。」

そこで言葉を切つて、もう一度大きく息を吸い込む……。空の暁色と、一緒に……。

「この国の夜の闇のような政治の暗黒を拭い、新しい次代を築きましよう！辰南の暁の為に！」

割れるような歓声が、大地に轟いた。そして……。

「景華姫の御為に！辰南の暁の為に！」

そう掛け声が上がった。景華は最初こそ驚いたものの、あまりの嬉しさに呆然とその場に立ち尽くしてしまった。

「うまくやったじゃねえか。こんなこと、教えなかったのによ。」

隣に来た柳鏡が、そう言葉をかける……。そして、ふと旗の方を指差した。全軍、進軍開始！という、連瑛の掛け声が響く……。

「見えるか？あの旗……。」

王家の象徴である紫色の旗。その旗に描かれていたのは、金色に染め抜かれた龍と亀に守られている、銀色の百合の花。銀色の百合は、王家の姫の紋章である……。

「すごい……。あれ……。」

感激のあまり言葉をなくしている景華に、柳鏡が説明を加えた。

「姉さんが考えて、清龍の里の女性陣が作ってくれたらしい……。」

向こうの軍にも、同じものを掲げてもらうそうだ。伝令班の姉さんがあつちに持つて行った……。」

「そう、なんだ……。」

もう、まともに言葉さえ出て来ない……。口を開けば、一緒に涙までこぼれて来そうだった。それでも、隣にいる彼に伝えたいことがある……。

「ねえ、柳鏡？」

「何だよ？」

面倒そんな返事が返って来た。ザカザカという規則正しい行進の音に、景華の声は消されてしまいそうだ……。

「絶対に、勝とうね……。それで私、絶対に良い王様になってみせる。だから……。」

彼女たちが列に続いて行かなければならない番になった。馬の鼻先を兵士の列の方へ向けて、景華が続きを話す……。彼が一番好きなあの笑顔で……。

「だから、ずっと見ていてね……。」

その言葉に、彼は曖昧に笑って応えた。それができないことを、知っていたから……。それでも、彼女に気付かれないように軽口を叩く。

「あんたの脚をか？」

「前言撤回！柳鏡だけは三十回位死になさい！」

馬上でも真つ赤になつて裾を下げようとする彼女を見て、柳鏡は少し目を細めて笑った。これもいつかは思い出になってしまうのか、という切なさを噛み締めて……。

「陛下！大変です！」

朝食をとっていた趙雨の前に、慌てた様子で將軍の一人が駆け込んできた。

「どうした、將軍？朝から騒々しい……。だがあまり穏やかではないようだな、話せ。」

「も、申し上げます！反乱が起きました！亀水族と清龍族が、今朝方同時に兵を起こしたようです！」

「何だとっ？同時にっ？」

將軍は混乱している、という様子で趙雨にそう聞かせた。対する趙雨も、突然の出来事に驚きを隠せないでいた。どちらの部族も人事に不満は持っているだろう、と趙雨は思っていた。だが、絶えず部族同士の闘争が絶えないこの国で、どうやって二つの部族が結束したというのか……。よほどの者が統率しなければ、目的は同じでも

すぐにばらけてしまうはずだ。それにも関わらず同時に決起したということは、よほど長く、綿密に連絡が取られていたに違いない……。「そして陛下！問題はその旗印なのです！」

將軍が、青い顔でそう言った。信じられない、という言葉が一番似合う顔だ……。

「何だ？それぞれの部族の旗ではないのか？」

苛立ちを隠さずに將軍に問いかける……。その様子を、春蘭がじっと見ていた。

「それが……金色の龍と亀が、銀の百合を擁しているのです！」

「何だと！」

趙雨は、その言葉を聞いて愕然とした。まさか、彼女が……？真紅の瞳が、脳裏にちらつく……。

「陛下！銀の百合、というのは王家の姫の紋章ですよねっ？それをなぜ、奴らが……？」

「黙れ！」

状況を飲み込めずにあたふたとしている將軍を一喝する……。その様子からは、余裕という物が一切感じられなかった。

「いいか、將軍。このことは他言無用だ。近衛隊から口が固い者を選んで二隊に分け、討伐に行け。奴らの動向を逐一知らせろ。わかっただな？」

「仰せの通りに、陛下！」

將軍はそう言つて伏礼をすると、廊下を早足で歩いて行つた……。後には、趙雨と春蘭だけが残つた。

「まさか、まだ生きていたなんてね……。」

春蘭がそう言つて趙雨に歩み寄り、その腕に自分の腕を絡めた。趙雨が長く息を吐いてから、彼女の薄青の瞳を見下ろす……。その瞳には、昔のような明るい光は宿っていない……。

「いや、おそらく偽物だろう……。彼女は死んだんだ。そう報告も受けたじゃないか……。」

「そうね……。」

そう言つて彼から逸らした瞳には、ただ黒い光のみが渦巻いていた。険しい顔つきで、渡り廊下の先の植え込みを見つめる……。

『今更戻つて来るなんて……。』

今も忘れられない真紅の瞳が、彼女の目に浮かんだ。

『今度こそ、殺してやる……。』

その胸に辛うじて収まっている感情を、彼女はぐつと抑え込んだ。同時に彼の腕を強く握っていたことには、気が付かなかった……。

「おいあんた、寝ぼけて落馬したりするなよ！」

景華の隣に馬を歩かせている柳鏡が、そう声をかけた。清龍の軍は敵を攪乱するために三つに分かれ、それぞれに進んでいた。景華たちの軍は一日目の行軍を終え、短い休息を取った後にまた進軍を開始していた。午後からは生憎の曇天で気温が上がらず、冷え込む中で野宿だったので、景華はほとんど眠れなかった。

「大丈夫だつて。柳鏡こそ、体が重くて動けない、なんて言わないでよ！」

心配して言ってくれたその言葉に、嫌味で応酬する……。いつものことだったが、眠れないで気持ちが不安定だったのも原因だった。柳鏡は、景華の軍の副将として配属されていた。名前は一応景華の軍であるが、とっさの判断は柳鏡がしてくれることになっていた。本来なら一軍の将として行進していてもおかしくない柳鏡だが、彼がこの位置を望んだのだと言う……。

「アホか……。言つておくが、そろそろ青谷の領主の領地に入るぞ。趙雨の息がかかった奴だからな、油断していたら後ろから矢でブスリ、なんてことになりかねないぞ？」

「もう、大丈夫だつたら！」

景華がふくれっ面でそう応じた時だった。

「敵襲ーっ！背後に敵軍です！」

その声が響くと同時に、大きく角笛の音になった。

「ほら見ろ、お出ましになったぞ。全軍方向を転換しろ！迎え撃つ

ぞ！」

最初の言葉を景華にかけてから、柳鏡がそう号令をかけた。先程とは違う音の角笛が鳴らされる……。

景華の頭に、昨夜の柳鏡の言葉が蘇って来た。

「いいか？あんたは自分の身を守っていればそれで良い……。」

「どうして？それじゃあ役立たずじゃない……。あんなに練習したもの、大丈夫よ。」

配給の食事を景華の分も取って来てくれた彼に、口を尖らせてそう答える……。彼女の隣に腰を下ろして器の片方をその手に持たせてから、柳鏡が口を開いた。

「あんたに、人を斬らせたくねえんだよ……。」

深い緑の瞳が、何か複雑な物を宿して、揺れる……。意味がわからない、と思つて、景華はその口を反抗的に尖らせたまま彼が続きを話すのを待った。

「いいか？生きるためには仕方ないとしても、戦場では人を殺さなきゃならない……。だが、相手も人間だ。同じように痛みも感じれば、あんたが言つたように家族もいる……。」

「……。」

景華の目が、伏せられた。柳鏡の言いたいことが、なんとなくわかつた気がする……。

「俺たちは、そんな奴らの人生を奪っているんだ。それを後から考える、痛い……。」

柳鏡の顔が、心の痛みにはんの少し歪んだ。そう言えば、彼が戦場で挙げた武勲を誇るところを、彼女は一度も見ることがない……。すごいよね、と褒めても、曖昧で悲しげな笑みを返すだけ……。その時は、冗談で応酬してくることもなかった。

「だから、あんたにそんな痛みを覚えさせたくねえんだよ。心配しなくても、あんたに近づく奴がいれば俺がぶつた切つてやる……。」

「わからないよ……。」

景華が、俯いてそう言った。その言葉に柳鏡が片眉を吊り上げて、ほんの少しだけ反応を示す……。何がわからないのか、彼にはそれがわからない……。

「だってそれじゃあ、柳鏡が後から痛いでしょう……？」

そうか、そんなことだったのか……。少し肌寒い位の空に、食事の湯気が白く立ち登る……。

「いいんだよ、俺は。今までに何度もそういうことはあったし、今更……。」

そうだ、人でないこの身が、今更心の痛みなど感じてどうする……。右手でぐつと、左腕を握る……。温かさという物が、全く感じられない……。

「ねえ、柳鏡？一つ、聞いても良い……？」

「何だよ？」

自分がどこか奥底で動揺していることを彼女に気付かれないように、普段と同じ口調を意識してそう返す……。

「柳鏡は……そんな痛みを知っているのに、どうしても戦場に行ったの？」

辰南の龍神は齡よわい十四でその初陣を飾り、以来、数多くの武勲を立てて来た……。しかし、そのような痛みを知っていながら、彼はなぜ頼みにされるがままに戦場に赴き、数多くの犠牲を生みながらもその名を轟かせてきたのだろうか……。

「……。」

彼は、どう答えれば良いのか迷った。応えは単純明快だ。彼女のため、彼女の笑顔のため。そして、彼女の幸福に自分の存在意義を見出している、自分のため……。だが、それをそのまま話す訳にもいかない……。形の良い眉をひそ顰めて、柳鏡は少しの間考えていた。

「そうだな……。俺が人でいられる証拠のため、かな……？」

景華には、この意味は全くわからないだろう……。それがわかっていて、敢えてそう答えた。彼女が真実を知る日は、永遠に来なくていい……。それが、彼の願いだった。

「人でいられる、証拠……。」

彼の言葉をそう繰り返す……。人でない証拠、として彼が挙げているのは、もちろん龍神の紋章。では人でいられる証拠、とは……？景華に考えついたのは、彼がその痛みで自分が人だと確認しているということ。その痛みで、自分の中に心という物が存在することを確かめている、ということ……。

「柳鏡、馬鹿だね……。」

彼に景華がかけられる言葉は、それだけだった。彼のその行動は、彼女には馬鹿だと言うことしかできない……。それ以上に、彼の悲壮な生き方に対して言える言葉が、あるだろうか。

「放っておけ。それであんたに迷惑かけたこと、ないだろ？」

確かに、彼がそれで一度も自分に迷惑をかけたことはない……。だが、それでも。

「やつぱり、馬鹿……。」

そう言っただけで冷めきつた食事に手をつけた彼女に、柳鏡はそれ以上何も言わなかった。

「柳鏡。」

彼の名を、そう呼ぶ……。陣形についての指示をちょうど出し終えた彼が、振り返った。

「約束、守るから……。だから柳鏡も約束、守ってよ？」

彼が一瞬思案顔になる……。そして、この場合の約束がどれを示しているのか、考える……。頭に浮かんだのは、昨日のこと。

「ああ。あんたに近付いた奴は、全員俺がぶった切ってやる！間違っただけでも斬っちゃうかもな！」

「……そんなことしたら、呪い殺してやる！」

笑顔の彼に、そう答える……。自分が緊張しないようにという、不器用な彼の精一杯の思いやり……。

「やめろよ、道連れにする気か？」

そうお互いに軽口を叩いている間に、早くも第一陣と敵軍が激突し

ていた。

「いいか？六班に分かれる！一班から順に前に出て、疲れたらどんどん後ろと交代しろ！」

的確な指示が、彼から出される……。そして、清龍族の兵士たちは、その命に素早く従う……。それは普段自分たちが煙たがっている彼の存在を、心の奥底では認めていたということの表れだった。景華が見ている前で、次々に兵士たちがぶつかり合い、倒れて行く……。その光景は、彼女にはあまりにも凄惨だった。

「見たくないなら、見ない方がいいぞ……。」

景華が青い顔で唇を噛み締めている様子を見て、彼がそう言った。それでも、彼女は首を横に振った。高い位置で縛り上げた髪が、いつもより激しく横に動く……。

「ダメ、全部見ておかないと……。そうしたら、もうこんなことが二度と起こらないように、と思えるようになるでしょう……？」

「……。」

震えて、そんなに青い顔をして……。それでも彼女は、決して目の前の光景から目を逸らそうとはしない……。そんな彼女は、柳鏡の目にはとても意地らしく、そして気高く映った。彼女ならば、いずれ王位に就いた時に、国民が他国に誇れるような王になるだろう……。そう思った。

「……本当は、俺が混じって戦った方が軍の士気は上がるのかもしれない……。だが、そうするとここにいるあんたの守りが手薄になっちゃうんだ……。」

彼女がどういう答えを返すのか、なんとなくわかっていてそう言うてやる……。

「私は大丈夫だけど……。でも……。」

柳鏡が混ざれば、士気が上昇する……。それは願ってもいないような効果だ。だが、彼の心の痛みに対する代価は、何で支払うことができるだろうか……。

「俺のことは心配いらねえよ。問題は、あんたの方だろうが。俺は

……あんたが勝つための道具に過ぎねえんだよ……。」

それは、自分の心を押し殺すことになってでも、彼女の夢を叶えるという意味……。彼のその言葉に、景華は決意を固めた。

「前線に行つて、柳鏡。ただし……。」

続きを聞くために、彼の体が少し景華の方に傾けられた。

「絶対に、戻つて来ること。怪我もしないで。わかつたわね？」

なんとも無茶苦茶で、わがままな注文……。それでも、彼は。

「仰せの通りに！」

そう彼女に笑顔で誓つて、自分が騎乗している馬の横つ腹を強く蹴りつけた。龍神が、戦場を駆けて行く……。彼の背から、大剣が抜き放たれた。銀色の刀身が、閃く……。そして、彼が通つた後には、兵士たちの亡骸の山……。それが、そのまま彼の心を塞ぐ痛みに変わる……。彼女は誓つた。彼のその痛みに寄り添えるようになる、と……。その時だった。

景華の周りで、兵士たちが何人も倒れた。一瞬、何が起きたのか理解できずに固まる……。

「奇襲攻撃です！前から来ています！弓兵隊のようです！」

その言葉のおかげで、何が起きたのかを一瞬で理解する……。どうやら、敵はこれが総大将である景華の軍だと知っていたようだ。柳鏡が離れてすぐに攻撃を仕掛けてきたところから見ても、おそらく辰南の龍神の存在にも気付いていたに違いない……。

「慌てないで！向こうが近付いて来るまでは、こちらで弓で応戦して。ある程度の距離になったら、ぶつかりましょう！」

そう声をかけながら、自分も弓の準備をする……。背負っている矢羽根を抜き、弓に番える……。大切なのは、呼吸。そう彼に教わった……。その彼との約束を破らなくてもいいように、敵兵の足元を狙う……。

景華が矢を放つたのと同時に、何本もの矢がどちらにも射かけられる……。それらはちょうど中央の辺りで交差し、そのまま相手の軍に降り注いだ。

「うつ……！」

左肩に、痛みが走る……。見れば、銀色の矢尻が深々と彼女の肩に突き刺さっていた。その矢が動きの邪魔にならないように、途中でバツキりと折る……。こういう時には矢尻を抜いてはいけない、と教わったからだ。

「姫君！」

それに気付いた兵士の一人が、そう声を上げる……。

「私は大丈夫！それより、皆は？次を射かけたら、すぐに盾で急所を守って！」

そう号令をかけて自分も二本目の矢を番え、発射する……。そしてその後、襲い来る矢の雨を盾で避ける。

「一気に畳みかけて！突撃！」

彼女のその言葉に、全員が剣を抜き、走る……。もちろん、彼女も剣を抜いた。皆が敵陣に突っ込んで行くのを、一人で見ている訳にはいかない。だが、その身は恐怖にすくんでいる……。以前の彼女なら、間違はなくここで逃げ出したことだろう。でも、後には引けない……。馬の横っ腹を、先程彼がしたのと同じように蹴る……。金属の不協和音の只中に、彼女もその身を躍らせた。いくつもの真剣な顔が、彼女からも見える……。自分に向かって来た兵士に、覚悟を決めて対峙しようとしたその時だった。目の前で、その彼が急に倒れる……。

「間に合ったかつ？」

その姿が、彼女を安堵させる……。

「ギリギリね……。死んじやうかと思った！」

その位、本気で怖かった……。自分に向けられている多くの刃を、景華がどうにかして全て受け流す。そして、彼らはことごとく柳鏡の手によって斬り捨てられていく……。

「あんたみたいじゃじゃ馬はっ、しぶとく生き残るものなんだよ！」

彼女に平静を保たせようと、いつものように乱暴にそう言う……。

その鎧は、他よりも遥かに多くの返り血を浴びている……。血に濡れた刀身を翻して、龍神が舞う……。他国が彼のその名を恐れる理由が、そこにあった。

結局、全員無事という訳にはもちろん行かなかったが、景華たちの軍はあまり多くの犠牲を出すことなく勝利を収めた。柳鏡の活躍があつてこそその勝利だ。

「負傷者を集めろ！歩ける者は歩き、無理な者は馬や負傷者用の馬車に分乗させてくれ！この先の湖で休むから、その時に手当をする！」

柳鏡の指示で、迅速な対応がなされた。景華の肩口に、彼の視線がチラリと当てられる……。

「痛むか？」

短い問いかけだが、その声音からはあきらかに心配していることが読み取れる……。

「うん、大丈夫！そんなに深くもなさそうだし……。」

そう、嘘をつく。今は上掛けで隠しているが、先程チラリと眺めた時には、矢尻は完全に彼女の体に刺さり込んでいた。それでも自分の怪我で軍の士気を下げたりはしないように、そう答えた。肩口は、ジンジンと痛んでいる……。ともすれば、気が遠くなりそうだし、かし、そこは気力で持ち堪える……。

「湖まで、一時間あれば着く。その間は我慢しろ……。」

冷たい言葉に思えるが、それは彼女の意味を尊重しているからこそ言葉だ。本当は、今すぐその場で手当てをさせてやりたかった。

「いいよ、柳鏡。進軍させて。」

その表情を読み取って、そう声をかける……。自分なら問題ない、と彼に思わせたかった。

「……進軍を開始しろ！一時間後の湖到着を目標にする！」

その掛け声で、皆の足がゆくりと動き始める……。戦いの後で疲れ切っているであろう、誰も足並みを揃えて歩こうとは思えない……。

馬上で多少ふらつきながらも、景華はなんとか湖まで持ち堪えた。

「負傷者は重傷者から順番に救護班に見てもらえ！食事の当番は準備をしろ！もし負傷者の中に食事当番がいれば、誰かに代わってもらえ！」

そう号令をかけてから、柳鏡は馬から下りた。そして、意識が薄れてきている景華を馬上から下ろす……。

「おい、本当に大丈夫な奴がこんなことになると思うか？」

そう言いながら寄りかかって座れるような木の根元に、彼女を下ろした。

「だって、倒れる訳に行かないから……。」

確かに、旗印となっている彼女の一举一動は、そのまま軍の士気に直結している。彼女が倒れる訳にはいけないというのは、紛れもない事実だった。

「待つてろよ。救護班の奴、呼んで来るから……。」

そう言い置いて彼が立ち上がるうとした時だった。力の入らない手で、彼女が彼の上掛けを掴んだ……。

「いら、ない。皆、もっと重症でしょ？先に……治療してあげて……。」

「あんたも十分重症な部類だと思うが……。それでも最後にしたいのか？」

柳鏡の言葉に、彼女はコクリと力なく頷いた。もう、彼の声音が怒りを帯びていることにも気付けない……。

「ふざけるなよ……。」

声を荒げることにはなかったが、それだけに彼の怒りが深いことがわかる……。柳鏡は、くるりと背を向けて行ってしまった。痛みで意識が遠のいて、視界が揺れる……。ふと体が浮く感じが彼女を捕らえ、その後どこかに下ろされるのも感じた。

「柳、鏡……？」

辛うじて、腕の持ち主の名前を呼ぶ……。どうやら、皆が休んでいる湖のほとりから少し離れた場所に連れて来られたらしい、喧騒が

遠い……。

「救護班が嫌なら、仕方ないだろ？ 抜くぞ……。」
「つつつ……！」

肩に感じていた異物の存在が激しい痛みとともに、消えた。それと同時に、温かい液体が体から抜け出て行くのを感じる……。

「ちつ、やつぱりかなり深かったんだな……。」

彼女の傷口に布を押し当てながら、一人で呟く……。こういった矢傷の類は、手当し慣れている。だが……。

「あんたが嫌だって言っただからな、文句言っなよ！」

彼女の傷口を抑えたまま防具の止め具を解き、緩める……。そして、その戦衣を少しはだけさせた。白い肩が、朱に染まって無残だ……。

「あんた馬鹿かつ？ これだけ深く刺さることなんて、滅多にねえぞ？ なんでこんな風になるまで言わなかったんだよっ？」

彼女を責めても仕方ないのは、わかつている……。彼女にこんな怪我をさせてしまったのは、自分だ。たとえ彼女がなんと言っても、あの時側を離れるのではなかった……。その後悔が、口の中で苦い。傷薬を縫った布をその肩に当てて、包帯できつく縛り上げる……。

おそらく、しばらく出血が止むことはないだろう。景華がありがとう、と言って戦衣を着付け直した。防具の止め金が片手ではうまく取れないので、手伝ってやる……。

「傷、残っても知らねえぞ……。」

乱暴にそう言っつて、隣に腰掛ける。彼女は本当に彼の思い通りにはならず、困るようなわがままばかりを言う……。それがただのわがままならば文句のつけようもあるのだが、理に適っているわがままばかりを言うので、さらに困る。

「仕方ないよ。ほら、よくいるんでしょ？ 戦場でついた傷が消えない人って。」

青い顔をしているが、いくらか楽になってきたらしい、口調がはつきりとしてきた……。

「馬鹿なことばかり言うんじゃないよ。それは男の話だろうが。」

へらへらと笑う彼女に、本当に腹が立つ……。

「ほら、柳鏡のせいじゃないよ？ 私が行ってって頼んだんだし……。」

そして、あきらかに自分の落ち度なのに、彼女が自分を責めようとしないことにさらに苛立ちが募る……。

「父上が姉さんを戦場にやりたがらないのは、こういうことがあるせいなんだよ。本当は姉さんだってあんたの軍に入りたかったんだ。だけど、父上に止められた。体に傷でも残ったらどうする、って……。」

「そうだね。女の子は、いつかお嫁さんに行くからね……。」

彼女は、そう他人事のように言った。自分には関係のない世界の話だ、という考えが、頭のどこかにあったのかもしれない……。

「他人事じゃねえだろ。あんただって、王家の血筋を絶やさないとめにいずれ結婚しなきゃならないだろうが……。」

その時までは一緒にいてやれないかもしれない、という考えが、柳鏡の頭をよぎって、消えた。そんなこと、今は考えなくなかった……。

「うん。そうだね……。」

まるで他人事、という言葉がぴったりの生返事……。

「あんた、自覚はあるのかっ？」

いい加減その反応に腹が立ち、思わず声を荒げてしまった。彼女がこの時、どんなことを考えていたのかも知らず……。

「……だって、仕方ないよ。私が王様になったら、私の結婚はそのまま政治に繋がってしまうでしょう？ 相手は他所の国の王子、とかあるいはこの国の勇士、とか。私が勝手に決められる問題じゃないもの……。」

確かに、彼女の言う通りだった。彼女の結婚は、他国の王子とであれば外交のバランスを考慮せねばならず、国内の人間とであれば部族間の力関係に十二分に注意を払わなければならない……。そして、それらを考慮した中で最も理想的であるとされる相手が、彼女の意

思とは関係なく選ばれる……。柳鏡は、その言葉を聞いてしばらく黙り込んだ。

「あんた、それで満足なのか……？」

「やっと出てきたその言葉は、むしろ彼自身の意志を問うものだったのかもしれない……。この戦いを終結させて、彼女にそんな人生を歩ませる……。それで、本当に俺は満足なのか？と……。」

「本当は、ずっと一緒にいてくれる人位、自分で決めたいよ？でも、何もかも欲張りになっちゃいけないから……。」

彼女は最近、あの老婆の占いを思い出す。一つならず、手放さなくてはならないもの……。その答えの中に、自由という物が含まれているのではないだろうか……。」

「あんた、俺が思っていたよりも後ろ向きだな……。」

柳鏡のその言葉に、景華の顔が上がる……。何が言いたいのか、彼の表情も合わせて考えるために……。」

「自分で決められないから、最初から諦めるのか？そんなもの、あんたが王様になればあんたが一番偉いんだろ？いつもみたいにわがまま言えればいいじゃねえか。自分が結婚する相手位、自分で決める！とか、あんたなら言いそうだと思うんだけど……。」

「それじゃあ暴君だよ……。」

柳鏡の突拍子もない言葉に、景華は思わず苦笑させられた。

「あんたが暴君なのは今始まったことじゃあねえだろうが。ガキの頃から外の花を摘んで来いだの、うさぎを城に連れて来いだの……。」

「

「あつたね、そんなこと……。」

幼い頃の記憶に、ふつと頬が緩む……。」

「あんたにしたらいい思い出かもしれないが、こっちは地獄の日々だったんだぞ？あのうさぎだって捕まえるのに三日もかかったんだ……。馴らすのにはもっと時間がかかったし……。あんたが生きているのがいいと言っから、相当苦労したんだよ。わがまま過ぎるだろ……。」

彼女のそんなわがままに付き合ってくれるのは、いつも柳鏡だった。趙雨や春蘭は、ただ眉根を寄せて困ったように笑うだけ。だが彼は、絶対に景華が欲しかったもの、見たがった物を持って来てくれた。そして決まってこう言うのだ。二度とあなたのわがままなんか聞か
ねえ、と……。

「でも、柳鏡は絶対に叶えてくれたよね……。後から散々文句言われたけど。」

彼女から、彼が視線を逸らした。そして、そのまま何も答えない……。

「決めた！王様になっても、いっぱいわがまま言っちゃおう！だから柳鏡、全部叶えてね！」

「ふざけるな。あんたが調子に乗ったら手に負えないから、嫌だ。」
暗い表情を一転させてとびきりの笑顔で言った彼女に、間髪入れず断りを入れる。

「ダメ！もう決めたもん！」

それがすでにわがままだということに、彼女は気付いていない……。立ち上がって草を払う……。

「戻ろうよ。ご飯できたみたいだし。」

そう言っただけで戻って行く彼女の後ろ姿を見て、彼が呟いた。彼女には、決して聞こえないように……。

「俺に叶えてやれるものなら、全部叶えてやりてえよ。でも、時間がねえんだ……。」

左手だけを、ぐっと握り込む……。指先が、冷えた手のひらに食い込んだ。

「景華姫、怪我しちゃったんだね。痛そう……。」

蘭花の方が、そう言っただけで顔をぐっとしかめる。矢傷の痛みを想像しているようだ……。

「でも、お母様。そうしたら、蘭花も結婚する時には自由にできないの？ちよつと可哀想だよ……。」

兄が、隣にいる妹の顔を見やった。妹の方は、今度は心配そうに眉を寄せている……。

「大丈夫よ。蘭花はお兄ちゃんがいるからね。景華姫は一人っ子だったからそうなってしまったの。」

ほつと頬を緩めた後で、別の疑問を母親に投げかける。

「お母様は、どうやってお父様と結婚したの？お母様も一人っ子でしょう？」

両親の仲が良いことは、二人とも知っている。到底、政略結婚とは思えない……。

「お父様が、この国で一番の人だったからですよ。」

「ふうん……。」

誤魔化された気もするが、仕方がない。母親の口から、続きが紡がれた。

「その後、景華姫たちは無事に青谷を抜けることができました。途中何度か戦うことにもなりましたが、その度に柳鏡が活躍してくれたのです。」

「姫君！あそこに我が軍の旗が見えます。どうやら、合流地点に着いたようです。」

青谷を抜けてすぐの林の中が、清龍軍の合流地点になっていた。旗の数からみて、連瑛が率いていた隊と柳鏡の兄たちが率いていた隊は、すでに到着していたようだ。そこに、景華たちの軍が混ざる……。

「姫君、御無事で何よりです。」

連瑛が馬上からそう挨拶をしてくる……。景華もそれに笑って答えた。

「連瑛様も、お疲れ様です。ここで皆様にお会いできて本当に良かった。」

「柳鏡、姫君にお怪我をさせるようなこと、なかっただろうな……？」

「はい、父上……。」

景華に口止めをされたので、柳鏡はそう嘘をついた。彼女の怪我を残りの三分の二の隊が知る必要はない、というのが景華の考えだった。傷は、とりあえずは塞がっていた。肩を上げたり大きく動かしたりすると痛むが、それ以外には特に問題はない……。傷痕は、残ってしまいそうだが……。

「それでは、姫君。このまま南進します。よろしいですか？」

「ええ、行きましょう。次は炎の砦でしたよね？」

連瑛の命で、合流した大隊が進軍を開始する……。全体としては、二割強の兵士が減ってしまったようだ。つまり、景華たち以外の隊も攻撃を仕掛けられていた、ということだ……。

「父上たちの隊は、二度程戦闘を行ったみたいだ。兄さんたちは、三回……。」

兵士の減り具合から、柳鏡が計算して景華に教えてくれた。そして、そのまま馬を並べて歩かせる……。

「肩の具合は？」

小さく、誰にも聞こえないように彼女に訊ねる……。誰にも気付かれないように、唇の動きも最小限に抑えて。

「ちよつと痛むこともあるけど、大丈夫。」

「傷は……？」

小さく目を伏せて、景華が答えた。

「塞がつてはいるけど、残っちゃうかも……。」

「そうか……。」

何か言葉をかけてやりたかったが、何をどう言っているのかさえわからない……。ふと思い出したことが、口を衝いて出た。

「あんた……。あれ、まだつけていたんだな……。」

一瞬、何のことなのかわからずに戸惑う……。それから、思い当たる一つ。

「うん……。なくしたり壊したりしたら困るから、置いて来ようかとも思っただけど……。」

彼らが話しているのは、柳鏡が景華にあげた珊瑚の首飾りの話だった。肩口の矢傷の治療をした際に、白くて細い首にそれがかかっているのを、柳鏡は見たのだった。普段は襟の中にしまわれているので、誰にも、絶対に気付かれることはない……。

「別に……。あんたにやった物だから、あんたの自由だけだな……。」

「……。」
そう言うてついと目を逸らし、乗っている馬同士の距離を若干離す……。これでは彼が何を言いたいのかわからないと思うが、本当は彼女の首にそれが揺れるのを見た時、とても嬉しかったのだ……。城で育った姫君には当たり前の物だから、彼女はすぐに飽きてしまっただろう、と彼は思っていた。しかし、彼の予想に反して彼女はそれを身に着け続けていた……。我ながら単純かもしれないな、と彼は思った。彼女の行動一つで、一喜一憂してしまうのだから……。

「変なの……。」

彼が何を考えているのかわからない彼女は、そう言うて口を尖らせる……。今日は、久々に晴れ間が広がりそうだ……。

「どうなった？無事に討伐できたか？」

城に報告に戻った將軍に詰め寄る……。趙雨は、内心ではかなり焦りを感じていた。反乱軍が出たことは、すでに城の閣僚たちは知っていた。その旗印までは、まだ知らされていなかったが……。

「それが……。どちらも予想以上に抵抗が激しく、城の近衛隊だけでは太刀打ちができません！援軍を要請して下さい、陛下！」

趙雨の眉が、ギョツと顰められる……。正直、この決断は難しかった。確かに、虎神族や緋雀族に援軍を求めれば、簡単に討伐ができるのかもしれない……。だがそうになると、城の近衛隊でも抑えられない程の反乱軍が出た、として、人心に不安を与えかねない……。そうでなくても偏った人事で国民の支持を得られていない彼の政権は不安定なのだ、これ以上人心を揺さぶるようなことになっては、暴動も起きかねない……。

「城の近衛隊を増員する、と言って援軍を集めたら？」

後ろから、彼女の声がする……。その声の方を振り返り、趙雨はほつとした。自分一人では頭を抱えてしまうような問題も、彼女がいてくれれば解決できる気がする……。

「そうだな、それがいいかもしれない。父上、どの位なら兵士を貸していただけますか？」

「私もお父様にお願ひしてみろわ。」

春蘭の後ろ姿が、戸口から消えた。それを見送ってから父である虎神族の長、秦扇^{シセン}に目線を戻す……。

「趙雨、正直なことを聞いてもいいか？」

「なんですか、父上？」

厳しい顔きで顎に手を当てて何事かを考えている……。そして、重い口調で話を切り出した。

「反乱軍の旗印に、銀の百合が描かれているという……。本当か？」
趙雨の顔色が、一瞬にして青く変わった。その様子から、返答がなくても答えを読み取る……。

「それでは、その軍に姫君がいらつしやるのではないか？銀の百合と言えば、王家の姫の紋章のはずだ……。」

「偽物に決まっていますよ、父上……。」

青い顔のまま、自分の野望の犠牲にした少女の顔を頭に思い浮かべる……。彼女が、生きているはずがない……。

「父上も一緒にお聞きになったではありませんか。彼女の死体が揚がった、という話は……。同じ深緑の髪だったそうですし、彼女の簪^{かんざし}までしていたのであれば、間違いありません……。」

その言葉に、父親が疑問を差し挟む……。

「私には、どうも納得がいかないのだ……。姫君は、柳鏡がさらって行ったのだろう？その彼がなぜ、姫君の死体と一緒に揚がらないんだ……。？たとえどんな状況に陥ったにせよ、あの若者が、姫君を自分より先に死なせるとは思えないのだ……。」

趙雨が、それには確信があるように答える……。

「おそらく、無理に自分の妻にでもしようとしたのでしょうか。それで、姫君が思い通りにならないから殺したのではないでしょうか……。彼が姫君をどう想っていたのかは、子供の頃から見ていてよく知っていますから……。」

秦扇が、険しい顔付きで何事かを考える……。そして、また重いその口を開いた。

「私には、やはり納得がいかないのだがね……。わかった、三千の兵を貸そう。ただし、もしも反乱軍の中に姫君がいらっしやるのであれば、直ちに兵を引かせてもらうから……。姫君がいらっしやるのであれば、反乱軍はこちらの方になってしまう……。」

「ありがとうございます、父上……。」

反乱軍の中に、彼女がいる訳がない。趙雨はその確信の元に、父親との約束に合意した。戻って来た春蘭が密かに眉根を寄せて考え事をしていることに、彼は気付いていない……。

「明日には炎の砦に到達します、姫君。今日は、ここに幕営いたします。ただいま姫君の天幕を張らせていますから、もう少しお待ちください。」

今日は、彼らは天幕を張って本格的に幕営することになっていた。明日にはおそらく城の軍とぶつかることになる……。その拠点を築く際の予行演習として、幕営を行うことにしたのだ。

「負傷者用の天幕は足りていますか、連瑛様？」

景華の問いかけに、連瑛は一瞬間を空けてから答えた。

「それが……軽傷者用の天幕が足りていません。」

言った後で、連瑛は後悔した。姫が一度言い出したら聞かない、ということとは、息子から聞かされていた……。

「それなら、私の天幕を使って下さい。私一人のために、多くの負傷兵を夜露にさらしたりなさないで……。」

「アホ。」

隣から、その息子が割って入る……。

「柳鏡、姫君になんて口のきき方を……！」

「いいんです、連瑛様。私がそう話してくれるように、頼んであるんです。」

あまりにもひどい言葉遣いなのでたしなめようとしたが、景華自身に止められる……。

「あんたが天幕を使わねえなんてことになったら、無条件で全員野宿なんだよ。仮にも総大将なんだから、その位のことわかれよ。」

柳鏡のその言葉に、景華が返答に詰まった。

「それともあんた、父上や兄上たちにまで野宿させる気か？それなら、あんたの天幕を負傷者用に使ってやる……。」

「だって……。」

口を尖らせて、俯く。彼の言っていることが正しいということは、身に染みてわかっている……。柳鏡が、軽く溜息をついた。

「父上、確か副将以上の將軍には、個別に天幕が与えられていましたよね……？」

「ああ、そうだが……。」

個別に与えられている物なので小型ではあるが、天幕からあぶれている軽傷者は極僅かだ。彼はそう考えた……。

「それでは、俺の天幕を負傷者用に用いて下さい。どうせ俺は姫の天幕を守って眠らなければならぬので、必要ありませんから。それで良いだろ、わがまま姫？」

「別に四六時中付いていてくれなくってもいいのに……。」

そう口ごたえをするが、彼は取り合ってくれない……。仕方なく、景華の方が折れる……。

「それじゃあ、そうして下さい、連瑛様。」

景華はそう言つて、案内に来た兵士の一人と彼女の天幕に向かって歩いて行つた。連瑛が、こっそりと呟く……。

「助かったぞ、柳鏡。」

「いえ……。姫のわがままにはほとほと手を焼かされて来ましたから、ああいった時の対処法は知っています。」

その言葉に、連瑛が苦笑する……。

「お前もその若さで随分と苦労させられているんだな。お前の母親も、若い頃はなかなかすごかったぞ……。」

今度は柳鏡の方が苦笑してみせる……。

「違うのは、父上と母上は無事に結ばれた、ということですね……。」

息子のその言葉に、なんだか違和感を覚える……。

「私の天幕も完成しただろうか……。柳鏡、ちょっと来なさい……。」

「そう言った父の後を、何も言わずに柳鏡がついて行く……。連瑛の天幕も、完成していた。そのまま中に通される……。」

「外に会話が漏れることはないと思うが……。柳鏡お前、何を隠している？ 龍神の紋章のことで、何かあったのか？ 最近、よく左腕を掴んでいるだろう……？」

気付かれていたか……。そう思い、柳鏡は軽く唇を噛んだ。父親の目はあの老婆の目と一緒に、自分の心の中までを見通してくる……。だから、いつも隠し事はできない。そのせいで、悪戯がばれて叱られることもしばしばだった……。

「龍神の華、という者は御存じですか？」

柳鏡の問いに、少しの間目を閉じる……。

「そう言えば昔、春の祭りの時に来ていた占い師が言っていたな……。」

……。確か、龍神の紋章を持つ者に仇をなす、という存在だろう？

「そうです……。」

そう肯定してから、目線を下に落とす……。呪いの証からは、わざと目を逸らして。

「それが、どうかしたのか……？」

父親の目が、不安げな色を宿した。普段は厳しい人物であっても、彼は子供に対して当たり前の愛情を持っていた。ましてや、柳鏡の場合はその生い立ちや背負わされた運命が過酷であったから、なおさら……。

「あの姫が、その龍神の華なんだそうです……。そして華に焦がれた龍神には、本当に呪いが待っていた……。」

柳鏡が、自分の左腕をきつく握り締めた。その力の強さで、指先が白くなる……。

「俺は……だんだんと人ではなくなってきました……。それでも、最後の瞬間まで人であるために、彼女の側にいたいんです……。」
息子の身に何が起きているのか、連瑛は大体の察しがついた。おそらくは、紋章の力の暴走……。それが彼にどんな変化をもたらしているのかまではわからないが、あの息子がここまで動揺しているのだ、事態は相当深刻に違いない……。

「お前の名前は、お前の母親がつけたんだ……。水面に映る、柳の葉を見て……。」

「姫が、見つけてくれましたよ……。その色が、俺の目の色にそっくりだとか……。」

嬉しそうに話す、あの笑顔が蘇る……。人である内は持ち続けようと決めた、思い出……。

「惜しいな、姫君……。正解まであと一歩だった……。」

そう言つてふと遠い目をする父親に、柳鏡は目だけで問いかけた。一体、どこが違っているのか、ということ……。彼女がその説明をしてくれた時、彼自身もそれに非常に納得がいったのだ、間違っているはずがない、と……。

「その色は、水面が波立つと消えてしまうそうだ……。」

「それも、聞きました……。」

波立ったらすぐ消えちゃうの、と言ったふくれっ面も、柳鏡はよく覚えている……。

「お前の瞳の色と同じ、鏡のような水面に映る、柳……。でも、水面が波立ったらすぐに消えてしまう……。だから。」

そこで一度言葉を区切って、息子の顔をじっと眺める……。その面差しは、母親のそれに近い……。

「その色が映る水面のように、穏やかな人生を歩んで欲しい……。」

それが、お前の母親の願いだ……。」「

柳鏡は、胸が詰まるのを感じた。母が呪われた運命の自分に望んでくれたのは、危険を冒して手に入れる栄光ではなく、そこにある平穏……。その事実が、胸に突き刺さる……。

「……俺は……母さんが望んだような人生を生きてはいないのかもしれない……。」

そこで、視線を上げる……。その瞳に、恐れと言うものはない。

「ただ、最後の瞬間まで人として生きること。これが、俺の望む生き方です……。」

そう言つて一礼をしてから去つて行く息子を、連瑛には呼び止めることはできなかった。だが、本当はこの言葉をかけてやりたかった……。

「望むように生きろ、柳鏡……。」

「もう、柳鏡遅いよ!」

彼が戻るなり不機嫌な彼女に、さっきまでの話で感じていた感情を全てしまい込んで、いつものように、を合言葉に答える。

「なんだよ、俺がいないと飯も食えないのか?」

景華が座っている目の前には、二人分の食事が用意されていた。もう湯気が出ていないことから、彼女がかなり待っていたことがわかる……。

「待っていてあげたの。ご飯、食べようよ。」

彼女の正面に座つて食事の皿を持ち上げた、その時だった。

「柳鏡? 腕、怪我したの……?」

まずい、と思つて慌てて袖の中が彼女に見えないように引つ込める。しばらくは戦闘はないだろう、と考えていた彼は、ここ数日間、いつもの格好に戻っていた。その広い袖口が、仇となつたらしい……。

「今、包帯巻いていたよね……?」

いつの間に彼が怪我をしたのかは正直言つてわからなかったが、気

になつて仕方がない。

「大丈夫？ 見せて？」

そう言つて彼の腕に手を伸ばした。が……。

「触るな！」

そう言つて、彼が乱暴にその腕を振り払う……。景華が驚きにその目を見開いた。彼女には、知られたくない……。

「……何よ。人の肩の傷は嫌がつても見るくせに！ 心配になつただけじゃない！」

確かに、柳鏡は彼女の傷の具合を何度か確認していた。自分の責任でついてしまった傷だ、気になるのは当然である……。景華は心配をかけまいと傷を見せるのを嫌がるのだが、彼女の大丈夫があてにならないことも柳鏡は知っていたので、自分の目で確認するようにしていた。

「別に……。痛む訳じゃあないから心配はいらねえよ……。」

そう言つて、ついと目線を逸らす。この逸らし方は照れているときではなく、嘘をつく時……。

「やっぱり痛いんでしょう？ 薬塗ったりしなきゃ……。」

そう言つてもう一度手を伸ばすが、やはり乱暴に振り払われてしまふ……。今までそんなことを彼にされたことがなかった景華は、いい加減腹が立つた。

「……もういい……。」

そう言つて、落ち込んだ素振りを見せる……。それから……。

「私には見せられなくても、救護の人には見てもらつた方がいいよ、柳鏡……。後で行つてきなよ。それから、そんなに包帯巻いているんだから、本当は動かすのも大変でしょう？ しばらく負傷者として前線からも離れた方がいいんじゃない？ 私は、大丈夫だから……。」

その弱々しい笑顔で言われても、と柳鏡は思つた。自分がそばからいなくなるのは不安に違いないが、怪我をしているのに無理はさせられない、というのが彼女の考えだろう……。

「……何を見ても、驚かないか……？」

彼女の不安材料は、全て取り去ってやりたい……。少なくとも、戦闘の最中ではそばにいてやりたい……。しかし、このままこの秘密を持ち続けられ、それすらも叶わなくなってしまう……。彼女の前では、最後まで人でありたかった……。だが、天はなんとも無慈悲だ。彼の願いは、それすらも叶わない……。

「うん……。」

景華のその言葉を受けて、柳鏡はその袖をまくった。肩から手首まで、包帯で一部の隙もなく包まれている……。その結び目を、彼が必要以上にゆっくりと解く……。そして、それ以上にゆっくりと、包帯が解けて行く……。

「……！」

景華は絶句した。他に何の言葉も、反応も出て来ない……。

「信じられるか……？」

彼の腕は、人のそれではなくなっていた……。全体を、爬虫類を思わせる青銀の鱗が覆っている……。

「いつ、から……？」

そう言つて、彼のその腕にそつと手を伸ばす……。指先が、ヒヤリと冷たい腕ものに触れた……。

「封印を解放してすぐは、紋章が疼いたりするだけだった……。その内、派手に痛むようになって来た。それが収まった後、少しずつ増えて来た……。冷たいだろ？人間の腕じゃねえ……。すでに、人間じゃあなくなつて来ちまったんだよ、俺は……。」

深緑の瞳が、これ以上はないという程、不安定だ……。今にも、光を失つてしまいそう……。

「まだ、心は人間のつもりでいる……。だがそれも、これに侵食されていく内にいつかなくしちまうに違いねえ……。だから、ずっとあんたと一緒にいて、ずっとあんたのわがまを聞いてやる、だなんて話、約束できねえんだ……。」

景華の瞳から、涙がポトリ、とこぼれた……。ずっと一緒にいてくれると思つていた、ずっと自分のわがまを聞いてくれると思つて

いた彼が、その約束をできないと言う……。そして、いつかは自分の前からいなくなってしまう……。何をどう言えばいいのか、それすらももうわからない……。彼のその手を、自分の頬に持つて行く……。涙にぬれた頬が、冷たい手に包まれた。

「温かい……？」

「ああ……。」

意味不明な問いかけに、それでも彼は真剣に答えてくれる……。

「良かった……。」

そして、そのまま笑って見せる……。その泣き笑いの顔は、柳鏡の胸を強く締め付ける……。見ていられなくなつた彼は、その腕で彼女の細い肩を手繰り寄せた。彼女の小さな体は、彼の胸にすっぽりと収まってしまう……。

「ふえっ……。」

それを合図に、彼女は堰を切つたように泣き出した。声を上げて、小さな体を大きく震わせて……。外にその声が漏れないように、ギョツと強く抱き締めてやる……。鎧を外していて良かった、と彼は密かに思った。

「あんた、意外と温かいな……。ガキみてえ……。」

彼女の温もりはその左腕だけではなく、彼の体全体、とりわけ、心には温かくて、心地良い……。鱗こんなのある腕に抱かれているということがわかっていても、彼女は逃げようとすらない……。天幕の中がしばらく、彼女がしゃくり上げて泣く音だけに満たされた。

「……そばにいてやれる内は……。」

彼がふと口を開いた。その口調は、真剣そのものだ……。景華が彼の腕からほんの少し、その身を起こした。

「一緒にいてやれる内は……あんたのわがまま、なんでも聞いてやるよ……。だからあんたも一つ、約束しろ……。」

泣いているとわかっていて、その顔を上げさせる……。そして親指でその涙を拭つてやった後、先程彼女がしたのと同じように、その頬を左手で包み込む……。

「ずっと、笑っている……。俺が人でいられる、最後のその瞬間まで……。」

小さく笑顔を見せた、ということは、了承……。柳鏡の方も、その笑顔に小さく微笑み返す……。

「俺が戦う理由が、笑顔にある……。そこ。」

彼が迷いながら、ゆるりと動くのがわかる……。景華が、軽く目を閉じた。そして……。今度は何者にも邪魔されることなく、龍神の唇が、華のそれに触れた……。呪いの紋章が疼き、彼の中で何かが脈打つ……。肩のあたりが、固まってしまうのを感じる……。それでも彼は、そうやって彼女に触れなくて、たまらなかった……。初めて、彼は彼女との約束を、破った……。

「ちっ、重てえ……。」

次の日、再び重装備をさせられた柳鏡は、左腕を馬上でぶんぶん振り回した。

「仕方ないでしょ！今日中に戦闘になるんだから……。」

右隣にいる景華から、そんな言葉が聞こえてくる……。その様子を軽く睨み付けて、柳鏡が小声で言った。

「誰かさんが人に寄りかかったまま寝ちまったからな、腕が痺れてひでえんだよ……。」

「文句言わないの！あれが景華のわがままその一！」

「その一万、の間違いじゃねえのか？」

ふくれっ面になって指を一本、空に向かって突き立てる彼女に、しれっとしてそう答える……。その後、泣きつかれた彼女はいつの間にか彼に寄りかかって眠ってしまっていた。動くに動けなかった彼は、結果として犠牲を強いられてしまったのだ……。

「大体、柳鏡だって昨日、人のファーストキスを……。」

語尾がどんどん小さくなっていく……。元々小声で話してはいたが、最後の方は柳鏡にも聞こえなかった。だが、彼女が何を言おうとしていたのかはわかる……。じとーっと白い目で、彼女を見つめる……。

…。

「あんた、嘘をつくなよ……？」

「ついてないよ！本当だもんっ！」

「覚えていないなら、いい……。」「

真っ赤になつて怒る彼女から、小さく溜息をついて目を逸らす……。照れたとも、ふてつたとも、怒ったともつかない表情……。実は柳鏡が言ったことが正しく、昨日のあれが景華にとっての初めてではない……。彼はそれを、うさぎ事件、と自らの中で呼称している。遡ること、十二年前の話だ……。

「ほら、これだよ。」「

ぶっきらぼうにそう言つて、彼女の手に白くて柔らかい物を預ける……。彼女は、小さなその顔をパツと輝かせた。

「これが……うさぎさん？」

真紅の瞳をまん丸に見開いて、子供の手には余るそれを恐々と抱く……。

「人には馴らしてあるから、心配ねえよ。……かわいいだろ？」

「うん、ふわふわーっ！お父様にも見せて来る！」

うさぎを重そうに抱いたままパタパタと駆け出した彼女だったが、何を思つたかそのまま駆けて戻つて来た。

「ありがとう！」

そう言つて柔らかい物が自分の口に触れたことを、彼は今でもよく覚えていた……。

「全く、都合のいいことばかり忘れやがつて……。」「

彼のその呟きに、景華は軽く肩をすくめただけだった。これだからうさぎにろくな思い出はねえんだ、と彼は心の中で呟いた。

それから間もなくして、炎の砦についた清龍族軍の一行だったが、その砦の様子を見て皆が我が目を疑った。そこに掲げられていたの

は、辰南国の旗ではなく、景華たち反乱軍の旗……。だが、よく見ると微妙に模様が違っている……。

「敵の陽動か……？」

隣の柳鏡が、その瞳を鋭く細めた。確かに、景華たち清龍族の軍は全員今砦に着いたばかりなのだ、そう思う方が自然だった。その時、砦の上から景華の呼ぶ者があった。

「あれは、まさしく姫君！景華姫！っ、お忘れですかっ？じいでございます！」

景華のその瞳が、大きく見開かれた。そこにいるのは、彼女がじいと呼んで懐いていた師だった。小さな頃から詩や文字、歌について色々と教わっていたのだ、見間違うはずもない……。連瑛が、その人物を見上げて呟いた。

「あれは、鄭旦殿テイタン！この砦に囚われているとは聞いていたが、どういうことだ……？」

彼は現砂嵐族の長の叔父で、景華の国語の師であることから彼女の父から相当の恩賞を与えられ、この砦の守護も任されていた。しかし趙雨が王位に就く際に彼の即位を正面から否定したために、自らが任されていたその砦に捕らえられていたのだった。

「只今開門いたします！少々お待ち下さい！」

その言葉通りに、砦の門はすぐに解放された。しかし、柳鏡や連瑛はそれを訝しむ……。

「父上、どうなさいますか？畏とも思いにくいのですが、いまいち信用はできません……。」

「そうだな……。」

その時、景華が前に進み出た。そして、大声を出す前に特有の息の吸い込み方をする……。

「久しぶりね、じい！でも、どうやってこの砦を乗っ取ったのっ？」
彼女の問いに、鄭旦はやつと気付いた。そうか、彼らは自分たちを疑っているのか、と……。仕方のないことだ。自分たちは、ついこの間までここに捕らえられていたのだから……。

「お待ち下さい！今そちらに行きますから！」

そう言つて、砦の上の老人の姿が消えた。しばらくして、開け放した門の中から一人で、何も持たずにその老人が姿を現した。そのまゝ、こちらに向かつて来る……。景華は、馬から降りてそれを迎えた。彼が、その場で一礼する……。

「申し上げます、姫君！我々は、姫君が決起したのではないか、という知らせを受けました！そうです、黄金の龍と亀が、白銀の百合を擁している旗印の話を聞いたのです！」

息を切らして、老人は話を続ける……。どうやらあの偽の旗は、その噂から想像して作ったようだ……。

「その時、体中に力が漲るのを感じました……。陛下は崩御され、姫君は連れ去られたとお聞きした時には、もうこの世に私が存在する意味もない、と思いました……。それでも何とか趙雨が王位に就くのを阻止しようと思っていました。彼らの策略に違いない、と私は最初から思っていたのです！」

彼のその言葉を、景華は真剣に聞いている……。万が一のことがあつては困ると思つて、柳鏡も馬から下り、彼女の横に立った。

「そして、砦の中で暴動が起きるように仕向けました。自由に動ける者の中には、まだ何人か私に忠節を誓ってくれている者が残っていたので、彼らに協力してもらつたのです。」

「それで？」

だんだんと話が核心に触れて来たな、と思いながら、景華は続きを促した。その隣から、柳鏡がその身を乗り出す……。少しでも不審な点があれば、すぐに彼を捕らえるつもりに違いない……。

「ここは水が少ない地域なんです。近くに川や池も流れておらず、砦では井戸の水を生活に利用していました。その井戸に、ちよつとした細工をしてやつたのです。」

そこで彼が、自慢げにその胸を反らす……。こういう茶目つけのある仕草がいかにも彼らしいな、と景華は思った。

「毎日、井戸の中に毒薬を入れてやつたのです。もちろん、そんな

に強い毒ではありません。腹痛が起きる程度のものです。しかし、彼らは水質が急に悪くなったのだと考え、水の補給を城の方に頼むようになりました。」

続きがなんとなくわかった柳鏡は、この老人はなかなか優れた軍師だな、と内心で舌を巻いた。まだその結末がわかっていない景華は、さらに真剣な顔をして続きに聞き入る……。

「城から運ばれてくる水の量には限界があります。しかも、高官たちは自分たちの喉ばかりを潤し、兵士たちには少ない水で配給を行いました。それでは、暴動が起きるのも当然です。私が行ったのは、水質の改善を約束して、兵士たちの暴動を指揮したことだけです。」

「すごいわ、じい！」

景華がそう言つて、老人に飛びついた。焼き餅を焼いてもどうしようもないことはわかっていいるのだが、なんとなく、面白くない……。「なんの、姫の御為です。じいは当然のことしかしておりません！」

「そうだクソジジ、さっさと姫から離れる。内心ではそう思っているが、もちろん、柳鏡はそんなことおくびにも出さない。さりげなく景華の腕をつかまえて、自分の方へ引き戻す……。」

「積もる話は皆にお邪魔させていただいてからにしましょう。ほら、行くぞ。」

「わかったわよー。」

そう言つた景華が馬に乗るのを、さりげなく助けてやる……。それから、自分の馬にまたがる……。

「それでは、どうぞお入り下さい、皆様！」

老人の言葉を受けて連瑛が行進の合図をし、隊列がゆっくりと進みだす……。景華は、隣でどことなく不機嫌そうな彼に話しかけた。

「柳鏡、どうしてそんなに機嫌が悪いのよ？」

「別に……。」

その答え方が、彼の機嫌の悪さを物語っている……。

「嘘。絶対に怒ってる！どうしたのよー？」

「人の目の前で、じいさんなんかとベタベタするからだ！」

小声で答えて、その後たまらなくなつて彼女から目を逸らす……。その頬が、なんとなく、赤い。その様子があまりにもおかしくて、景華は吹き出してしまった。

「何それー？焼き餅？」

おかしそくに、だが嬉しそくに笑いながら景華が訊ねる……。前に、全く逆の立場でこんなことがあつたな、と思いながら……。まさか鄭旦相手にそんなことを考えるなんて、おかし過ぎる……。

「そうだ、焼き餅だ！」

彼はそう開き直つて、その後は景華と目も合わせようとしてくれな
い……。

「柳鏡、馬鹿だね……。」

そう笑つて見せる……。後でたくさんわがママを言つて、たくさん甘えてあげよう、と彼女は思った。嫌そうな顔をするくせに、内心では喜んでくれることを知っているから……。

「ね？柳鏡。」

残りの時間が短いことは、彼女も知っている……。だから、せめて一緒にいてくれる間は、良い思い出をたくさん作りたい……。彼女の唐突な問いに、彼はうるせえよ、とだけ答えた。もうすぐ、秋がやって来る……。空の色は、澄んで青かった。

旗印と龍神 守られない、約束（後書き）

お待たせいたしました。第三話、無事に完成させることができました。話の内容がだんだんと重くなってきたてしまいましたが、本編は次話で完結する予定です。どうぞ最後までお付き合い下さい。番外編などの構想も練っておりますので、よろしければそちらもご覧下さい。

女王陛下と龍神 龍神は、飛翔する

月明かりが、室内にも差し込む……。それが幼い兄妹と、その母親の姿を浮かび上がらせる……。母親が机の上に置いていた蠟燭は、とうに燃え尽きてしまっていた。それでも、母親が語る物語は、まだ終わらない……。

「じゃあ、いよいよお城に向かうんだね、景華姫……。」

兄の方が、そう口を開く……。妹の方は、眠そうに目を瞬かせていた。こちらはそろそろ眠ってしまうかもしれない……。

「そう。炎の砦は、彼女にお勉強を教えてくれていた鄭旦テイタンさんがすでに陥落させてくれたから、景華姫たちは予定よりも早くお城に向かうことができたの。」

「柳鏡リュウキョウはどうなっちゃったの、お母様……？」

眠そうにその目を擦りながら、それでも話を最後まで聞こうとする……。娘のその姿に、母親は思わず微笑してしまう……。

「龍神の紋章のせいで、どんどん体中に青色の鱗が生えてきてしまったのよ。それでも、彼は景華姫のために最後まで戦うことを約束してくれたわ……。さあ、続きを話しましょうか。」

「長、やりました！ ついに砂嵐族サランが寝返りました！ 虎神族コシンからの援軍を担当してくれるという趣旨の文章が、たった今届きました！」
若い兵士が、昼下がりの炎の砦に息を切らして駆け込んで来た。それを聞いて、清龍族シンロンの長、龍連瑛ロンレンエイは満面の笑みを浮かべた。

「そうか、ついに！ 早速姫君にお知らせしなければ！」

そう言っただけで自分の部屋を飛び出し、階段を三階まで駆け登る……。その一番東側の部屋の手前で、彼は足を止めた。

「ああーっ、ずるいよ、柳鏡！ また私の負けー？」

そう不満げな声が、室内から漏れてくる……。

「あんたが弱過ぎるんだろっが、アホ。俺はずるいことはしてねえ

よ。」

そして彼の息子の、不敬にもほどがある、と言いたくなってしまうほどの言葉……。

「ちよつと位手加減してよー！もう一回！ね？いいでしょ？もう一回！」

「ああ？面倒くせえ……。あんた、どうせ何回やつても勝てないだろうが。」

邪魔をしたくはないのだが、仕方なく室内の二人に声をかける……。

「姫君、連瑛です。御報告があつて参りました。」

「どうぞ。」

室内からそう声があつてから、その戸を開ける。どうやら二人で石取りの遊びをしていたようだ、床にいくつも黒い石が転がっている……。景華たち反乱軍は、砂嵐族の動向が安定していない、ということ、亀水族軍^{キスイ}は北の水の砦に、清龍族軍は南の炎の砦に留まつて様子を觀察していた。そこで暇になった景華が、勝てもしない勝負を柳鏡に挑んだ、という訳だ……。

「父上、どうかなさいましたか？」

二人が立ち上がった、彼の方へと歩いて来る……。息子の深緑の瞳が、その父を捉えた。もう一方からは、真紅の瞳が見つめて来る……。

「ああ。姫君、申し上げます。砂嵐族が、やっと当方へ寝返りました。これでようやく城に向けて進軍できます。」

「本当ですか？良かったあ。もしこちらに味方してくれないなんてことになったら、どうしようかと思いました……。」

そう言つてほつとした、というように胸を撫で下ろすその姿を見て、思わず頬が緩む……。

「アホ、父上の作戦に抜かりがある訳ないだろうが。それで父上、いつ頃出発ですか？」

そう軽く彼女を小突いてから、柳鏡が自分の父を見据えた。その視線の鋭さに、父親である彼も一瞬動揺する……。

「早ければ、明日にでも。ただ、準備に時間がかかることも考えられる。明後日、と思ってくれていた方がいいかもしれない……。」

「わかりました。……あんたもわかっただろ？」

そう言つて、隣の景華を見下ろす……。うん！と言う元気のいい返事が、彼女から返つて来た。その笑顔は、前までのそれよりも数倍明るい……。彼と、笑う、という約束をしたからだ……。

「ほら柳鏡、続きしようよ！」

彼の腕に甘えるように飛びついて、そのまま先程座っていた所まで彼を引きずって行く……。連瑛は、静かにその部屋を後にした。

「……あんた、懲りねえな。まだ負け足りない、って言つのか？」

嫌味な口調に、とびきり意地悪な表情でそう訊ねる……。彼の予想通り、彼女がふくれっ面になって反抗した。

「次は絶対に勝つよ！柳鏡、覚悟してね！」

「途中で大地震でも来たら、あんたでも勝てるかもな。」

「何ですってーっ！」

顔を真っ赤にして怒る彼女を見ると、自然と笑みがこぼれる。炎の砦に滞在している二週間、景華は精一杯柳鏡にわがまを言つてみせた。退屈だから遊んで、だの、じいと勉強をするから付き合つて、だの……。傍から見ればそれはただ柳鏡を困らせているだけに見えるが、彼らには、ある約束があった。それは、柳鏡が景華のわがまをなんでも聞く、というもの。そして、景華はその代わりにずつと笑っている、と約束した。柳鏡が人でいられる、最後のその瞬間まで……。

「そう言えば、腕の調子はどう？」

急に真面目な顔付きになって、彼女が思い出したように問いかけた。明日ないし明後日からまた戦場に赴くのだ、気になって当然である。その上彼はこの軍の主力なのだ、彼がもし不調となれば、それはそのまま士気の低下に繋がってしまう……。

「ああ、別に変つてねえよ。まあ、少しずつ増えて来てるっちゃあ増えて来てるが……。」

この砦に入るまでは、呪いの青銀の鱗は彼の腕のみを覆い尽くしていたが、最近では、肩から胸にかけての部分にもその侵食が始められていた……。その答えに、真紅の瞳が伏せられた。彼女自身は知らない、龍神の華の称号を示す、その瞳……。彼の答えは、刻限が刻一刻と迫っているという事実を、そのまま景華に突き付けていた。その顔を見て、柳鏡も胸が痛む……。

「……今更そんな顔したって、仕方ないだろうが。時間がもったいねえだろ……。約束、破る気か？」

「そ、そんなことないよ！」

慌てて顔を上げて、彼に笑いかける。彼の黒いくせ毛が、秋の風に吹かれた。どんなに想い合っている、彼らには時間がない……。しばしの平和な生活で忘れかけていた、現実……。

「ねえ、柳鏡。一つ、お願いしておいてもいい……？」

黙って視線だけを彼女に当てる……。約束をしてしまった彼に、選択権はない。それでも彼女がお願い、というのだから、何か重要なことに違いない……。真紅の瞳が、眩しい……。

「いつか……柳鏡が行かなくちゃダメになった時……。」

そう、それは、二人が離れなければならない時。彼が、人としての最期を迎える時……。

「その時は、何も言わずに行つてね……。」

真意がつかめずに、疑問を表す意味で片眉を軽く上げて見せる……。彼女が、笑った。切なげで、苦しげで、泣いている時よりも悲しそうな笑顔……。

「そうしたら、明日は帰つて来てくれるかも、って、ずっと待つていることができるでしょう……？」

「……。」

胸が、痛い。張り裂けそうな痛みが、彼のその身を貫く……。できることならば、叶うものならば、彼女のそばを離れたくはない……。それでも……。

「……わかった……。」

運命には、逆らえない……。たとえば彼が人外の力の持ち主だったとしても、それだけはいくらでもない……。彼女のそばで、彼女を愛おしい、と思う度に、彼のその体は蝕まれていく……。龍神と龍神の華は、やはりお互いを滅ぼしてしまふ運命にあるのだ……。彼の返答を受けて、彼女は小さく笑った。

「ちっ、砂嵐族め……！」

忌々しげにそう舌打ちして、趙雨^{チョウウ}は手にしていた杓を床に投げつけた。まさか、裏切られるとは……。彼らのその行動は、そのまま彼の政権への不満を表していた。もう、後がない……。父が送ってくれるはずの援軍は、その砂嵐族のせいで遙か西方で足止めをされていた。春蘭^{シュンラン}の父が送ってくれるはずだった援軍も、炎の砦の手前で反乱軍と未だにこう着状態だと言う……。

「苛立つても仕方ないわ、趙雨……。」

春蘭が、彼が投げた杓を拾い上げた。そのまま彼に歩み寄る……。

「こうなったら、恥も外聞も捨てて総力戦に持ち込むしかないわ。城の兵士たちは強者揃いだし、きっと大丈夫よ……。」

「ああ……。」

彼女が渡す杓を受け取って、どことなく上の空、という様子で答える……。彼の脳裏にちらついているのは、銀色の百合……。反乱軍、しかも三部族が、これだけ長い期間にわたって結集している……。そこから考えて、彼らは余程の旗印の下に団結したとは思えない……。そして、その条件に最も適しているのが彼女だ……。唯一の直系の王族で、その母は亀水の長の一族出身、その護衛には清龍の長の息子である、龍神……。

「だが、なぜ生きていたんだ……？」

そう、彼女は死んだはずだ。ここにいて、春蘭の口から確かに聞いた。だが……。

「反乱軍の総大将が誰なのか、調べる必要があるな……。」
そう重く言って彼は、春蘭がいる部屋を後にした。彼女一人が、会

議を執り行つ閣議室に取り残された。そこには、四神剣が置かれていた。それを手でなぞりながら、ゆっくりと室内を見渡す……。赤い色は、嫌いだ……。

砂嵐族の協力があつたおかげで、彼らは無事に進軍を開始することができた。なんでも城のそばまで通じている抜け道を教えてくれるとかで、景華たち清龍族軍の一行は、砂嵐族から派遣された案内役の人物について北進していた。

「砂嵐族は、万物に神が宿ると考えている……。」

相変わらず隣にいてくれる柳鏡が、そうこつそりと教えてくれる……。辰南国では、砂嵐族以外の部族は全て、それぞれに白虎、朱雀、青龍、玄武を神として崇めていた。唯一砂嵐族だけが、万物に神が宿るなどという独自の信仰を持っていた。その時、一行の足が止められた。景華と柳鏡も、馬の手綱を引く……。そこには、山肌にポツカリと口を開けた洞窟があつた。普段は周囲に茂っている樹木に覆われているらしく、周囲には斬り倒された木々が転がっていた。奥に行くほど下っていつていることから、それは地下に通じているに違いない……。

「ここから、城の南門まで半日、という距離の場所まで移動できます。」

案内人が、連瑛に頭を下げてそう言った。南門は城下の街に面していて、そこから入ってしまえば罪もない街人を巻き込んでしまうのは目に見えている……。景華の眉が、ギョツと顰められた。その様子を見た柳鏡が、父の方へと馬を歩かせる……。

「父上、まさか南門から突撃するなんておっしゃいませんよね？民を巻き込むとなれば、姫は納得してくれませんか？」

「……。」

柳鏡のその言葉に、連瑛はしばしの沈黙を持って答えた。それは、彼がまさか、と言ったことを実行しようとしていたことを表している。

「このままこの抜け道で南門のそばまで行き、その後近くの山林を迂回して東門に近付くのはどうですか？」

「それでは、時間がかかり過ぎるだろう……。城側に我々の存在が気付かれるかもしれない……。」

そうすれば、より多くの犠牲が出てしまうことが目に見えている……

……。柳鏡も連瑛も、密かに頭を抱えた。

「あの……。」

景華が静かに歩み出た。二人の視線が、彼女に注がれる……。

「半分に分かれるのはいかがでしょうか、連瑛様……。城の南門を攻めるふりをする軍と、東門に迂回して本当に城に攻め入る軍です。そうすれば、南門に城側の目線が向けられている内に、残りの人々が移動することができでしょう？」

「攻めるふり、ですか……？」

そんな奇策聞いたことがないぞ、と思いながらも、連瑛は景華が話す続きに聞き入った。

「はい。本当に攻め入ったのでは、民の犠牲を生むことになりかねません。苦戦しているふりをして、うまく押したり、引いたりする必要があるんです……。」

柳鏡の目がほんの少し、驚きに見張られた。まさか、彼女からこんなに素晴らしい作戦が生み出される日が来るとは思ってもしなかった。彼女に兵法について教えてやっていた、懐かしい生活が脳裏に蘇って来る……。

「それは……。相当熟達した指揮官でなければできませんね、父上……。」

息子が自分に何を求めているのか、彼にはわかった。それに、心の中で強く頷く……。

「それでは、その役はこの連瑛が引き受けましょう、姫君。南門付近で亀水族の軍と合流することになっていきますから、私たちは最初少数で行き、彼らと合流した後、南門攻めを開始します。それでよろしいですか？」

「ありがとうございます、連瑛様！」

景華がそう言つてニッコリと微笑んで見せた。

「あんにしちゃんあ上出来な作戦だったな。やってみる価値はある。」

「これは、彼なりの褒め言葉だった。それでも、対する彼女は絶対にふくれっ面……。」

「あんにしちゃんあ、は余計！この抜け道を行けば、城までどの位で着きますか？」

案内をしてきている、砂嵐族の若者に景華が問いかけた。彼は深く一礼してから答える……。

「五日、長ければ一週間はかかります。何しろ中は真っ暗なものですから、足場がうまく取れるかどうかで変わって来てしまうのです。」

「馬たちは連れて入れますか？見た所、かなり広そうですが……。」

景華が、洞窟の入り口を背伸びして眺めながら訊ねた。その様子を見た柳鏡が隣でこっそりと彼女に言った。チビ姫、背伸びしないとそんな物も見えないのか？と。景華の肘鉄が、見事に柳鏡の鳩尾に吸い込まれた。そのまま柳鏡がむせ込む……。口は災いの元、とはよく言つたものだ。もっとも、彼が鉄鎧を着ていればもっと別の結果が待っていたのかもしれないが……。

「連れて入ることは可能だとは思いますが……。乗って歩くことは困難でしょう。」

「わかりました。さあ、行きましょう、連瑛様。」

景華がそう言つて連瑛に笑顔を向ける……。連瑛は、苦笑いをしてそれに応じた。自分の息子は、どうしてもこの姫には逆らえないな、と思いながら……。ゆるりと、行進が始められた。

「……死ぬ思いしたぞ……。」

恨みがましい目で彼女を見て、柳鏡がそう言つた。それから、小さくむせ込んだ。景華にやられた肘鉄のショックが、まだ残っているらしい……。

「言つたでしょ？柳鏡だけは三十回位死になさい、って。」

景華がそう言つてつん、とすました顔をした。どうしても、一矢報いてやりたい……。

「洞窟の中は真つ暗かあ……。誰があんたの脚触つても、わからねえな。その前に、誰かさんが怖い怖い、って泣き出さなけりやあいけどな……。なにせ、一週間も地の底だぜ？」

景華が、ぐつと返答に詰まった。実は、彼女は昔から暗い所が苦手なのだ。城にいた頃は、眠っている間でさえ明かりをつけていた。清龍の里では、夜に一人になることは滅多になかったので問題なかったが……。

「み、皆いるから怖くないし……。それに、そんな変なことするよな人、柳鏡しかないからね！もし何かあつたら、犯人は絶対に柳鏡！」

「アホ。あんたの脚なんか触つたって面白くねえよ……。俺にだって選ぶ権利位ある。」

「よくも言つたわね！覚えていなさい！」

顔を真つ赤にして怒る彼女に、ほんの少し笑いかける。それだけで彼女が大人しくなってしまうことを、彼は知っていた。案の定、彼女は赤い顔のまま俯いて、彼から視線を逸らした。そのまま一行は、地の底への入り口をくぐった。ひんやりとした空気が、洞窟内を包んでいる……。時々、水が落ちる音も聞こえてくる……。

「前に退治した奴の、住処みてえだな……。」

柳鏡が、景華だけにこつそりと呟く……。その後で、まずい、と思つた。景華には、大蛇の妖怪を退治した話は聞かせていなかった。

「前、って、いつつ？」

対する彼女は、真つ暗な上に足場の悪さが災いして、必死になつて歩いていた。一步を踏み出すごとに、一言を話しているという状態……。柳鏡が溜息をついた。

「あんたなあ……。そんな歩き方していたら、一月はここを抜けられないぜ？怖い怖いと思うからそんなへっぴり腰で歩いているんだ

ろうが。」

情けない、と呟く柳鏡だったが、今度は肘鉄が飛んで来ることもない。どうやら、本当に真剣なようだ……。ふと彼が足を止めると、景華もその歩みを止めた。暗闇でも、じつと彼女が自分を見上げているのがわかる……。その表情まで、はつきりと。

「だって歩きにくいんだもん！ 転んだら痛いし……。」

確かに足元はごつごつとした岩場だ、転んだら半端なく痛いだろう。だが先程の話であつたように、馬に乗るのは到底無理な話だった。天井の高さが、馬の背丈とギリギリなのだ……。

「文句言っんじゃねえよ。これで無事に城のそばまで着けば、万々歳だろうが。」

「わかつてるわよー。だから、頑張つて、いるんで、しょー！」

口を尖らせて、彼女は再びそのおかしな歩き方を始めた。その滑稽な姿に、思わず吹き出しそうになる……。仕方なく、柳鏡が彼女の前に出た。

「いいか？ 俺が歩いたところを歩け。あんたと違ってまともに足場を選んでいくからな、いくらかマシだろう。この位の距離でなら、なんとか俺の足位見えるだろう？」

そう言つて、彼女を振り返らずに歩き出す……。

「無理だよ、柳鏡。七寸も背丈が違つんだもん、柳鏡の歩幅で歩くなんて無理！」

そう不平をこぼしながらも、彼に言われた通りにその足跡を辿ってみる……。

「あれ……？」

一歩を踏み出して、驚く……。その後、二歩目を踏み出して、確かめる……。そして、三歩目を踏み出して、確信する……。

「ねえ、柳鏡。歩幅、合わせてくれてるの……？」

それには答えずに、彼はほとんど先へ進んで行ってしまう……。それでも、その歩幅は彼女のそれに等しい……。

「ねえ、柳鏡つてばー！」

景華の声が、洞窟内に反響した。それに気が付いてから、慌てて口を押さえる……。柳鏡が振り返らずに彼女に言った。

「仕方ないだろ、どこかの誰かが寸足らずなんだから。大体あんた、チビのくせに声だけでか過ぎ……。」

「失礼しちゃうわねーっ！」

その声もまた、洞窟内に響く……。しかし、清龍の兵士たちは二人のこんなやり取りにはもう慣れていたので、無視してひたすら進軍を続ける……。日の光が恋しくて、たまらない景華だった。

「洞窟か……。行ってみたい気もするけど、本当に真っ暗なんだろうね。」

好奇心旺盛な兄妹は、洞窟、という空間に興味を持ったようだった。「お城の近くにも、ありますよ。」

母親のその言葉を受けて、二人の顔がパツと輝く……。

「行ってみたい！お母様、連れて行って！」

その言葉に母親が苦笑してみせる……。二人が布団から出している手をその中にしまつてやりながら、それに答えてやった。

「そうねえ……。お父様が連れて行ってくれる、っておっしゃったら行つて来てもいいわ。」

「じゃあ、お母様からお父様に頼んでよ！お母様が頼めば、お父様は絶対にダメって言わないよ！」

それには母親は首を横にふつてみせた。

「自分たちでお願いしなさい。そういうことも、お勉強です。続きを話しますよ？」

抗議の言葉を言わせないための、とびっきりの手段……。それが、お話の続き、だった。

「景華姫たちは無事に洞窟を抜けることができました。途中で一度、大蜥蜴とかげの妖怪に襲われましたが、勇敢な清龍の戦士たちが戦ってくれたおかげで、景華姫は再び生まれ育ったお城を見ることができたのです。」

「ふええ……。怖かった……。」

地上に出た景華が発した第一声がその一言だった。隣の柳鏡がそれを聞いて鼻で笑った。

「あんたは人の後ろからちよろちよろと歩いて来たただけだろうが。おまけに、あの蜥蜴が出た時だって人の陰に隠れていただけだろ？」
出口の手前で、一行は大蜥蜴の妖怪に遭遇してしまった。どうやらあの洞窟の主人だったようで、縄張りを荒らされたことで怒ったらしかった。しかし清龍の兵士たちが皆勇敢で、率先してその蜥蜴と戦ってくれたことから、柳鏡は後方で景華の守護に徹していたのだった。

「別に庇ってくれなんて頼まなかったもん！」
そう言つてむくれる彼女に、柳鏡が脅しをかけた。

「あんた、知らないのか？ ああいう妖怪は、若い女っていうのを好んで食べるんだぜ？ あんたも見つかっていたら今頃、あいつの腹の中だったかもな。」

「そんな気持ち悪いこと言わないでよー！」

自分の肩を抱いて震え上がるような仕草をみせる景華に、柳鏡はおかしくなって吹き出した。本当は、そんなことになるはずもなかった。なぜなら、自分がいるからだ。

「姫君、ご覧下さい。ここから城を眺めることができますよ。」

連瑛がその声をかけて、前方を指差す……。月の光に浮かび上がって、城は荘厳な雰囲気醸し出していた。懐かしさに、彼女の口からは言葉が失われてしまった。白い壁も、緑の屋根も、朱色の渡り廊下も、細かな装飾の数々も……。彼女が城を最後に見た一年前と、その様子は何も変わっていない。何も知らずに平和に暮らしていた、あの一年前と……。

「やっと戻って来られたな。」

隣の柳鏡が、彼女を見下ろしてそう言った。城を見つめる彼女の横顔は、妙に切なげだ……。

「何も……変わっていないね……。今までであったことが、全部嘘みたい……。」

それでも、彼女はわかっている。時間は、元には戻せない。たとえば、どんなに望んでも……。

「今日はここで休むことになります。明日、二手に分かれて進軍を開始しましょう。」

連瑛はそう言つて二人のそばを離れた。城を見つめるその目から、二人にしかわからない物があるということを感じさせられたからだ……。景華が溜息をついた。

「……趙雨と春蘭も、あそこにいるのかな……。」

「いるだろうな……。趙雨は王なんだし、春蘭は……なんとなくいる気がする……。」

柳鏡が城を見つめる目が、ギョツと細められた。深緑の瞳が、月の光を反射する……。そこにあるのは、深い怒りと悲しみ……。

「私ね、これで良かったと思うの……。」

意味不明な景華の呟き……。柳鏡の視線が、彼女の横顔に当てられる……。

「何も知らないまま趙雨と結婚して、何も知らないまま平和に暮らして……。そうじゃなくて、良かったなって……。」

自分の父を失い、友を滅ぼすことになってしまった……。それでも、彼女は現在の形で良かったと言う。柳鏡の目が、彼女の横顔に問いかける。なぜ、今の形で良かったと思うのかを……。

「あのまま城にいたら、皆がどんな暮らしをしているのかを知つて、考えることもできなかったでしょう？ずっと周りに甘えっ放しで、自分で何かをするってこと、知らないままだったと思うの……。」

彼女の髪が、夜風に舞い上がる……。その柔らかな香りが、彼の鼻腔にも届いた。紋章が、彼の中で疼く……。

「それにね……。」

そこで、彼女の真紅の瞳が彼に向けられた。月光が、それを照らし出す……。

「あのまま趙雨と結婚していたら、自分の本当に好きな人、わからなかったかもしれないもの……。」

「……。」

彼は、その言葉には答えない……。いや、応えたくても、それができなかった。そして彼女も、それを知っていた……。夜風が、二人の間を吹き過ぎる……。

「なーんてね！本気にしたっ？」

悪戯っぽく笑ってそう言う……。その彼女が、本気で先程の言葉を言っていたことも彼にはわかつている……。それでも。

「する訳ないだろ、アホ。」

そう言って彼女の額を軽く指で弾いてやる。痛っ、と言う声が上がつて、抗議の視線が返って来た。それに、笑いかける……。秋の木の葉が、風に舞い上がった。

「柳鏡。」

父親が、彼を呼んでいるのがわかる……。その声を聞いて、彼は困った。

「俺にどうしろと言うんだ……？」

そう言って、自分の左側を見下ろす……。その肩には、景華の頭が乗せられていた。彼女は、彼の気も知らず規則正しい寝息を立てている。隣に座って彼女のとりとめもない話を聞いてやっている内に、彼女が彼の方へと倒れて来たのだった。彼を見つけた父親が、歩いて来る……。

「なるほどな、呼んでも来ない訳だ……。」

その様子を見て、苦笑する……。

「申し訳ありません、父上。何かありましたか？」

そのまま自分の父親を見上げて、彼が苦笑していることを確認する……。だが、その笑顔が嬉しそうに見えることも事実だ。

「いや、特に用があつた訳ではないが……。明日からお前とは別々の行動をとることになるからな、そちらの隊の指揮を任せる旨を伝

えておこうと思ってな……。」

「わかりました、全力を尽くします……。」

それから、連瑛の視線がチラリと景華に注がれる……。そして、今度は目を細めて穏やかに笑った。

「お前はこの前、お前の母が望んだような生き方はしていないと言ったな……。」

母が自分に望んだような、波風の立たない、穏やかな人生……。それは、彼が龍神の紋章を解放してしまった時点で守られていない……。彼は、父の言葉に無言で応えた。

「私は、そんなことはないと思うがね……。」

「なぜですか……？」

その言葉に、目を上げる……。紋章を解放して呪われた運命を歩んでいる自分の人生の、どこが穏やかだと言うことができるのだろうか……？

「これまで見たお前の中で、今が一番、穏やかな表情かおをしている……。」

確かに、そうかもしれない……。たとえ残された時間が僅かだったとしても、その間は彼女と一緒にいようと、彼女のわがままを精一杯聞いてやろうと誓った。そして彼女からもその分の、いや、それ以上の笑顔ものが返って来るようになった。その事実、彼を十二分に満足させていた……。

「確かに今が……今までの俺の人生の中で一番幸福で、満ち足りているのかもしれません……。」

息子のその表情は、本当に今のその状況に満足していることを表していて、その父親にはそれが何よりも誇らしく、そして、悲しかった……。もっと時間があれば、彼には間違いなく今以上の幸福が待っている。それなのに、彼はそれを望むことが許されていない。そして、息子はそのことに満足しているのだ……。彼は、息子に背を向けた。その背中が彼の目にどう映ったかは、わからない……。

次の日、連瑛は少数精鋭を率いて亀水族軍との合流地点に向けて出発して行つた。柳鏡の指示で景華たちの軍も準備が進められ、彼らを見送つてすぐに出立した。

「颯！また乗せてね！」

景華がそう言つて彼女の馬の胴を撫でた。彼女が乗っていたのは、一年前に城から一緒に脱出した馬だった。

「おい、もっとマシな名前つけてやれよ。そいつ、雌だぜ？」

柳鏡が苦笑交じりにそう言つてやる……。おそらく、彼女は性別などまるで気にせず名前をつけたのだろう……。

「いいの。ねえ、颯？素敵な名前でしょう？」

その言葉に馬が小さくないないた。

「ほら、嫌がつているだろ？センスねえな、って言っているぞ？」

「違う！今のはもちろん、って意味！」

馬の言葉などどちらもわからないくせに、くだらない口論のネタにする……。一番迷惑をしているのは、当の颯だろう……。

「出発準備、整いました。」

二人の間に、勇気ある兵士が割つて入った。これで、なんとかひと段落ついた。

「東門に向けて、出発！」

柳鏡の号令で、隊列がゆつくりと進み始めた。連瑛との予定では、二日後の夜には東門に到着し、三日後には城に攻め入る予定だった。彼らは、明日から南門攻めを開始すると言つ……。

「何っ？反乱軍が南門をつ？」

趙雨の驚きに満ちた声が、閣議室にこだました。その次の日、連瑛は言葉通りに南門攻めを開始した。もつとも、彼らに対する備えがされていたのだろう、門に常駐している警備兵にしては数が多かつたので、ふりをする必要もなく、彼らは真実苦戦していた。

「いいか？攻め続けるぞ！昼の部隊と夜の部隊に別れて、昼夜を分かたず攻撃しろ！」

東門に回った部隊が城に侵入するまで、彼らの隊は城からの攻撃を一手に引き受けなければならない。たとえ亀水族軍と合流していたとしても、彼らと違って砦を一つ落として来ている亀水族軍は、人数がかなり減っていた。その上、清龍族軍はほとんどが景華や柳鏡とともに東門側に向かつてしまったのだ、門の方には城からの援軍がほとんど来る以上、彼らは不利な戦いを強いられていた。

「慌てるな。砂嵐族が裏切った時点で、彼らの里に面している南門には人員が多く配備されている。城からほとんど援軍を出して潰せっ！」

この攻撃は、趙雨の予想の範囲内のことだった。いずれ彼らの攻撃がこの城に届く際は南門からだということは、反乱軍が起こったという時点で予測していた。しかし、彼らがここまで進軍してきたのは、彼の予想よりもはるかに速い……。彼が内心では動揺していることも、確かだった。いてもたってもいらなくなつて、彼女の姿を探す……。

「ここよ、趙雨。」

いた。彼のすぐ後ろに、彼女は立ってくれていた。その姿で、彼は心の平静を取り戻した。

「他の門は？大丈夫なの？」

心配そうに眉根を寄せる彼女に、笑いかける。少しでも、安堵させてやりたくて……。

「ああ、問題ない……。南門が一番低くて攻めやすい構造だから狙われたんだろう……。」

「そう……。」

小さく答えて、彼女の目が南門の方向に向けられた……。その表情からは、不安、というものが抜けきっていなかった。

「父上たちが南門攻めを開始したみたいだな……。」

山の中に分け入っていても、その喧騒が風の流れて聞こえてくる……。一方の景華たちは、当初の予定通り近くの山林にその身を隠し

ながら着々と東門との距離を縮めていた。

「うん。さつきから声が聞こえるようになったね……。」

隣で、彼女が目を伏せる……。ついに、趙雨たちと正面からぶつかることになってしまったのだ。

「ほら、早く行かねえと、父上たちがやってくれていることが無駄になるぞ。」

その切なげな表情が見ていられなくなって、そう声をかける。

「うん……。」

「俺たちも明日には東門の前の林まで行って、明後日には突撃しなきゃならねえんだ。総大将のあんたがそんな顔していたら、士気に響くだろ？」

その言葉には答えずに、彼女は喧騒がする方をじっと見つめた。南門攻めを引き受けてくれた連瑛のためにも、急がなければならない……。

「私の鎧と剣を持て！前線に出る！」

城では、趙雨がついに堪え切れなくなって、出陣の準備を始めた。

「ダメよ、趙雨。たかが反乱軍相手に王が出たりなんかしたら、權威が失墜するわ！」

「元からあつてないような權威だ！そんなもの、今更！」

鋭い音が、辺りに響いた。自分の頬を抑えて呆然とする趙雨と、唇を噛み締めてその彼を見つめている春蘭……。その顔は、青かった。「行つちやダメ！あなた、柳鏡に勝てるのっ？」

久々に聞いた、その名。懐かしく、苦い……。

「なぜそんなことを聞くんだ？南門を攻めている連中には、それらしい奴はいないという話だぞ？」

「あなたが出て来るのを待っているに決まっているわ！」

趙雨の青い瞳が、見開かれる。あいつに限って、そんなことをするだろうか……？

「いい？あなたは彼の敵なの！^{かたき}その彼が、あなたを見逃すはずがな

いでしょうつ？」

それに……。春蘭が、彼から目を逸らした。もし彼が前線に出てしまえば、出会ってしまうかもしれない。大嫌いな、真紅の瞳の少女に。死んだことになっている、彼女に……。

「行かないで！行っちゃダメ！行かないで！」

泣きじゃくる彼女を見て、呆然とする。一体、何が怖くて彼女は自分を引き止めようとしているのだろうか……。？だが、彼女がここまでするのであれば、答えは一つだ。

「わかった、行かないよ……。ただ、念のために武装はしておこう。城の中にいる者は、全員武器を持て！」

趙雨の合図で、その場にいた全員がバラバラと動いた。城の中にも、外の喧騒は聞こえてくる。趙雨の眉が、ギュツと顰められた。反乱軍の大將は、女性だと言う。まさか、本当に彼女なのだろうか……？

「そんなはずはない……。」

彼が小さく呟く声に、春蘭の肩がビクリと震えた。喧騒は、今はまだ遠い……。

「いよいよ明日だな……。」

景華と柳鏡が率いている清龍族軍は、ついに東門の正面にある林の中に辿りついた。途中で城の警備隊に見つかるともなく、奇襲攻撃を仕掛ける条件は、きちんと整えられていた。

「うん……。城、よく見えるね……。」

この前その姿を並んで眺めた時よりも、近い……。おそらく距離的な問題だけではなく、精神的な問題もあるのだろう。喧騒が止むことなく聞こえてくることから、連瑛たちが夜にも関わらず攻撃を続けていることがわかる……。

「近くに来たんだから、当たり前だろ。」

そう言つて腰を下ろした彼の隣に、自分も腰を下ろす。兵士たちは、明日に備えて各々休息に入っていた。

「明日、城に入ったら……私、本当に王様になるんだね……。」
「そうだな……。」

そうしたら、彼女は彼の手が届かない存在になってしまつて。元々あつてないような距離だが、その間を詰める……。

「王様になつたらね、やりたいことがたくさんあるの。」

そう言つて笑うその姿を、横から見下ろす。今日も、月が出ていた。どうやら、明日は満月のようだ……。

「まずね、全国の戸籍を作るの。生活水準も調べて、必要な支援ができるように。それから、いつになるかわからないけど、五部族を全部統一したい。そうすれば、こんな争いが起きたりはしなくなるでしょう?」

「ああ……。」

すっかりとした目で、平気で未来のことを話す彼女を見つめる。自分には、望むことすら許されない世界……。彼女の横顔が、ひどく眩しい……。

「それからね、王族の親戚を調べて、誰か一人を私の養子として城に招くの……。」

「は……?」

彼女が何を言おうとしているのか、彼には全く見当もつかない。なぜ、そんなことをする必要があるのだろうか?彼女自身の子供を王位につければ、それで問題はないはずだ。

「だって……。」

彼女の顔から、目を逸らす……。彼女が自分との約束を破るところなど、見たくない……。月の光が、彼女の頬を一筋になって滑つた。「決めたんだもん、誰とも結婚はしないって……。柳鏡がいなくなっちゃうってわかつた時に、決めたの……。」

彼の左腕が、横にいる彼女へと伸びる。呪われた、青い左腕……。しかし、それが彼女の背中に触れる寸前で、固く握りしめられた。自分には、彼女を慰めてやる資格すらない……。

「龍神は……。」

ふと空を見上げて、彼が話す。自分が約束を破っているところを見ないようにしながら……。

「龍神は、普通天空を常に翔けているそうだ……。けれど、俺はそうはしない。」

言葉を切って、彼女を見下ろす……。彼女が慌てて涙を拭うのが見えた。どうやら、約束は守ってくれるらしい……。

「どこかの誰かが、寂しくてメソメソと泣くからな……。」

その言葉に、彼女は笑ってみせた。約束を守って……。それに、自分も応える。再び、柳鏡が空を見上げた。

「紋章を解放した時には、永遠の命とか、巨万の富とかって言葉にすぎー惹かれたのに……。」

隣から見上げて来るその瞳は、月の光を受けて、赤い。彼が送った、珊瑚の首飾りを思い起こさせる。ただ赤いだけではなく、どこことなく、淡く感じられる……。

「どうしてだろうな。今更だけど、龍神になんかなりたくねえや……。普通、喜んでなるはずなのにな……。」

その横顔が、痛い……。彼は、以前までは龍神になりたいと思っていた。そうすれば、自分を疎む里の人々との関係を断ち切ることができ、手に入ることのない彼女を見つめて心を痛めることもないから、と……。それなのに、彼の人生はその紋章を解放した時から大きく方向を転換してしまった。ここまでの戦いで自分の一族の兵士たちが見せてくれた、自分に対する信頼。そして、手を伸ばせば触れられる距離にいる、彼女……。全てを手に入れたと思った時には、すでに刻限が迫っていた……。

「こんなに嫌々龍神になるの、後にも先にも俺だけだと思っぜ？」
最後には、おどけた調子でそう笑って見せる……。彼女からは、何も返っては来なかった。

次の日、景華と柳鏡率いる清龍族軍は早々に出発準備を整えた。不本意ながらも、彼も鉄鎧を纏った。

「ちょうど今の時間に警備も交代するはずだ。行くぞ！」
彼らは、一斉に飛び出した。

「陛下！ご報告いたします！東門に敵襲です！」

「なんだとっ？数はどの位だっ？」

「約三千と思われます！」

苛立ちを募らせていた趙雨の前に東門の守護を任されていた兵士が現われて、そう報告した。三千……。南門と東門を同時に攻められ、なおかつそれだけの人数がいれば、到底対応しきれない。

「くそっ……！ここまでか……？」

ギリリと歯噛みする。反乱軍のここまでの結束は、まったくもって予想外だった。そして、さらに耳を疑う知らせが舞い込む……。

「陛下！」

それは、東門に配属されていた別の兵士だった。蒼白な顔をして、趙雨の前に転がり込む……。

「も、申し上げます……。龍神が現われました！龍柳鏡が、東門に！前線には出て来ていませんが、どうやら女将校を守っているようです！」

頭を、何かでガン、と殴られた気がした。強い衝撃が、彼の思考を停止させる……。彼が、現われた。辰南の、龍神……。そしてその彼が守護をしているということは、その女将校の正体は……。

「増員を、陛下！東門の常駐部隊は、皆龍神に臆して浮足立っています！」

周りの声が、遠くに響いている……。東門の部隊が臆するのも無理はない。これまでの戦いで、彼らは龍神が戦場を舞う様を目の当たりにしている。味方だからこそもてはやし、頼りにしていた龍神だ。その彼が今、眼前に敵として現れた。もはやそれだけで、東門の兵士たちは戦意を喪失していた。いざ龍神が前に出れば、彼一人で自分たちの隊など壊滅させられてしまうだろう。その恐れが、彼らの思考を支配していた。春蘭が、前に出る……。

「これ以上の増員は無理よ！南門に兵力を多く傾けてしまっているもの！その上、城の守護もさせないと……！」

喧騒が、近くに迫って来る。趙雨が小さく、まさか、と呟いた。春蘭の薄青の瞳が見張られる……。

「東門が破られた！反乱軍が城に向かっている！」

最後に走り込んで来た兵士は、もはや趙雨に対して敬意を払うことも忘れていた。城にまで反乱軍の攻撃が及んだのは、初めてのことである。龍神の存在に完全に浮足立っていた東門からは、兵士たちが次々に脱走していた。それが原因となって、東門はこのような速さで破られてしまったのである。

「来るか……？柳鏡……。」

そして、彼女も……。彼が築き上げた政権は、どうやら脆い砂の土台の上に立っていたようだ。体中の力が、抜けて行く……。

「思ったよりも早く落とせたな。早く行くぞ！逃げられたら探すのも厄介だ！」

柳鏡がそう言って彼女の手を引く。向かう先は一つ。趙雨と春蘭がいる、王城……。途中懸命に立ち向かって来る兵士たちを、柳鏡が皆薙ぎ倒す。彼の左腕は、皮肉にも人でなくなっていく内にその力を増していた。今は、あの大剣が苦も無く片手で扱える……。市街地で馬を乗り回す訳にも行かず、城までは彼らの足で行くことが余儀なくされた。

「待って柳鏡！早い！」

景華はなんとか彼が走る速度について来てはいるが、息切れを起こしてひどい。

「手が空いている者はついて来い！これから王城に向かう！」

柳鏡のその言葉に、バラバラと清龍族の兵士たちが動いた。それを目の端で確認してから、景華を右手で抱えて走る……。彼女が暴れるのがわかった。

「ちよつと、自分で走るわ！」

「アホ、あんたの鈍足には付き合い切れねえんだ！あんたのせいで趙雨たちを逃がしたとなったら、目も当てられないだろっ？」

彼女を抱えながら走って思いつくのは、一年前のこと。ちょうど一年前のこの時期に、茫然自失といった状態の彼女を抱えて城から脱出した。そして今は、その彼女を抱えて城へと戻っている……。一年は彼にはとても短く、そして、満たされていた……。

「おいあんた、平和ボケで一年前より太っただろっ？」

彼女の体が前よりも重く感じるのは、その存在が彼の中でより重くなったせい……。それが、物理的な重さにも感じられる……。

「失礼ね！そんなに変わってないわ！」

真剣な戦闘の最中だが、彼女に向かってまた軽口を叩く……。それは、彼女が緊張しなくていいようにという彼なりの配慮だった。

「そうだよな、太った割にはどこも色っぽくなっていないもんな！なあ、痩せっぽっちのチビ姫！」

「死ね、変態！死んじやえ！」

憤慨してジタバタと暴れる彼女を下ろす。そして、先程までとは一変して鋭い視線を前方に向ける……。そこには、衛兵たちに囲まれた趙雨の姿があった。

「やはり御存命だったのか、景華姫……。」

「久しぶりに会ったのに随分な挨拶だなあ、趙雨。自分で姫の死体まで仕立てておいて、それはないんじゃないか？」

柳鏡が鼻で笑う……。趙雨が彼の腰から提げられている剣の柄に手をかけた。すでに、清龍族の兵士たちと城の衛兵たちはそれぞれに戦闘に入っていた。一方の彼らは、まだ睨み合いを続けていた。

「……姫様は亡くなったと聞いていた……。だが反乱が起きた時、まさかと思った……。」

「ほう、今更しらを切るとは、良い根性だぜ……。」

柳鏡の全身からは、怒りが滲み出ている。今までの鬱屈した感情が、彼の口を衝いて出る……。

「お前になら、姫を幸福にできると思っていた……。だが、俺や姫

のその信頼に対するお前の応えが、一年前のあの事件だ……。俺は、お前を許すわけにはいかない。」

趙雨が愉快そうに笑った。そしてその後、柳鏡を鋭い視線で見据える……。

「相変わらず姫、姫か……。本当にお前は、子供の頃からなんの進歩もないな……。さては姫、この乱が成功した暁には彼の妻になるとても約束したのですか？それで彼に頼んでこの乱を起こさせたのでしょうか？そうすれば彼は玉座もあなたも得ることができののですから、喜んで協力してくれたことでしょうね……。」

「柳鏡は地位や名誉を望むような人じゃない！あなただって知ってるくせに！」

景華の言葉を受けて、趙雨がまたおかしそうに笑った。そして、ゆつくりと剣を抜く……。

「そうです、知っていますよ、姫。彼はあなたさえ幸福ならそれでいいと思っていた人間ですからね……。外の様子をあなたに陳述して、あなたから^{チン}玠王に民の救済を嘆願していただこうかとも考えました。しかし、外での惨事はあなたが知らなくていいことだ、と彼に反対されました。辛いこと、汚れたことはあなたにお聞かせしなくていい、とね……。」

「随分とおしゃべりだな、趙雨……。」

彼の様子に、柳鏡も手に持っていた大剣の柄を握り直した。彼を見据えるその目には、鋭い光が宿されている。景華は初めて、柳鏡のことを怖い、と思った。彼のその表情は、景華が今までに見たことがないほど険しかった。

「それに、剣なんか抜いてどうする気だ……？まさか、俺と戦うつもりか？自殺行為だぞ？今の俺は、すこぶる機嫌が悪い……。」

趙雨が剣を鋭角に構えた。完全に、攻撃に移る体勢だ……。

「わかってる……。私がお前に勝てる訳がない。それでも、戦わない訳にはいかないんだ！」

ガン、ガシイイイイン！

金属の不協和音が辺りに立ち込める……。柳鏡の大剣と趙雨の剣がぶつかり合って、火花を散らす……。景華は、彼らの邪魔にならないように一歩身を引いた。

「アホっ、何をボヤボヤしている！」

罅迫り合いのこう着状態から趙雨を弾き飛ばして、柳鏡が振り返らずに彼女に言った。

「春蘭を探せ！あいつもどこかにいるはずだ！忘れるな、あいつも玠王を殺害した犯人なんだぞ！」

その言葉に強く頷いて、景華が駆け出した。懐かしい、城……。でも今は、その感傷に浸っている暇さえない……。通りすがりの部屋を、順番に見て行く。

「いない。……。ここも、いない……。ここも……。」

閣議室の扉に手をかけた、その時だった。

「死ねっ！」

「きやつ！」

後ろで銀光が閃くのが、僅かに視界に入った。慌てて後ろからの斬撃をかわす……。深緑の髪が一束、先程まで彼女がいた位置に舞った。振り返って、次の攻撃を剣で受け流す。彼女に向かって剣撃を繰り出して来るその人物は、彼女が探していた春蘭だった。激しく素早い攻撃が、続けて繰り出される……。

「やだ！止めて、春蘭！」

かなり際どいところでその剣撃をかわしながら、必死で彼女を止めようとする……。それでも、春蘭の手が休まることはない。

「どうして戻って来たのよ！あなたなんてっ！あなたなんてっ……！」

景華が、後ろに跳び退って彼女の攻撃が届かないところまで逃れた。ようやく、春蘭の攻撃の手が止まった。

「春蘭、春蘭に会ったら、ずっと聞きたいことがあったの……。」「肩で息をしながら、景華がその言葉をかける……。対する春蘭の方も、同じか、彼女以上に激しく肩を上下させていた。」

「どうして……もっと早く言ってくれなかったの？趙雨のこと……。私、春蘭がそうだって知っていたら……。」

「私が趙雨を好きだと知っていたら、身を引いたとでも言うつもり？」

激しい、射るような視線が、景華に向けられた。それを彼女も、臆することなく正面から見返す……。

「身を引くだなんて、そんな偉そうなこと言わないよ！だって、趙雨には春蘭の方がずっとふさわしいもの！本当はあの時、何か違和感があったの……。趙雨が私の告白に応えてくれた時……。おかしいな、春蘭のことはいいのになって……。それでも、自分が幸せだからって、見ないふりしたの！」

そう、今思えば。あの時の彼の瞳は近くにいる自分ではなく、遠くにいる誰か、おそらくは彼女に向けられていたのだらう……。それでも、彼が自分の気持ちを受け入れてくれたことが嬉しくて、気付かないふりをしていた……。

「私があの時、趙雨にそれを訊ねていれば……。そうしたら、お父様も、ここまで来る間に亡くなった多くの人たちも、誰も犠牲にならずに済んだのに……。」

「綺麗事はたくさん！」

彼女の瞳は、怒りに燃えあがっている。青い炎が、その瞳の中に窺える……。

「あなたはいつもそう！大して反省もしてないくせに、そんなことを言わないで！多くの人が犠牲になることはなかった、ですって？それなら、ずっと柳鏡に守られてどこかこの国の片隅で暮らしていれば良かったじゃない！」

「それじゃあダメなの！」

春蘭の激しい口調につられて、景華の声もだんだんと大きくなって行く……。

「私、柳鏡に教えてもらってたくさんのことを勉強したの！今まで王たちの良い所も悪い所も！そして、お父様が非道な政治をして

いたことも知ったわ！それでも私には優しい、いいお父様だった！だから決めたの！お父様が国民に恨まれて死んだなら、娘の私がその名誉を回復しようって！」

「笑わせないで！」

景華の言葉に、春蘭が間髪を入れずに怒鳴り返す……。その迫力に、景華の肩が一瞬ビクリと震えた。

「うわべだけを学んでこの国のことがわかれば、苦労はしないわ！あなた、知っている？昨年の大飢饉の話……。」

「お父様からお話だけは伺ったわ。そしてお父様が言っていたわ、氣候が安定していない緋雀の里の辺りでは、かなりの被害が出ているだろう、って……。」

景華の目が伏せられた。思い出したのは、柳鏡が連れて行ってくれた、廃坑となった鉱山の町の風景……。

「そうよ……。あの年は、里の人間の半分が食べていける量がやっとなかった……。それなのに、玠王はいつも以上の税を納めるように言った……。無理なら里を壊滅させる、ってね……。追い詰められた私たちは、国王の暗殺を決意したわ。それが、一年前のあの事件よ……。」

春蘭の語気が、だんだんとその激しさを失って来た……。どうやら、彼女も落ち着いて来たようだ。

「でも、それだけが原因じゃあないわ……。私、あなたがずっと大嫌いだった！」

「っ……！」

春蘭のその言葉に、息が詰まる……。彼女が困惑して固まっているそこに、柳鏡が現われた。

「無事かっ？」

そう言って、彼は彼女を庇うように前に立ってくれた。春蘭の手に握られていた剣が、彼女の手を離れて音を立てて転がった。青い顔を、両手で覆う……。

「柳鏡、私は大丈夫だから、下がって……。まだ、春蘭と話がある

の……。」

その言葉を受けて、柳鏡は一步後ろに身を引いた。それでも、いつでも飛び出せるように体重は前に傾けられている……。

「趙雨は……？」

そう問ってくる彼女の声が、震えている……。柳鏡が口を開いた。

「殺しちゃいねえよ。もともと、俺に言わせればあんたも趙雨も殺しても殺し足りない位だけどな……。」

「柳鏡、そんなこと言わないで！」

冷たい物言いで彼女の心を抉るようなことを平気で言う彼を、景華が止めた。春蘭を傷つける必要は、どこにもない……。

「あんたはそれで良いのかもしれないが、俺は言い足りないぜ……。こいつらは、あんたを傷つけて、この城から追い出して……。許せる訳ないだろ？」

春蘭が顔を上げた。肩が震えていた理由は、涙がこぼれたから。

「柳鏡は、相変わらずなのね……。ずっと、あなただけ……。そんなになんでも持っているのに、どうして私から趙雨まで奪おうしたの？」

なんでも持っている、という言葉に、景華が過剰に反応した。なんでも持っているのは、彼女の方ではないだろうか……？

「……確かに私は欲しい物はなんでも与えられていたし、飢えて苦しい思いをしたこともないわ。でも私、ずっと春蘭が羨ましかった。」

その言葉の真意は、春蘭にも、そして柳鏡にもわからない……。

「春蘭には……お母様がいるじゃない。兄弟だっているし、私にはない良い所、たくさん持っていたから……。あの夜趙雨に言われたでしょう？春蘭には、私にはない公平さがあるって……。周りをなんの鼻屑目もなく見るなんてこと、私にはできないもの……。」

春蘭の隣に、傷を負った趙雨が並んで立った。柳鏡の剣撃を受けても動けるということは、彼は言葉とは裏腹にかなり手加減をしたに違いない。普通なら、即死していてもおかしくないのだから……。

「それに……。」

春蘭が、今にも倒れそうな趙雨を支えた。趙雨が、小さく彼女に微笑む……。景華の手が、そっと柳鏡の腕に触れた。

「私に柳鏡がいてくれるのと同じように、春蘭には趙雨がいるじゃない。なんでも持っているのは、春蘭も同じでしょう……？」

春蘭の目から、後から後から涙がこぼれる……。気が付かなかった。一番憎んでいた彼女に言われるまで、自分が持っている物の価値には気付こうとしてもしていなかった……。彼女を憎んでいた一番の理由が、それだったというのに……。

「ダメなんです。私は、趙雨にはふさわしくありません……。」

激昂していた感情が収まったのだろうか、春蘭の口調も言葉遣いもいつも通りに戻った。

「なんでも持つているあなたから、全部奪ってやりたかった……。

あなたが当然の物として持っている物が、全て私から奪ったように見えていました……。そんな自分のわがままで、彼に国王暗殺までをさせてしまった……。たとえ一族の救済を表面上に掲げていたとしても、内心ではそんなことを考えていた私が、彼にふさわしいはずがありません……。」

「そんなことないよ。」

景華が、ニツコリと彼女に笑いかけた。

「春蘭が本当に一族の心配をしたのでなければ、趙雨が手伝ってくれた訳ないじゃない。……お父様は、あまり王様として褒められた政治は行っていないかったし……。だから、これで良かったと思うの。」

彼女の言葉に、二人が目を見張る……。柳鏡には、聞き覚えがある言葉だった。

「二人は、私に色々と必要なことを勉強する時間をくれたんだよね？私は、そう思っているよ……。」

その笑顔で、心に残されていたわだかまりが、溶けて行く……。四人は、小さな頃の彼らに帰ることができた……。景華が二人に歩み

寄り、春蘭を抱き締める……。

「ありがとう、春蘭……。」

その様子が見ていられなくなった柳鏡が、お人好しの馬鹿姫が、と
眩きながら室内を見渡す……。その時、彼の目に銀色の物が映った。

「おい、馬鹿姫。あれが、四神剣じゃあないのか……？」

「ああ、そうだ……。」

柳鏡のその言葉に応えたのは、呼びかけられた景華ではなくふらつ
いている趙雨だった。柳鏡がそれを持って、彼に肩を貸してやる……。
すまない、と言って、趙雨はその肩にもたれた。

「ほら、どうする？いくら和解したからって、こいつらに罪を償わ
せる必要があるだろ？」

正義感の強い柳鏡は、そういったことにはとことん厳しかった。四
神剣を受け取って、景華が泣き笑いの表情を浮かべる……。

「うん……。でも、それは皆の前でね。ねえ趙雨、春蘭。いくら私
たちの間で和解が成立しても、それじゃあこの乱に協力してくれた
皆に示しがつかないの。……わかってね……？」

「ええ……。わかっています……。」

王族の暗殺、それも国王を暗殺したとなれば、死罪は免れない。二
人には、とうに覚悟ができていた。玉座がある、王の間に四人で向
かう。しばしの間のみ許された、平和な時間……。子供の頃の思い
出が、色鮮やかに蘇る……。

「そう言えば、ここで行方不明になった姫の帰りを待ったことがあ
りましたね……。」

城の裏山が見える渡り廊下にさしかかった所で、ふと春蘭がそう言
って微笑んだ。

「あつたな、そんなこと。なにせ、ガキの頃から人騒がせな姫だっ
たからな……。」

「柳鏡、一言余計だよ！」

景華が赤くなつてむくれるのを見て、三人が苦笑する……。

「そう言えば、あの時は確か柳鏡が見つけて来ましたよね……。」

「そうでしたね。暗くなってから急に飛び出して行っと思ったたら、その少し後に姫を背負って戻って来たんですよ？あの時、どうやって姫を見つけたの？」

趙雨の言葉を受けて、ふと春蘭が疑問を口にした。すんなりとその言葉が出て来たことから、それを長年ずっと不思議に思っていたに違いない。

「多分あの時、チビ姫が喚んだんだよ、俺のこと。それで居場所がわかったから、仕方なく迎えに行っただんだ。」

「迎えに来てなんて頼まなかったけどね！大体、呼んだって聞こえる訳ないでしょ？」

相変わらずの喧嘩をして見せる二人に、春蘭も趙雨も苦笑が漏れる……。

「あんた、よく言うな。見つけてやった時には怖かったー、なんて言いながらピーピーと泣いていたくせに。足挫いたって言うからおぶってやったら、人の服に涙だけじゃなく鼻水までつける始末だったじゃねえか。」

「う……。」

景華が反論に詰まった。春蘭は、そろそろ止めに入ろうかと考えていた。

「それに。」

柳鏡の言葉にはまだ続きがあったようで、全員の視線が彼に注がれた。景華は、口を尖らせて文句を言いたそうにしている……。

「あんたの喚び声は、よく通るんだよ……。まったく、どこにいたって聞こえるんだから、始末に終えない。」

趙雨と春蘭は、ほっと胸を撫で下ろした。どうやら、一年という月日は彼らに大きな進歩を与えたようだった。楽しい時はあっという間に終わりを告げ、気付けば彼らは王の間の前に立っていた。景華が、その手で扉を開く……。

「ここに……皆に来てもらおうか。ここが……一番いいよね……？」
「ああ……。」

景華の言葉に柳鏡が頷き、廊下に出て腰に提げていた角笛を吹いた。これは、城での戦闘で彼らが勝利を収めたという合図。同時に城の衛兵たちは、城から聞き慣れない音の角笛が聞こえたことで、敗戦を知ることになる……。後は、皆がこの城に辿りつくのを待つだけだ。

始め四人しかいなかった王の間は、今は人で溢れ返っていた。角笛を聞いた清龍族、亀水族の面々が、城にやって来たのだった。そこで、景華はあることを聞かされた。王の間に入って来た帯黒が、まず景華の前に跪いた。それから、彼女を見上げて口を開く……。

「申し上げます、姫君。昨日の夜に、我ら亀水族の長、亀襄^キ殿が亡くなりました……。」

「え……おじいさまが……？」

一瞬当惑して、帯黒を見下ろす……。彼がその言葉に頷いてから、続きを紡いだ。

「はい。姫の御為に、と最後まで死力を尽くして、逝かれました……。」

「……わかりました……。」

景華は唇を噛んで俯いた。一年ぶりに味わった、喪失の痛み……。そして彼女は、また一つ、大切な物を失わなければならない。幼馴染の、親友たち……。しかも、自分の裁量で……。城が陥落したという知らせを受けた、虎神族と緋雀族の長たちも王の間にその姿を現した。その後から、砂嵐族の長も部屋に足を踏み入れた。

「それでは、姫君。まず、姫君の即位式から執り行いましょう。」

「はい……。」

連瑛のその言葉に応えて、景華が立ち上がった。彼らがこの場所を集合場所として選択した理由は、景華の即位式をそのまま行うためであった。そのまま、広間の中央へと歩み出る……。連瑛の手には、趙雨から奪還した王冠が載せられていた。

「各部族長は前へ。」

連瑛の言葉に、残りの四人の部族長、亀水族からは帯黒が前に歩み出た。そして、景華の前で膝を折る……。

「各部族長たち、こちらにいらっしゃる景華姫を次代の王と認めるのであれば、その裳裾に忠誠を誓う口付けを……。」

最初に亀水族の帯黒が動き、その次に砂嵐族の長が彼女の裳裾に触れた。乱に協力してくれた彼らには、当然の行動だった。問題は、虎神族と緋雀族……。

「姫君。」

虎神族の長、秦扇が景華を見上げて呼んだ。真紅の瞳が、彼に向けられる……。

「姫君、いえ、これからは陛下とお呼びするべきですね。此度のこと、虎神族の長として大変申し訳なく思っております……。このような私でもお許しくださるのであれば、忠誠を……。」

秦扇が彼女の裳裾を持ち上げて、忠誠を誓った。清龍族の連瑛は戴冠の役目があるために最後になるから、残るは緋雀族のみ……。全ての部族からの忠誠が得られなければ、彼女の即位は無効とされてしまうのである。景華が緊張した面持ちで緋雀族の長、春蘭の父を見つめる……。彼の手が、ずっと動いた。

「知らぬことだったとはいえ、数々のご無礼、どうぞお許しを……。女王陛下に忠誠を……。」

景華は各部族長に笑顔を見せた。それが、彼らの忠誠に対する彼女の答え……。連瑛が景華の正面に立った。そして、深緑の髪の上に金色の宝冠を載せる……。その重さは、彼女の努力の重さ……。そして、ここまで来る間に死んでいった、多くの兵士たちの命の重さ……。彼女が失った、多くの物の重さ……。それら全ての重さを感じながら、ぐっと前を見据える……。

「女王陛下の御代の、繁栄をお祈りいたします……。」

最後に連瑛が、膝を折って彼女の裳裾に口付けた。景華は悠然と歩き、玉座にゆつくりと腰掛けた。そして、王の間に集まった多くの人々を順番に眺める……。その堂々とした態度からは、一年前まで

の頼りなさ、弱さは一切感じられない……。そこにいるのは、強い意志と誇りを持った、若い女王だった。

「女王陛下の御代に繁栄を！辰南の暁に祝福を！」

口々にそう唱える、多くの声……。熱い物が、彼女の真紅の瞳からこぼれ落ちた。それでも、彼女は笑顔のままでいる……。そして、彼をその目で探す。いた。入口にほど近い隅の方で、彼は自分のことを見守ってくれていた。悠然と、彼に微笑みかける……。彼は、本当に彼女の夢を叶えてくれた。そして、玉座に腰掛ける彼女を見る、という物は、彼の夢でもあった。金色に輝く玉座と宝冠、そしてそれ以上に輝いている彼女の笑顔に、彼は小さく微笑み返した。

「陛下。どうぞ、四神剣を……。」

連瑛の手からそれを受け取って、鞘から抜く……。

「昨年の珎王暗殺事件の犯人は、この剣があきらかにしてくれます……。」

そう言つて、その切っ先で軽く自分の腕を傷つける……。彼女の血液が触れた部分から、刀身が白く輝き始めた。

「この剣を抜ける者は王族、または婚姻などによりそれに準ずると認められた者のみ。そして、流された血の記憶、この場合は私の中に流れる珎王の血が、その犯人の部族をあきらかにしてくれています……。刀身が白ということは、犯人は虎神族。そして、あの当時王族に準ずると認められていた虎神族の人間は、虎趙雨ただ一人、ですね……。」

広間が、しんと静まり返った。これで、柳鏡に掛けられた疑いを晴らすことができた。

「陛下、最初のお仕事を……。罪人に、刑罰を言い渡して下さい……。」

連瑛が、そう重く口を開く……。春蘭と趙雨が、玉座の前に引きずり出された。

「その前に、二人の言い分を聞く必要があるわ。……。あの時のことを、詳しく話して……。」

趙雨が礼をしてからその言葉に答えた。顔を上げて、彼女を真っ直ぐに見つめて話す……。

「はい。一年前のあの夜、私は春蘭と一緒に陛下の寢室を訪ねました……。」

しとしと、雨の音がうるさい。その湿った空気が、彼の心を塞ぐ……。いや、もしかすると、これから行おうとしていることの重大さが、彼の心に重くのしかかっているのかもしれない……。待ち合わせをしていた廊下の先に、春蘭の姿が見えた。

「趙雨、本当にいいの……？このまま実行してしまえば、あなたも罪人として捕らえられてしまう日が来るかもしれないのよ……？」心配そうに見上げて来る彼女の頬を、左手で包み込んでやる……。雨のせいかな、冷たい……。彼の決心は固かった。

「仕方ないんだ。多くの民が犠牲になっているのに、王はそれに見向きもしない。そんな国王にこの先も政治を任せることなんて、できないからな……。」

「でも……景華姫のことはいいの……？」
幼馴染の、かわいらしい、純粋な姫……。彼女は、彼らのこの野望の犠牲となってしまうのだ……。

「……それも、仕方ないんだ……。姫と婚約をしなければ王位継承権は得られないし、かと言って君以外の女性と結婚することはできない……。」

その言葉に、春蘭が気弱に微笑んだ。そして、その表情を硬く引き締める……。

「行きましよう、趙雨。もう後戻りはできないわ。この作戦に協力してくれた皆のためにも、私たちが迷ってはいけな……。」
冷たい廊下を、足音をさせずに歩く……。二人の影は、完全に闇に紛れていた。そして、目的の部屋の前で足をピタリと止めた。趙雨が大きく息を吸い込み、吐き出した。その後、もう一度息を吸い込んでから中の人物に声をかける……。

「陛下、趙雨です。よろしいですか？」

「おお、趙雨か。さあ、入ると良い。」

娘の結婚ですっかり舞い上がっていた玠王は、真夜中の訪問に何の疑問も持たずにその扉を開けた。室内に、二つの陰が滑り込んだ。

「おや、春蘭も一緒だったのか。まあいい、入りなさい。美味しい酒があるんだ。一緒に飲もう。」

そう言つて、部屋奥に彼らを通す。衝立^{ついたて}の、向こう側に……。

「素晴らしい剣ですね、陛下。」

玠王の腰に提げられている四神剣を見て、趙雨が軽く微笑んだ。その様子を見て、玠王がその剣を彼の手に握らせる……。

「王族とそれに準ずる者のみに許された剣だ。景華と結婚する君には、もう抜けるかもしれない……。いずれはこの剣も、この国も私の娘も君の物になるんだよ、趙雨……。」

「いずれは、などとおっしゃらずに、今すぐ私に下さい。陛下……。」

四神剣が、その身を趙雨に委ねた。鞘から、銀色に輝く刀身が現われる……。

「な、何をする！ 気でも狂ったか？」

色を失つて後ずさりした玠王の背中が、衝立にぶつかった。袋の鼠、逃げ場所がない……。

「気が狂っているのはあなただ、陛下！ 罪もない多くの国民を犠牲にしたあなたは、この国には必要ない！」

ドカッ！

肉を突いた感覚が、その柄から趙雨の手に伝えられる……。

「ぐう……。」

倒れた玠王のその口から、血が大量に流れ出た。もう一度深く剣を突きたてて、抜いた。血飛沫があがつて、彼の衣を赤く染める……。その色は、罪の色……。その時だった。

「お父様？ 入るわよ。」

聞き慣れた、あの声。後から彼女もその手にかかるつもりではいた

が、心の準備という物が全くできていなかった。

「やだ、雨漏り？」

そう呟く声が聞こえる。そして、その直後に息をのむ音……。おそろく、床の水溜りが何から構成されているのかに気が付いたのだろう……。

「景華姫……？」

恐る恐る、その声をかける。彼女ではないことを、祈りながら……。衝立を、四神剣で倒す……。

「っ……！」

彼女は、絶句してしまった。できることならば、怖い思いをさせることなく、眠っているまま逝かせてやりたかった……。それが、犠牲となる彼女へのせめてもの思いやりだったのに……。

「陛下の死体が揚がった、という話は、私が作った物です……。私がついた、嘘です……。」

誰もが趙雨の告白に息をのむ中で、春蘭が静かにそう話始めた。

「まだ見つからない！一体、どこにいるんだ……？」

趙雨は、景華と柳鏡が見つからないことでだんだんと追い詰められていた。もしも彼らに反乱を起こしたら、という懸念が、どうしても拭えない……。春蘭は、その様子を見ていることしかできなかった。だが、元々彼に国王の暗殺を持ちかけたのは彼女の方なのだ、見ているだけなど、到底許される訳がない……。

「なんとか、死んだことにできないかしら……。」

その時、彼女の頭に本の一節が思い浮かんだ。国王の側妃が正妃を追いついて死体を作り上げ、自分が立后するという話……。確か、髪の色が同じ腐敗した死体に、彼女の持ち物を持たせればよいだけ。そして人を使つて、趙雨には何も言わずに彼女の死体を作り上げた。それが川から揚げたことにして、彼に見せれば……。

「騙されてくれる、かしら……。」

彼が騙されてくれる確率は、五分五分。それでも、彼女はこれ以上彼が苦しむのを見たくはなかった。一縷の望みに託して、彼女はその作戦を実行した……。

「陛下、お聞き下さい。これらは全て、私たちと少数の協力者で行ったことです。長や一族の者は、ほとんどが私たちの嘘を信じ、騙された者たちです……。どうか彼らには、御配慮を……。」

趙雨の言葉に、景華は強く頷いて見せた。それから、女王としての言葉を紡ぐ……。

「わかつているわ。それに、先程各部族の長は私に忠誠を誓ってくれたばかりだもの、その彼らを簡単に罰したりはしないわ。」

安堵の色が、趙雨と春蘭の顔に宿った。その後、再び二人の顔が玉座の上の景華に向けられる……。

「ただあなたたちが行ったことは、国王暗殺、並びに全国民を騙した偽証罪に問われるわ。それは、わかつていますね……？」

「はい……。」

春蘭が静かに応えて、趙雨も頭を深く垂れた。柳鏡が、広間の隅からじつとその様子を見つめている……。あの彼女が、まさか、死罪^{せん}の判決を下すだろうか……？王としては必要なことかもしれないが、そんなことをすれば彼女がこの先一生苦しむことになるのは、目に見えている。彼女も親友たちも体裁も守れる解決策は、ないのだろうか……？

「本来なら、あなたたちが犯した罪は死をもつて贖うべきなのでしょう。しかし、あなたたちがこの国の今後によく貢献してくれたということも、事実なのです。」

景華のその言葉で、広間がざわついた。柳鏡も、驚きで僅かにその身を乗り出す……。

「あなたたちがあの事件を起こしてくれなければ、私がこの国について学ぶような機会はありませんでした。この一年間は、私がこの国をよく知り、どう政治を運営していくかということをよく考える

時間となりました。私が今後民に望まれるような政治を行うことができます、それはあなたたち二人のおかげなのです。」

ざわざわと騒がしかった広間が、静まった。皆、景華の言葉に聞き入る……。

「しかしその時に恩赦を出そうにも、あなたたち二人はもういなくなっているかもしれません……。ですから、先に恩赦を出しておこうと思います。」

『そんな話聞いたことねえぞ、アホ。』

柳鏡が、心の中でそう呟く……。それでも、その表情は優しくった。彼女らしい決断に、笑みがこぼれたのだ……。

「本来なら死罪の二人ですが、恩赦でもって左遷とします。南西の天山^{テンザン}の街で、静かに暮しなさい。この判決に異議のある方はいませんか？」

ぐるりと広間を見渡す。皆が皆、景華に向かって頭を下げて了承の意思を表示する……。柳鏡だけは、軽く彼女に笑いかけてくれた。それが、彼女の原動力となる。

「どうやら、皆さん承認して下さるようですね。明朝、夜明けとともに王都を去るように……。」

景華が、そう言って二人に笑いかける……。その笑顔は、子供の頃から変わらない。趙雨と春蘭も、笑顔でそれに応えた。三人が三人とも涙を浮かべて笑う様子を見た柳鏡は、変わっていないな、と心の中でまた呟いた。

夜宴の明かりが、目に沁みる……。その眩しさに耐えられなくなつた景華は、一人渡り廊下に出た。彼女の即位を祝って、各部族の長や今回の乱で大きな功績を残した者たちが、宴を繰り広げていた。景華もちろん参加させられたが、本当は、早く一人になりたいくてたまらなかつた。そのまま、人の気配がない方に向かって歩く……。少し歩いたところで、何かにドン、とぶつかつた。

「チビ姫、じゃない、チビ陛下。どこに目くつつけているんだ？」

彼女がぶつかってしまったのは、柳鏡の背中だった。そのまま、肩越しに声をかけてきた彼の背中にしがみつく……。

「ごめん、柳鏡。ちょっとだけ背中、貸して……。」

ギョツと、彼の衣を握り締める……。

「いいけど、鼻水つけるなよ……。」

とげのある言葉なのに、優しい……。ふざけた調子でそう返してくれるのは、彼女の心情を慮おもんばかつてのこと。静寂が、しばし二人の間を流れた。

「うん、もう大丈夫！ありがとう！」

どの位そうしていたのかわからなかったが、景華が元気にそう言つて柳鏡の衣を離れた。それを合図に、柳鏡が振り返る……。

「おかしな奴……。鼻水、つけなかっただろうな？」

「つけてないよ、失礼な！」

いつものように怒つてむくれる景華の頭に、ポンと、彼の手が載せられる。温かい、右手……。その後、彼がその膝を折つて彼女の前に跪いた。

「何しているの？さっきの真似ごと？柳鏡がやったら、気持ち悪いね……。」

どうしようもない奴だな、と思いながら、柳鏡がその顔を上げた。

そして、景華の右手を取る……。今度は、冷たい左手で……。

「俺にだって、一言位真面目なこと言わせてくれよ……。」

その彼の言葉に、息をのむ……。そして、月光を受ける深緑の瞳を見つめる……。

「どうか良き王、民に愛される王として、良き時代を創り上げて下さいますよう……。女王陛下の御代に、祝福を……。」

その言葉の後に、彼女の手の甲に柔らかい物が押し当てられた。心臓の鼓動が、高鳴る。そして、止まらない……。

「ほら、戻るぞ。あんたは主賓なんだから、嫌でもおっさんたちに付き合わなきゃならないんだぜ？」

そう言つて、彼女の手を引く……。これが、彼女に触れる最後だと、

わかっていながら……。そのぬくもりを覚えておこうと、強く握る……。

「痛いよ、柳鏡。ちゃんと戻るから。」

そう言つて、景華がその手をパツと引つ込めた。彼女は、あれが最後だと知らなかったから……。

「悪い……。」「

柳鏡は、景華を後に残して祝宴が行われている部屋に入つて行つた。満月が、冷たい光を浴びせている……。

夜中、柳鏡はふと空を見上げた。一年前と同じように、彼は景華の部屋の戸口を守っていた。そして、その部屋の戸口を静かにくぐる……。彼女は、安らかな寝息を立てていた。見慣れた、寝顔……。そしてその髪に、そつと触れた。深緑の柔らかい髪は、彼の冷えた指先に心地良い……。そつと屈みこんだ柳鏡の唇が、彼女の額に触れた。そして……。」「……。」

もう一度ゆつくりと彼女の顔を眺めて、彼は踵を返した。決して、彼女の方を振り返ろうとはしない……。渡り廊下に出た彼の頬に、一筋の光が流れた。

景華はふと目を覚ました。暗闇に慣れられるように、彼女は明かりをつけて眠る習慣を改善しようとしていた。それでも、やはり暗闇は恐ろしい……。何者かが、息を潜めて彼女を狙っているかのような錯覚に囚われる……。

「柳鏡……。？」

廊下にいてくれるはずの、彼の名を呼ぶ……。返答は、ない。近くにいてくれるはずなのだから、今の声の大きさでも十分に聞こえるはずだ。もしかしたら、疲れて眠っているのかもしれない……。嫌な予感がする……。ヒヤリとした床に、足をつける。そして、渡り廊下に続く戸を開けた……。その時。

「っ…………！」

彼女の目に、満月に向かって昇って行く、青銀の龍が映った。その瞳の色は、深緑…………。

「柳鏡…………？」

彼の名を呼んでみるが、やはり、返答はない…………。

「柳鏡…………！」

廊下を見渡す…………。彼の姿は、どこにもない。そこで、確信する…………。彼女の体から力が抜けて、床に膝をつく…………。空気の冷たさが、彼女のその身に染みる…………。

「…………行っちゃったんだ、柳鏡…………。本当に、何も言わないで…………。」

あの彼が彼女のそばにいてくれない…………。その理由は、たった一つ…………。彼が、行かなければならなかったこと。龍神として、飛翔しなければならなかったこと…………。そして、おそらく先程の青銀の龍が、彼なのだろう…………。心惹かれた、あの瞳の色…………。嫌な予感、的中した。夕べ彼に掴まれた手を、反対の手で強く握る…………。彼に掴まれた感覚は、まだ戻って来る…………。それなのに…………。

「…………もう…………そばにいてくれないんだ…………。わがまま、聞いてくれないんだ…………。」

冷たい床に、しずくがこぼれる…………。後から後からとめどなく溢れてくれるそれを拭ってくれるあの手は、もうない。今にも漏れそうな声を、ギョツと顔を埋めさせて消してくれるあの胸は、もうない。

「不細工な顔。」

「アホが…………。あんたみたいのを学習能力がないって言うんだ！」

「そうだよな、太った割にはちつとも色っぽくなっていないもんな！なあ、痩せっぽっちのチビ姫！」

あの思ってもいない悪口の数々も…………。

「姫じゃなくても、あんたはあんただろ。」

「ずっと…………あんたとこうして、平和に暮らせれば良かったのにな…………。国も神もない、何もない所で、二人で…………。」

「仰せの通りに！」

「一緒にいてやれる内は……あんたのわがまま、なんでも聞いてやるよ……。」

そして、傷ついた彼女をいつも癒してくれる、あの言葉も……。見つめられる度に胸が苦しくなる、あの瞳も……。

「柳鏡の、馬鹿……。」

それでも……。

「好きなのに……。こんなに、好きなのに……。」

彼は、もう戻っては来ない。青銀の龍神は、今も彼女を見守ってくれているのだろう……。月が一瞬、陰った。龍神が、通る……。秋の空はどこまでも澄んで、そして、どこまでも冷たかった……。

「その後、景華姫は……あら？」

ふと異変に気付いて、母親が目を上げる……。そして、その後微笑した。幼い兄妹は、安らかな寝息を立てていた。風邪を引かないように、そっと布団を掛け直してやる。その時、部屋の戸が開いた。長身の陰が、入口をくぐる……。それは、子供たちの父親だった。

「あら、迎えに来てくれたの？」

目を細めて笑って、彼を迎える……。

「ああ。明かり、消えただろうと思ったからな。不便だろ？」

ぶっきらぼうにそう言う彼に、ありがとう、とまた笑って答える……。

……。大きな手が、自分そっくりの息子の髪を撫でた。彼は、本当に自分そっくりだ。同じ黒いくせ毛を、切り揃えるのを面倒くさがるところまで……。

「平和な寝顔だな。間抜けだ……。」

「あら、あなたそっくりじゃない。」

息子の寝顔にそう言った父親に、ほんの少し意地悪に母親が言葉かけた。そして、そのまま立ち上がろうとした。

「きやつ。」

「危ない！」

ガクン、と膝が折れる……。転ぶ前に、間一髪で父親がその体を受け止めた。母親は、二人分の体重をその細い腰で支えている……。彼女のその体は、臨月を迎えていた。

「気を付ける……。」

「うん、ありがとう……。」

ホウ、と息を吐いてから、彼女を立たせる……。一人で歩かせるのは不安だったので、隣から支えて二人で歩きだした。

「今日は何の話を？」

何気ない調子で、彼が訊ねてくる……。廊下に出て、子供部屋の戸を閉めた。

「あの時の話を……。」

彼の顔色が変わった。怒っている訳ではないようだが、非難めいた目つきをしている。

「早過ぎないか？半分もわからないだろう？」

「ええ……。それでも、いつかあの事件を事実としていきなり知るより、今お伽話として聞いておいた方が衝撃が薄れると思って……。それに……。」

顔を上げて、彼の瞳を捉える……。月光のせいだろうか、その瞳は、いつもより色濃く見える。子供たちと同じ、深緑の瞳……。それは、八年前も今も変わらず彼女の心を波立たせる……。

「子供たちに話したお話は、結末が違うの。」

彼は、訝しげに片眉を上げた。城の渡り廊下からは、裏山がよく見える。そして、そこにある満月も……。

「綺麗な月。満月ね……。」

「ああ……。」

ふと、二人の足が止まった。並んで月を眺めている内に、ふと彼女の口から言葉が漏れる……。

「子供たちに話したお話は、結末が違うの。」

「さっきも聞いたぞ、それ……。」

彼の苦笑交じりの言葉に笑顔を向けてから、その胸に顔を埋める……

…。温かい左手が、彼女の肩に添えられた。真紅の瞳が、嬉しそうに細められる……。

「だって、私の龍神は、ここにいるもの……。」

そう言って微笑んだ彼女のその胸で、珊瑚の首飾りが赤く、淡く煌めいた。

全ては異国恋歌、物語の世界の中に……。

女王陛下と龍神 龍神は、飛翔する（後書き）

お待たせいたしました。異国恋歌／＼龍神の華／＼、ついに本編が完結いたしました。ここまでお付き合い下さった皆様、本当にありがとうございます。初めての作品でしたので、まずは無事に完結させられたことを素直に喜びたいと思います。また、只今本作品の番外編を執筆中です。よろしければ、どうぞそちらもご覧下さい。

外伝 わがまま陛下と龍神 物語の本当の終わり（前書き）

本編でお気付きになった方もいらっしゃると思いますが、子供たちの両親は景華と柳鏡です。この話は、この二人がああ後どのような結婚するまでに至ったか、という物です。本編の読後感を大切にしてください。読者の方がいらっしゃいましたら、ご遠慮下さい。

外伝 わがまま陛下と龍神 物語の本当の終わり

夜中、柳鏡はふと空を見上げた。一年前と同じように、彼は景華の部屋リユウキョウの戸口を守っていた。そして、その部屋の戸口を静かにくぐる……。彼女は、安らかな寝息を立てていた。見慣れた、寝顔……。そしてその髪に、そっと触れた。深緑の柔らかい髪は、彼の冷えた指先に心地良い……。そっと屈みこんだ柳鏡の唇が、彼女の額に触れた。そして……。

「……………」
もう一度ゆっくりと彼女の顔を眺めて、彼は踵を返した。決して、彼女の方を振り返ろうとはしない……。渡り廊下に出た彼の頬に、一筋の光が流れた。

景華はふと目を覚ました。暗闇に慣れられるように、彼女は明かりをつけて眠る習慣を改善しようとしていた。それでも、やはり暗闇は恐ろしい……。何者かが、息を潜めて彼女を狙っているかのような錯覚に囚われる……。

「柳鏡……………」
廊下にくれてくれるはずの、彼の名を呼ぶ……。返答は、ない。近くにくれてくれるはずなのだから、今の声の大きさでも十分に聞こえるはずだ。もしかしたら、疲れて眠っているのかもしれない……。嫌な予感がする……。ヒヤリとした床に、足をつける。そして、渡り廊下キョウカに続く戸を開けた……。

「柳鏡……………」
彼の名を呼んでみるが、やはり、返答はない……。

「柳鏡……………」
廊下を見渡す……。彼の姿は、どこにもない。そこで、確信する……。彼女の体から力が抜けて、床に膝をつく……。空気の冷たさが、彼女のその身に染みる……。

「どこ行っちゃったのよっ……？」

真紅の瞳から、滴がこぼれそうになる。彼は、約束を守ったのだ。行く時は何も言わずに行くという、約束……。彼女はぐっと、こぼれそうになった物を飲み込んだ。そして、力が抜けてしまったその体を奮い立たせる。泣く前に、自分がすべきことがあるはずだ……。

「探さなきゃ！」

寝巻に上掛けを羽織って、彼女は自分の部屋を飛び出した。彼を、失いたくない。その一心で……。

「颯！お願い、一緒に柳鏡を探して！」

厩舎に飛び込んで、あの馬に飛び乗る。彼女の言葉が理解できたのかどうかはわからないが、そのとたんに颯はものすごい勢いで駆け出した。乗馬には大分慣れた彼女でも、振り落とされそうになる……。

「お願い颯！急いで！」

彼の行き先を、知っている訳ではない。しかし彼女の脳裏に、ある場所が浮かんだ。確信はない。それでも、その場所を目指して、駆ける……。颯は、一年前のように壊れた城壁の上を飛び越えた。

秋の空気は、冷たい。ましてや夜の空気は、なおさら……。彼の心を温めてくれる少女は、もういない。最後に、眠っている彼女に別れを告げて来た。約束通り、何も言わずに……。

「自分で言ったくせに、怒るだろうな。あのわがまま姫は……。」

泉が見えた。彼が龍神の紋章を解放してから、飛翔するならここだと密かに決めてあった場所……。一年前に、彼女に水を飲ませようとして拒絶された、あの場所……。彼を最後に見送ってくれるのは、ほろ苦い思い出の方が良い……。その方が、決心が鈍るようなことがないだろうから。乗って来た馬から降りて、彼を離してやる。彼は、勝手に走って行った。

「さてと……。青龍の召喚とやらを行うか……。」

そう言つて、左腕を捲る。それから、その腕に巻かれた包帯を解いた。くつきりと刻まれた青い紋章と、青銀の鱗……。自分の腕だとしても、見る度に悪寒が走る。彼女は、そんな腕の自分でも受け入れてくれた……。深緑の髪が、意識の隅にちらつく。ダメなんだ。彼女は、俺のものにはできない……。

「確か、紋章に触れて呪文を唱える、だったか？随分とお手軽だな……。本当にそれで大丈夫なのかよ？」

彼の悪態に反応を示してくれる者は、一人もない。彼女なら、ほら、文句言わないの！と言っただろう。真紅の瞳が思い出されて、胸が苦しい……。人でなくなろうとしているこの瞬間にも、思い返すのは、考えるのは彼女のことばかり……。

「洗脳されてるみてえだな……。馬鹿だな、俺……。」

自分から、彼女を離れたくせに。望んだ訳ではないが、それが彼女の幸福のためなのだ。自分の存在は、彼女の存在を害するように運命付けられている……。そして、その逆も……。暗い思考を振り切つて、彼は息を吸い込んだ。青龍の力で龍神になれば、もう、苦しむこともないだろう……。

「我、龍神の紋章を持つ者なり……。ここに東方の守護神、青龍を召喚す……。」

辺り一面が、青白い光に包まれた。真昼の太陽よりも眩しく思える程の、輝き……。もしも彼女が城からこれを見れば、気付くだろう。いや、もしかしたら自分の不在で気が付くかもしれない……。そして、帰らない自分をいつまでも待ち続けてくれるのだろう。約束通り、何も言わずに離れたのだから……。

「柳鏡！」

城に残して来た、愛おしい声。その時になつて、気が付く……。ああ、自分は。最後に彼女が自分を呼ぶ幻聴が聞こえる程、本当に強く、彼女を想っていたのだと……。

「柳鏡！」

ハツとする。背中から、細い腕が回される……。まさか、そんなは

ずはない。彼女が自分を追いかけて来るなんて、そんなこと……。肩越しに、後ろを振り返る……。

「っ……………」

最初に目に入っただのは、深緑の髪。その柔らかさは、彼の凍えた心に温かい……。そして次に目に入っただのは、龍神の華の、真紅の瞳……。そして。

「やだ！龍神なんかになっちゃダメ！」

相変わらずの、わがまま……。今度は、体ごと振り返る。彼女の細い腕は一度解かれたが、今度は彼の正面から、再び折れそうな腕がその体に回される。非力な彼女が、精一杯の力を込めて……。

「あんた、どうして来たんだよっ？何も言うなって言ったの、あんただろっ？」

必死で彼女を振り払おうとする。決心が、鈍ってしまうから……。それでも、彼女は離れようとしめない。

「前言撤回！何があっても、一緒にいてくれなくちゃダメ！」

小さな肩が、震える……。彼女は、最後の最後に約束を破った。

「一人ぼっちに、しないでよ……。柳鏡がいてくれないと、ひとりぼっち……………」

この一年間で、彼女は多くのものを失った。残っていたのは、彼だけ……。光が収まって、青い長大な龍がその姿を泉の上に現した。その場にいるだけで相手を圧倒するほどの、強い靈気……。

「私を呼んだのはお前か？龍神の紋章、栄光への権利を与えられた者よ。」

柳鏡が景華からずっと離れて、その前に跪く……。景華は、茫然とその場に立ち尽くした。彼が、自分から離れて行く……。

「はい。私があなたを召喚いたしました……………」

冷たい言葉が、景華の耳に遠く響く……。膝から力が抜けて、ガクン、とその場に座り込む。彼は、本当に行ってしまうのだろうか？彼女を、一人にして……。

「お前は試練を乗り越え、昇龍の資格を得た。この世に、何も未練

はないな……？」

「……………はい……………」

かなり迷ってから、それでもそう答える。彼の未練は、たとえこの世に残ったとしても、永遠にそれが叶えられることはない……。彼女とは、結ばれないように運命付けられているのだから……。左腕の紋章から、淡い光が発せられる。彼の腕と同じ、青銀の色……。

「柳鏡！行かないでよ！ダメっ！」

青龍の霊気でその場に足が縫い止められてしまっているのだろう、彼女は駆け寄ろうとはせず、その場所から彼を見つめた。最後に想いを告げること位、許されるだろうか……？

「……………泣くなよ。俺、あんたの笑った顔が好きだった。ガキの頃からずっと、自分でもアホかと思う位、あんたに夢中だった……………」
淡い光が、彼の体を包みだす……………。彼女が激しく首を横に振った。聞きたくない、ということだ。それでも、伝えたい……………。

「あんたが、ずっと好きだった……………」

景華が顔を上げた。今更聞く、彼の本音……………。でも、それなら。

「それなら一緒にいてっ！一人にしないでっ！私……………！」

理由も、話しておこうか……………。この速度でなら、まだ龍神になれるまではかなり時間がかかりそうだ。そばにいられない、理由も……………。

「龍神の華、の話は、覚えているか？」

泣きじゃくる彼女が、辛うじて頷く。それに安心して、続きを話す。
「それ、あんたのことだそうだ。あんたみたいな、真紅あかいの目をして
いる奴……………。俺たちは、互いに害し合う存在らしい。あんたが生き
れば俺が死に、俺が生きればあんたが死ぬ……………」

言葉を切る。何も聞きたくない、と彼女が首を振る。現実残酷だが、自分の心に偽りがなかったことを証明するために、話さねば……………。

「だから、俺はあんたを離れる。あんたが大事だから離れるんだ、誤解するなよ……………」

「……………でもいい……………」

「は……？」

泣きじゃくる彼女の声は、かなり聞き取り辛い。必死で、彼女の声を拾おうとする……。

「それでもいい！一緒にいてくれるなら、なんでもいい！私が大事なら、戻って！」

めちやくちやな論理。いかにもわがままな彼女らしいが、困る……。

「そんなこと位で柳鏡を諦められる程、聞き分けが良い子じゃないわ、私！だって、わがままなもの！」

その言葉に、笑みがこぼれる。そして、心が揺さぶられる……。

「それに柳鏡がいなくなったら私、今すぐ死んじゃう！柳鏡がいないなら、生きている意味もないもの！」

本当に、彼女は無茶苦茶だ。自分がいなくても彼女は国王として生きなければならぬのに、平気でそんなことを言う……。涙で顔をクシャクシャにして、小さな肩をこれ以上はないという程大きく震わせて……。それでも彼女は懸命に、怒鳴る。

「戻って！……戻りなさい、柳鏡！好きなら私を置いて行くなっ！」

深緑の瞳が、見開かれる……。青銀の光に預けられていた彼の体が、心が動いた。そのまま、彼女の体を包み込む。強い腕、近い吐息……。

「あんた、どこまでわがままなんだよ……？」

彼の顔を見上げる。深緑の瞳が、近い。寒さと靈気で白くなる吐息が、かかる……。

「柳鏡と一緒にいてくれるなら、どこまでもわがままになる！」

苦しい位の、抱擁。乱暴で、力加減なんて全くされていない。それが、嬉しい……。彼が纏っていた青銀の光が、左腕の紋章の中に治まって行く……。

「それがお前の答えか、柳鏡？龍神の紋章を持つ者よ……。」

青龍が、重く言葉を発する。彼女とともに滅びを選ぶのか、という意味……。

「はい。永遠の命も、巨万の富も……。」

柳鏡が、顔を上げる。その腕に、最愛の華を抱き締めたまま……。

「彼女と過ごす一瞬に比べれば、何の価値もない。」

青龍が、一度咆哮と思しきものを上げた。それから、次の言葉を紡ぐ。

「愚かなり、人の子……。短い生涯を、なぜ選ぶ？」

確信に満ちた声で、柳鏡が告げる。

「それが……人、だからです……。」

青龍が黙り込んだ。どうやら、彼の完敗のようだ……。その体を大きくくねらせて、体勢を変える。

「それがお前の結論ならば、それも良い。龍神の華と龍神が結ばれたことは、未だ嘗てない……。もしかすると、二つにはまだ知られていない別の関係があるかもしれない……。」

そしてその青く透き通った瞳で、景華を見つめる。身をすくませた彼女を、柳鏡が庇う。その様子が、青龍には腹立たしい。

「またしても龍神の華は、紋章を持つ者の昇龍を妨げるのか……。」「そう言い残して、空へと昇る……。その姿は月明かりに紛れて、消えた。柳鏡が、おかしように笑い声を上げる。」

「神様でも捨て台詞って吐くものなんだな……。」

冷たい左手が、景華の頬を包む。そして彼女の額に自分の額をコツンとぶつけて、彼が止まった。

「さあ、困った。俺は、まだあんたの返事を聞いていないんだが……。」

いつもと変わらない、景華に意地悪をする時に独特の口調。景華の頬が、見る間に赤くなった。

「な、そんなことっ、今更……。」

「ほう、俺には今更あんなことを言わせておいて、自分は逃げるのか。大した根性だな……。」

意地の悪い、唇を吊り上げる笑い方……。勝手に言ってくれたくせに、と景華は心の中で反論する。

「さて、困ったな。あんたの返事を聞かないと、続きができないん

だが……。このままここにいるのも良くないよな、女王陛下？あんな、どうせ無断で城を抜け出して来たんだろ？」

「う……。」

景華が返答に詰まる。顔が近い。息がかかる……。もう、この際だ。「残念でした！柳鏡なんか、大っ嫌い！」

そう言つて舌を出して見せる。その両頬が、つねられた。そのまま、両方に持つてかれる……。

「どの口がそんなこと言うんだ？この口か？引つ張つたら素直になるか？」

「ふあふあふあひ！」

ならない！と抗議の声を上げる。つねられた両頬は、ようやく放してもらえた。自分の手で、それを包む。

「暴力反対ー！」

「アホ、今のはかわいがつてやっている、つて言うんだ。人聞き悪いな。」

むうつとむくれて見せる。彼が、優しく笑つ。それだけで、景華の膨らんだ頬は元通りになってしまう……。

「帰るか。あんたが乗つて来たの、颯だろ？俺の馬は逃がしたから、二人乗りだな。」

「やだー！柳鏡みたいな変態とは二人乗りできないー！」

彼の優しい笑顔が、とげのあるものに変わった。まずい、と思った時にはもう後の祭り……。

「じゃあ、あんたはここにいろ。俺だけ帰るから。じゃあな。」

「あつ、待つてよ！嘘だよ、嘘！」

颯に向かって歩いて行く彼の後ろを、慌ててついて行く。この半歩の距離は、永遠……。景華を馬上に押し上げてから、彼がその後ろに乗った。一年前と同じように、彼の右腕に抱き締められる……。颯が、走り始めた。秋の夜は長い。彼女なら、そんなに遅くならずに城に連れて帰ってくれることだろう。

「柳鏡、さっきのあれ、嘘だよ。」

「どれだよ？あんたの言ったこといちいち覚えていたら、俺、洗脳されるだろうが。」

面倒そうに彼が答えた。本当は、もう洗脳されているくせに……。

「柳鏡、大好き！」

これまで彼女にかけられた言葉の中で、一番素直で、一番嬉しい言葉……。

「……知ってる。」

龍神は、ついに華を手にした。

『あれ？なんか変……。』

目を覚ました景華が感じた物は、朝に特有の空気の冷たさと、温かい腕、規則正しい息の音……。そっと目を開ける。最初に目に映ったのは黒いくせ毛、次に包帯を巻かれた腕と体……。空は白んで来ているが、まだ日は射していない。

『あ、そうか、柳鏡……。』

寝ぼけた頭で、ようやく状況を飲み込む。昨夜、彼を連れ戻してからの記憶……。

『柳鏡の腕、痺れてないかな……。？』

自分が頭をもたれさせているその腕は、包帯が一部の隙もなく巻かれている。呪いの青い鱗を隠すために……。

『……あれ……。？』

景華は、ふとあることに気が付いた。昨夜と違って、彼の腕が温かくて、柔らかい……。そっと起き上がって衣装を軽く整え直し、早く確かめたい、という一心で、彼を揺り起こす。

「柳鏡……？ねえ、柳鏡？」

「なんだよ、うるせえな……。」

寝起きが悪いのは、いつものこと。それでも、彼女が起こせば彼は必ず起きる。

「ねえ、柳鏡。腕……。」

「ああ？」

そう言つて仕方なさそうに起き上がる。そして。

「ちっ、痺れてひでえな……。あんた、頭悪いくせに重過ぎるんだよっ……。」

思つてもいらないような悪態をつく。そこで、彼の表情が変わつた。

「んっ……？」

彼も異変に気付いたらしく、右手で肩の結び目を解こうとする。あまりうまくいかないのが、景華がその結び目を解いてやった。逸る気持ちとは裏腹に、ゆっくりと包帯が解かれていく……。そして……。

「龍の鱗が……消えている……。紋章も……薄くなつてっ……！」

柳鏡が目を見張り、驚きの声を上げる……。景華もそれを見てニコリと微笑み、何度も頷いた。真紅の瞳には、涙がいつぱいいつぱいに湛えられている……。長い間彼を苦しめ続けていた呪いの証、龍神の紋章から、彼は今、やつと解き放たれたのだ……。

「紋章こゝれの伝説に一つ、書き加えねえとな……。」

柳鏡のその言葉に、景華は首を傾げた。一体何を？とその瞳が問っている……。

「龍神の呪いから救つてくれるのは、破滅をもたらすはずの龍神の華だ、つてことだよ。俺も……これで、人になれた……。」

抱き寄せられる。景華を抱きしめてくれるその腕は、二本とも温かい。それが、何よりも嬉しかった。彼がこだわり続けた、人として存在すること。それが、叶つたのだ……。

「でも、待てよ。紋章こゝれのおかげで強かつたんだとしたら、前より弱くなつちまつたかもしれねえな……。」

景華が元気に答えた。

「その時は、私が柳鏡を守つてあげるよ！任せて！」

たまらなく不安げな顔を彼女に見せてから、その額を指でピンツと弾く。

「痛っ！」

「あんたに助けられる位なら、死んだ方がマシだ。……そろそろ時

間だな……。」

そう言つて、足元に脱ぎ捨てたままだつた上着たちを拾い上げる。こんなものもういらねえな、と言つて彼は乱暴に、だが、嬉しそうに包帯を捨てた。そして最後に、枕元に立掛けたままだつた大剣を背負つた。

「どこか行くの？」

きよとん、として問いかける景華に、柳鏡は苦笑して答えた。

「あのなあ、俺のいるべき場所は本来、この部屋の外なんだよ……。」

「うん、そうだね。それで？」

「つまり、俺があんたの部屋の中にいることは、他の人間に見つかる訳にはいかねえんだ。」

「どうして？」

この姫、いや、この女王はどこまで鈍いだろう、と思いながら、答えてやる。目を逸らして、長い指を黒いくせ毛に掻き込んで……。

「……まだ……人に認められて、正式に結婚した訳じゃないからな……。」

それで、わかつた。景華は一度目を見開いて、それからしゅん、として俯いた。

「そうだね……。」

大きな手が、彼女の頭をクシャクシャつと撫でた。その仕草は、昨日までに比べると、遥かに優しい……。

「そんな顔するなよ、不細工だな。いや、アホな顔つて言つた方がいいか？」

「失礼ねーっ！人が真剣に考え事しているのに！大体っ……！」

彼はずるい。その瞬間、彼女がとつさに思ったのがそれだつた。彼女の額に一瞬、その唇で触れると、彼は体をくると反転させて出て行ってしまったのだ。それで、彼女が何も言えなくなってしまうのを知っているから……。

『ずるい……』

そして。

『好き……。』

景華は、寝台の上で膝を抱えた。そのまま、真剣な顔で足元を見つめる。まだぬくもりが残っている、寝具たち……。

『人に認めてもらうって、どうすればいいんだろう？ 私は、一度趙雨のことがあったから、信用されていないだろうし……。ただ柳鏡と結婚したいって言っただけじゃあ、やんわりと否定されちゃうよね……。』

その時、突拍子もない考えが景華の頭に浮かんた。これならば、彼を皆に認めさせることができる……。時期を見て、大臣たちに話してみよう。いつの間にか、部屋には朝日が差し込み始めていた。

それから一月経った城では、乱で壊れた物の復興具合や戸籍作りの作業の進み具合を確認するための閣議が行われていた。どうやら、どちらも順調なようだった。壊れた物の修復や戸籍作りにかかる費用のために、景華は自分の宝飾品や城の装飾品をかなり売った。彼女が手元に残したのは、父母の形見の簪かんざし一本ずつと、柳鏡がくれた珊瑚の首飾りのみだった。そうしてできた費用を、ある物は建物の建築資材に、またある物は役人がその地に滞在するための費用として使った。

「それから、大臣たちに一つ提案があります。」

報告を聞き、それぞれに指示を出した景華がそう言った。彼は、城の守護を行う近衛隊の隊長としてこの閣議に出席している……。

「今残っている直系の王族は、私のみです。つまり、私にもしものことがあれば直系の血筋が絶えてしまうことになります。」

「私も、常々それは案じておりました。陛下には、一刻も早く良い夫君を迎えられ、お子様を持っていたく必要があります……。」

「シンロンそう答えたのは彼の父、清龍族の長、ロンレンエイ龍連瑛。」

「そこで、大臣たちに提案したいのです。私の人選には、既に信賴

をなくしていらつしやることでしよう。」

景華の言葉に、何人かの顔が下を向く。凶星、といったところだろう。

「ですから、大会を開こうと思います。」

「大会、ですか？」

あちこちから、驚きの声がざわざわと上がった。連瑛も明鈴も、もちろん、彼も目を丸くしている。

「一体、どういうことですか？」

そう問ったのは虎神族の長、虎秦扇だ。趙雨の、父の……。

「ですから、私と結婚してこの国を支えて下さる方を、皆様にも納得していただけるように公正な勝負で決めたいと思います。」

誰もが、彼女の言葉に聞き入っている。

「もちろん、その人が王位に就くことはありません。法を改正しましたからね。でも、その子供は次代の王となります。つまり次の王にはその部族の血が流れるのですから、十分に魅力的な地位だと言えるでしょう。」

そこで一度、景華が言葉を切った。皆が続きを待っていることを確認してから、さらに口を開く……。

「各部族から一人ずつ、優秀で、なおかつ私との結婚でも納得してくれる若者を代表として出して下さい。その際、決して無理強いをすることのないように。彼らにいくつかの競技で競ってもらって、結果を出したいと思います。よろしいですか？代表がいなければ、それでも構いません。」

各部族長が、礼をして去って行った。他の人も、後に続く……。柳鏡だけが、静かになった閣議室に残った。

「……あんだ、どういふつもりだ……？」

その口調がとても静かなことから、彼が本気で、しかも相当怒っていることが窺える……。それも当然だ、今回のこの計画は、彼女の独断で行った物だった。彼に、一言も相談せずに……。

「柳鏡、絶対勝ってね！」

敢えて全く関係のないことを言って誤魔化そうとする……が。

「ふざけるなっ！ どうして俺が、あんたを賭け事の対象として、賞品として獲得しなければならん？ 俺にあんたを物扱いしろって言うのか？ それにあんたっ、自覚はあるのか？」

「何のよっ？」

対する景華も、声を荒げた。外には誰もいない。彼らの会話を聞いているのは、彼ら自身と、この部屋の調度品たちだけ……。

「……どうやら……俺の思いあがりだったみたいだな……。」

柳鏡が唇を噛んで、俯いた。その拳が、強く握られる……。

「あの時……たとえ非公式にだったとしても、俺はあんたを手に入れたと思っていた……。どうやら、俺の思い違だったみたいだな……。」

「違うよっ！」

景華が力一杯その言葉を否定した。腕を上下に振る、お決まりの仕草……。

「私、あの時にずっと、一生柳鏡だけって誓ったもの！ ただ、柳鏡言ったじゃない。人に認められて、正式に結婚した訳じゃないってだから、ずっと一緒にいる訳にはいかないって……。それじゃあ嫌だから、皆に認めて欲しくて、一緒にいて欲しくてこうしたの！」

「そんなこと、他にも方法がいくらでもあっただろう？ 俺を戦地にやって武勲をあげさせて、それを理由にする、とかっ……！」

「それじゃあ時間がかかり過ぎるもの！ 現在いま一緒にいられないじゃない！」

普段の喧嘩とは違う、本当の口論。それでも、彼にわかって欲しい自分が、なぜこんな方法を選んだのかを……。そして、深緑の瞳が見返して来る。ほんの少しだが、その面積が大きくなった。おそらく彼は自分の意図を理解し、納得してくれたのだらう。面倒事が嫌いな彼には、気に食わないかもしれないが……。

「絶対優勝してよ！ 負けたりしたら、一生呪ってやるから！」

軽く溜息をついた柳鏡の左手が、景華の右手を取った。その甲に、

彼の唇が押しつけられる……。それは忠誠の印であり、彼女の言葉通りに優勝してみせるという、誓い……。彼は、彼女の絶対命令を受けた。

「約束、してくれる？」

真紅の瞳に涙をうつすらと浮かべた彼女が、そう問いかける。

「ああ。まったく、相変わらずわがままで、面倒なことを言いやがる……。」

溜息をついてだるそうにするが、彼は決して嫌そうな顔はしていない。彼女の絶対的な信頼が、何よりも嬉しかった。

「負けたりしたら、呪うついでに死んでやるっ……。」

景華が、頭一つ半近く背が高い彼の目を軽く睨んで、そう言う。最高の脅し、のつもりだった……。

「ああ、一層その方が楽かもしれないな。このままいって本当にあったなんかと結婚しちまったら、一生わがまま陛下の面倒を見る羽目になっちまうし……。」

「何よ、柳鏡の馬鹿っ！大っ嫌い！」

赤くなって怒るその姿は女王のそれではなく、年相応の、十七歳の少女の姿だった。

「はいはい、知ってるから。」

そう言っなだて彼女を宥めるような仕草をしてから、柳鏡は椅子に立掛けたままだった大剣を背負って出て行った。

「父上、柳鏡です。よろしいですか？」

その夜、柳鏡は父である清龍族の長、連瑛の元を訪ねた。

「入れ。」

短く、入室を促す言葉。戸がキィ、と軋んだ音を立てて開き、その後すぐ閉じた。長身の陰が、一つ室内に増えた。

「陛下のおそばに控えていないか？」

「今は、姉上に代わってもらっています……。」

父に勧められて、柳鏡は椅子に腰掛けた。酒が入ったひょうたん

盃を二つ出して、連瑛もその向かい側に腰掛ける……。

「何かあったのか？」

「父上に、お願いがあつて参りました。」

出された酒に口をつけてから、柳鏡が話を切り出した。

「どうか、今日陛下が提案された大会に、清龍族代表として俺を出場させて下さい。」

連瑛が、酒をぐつと飲み干した。空になった盃に、柳鏡が酒を注ぎ足す。

「正直、なぜ陛下があんなことをおっしゃったのかわからない……。陛下はいずれ、時期が来れば必ずお前を選んで下さると思つていた……。違うか？」

確かに、乱の最中の二人の様子を見ていれば、そう思つのが自然であつた……。柳鏡が、自分の盃の酒を見つめた。蝋燭の光が、その中で踊る……。

「……。一緒にいられる現在いまが欲しい、と彼女は言いました。他の理由は、彼女が昼間言つた通りです……。」

柳鏡は、ここで敢えて彼女を女王陛下としてではなく景華として扱つた。父は、これで自分が言いたいことを読み取ってくれるだろう、と思つて……。

「そうだったのか……。」

その言葉には、二重の意味があつた。一つは、彼女の思惑に納得したということ。そしてもう一つは、彼らがどういった関係なのかを把握した、ということ。

「お前がそう望むのなら、もちろんお前が代表だ。武芸に秀で、頭の回転も悪くない。そして、陛下に対する忠誠心も、それ以上の想いも揺るぎない。お前以上の代表など、いる訳がない……。」

そう言つて、息子を力づける。彼の息子は、長年の想いを成就させるべく、戦う。そしてなによりも、その想い人のために……。

「若いのに、お前も苦労させられているな……。お前の母親みたいだ……。」

小さく呟いた連瑛の盃には、月が浮いていた。

「どうやら、各部族とも代表を決めて下さったようですね、ありがとうございます。」

彼女の衝撃の発表から三日後、全ての部族からの申し出が出揃ったので、景華は各部族長とその代表者を招集した。結局、各部族の代表は皆、各部族長の子息となった。清龍族代表の柳鏡を始め、亀水族からは景華のいとこにあたる凌江リョウコウが、砂嵐族からは部族長の三男である大連タイレンが、緋雀族からは三男で春蘭の一下の弟である紅瞬コウシュンが、そして虎神族からは趙雨の次弟にあたる英明エイメイが名乗りを上げた。

「それでは、こういった方式で大会を行っていくのか説明いたします。まず、皆さんには文、武、勇、芸、忠の五つの課題で競っていただきます。それらの課題は、各部族長に一人一つずつ決めていただきます。その課題の出来具合で順位をつけ、一位から順に五、四、三、二、一点と点数をつけて行き、その得点の合計が一番多かった方が優勝となります。また、万一課題をこなすことができなかったら無得点となります。よろしいですか？」

単純明快なルールだったので、質問はないようだ。景華は、ほっと息をついた。

「では、各部族長は残して下さい。誰がどの課題を決めるのか、くじ引きで決めたいと思います。それと、勝負を公正に行うために大会期間中はご子息にはこの城に滞在していただき、できるだけ課題を決める部族長たちとは会わないようにしていただきます。」

全員が頷くのを確認してから、景華は候補者たちを退出させた。彼らを用意された部屋に案内するための侍女たちが、外に待機していた。戸が閉められて、室内の声も室外の声もお互いに聞き取れなくなる……。

「俺の部屋は？」

柳鏡が、女官の一人に問いかけた。他の候補者たちも、足を止める。「西の対の南角の部屋です。ご案内いたします。」

「いや、いい。場所がわかれば一人で行ける。」

「そんなつれないことをおっしゃるな、柳鏡殿。」

踵を返して歩き始めていた柳鏡を、後ろから呼び止める声があった。
「女官殿が可哀想ではないか。なあ？仕方ないからこちらにおいで。彼女と一緒に私を部屋まで案内しておくれ。」

そう言つて柳鏡の案内をするはずだった女官の肩を引き寄せたのは、虎神族代表の英明だった。柳鏡は、彼を一瞥して思った。この女好き、と……。見れば、彼は女官たちと楽しそうに肩を組み、ニヤニヤと笑っている。柳鏡の脆い堪忍袋の緒は、既に切れていた。修復の見込みもない程、派手に……。

「もし万が一俺に事故が起きてあなたが優勝するようなことになれば、もう女遊びはできませんよ、英明殿？」

嫌味全開の口調で柳鏡が発した言葉に、英明はどこまでも軽薄に答えた。本当に、あの趙雨の弟なのだろうか……？密かにそう思う柳鏡だが、それは口には出さない。

「あなたに事故が起きなくてもそうなると思うが……。宮廷は美人の宝庫だろう？そんな所に住めるといっただけで十分だ。陛下もなかなかかわいらしい方でいらっしゃるし……。」

柳鏡の頬が、ヒクヒクと痙攣している……。形の良い片眉が吊り上がった。

「ほう……。あのわがまま陛下をかわいい、とおっしゃるのか……。」

それでは、一日付きっ切りで陛下のお世話をなさってみると良い。言つておきますが、死ぬ程大変ですよ？陛下はドジで、無茶苦茶で、無鉄砲で、その上八つ当たりの常習犯でいらっしゃる……。」

周囲の他の候補者たちが黙り込む中、英明だけがおかしそうに笑い声を上げる……。

「それは、それは。護衛の騎士としてさぞ苦勞をされたことだろう。さあ、行こうか女官たち。両手に花とはまさにこのことだな？」

そう言つて両肩を女官たちと組み、楽しそうに話しながら英明は行つてしまった。その後ろ姿を見て、柳鏡は誓った。

「あいつにだけは、男として負けられねえ……。」

他の候補者たちは、比較的まじめで大人しそうだ。特に凌江は乱の時から会うことがあったので、気心のしれている友達となっていた。その彼も同じ西の対なので、一緒に移動することになった。

「しかし驚いたなあ。まさか、お前が出るなんて。」

凌江のその言葉に、柳鏡は黙ってじろりとその横顔を眺めた。同じように、彼が候補として出たことに驚いているということを伝えるために……。

「ああ、俺か？俺は、辰南一の男になりたくて出たんだ。だってそうだろう？各部族の代表の中で一位になれば、国土無双の男として評価される。」

それが、景華がこの大会を開いた理由だった。柳鏡が代表たちの中で一位になれば、各部族長も彼の実力を認めざるをえない……。

「ところで、お前はどのようにして出たんだ？」

「聞くな……。」

そう言っただけで柳鏡が視線を逸らした。

「ふうん、さては……。」

凌江が含み笑いをしながら柳鏡の顔を下から覗き込んだ。

「お前、陛下に惚れているんだろう？」

「っ……！」

図星を指されて、柳鏡は言葉が出ない……。凌江がニヤリとした。

「やっぱりな、そうだと思っていたんだ。しかし、驚いたな。陛下とお前は相思相愛だと思っていたのに、お前の片恋だったのか？」

「うるせえ、放っておけ！」

自分の一方的な恋慕なら、ここまで苦労はしていない。両想いだからこそ、彼女の期待に応えたくて苦労しているのだ……。長い指が、黒いくせ毛を乱暴に掻いた。

「安心しろ、柳鏡。俺が優勝したら辞退してお前を推薦してやる。」

そうすれば俺は国土無双の男だし、お前は陛下とめでたく結ばれる、という訳だ。悪くないだろ？」

「優勝しろってというのが絶対命令だから、それじゃあ意味ねえんだよ！」

ちようと凌江の部屋の前についたので、柳鏡はそう不機嫌に言い放って足早に自分の部屋に向かって行った。

「絶対命令って、誰のだよ……？」

残された凌江が、その背中にポツンと問いかけた。

三日後、最初の文の課題が執り行われた。これは非常に単純な課題で、史学、語学、数学の三つの科目の試験が代表者たちに課された。皆一室に集められて、答案用紙の上にさらさらと筆を走らせる。それを文官たちが採点した。

「どうだった？」

景華が、文官たちが採点を行っている部屋を訪ねた。全員が礼をしってから、責任者である文官長が答えた。

「たった今、採点が終了いたしました。結果も出ております。一位は、虎神族の英明様でした。」

景華は、これは仕方ない、と思った。彼が苦手とする語学が含まれていたし、他にも種目があるので全てで一位を取らなくても良い、と……。

「二位が砂嵐族の大連様、次に亀水族の凌江様、緋雀族の紅瞬様と続き……。」

「えっ、柳鏡は？」

いくら語学が苦手でも、彼の知識ならば他の部分で十二分に挽回が可能はずだ。その彼の名前が、ない……。

「あの……清龍族の柳鏡様の回答用紙がこれなのですが……。」

文官長は、ひどく困った様子で景華にそれを差し出した。それを受け取った景華の手が、わなわなと震える……。ブチンッ！何か、不穏な音がした。そして、彼女は勢いよくその部屋を後にした。廊下を、その足で踏み鳴らして……。

バターンッ！

先程から廊下がやけに騒がしいな、と彼は思っていた。なにやら、ドシドシとその床を踏み鳴らす音が……。しかし、まさか自分の部屋の戸がそんなに勢い良く開けられるとは思ってもいなかった。驚いて飛び上がった。

「……柳ー鏡おーっ！」

そして現われた人物にも驚かされたが、そのものすごい剣幕にはもつと驚かされた。怒りが、その全身から滲み出ている……。大剣の手入れをしていた柳鏡は、その瞬間に思った。間違いなく殺されると……。

「な、なんだよ、いきなりっ……！」

なんとか平静を装って、その声をかける。対する彼女は、息を切らせて肩を上下させていた。自分が何をやったのかは全くもってわからないが、相当頭に来ているらしい……。

「馬鹿っ！柳鏡の馬鹿っ！馬鹿、馬鹿、馬鹿っ！」

現われて早々に喧嘩を売るとは良い根性だな、と思いつながらも、これ以上彼女を怒らせれば本気で八つ裂きにされかねないので、黙っている。

「なんでっ、なんで、なんで、なんでっ！」

そう言って彼の方へツカツカと歩き、詰め寄る……。そして。

「なんでこんなに、字が汚いのよーっ！」

彼の目の前に、手に持っていた答案を突き付ける。それを見て一目で自分の答案だと理解した柳鏡が、訊ねる。

「やつぱり……汚いか……？」

「当たり前でしょーっ！こんな、こんなっ……！」

彼の答案用紙は、敢えて題をつけるなら、ゲテモノ協奏曲。そこには、何匹ものおたまじゃくしやミミズが元気良く泳いだり、地を這う姿が描かれていた。……文字には、見えない……。

「仕方ねえだろ。俺、ガキの頃から字書くのが苦手なんだから。」
確かに、彼はいつも筆を持てば顔や手を汚す方が専門だった……。

だが……。

「読めないから……採点できない、って……。柳鏡、最初の課題は一点だよ……。」

景華が俯いた。肩が、先程とは違う震え方をしている……。その様子に柳鏡は困ったが、どうしようもないというのも事実だ。

「済んだ物は仕方ねえだろ。苦手なことだったし、他の課題で挽回すれば……。」

バンッ！

景華の拳が、激しく机を打ちつけた。

「苦手、苦手って……。さっきからそればかり……。そんな風じゃあ、優勝、できないよ……？」

「そんなこと言ってたって、こればかりは仕方ないだろうが。」「パアンッ！」

今度は、景華の平手が柳鏡の頬を強く打った。

「そんなこと言わないでよっ！ 苦手でも嫌いでも、私のために頑張りなさいよ、馬鹿っ！ 大っ嫌い！」

言うだけ言っと、彼女は行ってしまった。思い切り平手で打たれた頬よりも、心が痛い……。久しぶりに見た、彼女の泣き顔……。開けっ放しの戸口から、冷たい風が吹き込んだ。

夜になって、景華は寝台の上に膝を抱えて座っていた。ただし、考え事をしている訳ではなく、いじけているのである。柳鏡に代わって景華の警護をしてくれている明鈴^{メイリン}が、二つ分の入れ物にお茶を注いだ。そしてその片方を、景華の手に持たせる……。

「ありがとう……。」

つい先程まで泣いていたのだろう、弱々しく笑って見せた彼女は、泣き腫らした目をしていた。明鈴の方も椅子を引いて来て、彼女の前に腰掛けた。

「柳鏡は……私が誰のお嫁さんになっても、構わないんだわ……。」「いじけて、なおかつ自暴自棄に陥ってそんなことを言う……。彼の

心を疑っている訳でもないのに。

「それはないよ、絶対。もしそうなら、面倒くさがりなあいつが大
会に出る訳ないじゃない。」

そう言つて隣に腰掛け、彼女の頭を撫でてやる……。明鈴にとって
景華は、二人でいる時には女王陛下、ではなくかわいい妹、だった。
自分の弟にとつて、二人でいる時の彼女が、特別に愛おしいことを
除けばただの少女であるのと同じように……。

「だって……結果のこと、全然気にしていなかったし……。」
グスン、と鼻をならす……。

「でも、柳鏡が約束してくれたんでしょ？優勝する、って……。」
明鈴の問いかけに、景華はコクリと頷いてお茶を一口含んだ。その
温かさが、体中に染み渡る……。

「じゃあ、絶対優勝してくれるよ。景華のお願いならね。」

明鈴の笑顔に、景華も同じ表情を作つて応えた。どうやら、大分落
ち着いたようだ。

「ところで、どうして大会なんて開こうと思ったの？そんなことし
なくても、柳鏡と結婚する方法はあったよね……？」

チラリと戸口に視線を走らせながら、明鈴が訊ねた。

「だって、時間がすぐかかってしまふでしょう？それにね、柳鏡
に言われたの。正式に結婚した訳じゃないから、朝までは一緒にい
られない、って……。」

ブッ！

口に含んでいたお茶を吹き出してしまった明鈴は、隣で目を丸くし
ている景華に辛うじてこう言つた。

「あいつ……意外と手が早いわね……。」

その意味を理解したのかどうかはわからないが、景華の言葉は続い
た。

「わがままかもしれないけど、それが嫌だったからこうしたの。手
っ取り早いでしょう？」

「まあ、確かにね……。でも、柳鏡が負ける、ってことは考えなか

ったの？」

明鈴が軽く苦笑してからそう訊ねた。湯気が立つお茶を見つめて、景華は本当に幸せそうに微笑んだ。

「一度も考えなかったよ。だって……。」

言葉を切つて、さらに目を細める……。

「柳鏡が、一番だもん……。」

そう言いきつた彼女は本当に眩しくて、この顔を弟にも見せてやりたかつたな、と彼女は思った。

「目、冷やそうか。お水と布、もらつて来るね。」

明鈴はそう言つて景華の部屋を後にした。廊下に出て戸を閉め、正面の植え込みの中に剣を突き付ける……。

「盗み聞きするなんて、いい度胸ね……。」

植え込みの枝がガサゴソと音を立てて、柳鏡がその姿を現した。

「ばれてたんですか……。」

彼の目は、明鈴の肩を通り越して一枚の戸に向けられていた。中の彼女が、見えるかと思つて……。

「どこから聞いていたのよ？」

「ほとんど全部、ですかね……。」

どこかばつが悪そうに答える……。明鈴が、溜息をついた。

「しかし、あんたたちもよく喧嘩のネタが尽きないわねえー。ちょっと待つてて……。」

そう言つて彼女は渡り廊下を歩いて行き、曲がり角でその姿を消した。その言葉通り、彼女はそんなに間を空けずに戻つて来た。その手には、冷たい水がはられた桶と白い布……。

「ほら。景華、泣いて目がすごく腫れてるの。あんたのせいなんだからね、ちゃんと治してあげな。虎の刻になる頃には戻るからね、それまで景華のこと頼んだよ。」

「えっ？ちよつと、姉さんっ？」

戸惑う柳鏡の手に、彼女は持つて来た物を全て押しつけて去つて行った。仕方なく、彼女の部屋の戸を開ける。

「何しに来たのよっ？」

予想通りの歓迎っぷりだった。何も言わずに机の上に桶を置き、布をその中に浸す。それを硬く絞ってから、相変わらず寝台の上で膝を抱えている彼女の隣に腰掛ける。

「ほら、冷やさねえと……。」

「嫌。」

景華はそう言つて、柳鏡と反対側に顔を向けた。

「あんた、それ以上不細工になってどうするんだよ……。」

彼女の顔を自分の方に向けさせて、その瞼に冷たい布をあててやる。彼女は、今度は大人しくそれに従った。膝が解放されて、細い足が寝台から床に向かって投げ出される。

「私、今明鈴さんに話していたの。柳鏡が優勝しても、絶対に柳鏡のお嫁さんにはなつてあげない、つて……。」

「全部外で聞いていた……。」

「そう。聞いていたならわかったでしょ？だからっ……はっ？」

柳鏡の言葉に、景華は絶句した。全部聞いていたということは、まさか、最初から最後まで……？頬が熱くなる……。

「あんた、余計なことまで話し過ぎ……。」

「柳鏡には関係ないでしょ！盗み聞きするなんて、最低！もう出て行つて！さよならっ！」

その言葉を聞き終えた柳鏡が、立ち上がった。

「ちよっ……。」

彼女の呼びかけで、彼は立ち止まって振り返った。

「何も、本当に出て行かなくても……。」

「ああ、これを濡らし直すだけだ。」

そう言つて、彼女の瞼から熱を吸い取った布を、再び水にさらす。景華がふくれっ面になった。

「騙すなんて、ずるい。」

「別に騙したつもりはねえよ。」

また、冷たい布が瞼に優しく当てられる。視界が、白くなる……。

「不安にさせて、悪かった……。」

彼がどんな顔をしているのか、景華には見えない。でもその声音からは、彼の謝罪の気持ちが一十二分に窺える。

「もういいよ。無茶苦茶言ったの、私だもの……。無理に優勝しろなんて言って、ごめんね……。」

「無理じゃねえよ。」

彼のその言葉に、目を上げる。視界に、色が戻る……。

「残りの種目で全部一位を取れば、優勝だろ？全部一位になってやるよ。だから……。」

そこで言葉を切った彼が、ついと彼女から視線を逸らした。照れた時に特有の仕草で、黒いくせ毛の中に指を掻き込む……。

「だから、何？」

続きをなかなか言わない彼の顔を、真紅の瞳が覗き込んだ。彼の苦手な色。でも、一番好きな色……。

「だからっ……。そのっ……。ああ、もう！いいか？一回しか言わねえぞっ？」

彼女から意図的に目を逸らしていた彼だが、何を思ったのかその目を見つめた。その頬は、赤い。深緑の色が、彼女の視神経に心地良い刺激をもたらす……。吸い込まれそうになりながら、頷く。

「だからっ……。その、その時はっ……。その時は、大人しく俺の嫁さんになれっ！いいなっ？後から文句とか、絶対言わせねえからなっ！」

予想だにしなかった言葉。不器用で恥ずかしがり屋で、その上面倒くさがりの彼からは、一生もらうことができないと思っていた言葉……。思考が、停止する。再起不能。深緑の瞳が、だんだんとぼやけて映る。周囲が、歪む……。

「だああ、もう！泣くなよ、いい加減！俺、あんたを泣かせに来たみたいじゃねえか！」

慌てて涙を拭ってくれる不器用な手が、本当に心地良い。温かい、大きな手……。停止した思考が、ようやく復活する……。

「なるーっ……！柳鏡のお嫁さんになるーっ……。」

繰り返し、そう呟く。自分が言っていることは、もはや自分ではよくわからない。でも、彼はわかってくれたようだ。

「わかったからもう泣くなっ……その時になってから気が変わった、とか言うの、なしだぞ？」

「言わないよー……。」

ボロボロと涙をこぼすその姿は、小さな頃の彼女を想起させる。しかし……。

「まったく、大体なんでこんなに泣かなきゃならねえんだよ？俺、悪いことしたみたいじゃねえか。」

「だってえー……。」

辛うじて、彼に口答えする。

「柳鏡がそんなこと言ってくれるなんて、思いもしなかったもん……。」

どうやら、彼女を宥めるのにはまだ時間がかかりそうだ……。

真つ暗な室内で、柳鏡は軽く溜息をついた。自分に寄りかかったまま気持ちよさそうに寝息を立てている彼女を見て、苦笑する。もうすぐ、明鈴が指定した虎の刻だ。仕方なく、彼女の頭をそつと支えて寝台に寝かせようとする……。だが。

「……もう時間？」

枕に頭がつくか否かというところで、彼女が目覚ましてしまった。寝ぼけた顔で、目を擦りながら起き上がる。どうやら、目の腫れは引いたようだ。

「起こしちまったな、悪い……。もうすぐ姉さんが戻って来るんだ。」

大会が終わるのは、各種目を一日おきに行うから、八日後……。景華は、ふとそんなことを考えていた。そして。

「ねえ、柳鏡？」

「何だよ？」

面倒そうな、かと言って決して嫌そうではない返事が返って来る。
大剣を背負うその背中に笑いかけながら、言う。

「九日後の朝は、一緒にうんと朝寝坊しようね！」

何も答えないのは、承諾の証拠。彼は、そのまま出て行ってしまった。廊下に出てから、軽く左腕を振る……。彼女が寄りかかっていたので随分と痺れてはいたが、嫌な感じはしなかった。蘇るのは、柔らかい重さの記憶……。

「九日後の朝は、か……。」

先程彼女が言った言葉を、繰り返す。

「勝手に約束増やすんじゃないよ。面倒な奴……。」

しかも、わがままだ。小さく笑みがこぼれる。彼女のわがままを聞いてやれるということは、彼にとっては何よりも嬉しいことだった。一度は諦めた、彼の願い。それは、彼女のわがままを一生、一番そばで聞き続けてやるというもの……。彼の未練。昇龍を妨げた、一番の理由だ。月を見る。

「今頃、青龍は悔しがっているかもしれないな……。」

短い生涯を、なぜ選ぶ……。？あの言葉が、蘇る。青龍は、自分が後悔を思うと思っていたに違いない。だが……。

「生憎だったな。俺、今が一番幸せだ……。」

空を見上げて、かの神にそう声をかける。彼の言葉を受けて、月が輝いた。

次に行われた武の課題は、全員で総当たり戦を行ってその中で優劣をつけるというものだった。もちろん、一位は柳鏡だった。他の候補者たちもかなり腕の立つ者揃いだったが、辰南の龍神には敵うはずもなかった。

「くっそー！やっぱりお前は強いな！」

しりもちをついた状態で大剣を胸に突き付けられた凌江は、本当に悔しそうにそう言った。

「当たり前だ。そんなに弱い奴に陛下の護衛が務まる訳がない。」

「わがまま陛下の、か？」

柳鏡が手を貸して、凌江を助け起こす。この前の柳鏡と英明の会話を思い出して、凌江は彼にそう言った。

「その上、ドジで、無茶苦茶で、無鉄砲で……だっけ？」

続きを思い返して、彼に問う。景華が白い目でこちらを見ているのを知っていて、柳鏡は彼に答えた。悪意に満ちた、爽やかな笑顔で……。

「ああ。しかももの八つ当たりの常習犯で、じゃじゃ馬で、泣き虫で。その上、泣き顔とふくれっ面は世界一不細工ときている。」

ゴゴゴゴゴゴッ……！

背後から、怒りで迸る闘気を感じる……。背中に彼女の視線が刺さるのが感じられる……。だが柳鏡は、とびっきりの魔法を使った。

「だから、目が離せねえんだよ。」

なんと単純なのだろう、彼がそう言った途端に、背後の不穏な空気が一瞬でピタリと治まってしまった。その様子を見て、凌江が苦笑した。

「確かに、お前でなければ務まらないな……。」

結果、二位が英明、三位が凌江、四位が紅瞬、五位が大連となり、総合得点では柳鏡は六点で、凌江と並んで二位に躍り出た。一位の英明とは、まだ三点差がある……。

そしてその二日後、勇の課題が執り行われることになった。勇の課題の内容は、城の北にある山に分け入って、次の日の正午までに一番凶暴な動物を仕留めた者が勝ち、というものだった。柳鏡が、さりげなく景華に訊ねた。

「なあ、虎と熊っていうのはどっちが凶暴なんだ？」

「うーん……、虎、じゃないかなあ……？多分、虎が一番……。」

「そうか、わかった。」

普通に考えればありえないことを言っている柳鏡だったが、彼には自信があった。何しろ彼は景華と清龍の里で暮らしていた時に人食

い虎や熊の退治依頼を受け、その賞金で生計を立てていたのだ。それらのいるような場所の見当のつけ方も、大体はわかっていた。明日の朝まであれば、何とかなるだろう……。

「怪我、しないですね？」

人に聞こえないように俯いて小さくそう呟く景華に、笑いかけてやる。

「虎や熊ごときにやられる龍神がいるか、アホ。」

そう、彼は。彼女の、龍神……。

「うん、頑張つてね！」

笑って送り出す。そうすれば、彼が何倍も力を出せることを知っているから。他の候補者たちも、それぞれに出発して行った。

「ところで、どうしてこんな課題になさったのですか、伯父様？」

そう、この課題を決めたのは亀水族の長、帯黒だった。

「どんな動物でも良いと知りながら、より強い者に立ち向かおうとするのは勇気です、陛下。しかし、力量が備わっていないければそれはただの無茶なのです。自分の限界と向き合うこともまた、私は勇気だと思います。」

礼をとってそう答える伯父に、景華が笑いかけた。

「でも、清龍の里に私を匿ってくれていた時に、柳鏡はこういうことをしてくれていたんです。彼には限界がないわ。すごく、有利な課題……。」

「左様。陛下の龍神が動物ごときで限界を迎えるとは、私も思っておりません。陛下をお隠ししていた際に彼がどのようなことを行っていたのかは、凌江から聞き及んでおりました。ですから、このような課題にしたのです。」

豊かな深緑の髪が、揺れた。彼女が小首を傾げる……。

「普通なら、自分の息子が少しでも有利になるような課題を作るべきなのでしょう。しかし、私は思ったのです。彼以上に、陛下の御心に寄り添える者も、陛下をお支えすることができる者もない、と。ですから私は、一人の父としてではなく、一人の臣下として、

国民としてこのような課題を作らせていただきました。」

「感謝します、伯父様……。」

景華の彼女自身としての、そして女王としての言葉に、帯黒は礼をしただけで応えた。明日が、待ち遠しい……。

次の日、最初に戻って来たのは英明だった。彼は、自慢げに自分が狩った熊の首を掲げた。

「ご覧下さい、陛下。どうです？立派な熊でしょう？」

「ええ、本当に。」

柳鏡の方がすごいわ、と心の中で答えていながらも、虎神族との微妙な関係を保つために笑顔で答える。そこに、凌江が戻って来た。

「う、わ……。」

彼が持つて来たものに、彼女は絶句した。それは、大きな毒蛇だった。景華が身をすくませているのを見て、凌江が笑った。

「大丈夫ですよ、陛下。もう死んでいます。それよりも、私はさらにすごいものを見ました！」

凌江が目を輝かせてそう言った。景華は、それが何なのか目で問いかけた。

「清龍族の柳鏡殿が、巨大な虎を狩るところをこの目で見ました！あれは圧巻でした……。」

凌江はそう恍惚気味に言って、詳しい様子を語り始めた。

「ちいっ！」

柳鏡はそう舌打ちして横飛びに飛んだ。髪一筋の差で、鋭い牙が空を裂く……。彼は、汗に濡れた手で大剣の柄を握り直した。

「たかが虎のくせに、なかなかやるな……。」

ゾクリとするような冷たい、だが生き生きとした目。彼は、虎を相手に楽しんでた。ぺろりと舌を出して、乾いた唇を舐める。そろそろ、遊びは終わりにしたい。久々の狩りで少し遊び過ぎたようだ、だんだんと制限時間が気になって来た。いい加減に帰らないと、ま

た彼女に泣かれることになる……。

「悪いが、そろそろ時間だ。」

余裕たっぷりの笑みで、彼の隙をつこうとジリジリとその距離を詰めてくる虎を見つめる……。そして。

「恨むなよっ！」

「ガウウッ！」

どちらも、同時に地を蹴って飛び出した。そのまま空中で交差する……。鮮血が舞った。柳鏡の方は見事に着地するが、虎の方は無残にその場に崩れ落ちて、動かなくなった……。

「あの瞬間に、彼はおそらく神速の突きを繰り出していたのでしょー！しかも近付いて見ると、急所を一撃で仕留めているのです！しかし、その攻撃は早過ぎて目に入りませんでしたよ……。」

景華はニツコリと微笑んで心の中でこう呟いた。だって、私の龍神だもの、と……。そこで凌江が、何かを思い出したように口を開いた。

「そう言えば、自分の獲物を置いたら戻って来て手伝うように彼に頼まれていました。行って参ります。」

「待て、凌江。獲物をそのまま持って帰らずとも、何か大きさや動物の種類がわかるものがあればそれで良い。」

「それが、父上……。」

凌江がこちらに向き直り、父とその隣に立っている景華を振り仰いだ。

「何しろ見事な虎なので、その毛皮を婚礼の際に陛下に送る贈り物にしたい、と言っていたものですから……。」

凌江はそう言って駆け戻って行った。帯黒の指示で、何名かが彼の後を追った。彼らが入口から出たその直後に、紅瞬と大連の二人が戻って来た。どちらも大きな猪を仕留めたようだ、その耳と牙を持っている……。紅瞬の猪の牙の方が、僅かに長く見える。

「婚礼の贈り物、だと？ふん、まだ優勝してもいなくせに……。」

英明が、凌江が消えた方を見つめて面白くなさそうにそう呟いた。そして……。景華の位置から、黄金の地に黒の縞模様が見えた。それを見ただけで、景華の足はすくんでしまう……。そして、全身を返り血で真っ赤に染めた龍神が、戻って来た。狩りから帰って来たその姿を見て、あんなに汚したら洗濯が大変じゃない！と思ったのは、久しぶりのことだった。清龍の里以来……。

「只今戻りました、女王陛下。」

衆目がある以上、仕方なくそんな口調で話す。彼女が嫌がるのはわかっているが、こればかりは仕方がない。彼は、まだ彼女の臣下の身分なのだ……。

「どうぞこちらでご覧下さい。」

その言葉に恐る恐る足を踏み出して虎に近付く……。景華があまりにも怖がっているので、柳鏡がその手を取って虎に近付かせてやった。ある程度の距離で、景華の足がピタリと止まる……。

「アホ。死んでるものがそんなに怖いか？」

「死んでたって怖い物は怖いよ……。今にも動き出しそうなもの……。」

誰にも聞かれないような低い声で、そう話す。

「これとあの珊瑚の首飾りを、婚礼の贈り物としてあなたに贈る。そうしたらそれ、大っぴらに着けられるだろ？」

彼は知っていたのだ。彼女が彼の母親の形見である珊瑚の首飾りを、肌身離さず身に着けてくれているということ……。それは、常に彼女の襟の中に収められていたのだが。

「お気に召しましたか、陛下？」

その場にいる他の人々にも聞こえるように、大きな声で訊ねる。

「ええ、すごく怖いけれど……。」

「それは良かった。」

柳鏡が、随分と芝居がかった仕草で膝を折り、再び景華の手を取った。

「私が優勝しました暁には、こちらの虎の毛皮と、珊瑚の首飾りを

陛下への婚禮の贈り物にさせていただこうと考えております。」

そう言つて、景華の手の甲に唇を軽く寄せる……。周囲の空気が、動く。景華は、これでやつと柳鏡がこのような行動に出た意図がわかった。もちろん、他の候補への牽制だ。そして、これで景華の心が柳鏡に傾いたと考えさせることで、余計な焦りを生じさせようとしたものだつた。

「策士ね……。」

景華が笑つてそう言う。彼の耳にしか届かない、小さな声で。深緑の瞳が、そのまま彼女を見上げた。

「何とでも言え。あんたが変な約束させるからだ……。」
約束の九日後は、もう四日後まで迫っていた。

次の日には、四番目の課題である芸の課題が出された。馬術での競技は、柳鏡も得意としていた。

「行くぞ、颯！」

そう言つて、二人には非常に思い出深いあの馬を厩舎から連れて出る。そして、確認のためにその背にまたがった。颯は、脚力もバランスも最高の馬だつた。健康状態も申し分ない。

「颯で出るの、柳鏡？」

景華が寄つて来て、その胸を撫でてやる……。

「ああ。馬としての能力も高いし、俺と一番相性がいいからな。」

「ふうん……。」

なんとなく面白くなくて、短くそう答えた。その様子を見て、柳鏡が苦笑する……。

「なんだよ、妬いてるのか？」

意地悪く微笑んで、片眉を吊り上げて彼女にそう問う。不機嫌そうに口を尖らせるその様子が、とてもかわいらしい。馬にまで焼き餅を焼くところが、なおさら……。

「そうだよっ！」

あっさりと返つて来た肯定の言葉に、彼は正直言つて驚いた。妬い

てないよ！という答えを、彼は期待していたのだ。

「だって……。」

彼女の言葉が続くようなので、耳を傾ける。どうやら、その理由を教えてくれるらしい。

「颯と一番仲良しなのは、私だもの！」

ガクン、と彼の上体が揺らいだ。力が抜けるが、なんとか颯の背の上から落ちないように踏みとどまる……。そうか、そうだったのか……。

「そっちかよ……。」

試合開始前に、まさかの大ダメージ……。これが、試合に影響しなければ良いが……。颯の背から一度降り、なんとなくやるせない思いで出発地点に向かおうとする。

「柳鏡！」

人の期待を無邪気に踏みにじった彼女が、呼ぶ。いや、元々彼女にそんな期待をかけた自分が良くなかったのだろう……。いかにもけだるい、というように振り返る。左腕に彼女の体重がかけられて、彼の体がそちらに傾いた。左頬に、何かが触れる……。柔らかい、何か……。

「おい、あんた！人に見られたらどうする気だよっ？」

「大丈夫だよー、皆もう出発地点にいるもの。頑張つてね！」

そう言つて彼に背中を向けて、弾む足取りで戻って行く……。先程以上の、大ダメージ……。頬が熱い。危なく、本気で再起不能になるところだった……。気を取り直して出発地点に向かい、颯に乗る。

「おい、お前顔が赤いぞ？風邪でも引いたか？」

凌江が横から問いかけて来た。鼓動が、治まらない……。

「ああ、大ダメージだった。そしてその後に出た特效薬が効きすぎなんだよ……。」

凌江が肩をすくめる。先程のやりとりを見ていなかった彼には、話の内容がわかるはずもない。もっとも景華にそう言つても、何が？と、目を丸くされてしまふだろうが……。用意、の掛け声がかかる。

皆、一斉に姿勢を低くした。

「始めっ！」

五頭の馬が、一斉に飛び出した。皆一線に横並びで、最初の障害である石垣を迎える。この競技は障害物があるコースを馬で走り、先に着いた者から順番に得点をつける、という物だった。早くも最初の石垣で明暗が分かれた。柳鏡、英明が乗った馬は軽々と、しかも無駄なく石垣を飛び越えた。僅かに遅れて凌江の馬が着地し、高く飛び過ぎた大連と紅瞬の馬はかなり出遅れてしまった。

「意外とやりますね、柳鏡殿。」

隣からそう声がかけられた。これは虎神族の長、秦扇が決めた課題で、おそらくは息子が馬術を得意としていることから作った課題なのだろう、彼は余裕綽綽といった様子だ。

「前見ていないと落ちますよ？」

彼には視線を向けず、前方を見据えたまま柳鏡が言った。すでに、第二の障害である生垣が彼らの目の前に迫っていた。二頭の馬がそれを同時に飛び越える……。僅かに、英明の馬の鼻先が前に出た。

『柳鏡！』

彼女の不安げな喚び声が耳に響いた。実際に呼ばれた訳ではなく、頭に直接その声が響く……。負けられない。彼女のために、なによりも、自分のために……。折り返し地点の大きな木が見えた。これを回って、元来た道を戻れば良い……。木の周りを回るために、英明の馬の速度が若干緩められた。しかし、柳鏡は速度を落とさない……。二人の位置が逆転した。

「行くぞっ、颯！」

颯は、見事な急旋回を見せた。その場に砂煙をもうもうと立てて、走る。生垣を越え、石垣も越える……。そして。

「一着、清龍族の柳鏡殿！」

たまた、っと彼女が駆け寄って来るのが見える。柳鏡は颯の背から降りて、彼女を迎える準備をした。しかし……。

「すごいわ、颯！一番だなんて、偉い！」

柳鏡の期待とは裏腹に、彼女は自分の馬に抱きついた。本日二度目の、裏切り……。その様子が、妙に腹立たしい。ひきつった笑みを浮かべて、彼は彼女に訊ねた。

「おい、俺には一言もなしか……？」

「あつ、柳鏡もお疲れ様！」

声をかけられてから気が付いたかのように、そう付け足す……。彼女に悪気がないのはわかっている。だが……。

「馬の後かよ、俺は……。」

そう呟いた彼に、彼女は焼き餅？と楽しそうに聞いた。しかし、彼にはすでに答える気力すら残されていなかった……。

結局、二位以下は英明、凌江、大連、紅瞬となり、総合得点では一位が英明で十七点、二位の柳鏡が一点差で彼を追いかけて、三位が十点の凌江で、四位に九点の大連、五位の紅瞬は八点となっている。もし次の課題で柳鏡が一位を取り、英明が二位となって同点になっってしまったら、これまでの功績からいけば柳鏡の方が評価が高いので、彼を優勝とすることができる。後は、柳鏡が一位を取れば良いだけとなった。

「いよいよ明日だね、景華。」

忠の課題の前の夜、景華の護衛にはいつものように明鈴がついてくれていた。彼女の言葉に、景華は笑顔で答える。

「うん！明日柳鏡が優勝してくれたら、明鈴さんをお願い事があるの！」

「え、私に？」

目を丸くする彼女に、さらにニツコリと笑いかける。

「そう、明鈴さんに。」

「えー、なにに？」

寝台の隣に腰掛けてくれた彼女の目を見て、その問いに答える。

「私が柳鏡のお嫁さんになったら、明鈴さんは義理のお姉さんでしょう？だから、明鈴さんをお姉ちゃん、って呼びたいの！私、ずっ

と兄弟が欲しかったから。ねえ、いいでしょう？」

ギューツときつく抱き締められる。

「もちろんだよ、景華ー！こんなにかわいい妹なら大歓迎だよ！私も女の子の兄弟がいなかったから、嬉しい！」

「えへへ、お姉ちゃん！」

彼女たちがのんきにこんな話をしている間に、夜は更けて行つた。

そして、いよいよ朝がやって来た。大会最後の種目、忠の課題が執り行われる、朝……。天気が良いおかげで、温かい日となった。外に特別に設置された競技場で最後の課題が行われるということで、朝からそちらに向かつている候補者もいた。

「柳鏡、緊張してない？大丈夫？」

朝食をとっていた柳鏡の元に、景華がやって来た。彼女の方が、よほど緊張しているように見える……。

「するかよ、緊張なんて。あんたの方がよっぽどヤバそうだぞ？」

「当たり前だよー、私の一生が決まっちゃうんだから。まあ、柳鏡が失敗しなければいいだけなんだけど。」

真正面に腰掛けて、真剣な口調でそう言う。思わずその真面目な顔に吹き出してしまった。

「ちよつと、なんで笑うのよ！」

「いや、あんた口でそう言っている程緊張してないだろ？」

「な、なんでわかるの？」

慌てたようにそう言う彼女に、笑いを噛み殺しながら説明してやる。彼が負けるだなんて全く考えていない彼女は、ぷうとふくれっ面になった。

「あんた、演技に集中し過ぎて顔がクソ真面目になり過ぎなんだよ。大体、試合前にこんな所に来て大丈夫なのか？」

「あ、それは大丈夫。他の候補者たちの様子も見て回って来たから。皆緊張してたよ。まあ、一人全く別の人種がいたけど……。」

「あんな奴の所にまで行つたのかよ……。」

彼が不機嫌になった理由は、彼女が英明の元も訪れた、ということだった。おそらく、いつもの軽薄な口調で彼女に接したに違いない。想像しただけで、吐き気がする。

「あんだ、大丈夫だったのかよ……？」

「へ？何が？」

柳鏡が何をそんなに不安がっているのか、景華には全く想像もつかない。

「……あいつ、軽薄な口調であんたみたいな奴にまで迫りそうだったから……。」

「あんたみたいな奴にまで、って、随分失礼な言い方ね！別に何も言われなかったよ？今宵陛下の御元へどうのこうの、とか言っていたけど……。」

「十分迫られてるじゃねえか……。」

白い目で彼女を見つめる。彼女の鈍さは今始まったことではないが……。

「え、そうだったの？私、寝ぼけていらっしやるようだから手水を持って来させます、って言うて来ちゃった。……ひどいことしたかしら？」

「ブツ……！あんだ、それは最高にひどいな！英明の奴、今までにそんなこつ酷い振られ方したことないと思うぜ？」

嬉しそうにそう笑って、彼はその大きな手で景華の頭を撫でてくれた。髪が乱れる……。

「だってー、わからなかったんだもん！」

むくれて彼にそう反論する。その様子を見て、彼がその表情を一層緩めた。

「あんたが鈍いのは昔から知ってるって。被害者は俺だけかと思っただが、そうでもないようだな。」

「柳鏡に迷惑かけたことなんてないよ！」

彼が再び冷えた視線を彼女に向けた。その両頬が、乱暴に彼の手に挟まれる。

「あんたがそれを言うのか？あんたの鈍さで俺がどれだけ苦労した
と思っっている？」

「知らないよ！大体、柳鏡には鈍さで迷惑かけたことないったら！
彼女の頬を挟む力が、さらに強くなる。いい加減、腹が立ってきた
……。」

「じゃあ聞くが、あんた俺の気持ちにいつ気が付いた？ガキの頃か
？清龍の里にいた時か？それとも母さんの珊瑚の首飾りを渡した時
かっ？」

景華が首を横に振る。その答えは、予測済み……。

「龍神の紋章のせいで出て来た、青い鱗を見せた時じゃないのか……
……？」

そう、あの時の他にあるはずがない。それまでも気付く機会はい
くらでもあったが、鈍い彼女ならあの時がやっただろう……。しか
し、その問いにも彼女は首を振ってみせた。その向きは、横……。
思わず、彼女の頬を放した。

「おい、じゃあいつだって言っただよ？」

苦笑いして、彼女が答える。どうやら、自分がその鈍さで彼に迷惑
をかけていたということがようやく自覚できたらしい。

「えっと……柳鏡が龍神になっちゃうのを、止めに行った時……。
固まる。それから、ようやく言葉を見つける。」

「嘘だろ……？」

「いや、本当……。」

大きく溜息をつく。果てしない、脱力感……。長年自分の片思いだ
ったのはわかってた。だが、あまりにもひどい返答……。虚しさ
が、彼の心を吹き抜ける……。

「いや、あんたに少しでも期待した俺が馬鹿だったんだ……。そう
だ、あんたの鈍さをここまで痛感しておきながら、あんたに期待し
た俺が……。」

「あ、えっと……ごめんね？柳鏡……。」

苦笑したまま彼女がその手を胸の前で合わせた。もはや、笑うしか

ない……。

「あんななあ……。いや、もういい。これ以上言ったらきりがない。あんたの鈍さにはとくに諦めがついていたんだ。ただほんの少し、その見極めが甘かっただけだ……。」

「何よーっ！さっきから聞いていれば人のことを鈍い、鈍いつて！随分な言い草じゃない！そういう柳鏡だって、私の気持ちなんて気付きもしてくれなかったじゃない！」

ばつが悪くなつて、彼女はついに怒り出した。これは、八つ当たりに近い……。その言葉に、柳鏡が苦笑する。

「清龍の里。具体的にいつからつていうのはわからねえけど、亀水の里に行く前後位から。違うか？」

「う……合ってる……。」

完敗。いや、初めから彼には敵うはずもなかったのだ。黙り込むその様子を見て、柳鏡がまた苦笑をもらす。

「まあ、今更気にするな。……そろそろ行くか。時間だろ？」

「うん……。」

立ち上がって戸口に向かって歩く彼の背を見つめる。大きくて広くて、温かい背中。それが……。

「好き……。」

小さく呟いた彼女に、彼が振り返った。

「なんだよ急に。気持ち悪い……。」

聞かれてしまったことに対する照れ隠しに、その背中を思い切り叩く。

「何するんだよ、乱暴だな！あんな、そういうところ姉さんに似てきたぞ！」

「いいの！だって、明鈴さんは今日から私のお姉ちゃんなんだもの！絶対優勝しなさいよ！」

彼が笑った。優しい、心地良い微笑み……。

「……わがまま陛下の仰せの通りに。」

秋晴れの空が、その誓いを見守っていた。

競技場には各候補たちと部族長たちが、すでに集まっていた。景華のために用意された席の隣には、月桂樹の冠が置かれていた。これを、景華は優勝者の頭に被せてやることになっていた。候補者たちに、木刀が一本ずつ配られた。皆がそれを見て一様に目を見張る。「これより、忠の課題を行います。候補者たちは、その木刀を持って競技場の中にお入り下さい。」

課題を作った者からそう説明をするように言われた景華は、言われた通りに説明をした。話が、続けられる……。

「それでは、今回は全員乱戦で戦っていただきます。木刀が手を離れた時点で負けです。勝敗がつくまでは、決して競技場の中から出ることのないように。木刀での決闘だなんて馬鹿らしいと思う方もいらっしやると思いますが、私からの命令に忠実に従って下さい。それでは、始め！」

全員がバツと後ろ飛びに飛んで、距離を開けた。油断なく相手を見据える。

「お前に協力するぞ、柳鏡。陛下を手に入れるまで、あと一歩だろっ？」

凌江が、そう言って柳鏡の背中の方に回ってくれた。彼らは、他の三人の候補に囲まれていた。

「恩に着る。なんなら、今度一騎打ちで負けてやろうか？」

真正面にいる英明を油断なく見据えながら、そう軽口を叩いた。凌江は、大連と睨み合っている。紅瞬も、柳鏡の方に回って来た。

「そりゃいいや。辰南の龍神を倒せば、俺の評価も上がるかもな。」

二人が、バツと逆方向に駆け出した。案の定、英明と紅瞬は柳鏡を追って来る。とりあえず適当にこの二人の相手をしておいて、凌江が大連を倒して戻った時に紅瞬を引き受けてもらえばいい。そう思った時だった。

「きゃあっ！」

彼女の、悲鳴……。二人の様子を窺いながらも、そちらに視線を走

らせる。なんと、どこから入ったのかわからないが、彼女が腰掛け
ている席が刺客に取り囲まれている。その人数は、三人。その手に
は、抜き身の剣……。

「まずい！候補に渡したりしないように、と、部族長たちは武器を
没収されている！だが……。」

勝敗がつくまでは、決して競技場から出ることのないように。その
命令に対する、忠。もし彼女を助けに動けば、それが足りないと思
なされてしまう……。課題をこなせなければ、失格。それは、彼女
の期待に添えないということの意味する。

「柳鏡っ！」

彼女が、喚んだ。足が、勝手に彼女の元へと動く。英明が笑うのが、
目の端に映った。たとえ、優勝できなかったとしても。彼女が、他
の人間のものになってしまったとしても。それでも、守りたい。

「怖い！」

久しぶりに味わった、恐怖という感覚。抜き身の銀の刀身は、彼女
に今も一年前の恐怖を想起させる。足が、震える。誰も、自分を助
けに動くことはできない。もちろん、彼も……。剣が、振り上げら
れた。恐ろしさに、ギョツと目をつぶる。

「柳鏡っ！」

無意識に喚ぶのは、いつもその名前。彼女の体が、強いものに引き
寄せられる。一年前のあの夜と同じ、あの感覚……。まさか。

「ダメ、柳鏡！戻って！失格になっちゃう！」

見上げた先には、思った通りに深緑の瞳。彼女を抱えたまま、なん
とかその剣撃をかわした。

「アホっ！優勝したって、あんたが生きていなければなんの意味も
ないだろうが！考えろ！」

「柳鏡が優勝しなきゃ意味ないの！戻って！」

大好きなその腕のその感覚を、必死で自分から引き離そうとする。
そうしなければ、この腕に抱き締められることが、永遠にできなく
なるから……。

「あんだ、俺を喚んだらろっ？聞こえたぞ！」

「っ……！」

反論できない。彼女は、確かに無意識のうちに彼を喚んでしまったのだ。その言葉はとても嬉しいのに、現実が辛い。その時だった。ブオーツ！

試合の終了を知らせる、角笛。刺客たちがそれを聞いて、いつぺんに剣をその鞘に収めた。何が起きたかわからずに、固まる二人……。連瑛が、前に歩み出た。

「陛下、これで私が作った忠の課題が終了いたしました。課題のためとはいえ陛下に刃を向けたこと、お許し下さい。」

「課題、ですか……？」

景華が首を傾げる。その体は、まだ柳鏡の腕の中に預けられたままだった。二人とも、その感覚が自然過ぎて気付いていない……。

「はい。恐れながら、我々が忠節を誓うべきは陛下が下された命ではなく、陛下ご自身。陛下の厳命があっても、我々は陛下をお守りするために動くべきなのです。各部族長にはその旨伝えてありますので、武器を預けて陛下のために動かないようにして下さいなのです。」

「父上、つまり……。」

柳鏡が口を開いた。そこでようやく景華を抱き締めたままだったことに気が付き、慌てて放す。

「つまり、この課題は陛下の御為に行動するかどうかを見極める物だった。そして、結果は見ての通りだ。お前以外の候補は、まだあの競技場の中にいるぞ……。」

連瑛の指差す先には、四名の候補が狐につままれた顔をしている様子があった。

「じゃあ……柳鏡が、優勝……？」

ようやく状況を掴んだ景華が、そう言葉を発する。その様子に、連瑛が満面の笑みで頷いた。そして、月桂樹の冠を差し出す……。

「陛下、どうぞ私の息子に冠を。彼が、優勝者ですよ……。」

大きく一息ついてから、冠を受け取る。その動作が、ひどく緩慢だ……。手が、小刻みに震えている……。

「俺では不満ですか？女王陛下？」

柳鏡が、いつもの意地悪の延長でそう言った。しかし、その頬は上気している……。

「そうね……。仕方ないから、あなたでいいわ……。」

対する景華も、いつものように素直ではない口調でそれに応じた。手に持った冠を、黒のくせ毛の上に載せようとする。しかし、意地悪な彼は決して屈んでくれようとはしない。景華がふくれっ面で文句を言おうとしたその時だった。

「きやつ。」

浮遊感が、彼女を襲った。柳鏡に抱き上げられて、その深緑の瞳を見下ろす……。

「これで届くか？チビの女王陛下？」

いつもの彼女なら、ここで憤慨していたことだろう。だが……。

「うんっ！」

そう言って笑顔をはじかせて、彼の頭に冠を載せる……。

「おめでとうっ！柳鏡っ！」

「ああっ！」

彼も、今までに見せたことのないような笑顔で頷いた。

シヤラ……。

金鎖の音が、廊下から響いて来る。その後に、衣擦れの音……。

「陛下、柳鏡様がお越しになりました。」

「あ、どうぞ。お通しして……。」

スツと静かに戸が開けられる。景華の鼓動が、高鳴った。盛装させられた彼は、普段よりも勇壮で、見事な花婿ぶりだった。それなのに面倒なことが嫌いな彼は、いかにも不機嫌だといわんばかりの仏頂面だった。

「おやすみなさいませ。」

そう言つて、彼を案内してきた女官は部屋を後にした。柳鏡は、その場に留まつて動かない。しばらくして、彼が静かに口を開いた。

「……もういいか？」

その言葉に、景華が耳をすませる。女官たちの足音は、もうしない。

「うん、もう大丈夫。」

「ああ、かつたりい！」

彼女の返答を受けるや否や、彼は手に持たされていた杓を投げ捨て、被らされていた冠を乱暴に外した。その金鎖が、シヤラ、と音を立てる。そのまま今度は上衣の襟に手をかけ、止め金を外す。その乱暴な彼らしい仕草に、景華は思わず笑つてしまった。

「ああ、楽になった。まったく、なんであんたの所に来るだけで、あんなに面倒くさいことをしなきゃならねえんだよっ？」

そう言つて、彼女の隣に腰掛けた。寝台が、少し軋んだ音を立てる。「確かに、柳鏡は嫌いそうだもんね。でも……。」

せつかく着せてもらったんだから、もう少し着ていてくれれば良かったのに……。その言葉を、彼女は飲み込んだ。そんなことを言つたら、怒られそうだ。彼女も盛装させられていたが、それに対する言葉も、何もない……。

「おい、あんたもそんなものいつまで着ている気だよ？ だるいだろ？」

一番内に着る綿の着物だけになった彼は、ひどく快適そうだ。

「うん、そうだね……。」

そう答えはするものの、まだ着ていたかった。彼から、何か言葉が欲しい……。もっとも、不器用で恥ずかしがりな彼にそんなことを期待するのも間違いなのだろうが……。

「ほら、さつさとしろよ。そんなものいつまでも着ていられたら、その……調子狂うだろうが。」

目を逸らす。その仕草が、彼が彼女をどう思っているのかを表している。

「えへへ……。かわいい？」

ふざけてそう訊ねる。アホか、という答えが返って来た。ここまでは、彼女の予想通り……。その返答に満足して、彼女も綿の着物だけになる。その間に、彼の口から続きがこぼれた。彼の視線は、反対側の壁に向けられている……。

「ほら、馬子にも衣装、って言うだろ？ あんたみたいな奴でも、ちゃんとした服着たら……まあ、あれだ。その……綺麗に見えないこともない……。」

その言葉に、プツと吹き出してしまふ。照れ屋な彼の、精一杯の褒め言葉……。寝台に膝を抱えて、座る。顔が赤い彼を、隣に眺める。「なんかさ、普通はこういう時って緊張するものなんだろうけど、今更なんだよね。」

「ああ。今更だな……。」

隣から返って来るぶっきらぼうな答えが、嬉しい。今日から永遠に、彼女の隣からはこんな答えがずっと返って来るのだ……。

「ねえ、柳鏡。」

足元を見つめながら、彼に呼びかける。視線が自分に向けられたのが、わかった。

「明日は、何時に起きようか？」

そう明日は。約束の、九日後……。彼が微笑んでくれるのが、空気の流れだけでわかった。

「何時でも。わがまま陛下の仰せの通りに。」

視線を上げる。そして、深緑の瞳を捉える。その瞳に、笑いかけた。彼女のその表情は、今まで柳鏡が見た彼女の中で、一番幸福そうに見えた。

そして、それから一年の月日が流れた。

「ちよ、ちよつと柳鏡っ、起きて！ 柳鏡っ！」

朝の廊下に、元気な声が響き渡る……。

「なんだよ、うるせえな……。もう少し寝かせてくれよ……。」

「ダメーっ！ 朝食の時間があと半刻しかないの！ また朝御飯抜きに

なっちゃう！」

相変わらず寝起きの悪い彼を、布団をめくって無理矢理起こす。どうやら、彼らの寝坊は九日後の朝だけに限らず、常習化してしまつたようだ……。彼は恨めしそうに彼女を見上げ、乱暴に起き上がったから大きく欠伸をした。

「面倒だなあ……。あんたが調子に乗って作つた時刻法を撤廃すればいいんじゃないか？それに、朝食位抜いたってどうってことないだろ？」

「ダ・メ・な・の！」

いい加減な彼の様子に、景華は猛反対した。

「規則正しい生活を国民に勧めるなら、まず私たちがお手本を見せなきゃ。それに、朝食抜きだったら気分が悪くて、おえー、つてなるでしょ？」

その時、彼女の口内に何かが込み上げてきた。慌てて口元を押さえる……。何とか治まつたようだ。

「うえーっ……。」「

柳鏡は、単に景華が吐く真似をただけだと思っていた。しかし。何かがまた、喉元までせり上がってくる……。彼女は、口元を押さえて今度は俯いてしまった。それも治まってから、彼を見上げる……。

「気持ち悪い……。」「

「ほう、朝から人に喧嘩を売るとは、良い根性だな……。」「

「うつ……。」「

彼女がまた俯いた。顔色が悪い。そこで彼は、彼女が本当に調子が悪いのだということに気が付いた。

「おい、待てよ……。あんた、ここで戻すなよ！」

柳鏡はそう言つて景華を抱え、勢い良く廊下に飛び出した。そして、渡り廊下の欄干からその身を乗り出させる。あまりの勢いに、近くを通りかかっていた女官が飛び上がった。

「医師を呼んでくれ！あと、薬師もっ！」

彼女は頷いて、パタパタと駆けて行った。景華の背を撫でてやる……。

「いいか？ 戻す時はせめてここからにしろよ！ もう少ししたら、医師が来るはずだから……。」

「ふええー、気持ち悪いよう！」

情けない声を上げる彼女を、そう言つて力付ける……。どうやらこのドタバタでは、彼らは今日も朝食にはありつけそうもない。だが、そんなことよりもはるかに素晴らしい知らせがもつすぐ舞い込むのだから、それも良しとしよう……。

物語の本当の終わりは、幸せに煌めいて……。

外伝 わがまま陛下と龍神 物語の本当の終わり（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。異国恋歌〜龍神の華〜の番外編第一弾をお届けします。今回はかわいらしく、をコンセプトに書かせていただきました。いかかでしたか？次回は景華たちの幼少期のお話を書きたいと思っています。そちらもお読み下さい。もしよろしければ、ご意見、ご感想などお聞かせ下さい。ここまでお読み下さった皆様、どうもありがとうございます。

外伝 爆弾陛下と龍神 わがまま姫の日記帳

「ようし、始めよう！」

冬のある日、彼女の部屋からそう元気のいい声が聞こえてきた。そして、それに面倒そうに答える声も……。

「どうせあんたのことだから、なんでもかんでも出て来る内に収拾がつかなくなるのがオチだろ？」

「うつ……。」

返答に詰まってしまった。確かに、あれこれと懐かしい物が出て来る内にそちらに集中してしまって、片付けが手につかなくなってしまう、ということはしょっちゅうあった。彼は、彼女のそんな様子も全て見て来ている……。

「大体、なんであんたが急に片付けなんか始めたんだよ？ そんな珍しいこと始めるから、今年は城にも雪が降ったんじゃないか？」

外には、チラチラと白い雪が舞っていた。辰南の国で、城の辺りに雪が降ることは非常に珍しいことだった。冷え込みがかなり厳しい……。その言葉で寒さという物の存在を思い出して、思わず肩を抱いて身震いする。

「この部屋じゃあ他国からのお客様がいらした時に手狭だから、って言われて、別の部屋に引越すことになったの！ ほら、文句ばかり言っていないで柳鏡も手伝ってよ！」

景華がふくれっ面で言った言葉に、彼は仕方なく手近な書物の山に手をつけた。どれも政治に関する本や兵法書ばかり……。その中に一つ、変わった装丁の本を見つけた。どこか見覚えがある、赤い花の押し花が表紙に飾られている……。

「あれ、確かこれは……。」

「ああーっ！ ダメっ！」

景華が、彼の手から慌ててその本をひったくった。その様子が、何かその本がただならぬ物だということを窺わせる……。片眉を吊り

上げて、彼は意地悪に笑った。

「ほう、それはもしか、隠し事が……？」

「えっ、違うよ！ほら、続きしなきゃ！」

苦笑いして誤魔化そうとする彼女に向かって、ある紙切れを突き出す。

「ほら、夫婦の約束事第十七条。ここに隠し事はしない、って書いてあるぞ。確かこれは、あんたが決めたんだったよな……？」

彼が突き出した紙切れには、細かい字でびっしりと二人の間になされた約束事が綴られていた。あの大会から、二月が経過していた。

景華の結婚相手を決める大会で柳鏡は見事優勝し、二人は毎日犬も食わない喧嘩をしながら仲良く暮らしていた。

「うっ……。な、なんでそんな物持っているのよ……？」

「こんな三十三条もあるような物、面倒くさくて覚える気もしねえよ。それなら、持って歩いた方が早いだろ？ほら、こうしてあんたに突き付けることもできる訳だし。」

さつとその顔色を変えた彼女に向かって、利き手である左手を差し出す。本を渡せ、ということだ。

「お、怒らない……？」

「それは内容次第だな。なんの本だよ？」

いい加減手がだるくなってきた。初めは何の気もないただの意地悪だったはずなのに、彼女があそこまで隠そうとするものだから、気になって仕方なくなってしまうたのだ。

「日記帳……。」

「は？あんたもそんなものつけてたんだな。大体、片付けなんかするからそんなものが出てきたんだろうが。」

渋々と柳鏡の手にそれを預けてから、彼女はさつと自分の元いた場所、柳鏡の手が届かない場所まで逃げた。

「だって、部族長たちが帰郷して閣議がお休みの今でないと、ゆっくりできないじゃない。」

各部族長たちは年末年始を家族とともに過ごすために帰郷していて、

そのために閣議が行えないので、暇潰しのついでに部屋を移ってしまおう、というのが彼女の考えだった。柳鏡が、日記のページを開いた。景華は誓った。できる限り、無視をしようと……。

「……。」

無言でページを繰り続ける彼の指先に、だんだんと力が込められて行く……。不穏な空気……。

「おい……。」

無視。なるべくなら、今は彼に近付かない方が良い……。

「うおい、こら。」

歌を口ずさみながら、片付けに集中しているふりをする。だんだんと、彼の周囲に暗雲が立ち込めて行くのがわかる……。

「景華さん？辰景華さん？」

彼に名前と呼ばれたのは、かなり久しぶりだ。最後に呼ばれたのがいつだったのかも覚えていない程……。本当は喜んで返事をしたいが、今は堪える……。

「ダメか？じゃあ、女王陛下？」

笑顔が、冷たい……。だが、彼はなんとしても景華に返事をさせるつもりらしい。ついに、年貢の納め時だ……。

「な、なあに？あなた。」

声が緊張で上ずる。普段から彼をあなた、なんて呼んでいる訳ではないが、ご機嫌取りのために旦那様扱いをする……。

「ほう、ちゃんと聞こえていたんだな……。ちよつとこつち来いや……。」

笑顔なのに、冷たい物が内包されている。彼の手招きが、怖い……。

「あ、えつと……荷物の山から抜けるのが大変で……。」

「さっきこれを取りに来た時は早かったよな……？」

苦笑して苦しい言い訳をする彼女に、手に持った日記帳を指差して示す。万事休す、だ……。恐る恐る立ち上がって、彼の方へ歩く。

「ほら、ここに座れ……。」

「え、遠慮するわ。私重いから、柳鏡大変でしょ？」

自分の膝の上に彼女を招く彼にそう答えて、ギリギリその手が届かない所に正座する……。

「いいから。遠慮することはないぞ？」

黒い笑顔で、彼がそう言う……。

「あ、謹んで辞退させていただくわ。」

死にたくない、という一心で、彼に断りを入れる……。

「俺はあまり気が長い方じゃないんだがなあ……。怒らない内に、素直にお兄さんのお膝に座っておいた方が身のためだぞ……？」

いや、醸し出している空気がすでに激怒していますよ、お兄さん……。そんなことを思っても、言ってしまうえば大剣の錆にされてしまうので、口を固く閉ざしておく……。

「ああ、ご希望なら俺がそっちに動いてやることも可能だが、そんなことをすればただじゃあ済まないこともわかってるよな、奥さん？」

なあに、あなた？に応酬すべく発動した奥さん、という言葉……。完敗だ……。いや、勝とうと思っていた彼女が間違いだったのかもしれない……。死刑台への階段を登るように、ゆっくりと彼の元に動く……。

「さあ、説明をしてもらおうか？これは、一体なんだって……？」

「に、日記帳……。」

彼の手の届く範囲に移動するや否や、即効で捕らえられてしまった。もう、逃げられない……。

「ほう、これが日記帳か……。？だが、俺が見た所これには……。」

ぶにゅつ。彼の空いている右手に、頬をつままれてしまった。ぐにぐにと、何度も引つ張られる……。

「俺の悪口しか書いてないじゃねえか！どういふことか説明してもらおうか、なあっ？」

「ぼ、暴力反対ーっ！」

「問答無用っ！」

バタバタと暴れて彼の膝からなんとか逃れようとする景華を、しっ

かりと捕まえる……。彼女の日記帳は穴を開けた紙を集めてひとまとめに綴じたもので、最新のページは彼女がこの城を脱出した当日を含む一週間のものだった。

「よくも毎日毎日ここまで違うことが書けたな！」

「だって柳鏡が毎日毎日違う意地悪をしたんだもん！」

「言い訳するんじゃない！」

景華が諦めたらしく、大人しく動かなくなった。それで柳鏡もやつと彼女の頬を放した。彼女の指先が、懐かしむようにその表紙の押し花を撫でる……。

「確かこれって……。」

柳鏡の視線も、白い指先に当てられた。

「ああ、確かこの前趙雨たちと話になったよな。あんたが人騒がせにも行方不明になった時に持っていた花だろ？」

「う……。人騒がせ、は余計！しかも、あの花じゃないし……。」「口を尖らせて、それでもその表紙の花は優しく見つめる……。しかし、あの時以外に彼女がこの花に触れる機会があったらどうか。城の庭園にある花ではないのに。」

「じゃあ、いつのだよ？」

いつ彼女が他に城を抜け出す機会があったのか、と思って訊ねる。もし彼女があのも城を抜け出していたのなら、自分の管理不行き届きだ……。

「覚えてないの？あの後、柳鏡がいっぱい持って来てくれたじゃない。私が持って来たのはしおれてひどかったから、柳鏡がくれたやつで押し花したの。あ、日記にもつけてあるかも。」

二人で、そのページを探す……。四つの目が、どんどん後ろに行く程幼くなっていく文字を見て行く……。

「あれ、何歳の時だったかしら……？」

「あんたが六歳の時だぞ。……お、これじゃねえか？」

柳鏡が、あるページを指差した。六歳の少女が書いたにしては、美しい文字が記されている。

「あんた、字だけは綺麗なんだよな。」

「少なくとも、読めない、ってことはないわね。」

これは、嫌がらせ。彼の絵画作品、ゲテモノ協奏曲、に対する……。
「あんた、まだあのこと根に持ってたのかよ……。読むぞ？六歳、七月十二日。今日は、珍しく柳鏡が優しくて気持ち悪かったです。

……この頃から良い根性してるな……。私が欲しがった花を、たくさん持つて来てくれました。もう行方不明になるなよ、なんて言われました。余計なお世話です。……さすがあんただな……。」

あはは、と笑って誤魔化す……。確かに、今とほとんど変わっていない……。

「でも昨日も助けに来てくれたし、今日も花を持つて来てくれたから、柳鏡は本当は優しいのかもしれない。……前言撤回です。散々文句を言われたのを忘れていました。……あんた、死にたいのか……？今日はこれで終わります。」

「あつ、柳鏡が助けに来てくれた時のこと、覚えてるよ！」

あまりにひどい日記の内容だったので、彼の思考を切り替えるために別のことを言う。

「あの時、暗くなっちゃって怖かったんだ。あれから暗いのが怖くなつたの……。」

「ふえ……。ここ、どこ……？」

気付けば、彼女は全く知らない場所まで来てしまっていた。辺りはすでに暗くなっている。初めは城が見える範囲で遊んでいたが、花を摘んで歩く内に夢中になり過ぎて、気付けばかなり奥まで来てしまっていたのだ。

「帰らなきゃ……。お父様、お母様……。」

ふらふらと、当てもなく歩く。夜の森は、六歳の少女には十二分に恐ろしかった。暗さで、足元もおぼつかない……。

「あつ！」

ドサッ！

彼女がドジなのは昔からのようだ。足をもつれさせて転んでしまった。左の足首が、ジンジンと痛む……。どうやら、足をくじいてしまったらしい。もう、歩けない……。夜の闇は、一人で座りこんでいる彼女に迫って来る……。

「ふえっ……。怖いよう……。お父様、お母様っ……。」

涙が出る。城から出てはいけない、とあれほど言われていたのに。こんな悪い子の私は、誰も迎えに来てはくれない……。

「やだぁーっ！お父様！お母様！」

そして。

「柳鏡っ！」

彼女がこんな時に喚んでしまうのは、普段頼りにしている趙雨や春蘭ではなく、決まって柳鏡だった。それも、今も昔も変わっていない……。

「……！」

彼女の喚び声が、彼の耳に届いた。そのまま、駆け出す……。

「あつ、柳鏡！どこ行くの？」

後ろから春蘭が呼び止める声が聞こえたが、振り返って説明している暇はない。彼女は、泣きながら助けを求めているのだ。一刻も早く助けに行つてやらなくては。大人たちは誘拐ではないか？なんて言っているが、あの人騒がせて面倒な姫のことだ、一人で城から抜け出して迷子になっているに決まっている……。

「まったく、面倒な奴……。」

正直、彼女から目を放したことで彼は責任を感じていた。自分が目を放さなければ、こんなことにはならなかったのだ。少なくとも、彼女を迷子にすることはなかった。その思いが、彼の足を余計に早く動かす……。

「ふうっ……。！お父様、お母様……。柳鏡……。」

泣き疲れた彼女が、そう彼の名を呼んだ時だった。

ガサツ、ゴソツ！

目の前の茂みが、不穏な動き方をした。喉の奥から、ひきつった音が出る……。熊や虎だったらどうしよう！その思いが、余計に彼女の恐怖心を煽る。ギョツと固く目を閉じた。

「もうやだぁーっ！景華、良い子になるっ！」

「その言葉、忘れるなよ……。」

聞き慣れたその声に、そつと目を開ける。目の前の茂みから現われたのは、彼女が無意識に喚んでいた人物だった。座ったままの彼女の目の前に、しゃがみ込む……。深緑の瞳に見つめられて、彼女は堰を切ったように泣き出した。

「ふええーっ！怖かったよう！怖かったぁーっ！」

そう言つてボロボロと涙をこぼす彼女に、思わず苦笑が漏れる。こんな時位は、優しくしてやった方がいいのかもしれない。

「ああ、はいはい。怖かった、怖かった。まったく、だから城から出るな、つて言われてるんだよ。」

「だってえー……。」

彼女の手を見て、彼は脱走の理由を知った。その手には、真っ赤な大輪の花が握られていた。城の庭園にはないものなので、彼女の目にはとても美しく映つたのだろう。

「なんだよ、そんなのが欲しかったのか？」

彼の問いに、涙を拭きながら頷く。怒られるかと思つたが、彼は優しく深緑の髪を撫でてくれた。

「先に言えよ、馬鹿。別にあんたが取りに来なくたって、俺が取つて来てやったのに。……ほら、帰るぞ。大人たちが心配しているんだ。あんたはこの国の姫だから、行方不明になっただけで大騒ぎなんだよ、面倒くせえ。」

もうまっぴら、と言うように舌を出して、彼女の手を握った。しかし、彼女は立ち上がろうとしない。

「おい、早く戻ろっぜ。寒いし、虎や熊が出たら厄介だ。まあ、こんな裏山にはそんなものいないだろうけどな。」

「足……痛い。おんぶ。」

こいつは、一体何を言い出すんだ……？ 必死で、その言葉を飲み込む。遊び過ぎで足が痛いだとか？ しかも、おんぶ、だと……？

「見せてみる。」

小さな足に、そつと触れる。確かに、彼女の左足首はほんの少し熱を持っている。もしかすると、くじいたり捻ったりしたのかもしれない……。

「ああー、面倒くせえ。こんなわがまま姫、探しに来るんじゃないかな。」

そう言いながらも、彼女に背を向けてその目の前で膝を折ってやる。背中に、重みがかかった。小さな手が、彼の胸の前で組まれる……。真つ赤な花が、彼の視界で揺れる。

「まったく、あんたは本当に人騒がせだな。迷惑だ。いいか？ 俺の服に鼻水なんかつけるなよ。」

まだしゃくり上げている彼女に向かってそう言うてから、立ち上がった。ゆっくりと、彼女を背負って歩き出す……。

「重いなあ……。あんた、チビのくせになんでこんなに重いんだよ？ 頭も空っぽなくせに。」

「柳鏡、うるさい……。」「

反論に、いつものような元気がない。城に着くまでに、彼女は泣き疲れたのと安心したのとがあつて、眠ってしまった。春蘭と趙雨が待っている、あの渡り廊下に向かって裏山を降りて行く……。

「あつ、帰って来た！ おおーい、柳鏡！……あつ、景華も一緒だ！」

趙雨のその声に、大人たちが顔をあげた。二人の父親が駆けて来る……。

「おお、景華！ 無事だったのか！ 柳鏡、本当にありがとう！」

彼の背から娘を受け取って、抱き締める。それで、彼女が起きた。

「あ、お父様……。あのね、迷子になっちゃったの……。柳鏡が、助けに来てくれたよ……。」

そうかそうか、と娘の言葉に頷いてやる珎王の瞳は、潤んでいる。

よほど本気で娘を心配していたに違いない。

「それから……お花、取って来てくれる、って……。」

それだけ言つと、彼女はまた眠りについた。その寝顔を見て、皆が安堵する……。

「ああ、良かった……。本当に良かった……。娘を連れて来てくれてありがとう、柳鏡。……さて、この子を部屋に連れて行かねば。
連瑛、お前の息子には本当に助けられた。感謝している。」

「もったいないお言葉です、陛下……。」

連瑛は、そう深々と頭を下げた。玠王の言葉は続く。

「柳鏡になら、安心して景華を任せられるな……。」

後にして思えば、玠王の心はすでにこの時に決まっていたのかもしれない。柳鏡を景華専属の護衛にすることも、後には彼女の伴侶とすることも……。月が、裏山に浮いていた。

次の日、柳鏡は朝早くに景華の部屋を訪れた。その手いっぱいっぱいに、色とりどりの花が抱えられている……。景華の目が、驚きと喜びに見開かれた。

「うわあ、すごい！これ、くれるの……？」

ドサツとそれらを床に下ろして、柳鏡はドツカリとその場に座り込んだ。

「ああ。その代り、もう行方不明になったりするなよ。またあんたを探しに行かなきゃならないと思うと、面倒くさくてしょうがないわかったな？」

「いーだ！余計なお世話っ！」

素直じゃないのは、百も承知だ。楽しそうに色とりどりの花をより分ける彼女を見て、彼は何も言わずに静かに溜息をついた。

「まったく、あんたと一緒にいてろくな目に遭ったことないぜ、俺？」

深く溜息をついた彼に、反論する。

「何よー、文句ないでしょ。責任とってちゃんと柳鏡のお嫁さんになつてあげたじゃない。」

「いや、もらい手がなかったらあんたがあまりにも哀れだから、俺が仕方なくもらってやった、って説の方が有力じゃないか？」

むうつとむくれてみせるが、口ごたえはできない。確かに、どちらかというと彼の説に近いのだ……。その様子を見て、彼が勝ち誇つたように笑った。それから、また日記のページを繰り始める……。

「勝つて気分もいいし、どうせだから、あんたの嘘も暴いておこうぜ？これだけ詳しく書いてあるなら、多分記録つけてあると思うから……。」

「何よ、いつ？」

彼の手から日記を取り上げて、今度は細い指がそのページをめくり始めた。

「あんたが五歳の、八月……。」

「はい、どこかこの辺。」

そう言つて彼の手には日記帳を再び押しつける。この際、彼の機嫌が直ればなんでもいい。

「お？あつた。これだ、これ。」

「なにになに？五歳、八月五日。今日は、柳鏡がお城にうさぎを連れて来てくれました。ああ、あつたね、そんなこと。それで？……白くてふわふわであつたかくて、とてもかわいかったです。……あら？もしかしたら、柳鏡の悪口を書いてない日じゃない？珍しい……。」

「あんた、自分がどこにいるのか覚えていて言ってるんだろうな……？？」

彼女がいる場所は、彼の膝の上。つまり、彼の手が十分に届く場所なのだ。

「あ、冗談、冗談。うーんと……とても嬉しかったので、思わずうさぎにちゅーしました。あつ、これのこと？あの時私が初めてだつて言ったら、柳鏡、嘘だ、って言つたよね？」

「はっ？うさぎっ？」

彼が慌てるのも無理はない。彼の記憶とは全く別のことが綴られていたのだから……。そのまま、続きを読む……。

「ほら、続きに書いてあるだろ。そしてその後……、は？その後っ？」

彼女が、ハツとした。どうやら、その時のことを思い出したようだ。
「あ、そうそう。お父様に見せに行こうと思って走って行く途中でうさぎにしたの！それでその後、柳鏡にもお礼をしなきゃ、と思つて……。」

頭が、真っ白になってしまった。

「俺……うさぎの後かよ……。」

とんだ誤算だった。彼の中に残されていた甘酸っぱい記憶は、まがいものだったのだ……。そして、それに長年騙されていた……。思わず、肩を落とす……。

「あ、ほら。でも、人間で初めては柳鏡だよ。これは本当！」

「嬉しくねえ……。」

一生懸命に彼を慰めようとするが、どうやら彼は相当な打撃を喰らってしまったようだ、当分は立ち直れそうもない……。

「ほら、いいじゃない。柳鏡がくれたうさぎだったんだし。うさぎ、かわいいからいいよね？」

彼女のその言葉で、彼が顔を上げる。その目は、完全にいつてしまっている……。

「いつか、辰南中のうさぎを狩り尽くしてやる……。」

どうやらこの日記帳のせいで、彼のうさぎ嫌いには余計に拍車がかってしまったようだ……。

「ダメだよ！龍神が弱い者いじめなんかしちゃダメ！うさぎ、かわいいじゃない！」

「かわいくねえよ！最悪だ！いいか？あんたは人に馴れたうさぎしか知らないからそんなこと言えるんだ。あのうさぎだって、最初は最悪だったんだぞ！人のことを蹴るわ暴れるわで、あんたと同じ位

ひどかったんだ！」

ことの発端は、温かい春の日だった。

「ねえ、本にうさぎさんって出てくるけど、本当に真っ白なの？」

四人で一緒に読んでいた本の挿絵を指差して、景華が顔を上げた。どうやら、全員からの返答を期待しているようだ……。

「なんだよ、そんなことも知らねえのか？」

「柳鏡、そんなこと言わないの。そうだよ、景華。この位の大きさで……。」

優しい春蘭は、彼女に一生懸命その様子を説明してやる。趙雨がそれに協力して足りない部分をつけたしてやっている横で、柳鏡は溜息をついた。本当にこの姫は、城の外の世界に好奇心旺盛で、困るなんでも聞きたがるから、手に負えないのだ……。

「説明するより持つて来た方が早いだろ？明日獲つて来てやるよ。」

「えっ、うさぎさん、連れて来てくれるの？」

真紅の瞳が、パツと明るく輝いた。その様子にドキリとするが、そんなことは決して表には出さない。

「ああ。ただし、死んでる奴だけだな。生きてるのは面倒だから……。」

「ダメっ！生きてるうさぎさんがいい！生きてるの！お願い、柳鏡！」

困った。言ってしまった以上は仕方がないが、生きているのを明日までに、というのはいくら彼でも無理だ……。

「景華、無理を言ってはいけないよ。柳鏡が困るじゃないか。」

趙雨が彼女の隣から優しくそう声をかける。景華が、小さなその口を今と同じように尖らせた。

「だって、生きてるうさぎさんの方がかわいいに決まってるわ。柳鏡ならできると思ったのに……。」

彼女は、無意識の内だが、ずるかった。自分の願い事を誰に言えば叶えてもらえるか、小さなその頭で本能的に理解していたのだ。

そんなことを言われては、面倒くさがりの彼も努力するしかない……。

「わかった。じゃあ、夏まで待て。今から捕まえるとなったら、その頃がやつとなんだよ。人に馴らさないといけないし……。」
真紅の瞳が上げられて、再び眩しい光を放った。

「うん、わかった！うさぎさん、楽しみだねえー。」

ニコニコと笑う彼女を見て、趙雨と春蘭はホウ、と息をついた。柳鏡のおかげで、彼らは質問攻めから逃げることもできたのだ。その後、眉根を寄せて仕方なさそうに笑う……。温かい日差しが、降り注いでいた。

清龍^{シロン}の里に一度戻った柳鏡は毎朝、山にうさぎを捕らえるために仕掛けた罠に足を運んでいた。今日で、もう三日目だ……。

「あーあ、面倒くせえ……。なんだって毎朝こんなに早く起きなきゃならねえんだよ……。」

そう言って、三つ仕掛けた罠を近くのものから順番に見て行く……。一つ目の罠は、空っぽ。そして、二つ目も……。

「仕掛け方が悪いのかな？全然ダメじゃねえか……。」

そして、少し離れた所に仕掛けた三つ目の罠を見に動いた時だった。
「おっ？」

何か白い物が、彼が仕掛けた木の檻の中で動くのが見えた。まさか……。

「……！」

いた。白くて柔らかい、あの生き物……。見た所、そんなに大きくはなさそうだ。これなら、彼女を怖がらせることもないだろう……。元々、彼はうさぎなんてどうでもいい。ただ一つ、彼女の喜ぶ顔が見たくてこんな面倒なことをしていたのだ……。これを渡してやった時の彼女の顔が想像できて、少し気は早いが嬉しくなる……。

「さてと、連れて帰るか。」

檻ごとそのうさぎを持ち上げる。しばらくは、これに入れて飼うこ

とになるだろう。

「母さんも、こういうの見たら喜ぶかもな。」

家で毎朝、彼がどこに行くのかも聞かずに待っていてくれる母親の顔を思い浮かべる。ひとりでに、笑みがこぼれた。

「早く帰ろうつと。」

うさぎを驚かさないように慎重に運びながらも、気は家へと急ぐ。彼は、ついには走り出してしまった。

「あら、柳鏡。それ、どうしたの？ かわいいわね。」

家に帰った彼を迎えた母親は、彼が思った通りの反応をそのうさぎに対して示した。得意気に、ほんの少し胸を反らす。

「捕まえたんだ。お城の姫との約束で、夏までに城に連れて行かないやならないんだよ。人に馴らしたりしなきゃならないから、しばらく家で飼うから。」

そう言つて家の隅に檻ごとそれを下ろす様子を見て、母親は微笑して見せた。その瞳は優しく、彼と同じ深緑の色をしている。

「わかったわ。じゃあ、うさぎの分も朝御飯を用意しなきゃね。」

母親はそう言つて外に出て行き、青菜をたくさん抱えて戻つて来た。それを、息子に手渡す……。

「ほら、ご飯をあげてね。うさぎのお世話は、柳鏡がちゃんとしなさい。いいわね？」

「わかったよ、母さん。」

そこに、柳鏡の腹違いの姉の明鈴メイリンが訪ねてきた。

「おばさん、おはようございます。」

「あら、明鈴ちゃん。遊びに来てくれたの？ 朝御飯は食べた？」

明鈴が首を横に振る。彼女は家で兄たちと対立してしまい、他の二人と仲良くできない、ということとで自分の母親からも疎まれていて、しょっちゅう食事を抜かれたりしていた。そしてそういった時には、決まって村外れにある柳鏡とその母親の家に避難して来ていた。柳鏡とは父親は同じだが、母親が違う。しかし彼女は、母を同じくす

る兄たちよりも彼が好きだったし、自分の母親よりも彼の母親の方が好きだった。

「じゃあ、明鈴ちゃんの分も用意しましょうね。もう少し待てるかしら？」

その言葉に明鈴は素直に頷いて、うさぎに餌をやっている柳鏡の元にやって来た。

「何？捕まえたの？」

「うん。城にいるわがママ姫が、うさぎが見たいって言うから……。」

「彼の手から餌を少し受け取って、明鈴もうさぎに青菜を与えてみる。忙しく口を動かすその様が、とてもかわいらしかった。」

「じゃあ、またお城に行くの？うさぎ、捕まえたんだし……。」

「しばらくは行かないよ。うさぎ、人に馴らしてからでないと。姫様に怪我させたりしたら大変だし……。」

「そうだね。手伝うよ！」

隣でまだ餌をやり続けている二つ年下の弟に、明鈴は笑いかけた。

本当は弟は、早く城に行きたくてたまらないはずだ。いつも城から帰って来た彼から聞くのは、その姫のことばかり……。どんな悪戯をされた、とか、どんなことを言われた、とか……。

「ありがとう、姉さん！」

弟からも、嬉しそうな笑顔が返って来た。

それから一月が経って、彼はうさぎを檻から出してみた。大分人の存在には慣れたようだが、逃げ出されないように、戸を閉めてからそっと抱きあげる……。

「痛っ！このっ！暴れるなっ！」

案の定、抱きあげられたうさぎは慌ててその後ろ足で彼を何度も蹴りつけ、その腕から脱走した。しかしその後彼から逃げようとはせず、少し離れた所からこちらの様子を窺っている……。もう一度、試してみる。

「あつ！ちくしょう！」

やはり、彼のその腕からは懸命に逃げようとする……。しかし、近くに寄られる位では彼を怖がりもしなくなった。そっと、撫でてみる……。すると、うさぎは今度は逃げようとはせず大人しく彼のその体を撫でさせた。

「あーあ。景華もこの位大人しかつたらかわいげがあるのにな……。」

うさぎの目の色は、彼女と同じ真紅。若干彼女の瞳の方が色が淡いようだが、よく似ていた。彼に捕まえられたら暴れ出す所までそっくりだ……。

「いつになったら城に行けるかな……。」「

それは、このうさぎがいつになったら人に完全に馴れて大人しくなるのか、という意味。それまでは、彼女に会いに行けない……。

「早くなつてよ。」「

そう言つてうさぎを撫でる少年の頭上を、初夏の風が吹き過ぎて行った。

そして、八月の五日。ついにうさぎを人に馴らすことに成功した少年は、彼女のためにそれを連れて城に遊びに来た。

「あ、柳鏡。遊びに来てくれたの？」

彼女の部屋を訪れると、そこにはすでに趙雨と春蘭の姿があった。

そして、戸口をくぐって来た彼を迎えた彼女の真紅の瞳が、彼が持っているものにくぎ付けになる……。

「それ、もしかして……。」「

「うさぎ。」「

短くそう答えて、彼女の手が届く位置まで動いてやる。

「ほら、これだよ。」「

ぶつきらばうにそう言つて、彼女の手对白くて柔らかい物を預ける……。彼女は、小さなその顔をパツと輝かせた。

「これが……。うさぎさん？」

真紅の瞳をまん丸に見開いて、子供の手には余るそれを恐々と抱く……。

「人には馴らしてあるから、心配ねえよ。……かわいいだろ？」

「うん、ふわふわーっ。お父様にも見せて来る！」

本当に、柔らかくて温かい……。彼女は、それを父親の元に運ぼうと思つて廊下に出た。そして、小さなその足で小走りをしながら、その腕に抱いたものを見つめる……。白い顔に、赤い目。なんとも愛嬌のある顔だ。

「かわいいね！」

そう言つて、あまりのかわいらしさにその口に自分の唇を押し付ける……。そして、ハツと別のことに気が付いた。

「あ、柳鏡にお礼、言つてない！」

くるりとその向きを反転させ、彼女を見送つてくれていた彼の元へと戻る。そして……。

「ありがとう！」

勢い余つて、とても言うべきだろうか、そのまま、うさぎにしたのと同じように彼の口元に自分の唇を寄せる。深緑の瞳が、大きく見開かれた。彼女は、そのまま何もなかったかのように駆け戻つて行く……。後に残された柳鏡は、その場に茫然と立ち尽くしてしまつた。

「ちよつと柳鏡！大丈夫？」

春蘭が、固まつたまま動けないでいる彼を揺すつてくれる……。大打撃もいいところだ。彼の思考回路は、すでに機能を停止していた。再起不能。赤い頬でしばらくボーっと、彼女が行つてしまった方を眺める……。その様子を見た趙雨と春蘭は、肩をすくめて苦笑した。

「あ、ほら。うさぎとはあの後一回も……。」

「いや、なんのフォローにもなつてないぞ……？」

意気消沈している彼を一生懸命復活させようとするが、逆にどんどん傷を抉っている……。彼女に、悪気は一切ない。こうなったら、

また彼の機嫌を損ねるようなことを言つて無理矢理浮上させる他ない。後が怖いが……。

「もーっ、うさぎに焼き餅焼かないの！仕方ないでしょっ？」

彼が、ピクリと動いた。回復の、兆し……。

「焼き餅じゃねえよ！調子に乗るな、アホ！大体、考えたらおかしいよな。なんで俺があんななんかのために、あそこまでしてやらなきゃならなかったんだよ！」

「何よー、私のこと好きだったんでしょ？その位してよ！」

「ほう、それであんたが俺のことを少しでも気に止めた、っていうなら、やった意味もあつたかもしれねえな……。だが、いつ俺の気持ちに気付いたって？俺の昇龍を止めた時、とか、どこかの誰かが言つてたよな……？」

墓穴掘りまくり。言うこと言うこと、失敗ばかりだ……。

「も、もういいの！結果オーライ！はい、この話はおしまい。他の所も見てみようよ！」

「何が結果オーライだ、アホ……。」

慌てて何かいいことが書かれていないかとページを繰る彼女の手がふと止まった。そこは、彼女が十一歳の時のページだった。

「あ、柳鏡が私の護衛になったのって、この日からなんだ……。」

「あ？あんたが十一歳の四月二十四日？……ああ、そうだな。……

さすがあんただな、散々なことが書いてあるぜ？」

懐かしさに手を止めてしまったページだったが、彼の言葉通り、最悪とも言えるページだった……。

「十一歳、四月二十四日。今日是最悪だった。お父様の人選ミスだと思う。……あ、今はそんなこと思ってないからね。まさか、あの柳鏡を私専属の護衛に雇うだなんて、信じられない！わあー、書いてあることが過激ね……。」

苦笑いをして、彼の顔色を窺う。頬が、ヒクヒクと痙攣しているのが見える。

「どうせなら趙雨の方が良かったわ。でもお父様に言われました。

柳鏡以上の護衛はいない、って。意味がわからないと思ったけど、とりあえず言われた通りにします。最近のお父様は、不可解な発言が多いです。柳鏡には一生お世話になるんだからどうのこうの、とか……。」

「……あんたの親、食えない奴だな……。未来予知でもできたのか？」

その言葉に顔をあげて、ブンブンと首を横に振る。まさかそんな訳がない、と……。しかし、彼女の父が言っていたように、彼女は実際に一生柳鏡に迷惑をかけるつもりだ。とことんまで、わがままを言って……。

「ああつ、クソっ！きつと、あんたの親父はわかってたんだな！……そんな危ない奴に娘預けるなよ、腹立つな……。」

「何が？何がわかってたって話？」

相変わらず、彼女は常軌を逸して鈍い……。

「なんでもねえよ。……ちなみに言つと、あの日はむしろ俺にとつて最悪な日だったな。あの日のせいで、あんたのドジに散々付き合わされる羽目になっちまったんだから……。」

「景華、ちよつと来なさい……。」

父に呼ばれて、彼女はその部屋を訪れた。室内に足を踏み入れると、連瑛と柳鏡が頭を垂れた。一体、何があつたのだろうか……？

「お前に専属の護衛をつけようと思うんだが、どうかな？」

笑いながら、父親は娘の柔らかな髪を撫でた。かわいらしい真紅の瞳が、見上げてくる。

「いらないわ。四六時中びつちり見張られてるなんて嫌！ぜーったい嫌！」

そう言つて、腕を上下に強く振りながら頬を膨らませる。柳鏡は、吹き出しそうになるのを必死で堪えていた。

「そんなことを言つな。最近色々と危険な輩がいるからね、お前を危ない目に遭わせたくないんだよ。」

「でもお……。」

自分のためだと言われてしまえば仕方ないが、納得はいかないので口を尖らせて俯く。父がその様子を見て笑った。

「それにどうせ四六時中一緒にいた相手なんだから、今更いいじゃないか。なあ、柳鏡。」

「はい、陛下……。」

普段の彼からは想像もつかない程恭しい様子で、彼が腰を折る……。まさか……。

「お父様、まさか……。柳鏡を護衛に、なんて、言わないわよね……？」

「おお、そのまさか、だよ。どうだ、景華？嬉しいだろう？これでも私も安心だ……。」

玠王は、一人で満足気に頷いている。どうやら、彼は独りよがりなところがあるらしい……。景華の肩が、ふるふると震える……。

「やだーっ！絶対に嫌！柳鏡だけはダメっ！」

いつも意地悪で、口が悪くて、お小言ばかり多くて……。そんな彼に四六時中見張られているなんて、地獄だ。しかし、父は取り合ってくれない……。

「ははは、お前が素直じゃないのは父も承知だ。いやあ、良かった、良かった。」

連瑛は、愛想笑いを崩さないように真剣になっている。かなり、辛そうだ……。

「本当に嫌あーっ！」

彼女の悲痛な叫びだけが、乾いた笑いが漂う部屋の中に響いた。

その夜、彼女は渡り廊下で膝を抱えて月を見ていた。その隣には、護衛の仕事としてそばに控えている彼の姿があった。

「意味わからない……。どうしてよりによって柳鏡なの？」

「あんたのドジに対応できるような器用な奴がそうそういないからだよ、反省しろ。俺だって嫌だし。あんたみたいなわがまま姫のお

もりなんかするの、面倒くせえ。」

本当は、そんなこと微塵も思っではいなかった。ただ、彼女のそばにいられることが嬉しかった。ふと、景華の顔が曇った。

「……そう言えば、聞いたよ。柳鏡、お母様が亡くなられた、って……。」

「ああ、先月な……。」

二人とも、視線は相手には向けず、月に向けたまま話す。それで、ちょうど良かった。

「……寂しい？」

「あんたじゃあるまいし、そんなこと言わねえよ……。」

そう言って月を見上げるその横顔は、大人びているが、辛そうだな。なんとかして、元気づけてやりたい……。

「まあ、いいや。仕方ないから私の護衛で雇ってあげる！そうしたら、柳鏡もずっと一人ぼっちにならないでしょ？」

笑いかける彼女に対する答えは、いつもの調子で意地悪い……。

「仕方ないのはこっちの台詞だ、アホ。俺に迷惑かけるなよ。」

景華の含み笑いを、青白い月光が映し出した。

「ああー、そうか。俺はあの瞬間に人生の選択を誤ったのか。あの時琬王がなんとおっしゃっても断るべきだったな、わがまま姫のおもりなんか面倒くさくてできません、ってな。」

「失礼ねー！それなら、私こそ間違ったわ。あの時、柳鏡なんかに同情しないでクビにしておけば良かった！そうしたら、今頃……。」

柳鏡の片眉が、意地悪く吊り上がる……。本当に、何度墓穴を掘れば気が済むのだろうか……。

「俺がいなかったら今頃……。ああ、あんたは土の中だったかもしれない……。それで満足か？ん？土の中は真っ暗だなあ、明かりもないしなあ……。」

「あうあう……。」

口ごたえはできない。彼の言う通り、もし彼がいてくれなければ、

彼女は一年前に死んでいたはずだったのだ……。

「あは。感謝してるわ、本当に……。」

ひきつった笑顔を浮かべて、はぐらかす。どうやら、このページを選んだのは失敗だったようだ……。

「あ、見て。柳鏡が初陣から帰って来た日も日記つけてあるよ。」

「どれどれ……。」

背中の方で、彼が動くのがわかった。そのまま前にほんの少し屈みこんで、彼女の手元を見つめる。その感覚がなんとなくこそばゆくて、彼女は少しだけ身じろぎした。

「十二歳、九月三十日。今日、柳鏡が始めて行った戦場……。えっと、初陣？から戻って来ました。……あんたらしい日記の書き方だな。

初陣って言葉位知ってるだろ、普通……。お父様によく褒めてあげなさい、と言われたので、とりあえずそうしました。……ああ、あれはあんたの気持ちじゃなくて、親に言われただけだったのか。」

「確かにお父様にそう言われたけど、私も話を聞いてすごいと思っただわ！確か……。」

「うわあ、曖昧だな……。」

彼の呆れ顔に、彼女は苦笑いを返すしかない。自分の目を捉えていた彼の目が、再び紙面に戻された。

「続けるぞ？……せつかく私が褒めてあげたのに、柳鏡からは一言もなし！かわいくない！戦場で根性曲がりか直ればいいのにと思っただけど、無理だったみたいです。残念。……あんたに根性曲がりとは言われたくねえな……。でも、なんとなく今日の柳鏡は悲しそうでした。どうしてかしら？……とりあえず無事に帰って来てくれたから良しとします。一応。」

「ほら、私がちゃんと柳鏡の心配をしたことがわかるでしょ？それに、今ならあの時の柳鏡が悲しそうだった理由がわかるわ。」

一生懸命日記の良い部分を探して、どうやらやっと見つかったようだ。一生懸命その良い部分売り込もうとする。

「そうだな、一応心配はしてたみてえだな。」

彼は、一応、の部分に力を込めた。確かに、文末には余計な二文字が記されている……。過去に戻って日記を書いている自分に言いたい。余計なことは書かないで、と……。

「ねえ、結局柳鏡が戦場に行く理由は何だったの？あの時、はぐらかしたでしょ？」

ゴン、と彼の頭に何か重い物が落ちてきた。いや、詳しくはそんなような衝撃を受けただけだった。彼は、全くはぐらかしたつもりはない。むしろ、彼にしては随分とはつきり言っただ方だった。俺の戦う理由が、笑顔^{そこ}にある、と……。それなのに。

「さすがあんただな……。別になんでもいいだろ。あんたには一生教えねえよ。」

「気になるじゃない！ケチなこと言わないで教えてよあ！」

甘えるように彼を見上げる。しかし、彼がくれたのはゲンコツのみ……。

「痛いー！」

「こうでもしないと、あんたの悪い頭は良くなならないだろ！最悪に鈍いな、あんた！」

「またすぐそうやってえ……。」「

本来なら、彼女に口ごたえをする権利はない。本当に、彼女はどこまでも鈍感なのだ。子供の頃からどれだけその鈍感さに手を焼いて来たか、彼は考えることもしなくなかった。

「……この時のこと、少しか覚えてるか？」

仕方なく、話題を変えてやる。もし彼女が少しでも覚えていると言え、それでその鈍さを帳消しにしてやろうと思って……。

「あ、うん。なんとなくだけど……。」「

どうやら、彼のこの怒りはなんとか治めることができそうだ。そのまま当時のことを語りだす彼女の声に、耳を傾ける。その声音は、彼の耳には本当に心地良い……。

たたた、と廊下を駆けて来る足音が、彼の耳に届いた。今日は、

少し風が強い。それでも彼の耳がその音を拾った理由は、ただ一つ。それが、彼女の足音だったから……。

「あ、いたいた！柳鏡！」

城の渡り廊下の隅、誰の邪魔にもならない場所です。木々の葉を眺めていた彼の元に、わがまま姫が転がり込んで来た。

「きやつ。」

自分が戦場に行っている間もこうだったのだろうか、彼女のドジは相変わらずだった。反射的に、彼女が転ばないように支えてやる……。彼でなければできないような早業だ。

「助かったあ……。あ、おかえり、柳鏡！」

「助かったあ、じゃねえよ！転ばないように気を付けろ！大体、なんで走って来たんだよ？」

自分を笑いながら見上げる彼女に、なんとなく尖った言葉をぶつけてしまう。今は、彼女には会いたくなかった。戦場から帰ったばかりの汚れた手で、彼女には触れられなかった……。

「だって、柳鏡が帰って来たってお父様が……。柳鏡すごいね！すごく頑張ったんだって、皆言ってたよ！」

「……。」

自分を褒めてくれているつもりなのだろう。しかし、彼女のその明るい笑顔が今は何よりも辛い……。自分は、人を殺したのだ。しかも、誰よりも大勢の人を……。彼の脳裏に蘇って来るのは、夥しい量の血と、人々の苦悶の表情、金属の不協和音……。彼の心には、大きな穴が開いてしまったのだ……。

「どうしたの？疲れた？大変だった？」

不安げな真紅の瞳が、自分を見上げて来る。彼女にこんな顔をさせては、いけない。努力して、今の彼には精一杯の笑みを返す。ぎこちなくて、曖昧で、寂しげな笑い……。

「別に……。なんでもねえよ……。」

「嘘つき！」

間髪入れずにそう言う彼女に、返す言葉がなくなってしまった。

「どこか痛いんでしょう？痛そうだもの！ダメじゃない、ちゃんと診てもらわなきゃ！来て！」

そう言つて、彼女に腕を引つ張られるままに歩く……。痛い場所はあるが、誰にも癒すことはできない。それは、彼の内側にあるのだから……。

「はい、横になつてね。具合が悪い時は、寝なきゃダメ！」

「いや、別にどこも怪我とかしてねえし……。」

あつさりと自分の寝台を提供する彼女に、断りを入れる。いくら功績を上げたとは言つても、彼女の寝台にただの護衛の自分が横になるなどということが、許される訳がない。

「じゃあどこが痛いのよー？頭？柳鏡がおバカなのは今始まったことじゃ……。」

「あんだ、この剣の錆にしてやろうか……？」

真剣な顔でシヤレにしなければならないようなことを言う彼女に、そう凄んでみせる。しかし、対する彼女は怖がる様子など全く見せない。それどころか、落ち込んでしまったようだった。

「……だって、柳鏡の元気がないから……。」

そんなことを言つて、俯く。どうしようもなくなつて、とりあえず彼女の頭を撫でてやった。顔を上げた彼女が、とびっきりの笑顔を見せる……。この時、彼の心が脈打ち、蘇った。穴の開いていた箇所が、あつという間に修復されていく……。誰にも治せないはずの傷が、彼女のその笑顔であつという間に消えて行つた。そして、納得する。そうか、自分は。このために、戦つて来たのか……。

「いや、あんたのアホな顔見てたら笑えてきた。」

「死んじゃえー！」

真つ赤になつて怒るその様子が、たまらなく愛おしい。秋の風が、窓の外だけを強く吹き過ぎて行つた。

「ね？確かこんな感じだったよね？」

「……。」

正直言つて、絶句した。なぜそこまで鮮明にあの時のことを覚えていながら、自分が戦いに行く理由はわからないと言うのだろうか……。その方が、わからない……。

「いや、俺はわかつたぞ。あんたは世界一鈍い！」

「ちよつと、どうしていきなりそんな喧嘩腰なのっ？柳鏡のくせに生意氣ー！」

その頬を、ぐにぐにとつねる。

「ほう、それを言うならあんたの方じゃないか？生意氣、という言葉はあんたのためにある言葉だよな！」

彼女が、急に真面目な顔になった。その変化に、正直言つて慌てる……。その頬を放してやると、彼女はそのまま言葉を紡いだ。

「でも思ふの。」

「何をだよ？」

彼女の言葉にそれらしい反応を返して、その目を見つめる。昔はその真紅の色が彼の心臓をきつく締めつけたものだが、この頃ではそんなこともなくなっていた。ただ、温かい感情が溢れるだけ……。

「柳鏡、私にそんな話し方しててよく怒られなかったな、って……ほら、確かに頼んだのは私だけど、仮にも姫とその護衛だよ？色々と問題が……。」

「アホ、散々あちこちらからお小言くらったんだ。」

じとーっと、白い目で彼女を見返す。真紅の瞳が、見開かれた。

「えっ？じゃあなんでやめなかったのよ？敬語の方が、柳鏡でもかわいげがあつたかもしれないのに……。」

彼女が尖らせた口が、彼の指に強くつままれた。

「むむむむむーっ？」

何するのーっ？と言つてみたが、まったくもってわからない。しかし……。

「何するのーっ？じゃないだろ、アホ。あんた、自分もかわいげと言う物が全くなかつたくせに、よく言うよな！」

彼の手を自分の口から引き剥がして、反論する。

「何ですってー！私のどこがかわいくなかったって言うのよ！少なくとも、素直な方だったとは思っわ！」

「俺以外に対してはな……。」

彼が間髪入れずに言った言葉に、ぐうの音も出ない。確かに、彼に対してだけは、自分とはことん素直ではなかった……。またしても味わう、敗北感……。

「あのなあ……。俺があんたが何の気なく言っただわがママを叶えるためにどれだけ苦労してたかなんて、考えたこともなかっただろ？」

「うん、全然。なんか、柳鏡には叶えてもらうのが当たり前、って気がしてて……。あはは……。」

あっさりとその答えてから笑って誤魔化す彼女をしり目に、彼はまたがつくりと肩を落とした。

「考えてもみるよ？あの父親だぞ？あんたにこんな口のきき方してて、怒られなかった訳がないだろうが。」

「柳鏡。」

「はい、父上。」

彼は、里の父の屋敷に呼ばれていた。部屋に入るなり、冷たい空気がピリピリとしているのがその肌を感じられた。まずい、自分は、一体何をやらかしたのだろうか……？

「そこに座りなさい。」

父が指し示したのは、彼の足もとの床。まずい、あそこに座れということは、父上は相当怒っていらっしやる……。柳鏡はその瞬間に説教三時間、正座付きフルコースを覚悟した。大人しく、指定された場所に正座する。どうしても、父には逆らえない。恐ろしいという思いはない。彼は、すでに武芸ではその父を凌駕していた。それでも逆らえないのは、自分が父親を本当に敬愛しているからなのかもしれない……。

「最近、城からよく聞こえてくる噂があつてな……。」

「はあ……。」

城、城……。さて、一体自分はあそこで何をやらかしたのだろうか。姫の護衛の仕事始めて三年以上になるが、その間姫に怪我をさせたり、曲者を近づけたりするようなことは一度もなかった。とりあえず、仕事上の問題ではないだろう。しかし、他に何か怒られるようなことをしただろうか……？

「姫君の護衛が、主人である姫君に対して大層失礼な口のきき方をしているとか……。確か姫君の護衛の奴は、この清龍族の族長、龍連瑛の三男だったと思うが……。間違いないのか？」

「……。わがまま姫、とか、あんた、とか、アホ、とか……。あ、そうか。確かに、不敬ととられても仕方がない……。だが。」

「父上、恐れながら申し上げます。確かに私は不敬ととられても仕方ない言葉遣いしておりますが、あれは主人である姫の命なのです。」

「ほう、姫君の命、とな……。」

連瑛が、柳鏡の言葉に興味を示した。

「はい……。」

彼の目に思い出されるのは、渡り廊下から桜を眺める、彼女の寂しげな横顔……。

「春蘭も、成人しちゃったね……。」

欄干にその身を預けて、城から帰って行く春蘭を彼女は眺めていた。先程まで、彼女は景華の元に遊びに来てくれていたのだ。しかし……。

「趙雨も春蘭も、成人した途端に私に敬語、使うようになったね……。」

それは、当たり前前の話だ。いくら彼女と親しいと言っても、身分が違ふ。成人すれば、大人としての対応が求められるようになる。子供の内であれば、彼女と対等な口調で話すことも許されていたが、大人になればそうもいかない。しかし、彼女にはそれが納得いかな

い……。

「なんか、寂しいね……。」

「仕方ねえだろ。姫と部族長の一族とじゃあ、身分に差があるんだから。」

欄干に背中を預けて、彼女の隣に立つ。少年の声は、いつの間にか低くなっていた。元々大きい方だったが、その背丈もぐんと伸びていた。体つきも、全体的に逞しくなってきた……。今ではもう少年という言葉よりも、青年、という言葉の方がふさわしいのかもしれない……。その様子を見て、彼女が一層寂しげに微笑む……。

「柳鏡の声、変わっちゃったね。かわいくない……。」

「かわいくなくて結構。いつまでもなんの成長もしないあんたには、言われたくねえな。」

「放っておいてよ。柳鏡の方が二歳も年上なんだよ？先に大人になって当たり前でしょ！」

口を尖らせて、ほんの少し元気になる。それでも、寂しさは消えない……。

「ねえ、柳鏡。柳鏡が成人するまで、後どの位？」

一瞬、考える。頭の中で軽く計算してから、彼女の問いに答えた。

「一年と一カ月。そんなこと聞いてどうする気だよ？」

城の庭園にある桜は、散り始めていた。彼女が風に吹かれてその花びらが散るさまを、ぼつと眺めている。その横顔の切なさ、苦しい。

「じゃあ、柳鏡も一年と一ヶ月後には私に敬語を使うようになったやうのかな……？」

「嫌なのか？いつもは散々、口のきき方が悪い、とか言うくせに。」

いつものように、ふざけた調子でそう訊ねる。隣の彼女が、笑った。「口で言ってる程嫌じゃないよ。だって、その方が柳鏡らしいもん。かわいくなくて、腹が立って。でも、その方が良い。敬語なんか使われたら、友達じゃなくなっちゃうみたいで……。」

彼女の考えは、わかる。急によそよしくされたら、寂しがりな彼

女は人一倍寂しく感じるのだろう。その額を、長い指が軽く弾いた。
「痛っ。」

「アホ、誰があんたみたいなじやじゃ馬で生意気な、わがまま姫なんかに敬語を使うか。死んでもお断りだ。」

その言葉を受けて、彼女が微笑んだ。嬉しそうに笑うその横を、薄桃色の花びらが通り過ぎる。それは、彼女の真紅の瞳によく映える。
「約束だよ、柳鏡！」

そう言っただけ大きく伸びをした彼女の表情は、春の光と相まって、とても明るかった。

今思えば、それが失敗だったのかもしれない。彼女と約束をしてしまった以上は仕方がないが、彼女に対する口のきき方については、彼はあちこちから注意を受けていた。中には、成人したのにそんなこともできないのか、龍神はやはり武芸のみか、などと、ひどい誹謗中傷を受けることもあった。それでも彼が不敬な言葉遣いをやめなかった理由はただ一つ、彼女がそう望んだから……。

「そうか……。そのような話が……。」

連瑛は、そつと溜息をついた。彼の息子が姫に不敬な言葉遣いをしている、ということは、彼自身の教育に問題があったのでは、と言われかねないことなのだ。しかし……。

「柳鏡、お前は本当によくできた息子だ。」

「は……？」

お小言を喰らっている間に何を考えていようか、などと思っていた柳鏡は、父のその言葉に驚いて顔をあげた。

「周囲の目も気にせず、姫君の命に忠節をつくす。その様子、本当に立派だ……。お前も、他人に何度も注意を受けているのだろう？」

「はあ、まあ……。注意から、いわれのない誹謗中傷まで……。」
そして、おそらくそれはこの父にも及んでいることだろう。自分がきちんとした対応をできなければ、当然その波紋は父にまで及ぶはずだ……。

「しかし、父上にまでそのような誹謗中傷が及んだのであれば、姫に理由を説明し、改善させていただきます。」

そう言つて深く頭を下げた息子を、父は何も言わずに見下ろした。この息子に、姫の願いを切り捨てることなどできるはずがない。しかし改善してみせると言うのだから、なんとかして板ばさみにならなくて済む解決法を見つけるつもりだろう……。それを見守ることも、面白いかもしれない……。その成長を喜ぶ連瑛の上に、月光が降り注いでいた。

「ああ、そうか。だから公式の場所だけは敬語を使うようになったのね、柳鏡。」

「……。」

あまりにもあつさりとした反応……。今更真実を聞かせたところで、何の意味もない。何しろ、自分にわがままを叶えてもらうのは当たり前、と思つているような彼女だ。何らかの見返りを期待した自分が馬鹿だったのだ……。相変わらず、人の期待を踏みにじることは、彼女の得意技だ……。

「あ、その日のことも日記につけてあるかもよ。うーんと、春蘭の誕生日の次の日、だったっけ？」

「おい、重いからそろそろ降りろ……。」

彼の深い想いに対する言葉は、一切なし。まあ、彼女らしいと言えば彼女らしいが……。そして、彼はいい加減足がだるくなつてきていた。彼が胡坐をかいているその上に彼女が座っているのだが、そろそろ疲れてきた。自分から、彼女にそこを指定したのだが……。

「うん、ちよつと待つてね……。あ、あつたよ、これでしょ？読んでみて！」

そう言つて彼の胸にその背中を預けて、日記帳を手渡す。降りる気は、なし。いや、自分がどこに座っているのかも、おそらく彼女は覚えていない……。柳鏡がそれを受け取つて、溜息をついてから読み始める。

「十三歳、四月十三日。今日は、春蘭が城に遊びに来てくれました。でも、昨日成人した彼女は、趙雨が成人した時と同じように私に敬語で話すようになっていました。寂しいです。柳鏡も後一年と一カ月で成人します。彼は、敬語は使わないそうです。そうだね、柳鏡に敬語なんかで話されたら、気持ち悪くて死んじゃう！……ほお、いかにもあんたが書きました、っていう日記帳だな……。」

「えへへ……。」

照れたように笑う彼女に、間髪入れず突っ込みを入れる。

「いや、褒めてねえし……。」

それにしても、かなりの紙の量だ。一体、彼女はいくつの時からこの日記をつけているのだろうか……？

「重いでしょ？五歳の誕生日の時からつけてるから、紙がたくさんになっちゃったの！」

彼の心の中の疑問に勝手に答えて、彼女は笑って見せた。確かに、その年からつけているならこの質量になってもおかしくはない……。

「ところで、なんでこんな面倒なことしようと思ったんだ？毎日その日にあつたことを書くななんて、面倒過ぎないか？」

「柳鏡は面倒くさがりだからね……。お母様が、字の練習になるから書きなさいって言ったの。結構面白いよ？」

自分を見上げて来る真紅の瞳に、意地悪に笑って答えてやる。

「そりゃ、これだけ人の悪口書けば面白いだろうな……。」

「反省しまーす……。」

そう言つてしょんぼりとして見せるその姿に、苦笑が漏れる。また、彼女の悪口日記に目を戻した。

「あ？これ、何だよ？」

何気なく日記帳のページを繰っていた彼は、他のページとは違うつくりの部分を発見した。

「ああ、それはね、誕生日の日につける日記なの。その時に好きなもの、とか、たくさん書いておくの！」

彼がたまたま見つけたのは彼女が十六歳になった時のページだった。

彼女の話では他にも同じようなページがあるはずなので、見ていく……。

「あんだ、笑えるな……。将来の夢、趙雨のお嫁さん、だと。叶わなくて残念だったな……。」

「い、いいの！……あ、私、好きな色だけはずっと変わってないね！。赤だって！」

「将来の夢、もな。」

意地悪に笑った彼の気をうまく別のことで逸らそうとする彼女だったが、彼の方が何枚も上手だ。その手には乗ってくれない。それでも、彼女の誕生日記念の日記をどんどん探して行く……。そして、日記の一番後ろのページ、五歳の彼女の誕生日記念の日記を、二人で見る。

「あれ？ここだけ違う……。」

彼女がそう言ったのは、将来の夢、の欄。そこにはこう書かれていた。

「柳鏡の、お嫁さん……？えー、五歳の私、趣味悪い！」

「それを言うなら今のあんだもだな……。」

また彼に頬をつねられるが、その指先には力が入っていない。振り返って、彼の顔を見上げる。

「あはは、柳鏡照れてるの？赤くなってるー。」

「うるせえよ！大体、あんだはそういうところがずるいんだ！」

意味不明な彼の言葉に、首を傾げる。つい、と眼が逸らされてしまった。

「あんたは絶対そうなんだ！最後の最後に必ずと言っていい程強烈な爆弾が仕掛けてある！それで大逆転決めるんだから、せこいんだよ！」

「意味わからない……。」

そう言って口を尖らせた彼女には、真実その意味はわからない。だが、彼はいつもその爆弾に当たっていた。彼女のわがまを聞いた後、彼は必ずこう思った。二度と彼女のわがまなんか聞かない、と……

…。それでもまた次々と叶えてやりたくなくなってしまうのは、彼女が必ず自分に向けてくれる、とびっきりの笑顔のせい。その笑顔に、^{ばくたん}彼はいつも被爆していたのだ。

「あんたに意味がわかるはずないだろ。世界一鈍いんだからな！」

「失礼ねー！そんなこと言うけど柳鏡だって……。」

「失礼します、陛下……。」

戸口で女官がそう声をかけて、戸を開けた。二人の動きがピタリと止まり、そちらに視線が向けられる……。

「御夕食の準備が……。」

そこで視線をあげた女官が、一瞬固まる。そして。

「しっ、失礼いたしました！」

彼女は、慌てて戸を閉めて逃げて行った。今度は、二人が一瞬固まる……。なぜ、女官にあんな対応をされたのだろうか？そして、思いつく……。い出す……。

「ちよつとーっ！いつまでベタベタしてる気よ、変態！」

彼女が赤くなって立ち上がる。どうやら、自分たちの現状、という物がようやく把握できたようだ……。あまりにもその感覚が自然過ぎて、忘れていた……。

「俺は一度降りると言ったぞ？重くて死にそうだった……。」

しかも至近距離で顔を突き合わせて言い合いをしていたのだ、別の状況に見えなくもない……。

「もーっ、誤解されちゃったじゃない！柳鏡のせいなんだからねっ！」

「なぜ俺一人に押しつけようとする？あんたがさっさと降りればそれで済んだ話じゃねえか！」

「柳鏡がやってたらなんでもいやらしく見えるの！わかった？変態の工口大魔神様！」

真っ赤な顔で、照れ隠しのために必死で彼に悪態をつく……。

「あんた、良い根性だな……。仮に百歩も千歩も一万歩も譲って俺が変態の工口大魔神だとしたら、あんたは変態と結婚してることに

なるんだぜ？それでいいのか？女王陛下？」

「うう……。」

やはり、勝ち目はない。すぐに白旗を上げる。

「私が間違っておりまして……。」

「素直でよろしい。」

彼の得意気に笑う様子が、腹立たしい。いつかは一矢報いてやろう。そう決意を新たにする。

「ほら、飯食いにいくぞ。爆弾陛下。」

「ちよつと、何よその爆弾つて！」

先程女官が消えた戸口を、彼が先にくぐった。それに半歩遅れて、彼女がついていく……。それが、二人の一番自然な歩き方だった。

「あーあ、結局全然進まなかったじゃない、片付け。柳鏡のせいなんだからね！」

「さすが八つ当たりの常習犯だな。」

ふと空を見上げる。まだ、白い物がチラチラと舞っている……。

「雪、まだ降ってるね。今夜、冷えるかな……？」

「まあ、いつもよりは寒いだろうな。布団、一枚増やしてくれるように頼んでおくか。」

渡り廊下の床も、いつもより冷たい。靴を履いていても、その冷気は足を伝ってくる。

「一枚で足りるかなあ……。」

「あんた、寒がりだからな。」

曲がり角を曲がる。城の庭園は、うつすらと白くなっていた。この城がそんな風になっているのを見たのは、彼女には生まれて初めてのことだった。

「ま、いいや。いざ寒かったら柳鏡の布団も取って寝ちゃおう！」

悪戯な笑みに返されるのは、いつもの意地悪な笑顔……。

「そんなことになったら、あんたの寝相の悪さが原因で離婚だな。」

「えええーっ！」

本気で不安そうな顔をして、彼女が立ち止まった。その様子に、思

わず吹き出してしまふ……。

「まあ、嫌ならせいぜいお行儀よく寝ることだな。」

「うつつ……。」

絶対に、口論では彼に勝てない。彼は、彼女の戦法を熟知していた。たった一つ、彼が彼女に勝てなくなる秘策があるのだが……。

「あ、そっか！良い方法があつた！」

とてつもなく良いことを思いついた、というように、彼女が笑う。

「何だよ？」

どうせろくなことじゃないんだろうな、と思いながらも、あまりいじめると可哀想なので、仕方なく聞いてやる。

「柳鏡の布団、柳鏡ごと着ちゃえばいいんだ！そしたら、柳鏡も寒くないでしょ？」

彼の体が、ガクンと沈んだ。その様子を、彼女が不思議そうに目を丸く見開いて眺める。彼は、なんとか床に沈み込む前に復活した。

まさか、自分の唯一の弱点が彼女につかれるとは思ってもしなかった。唯一の、秘策……。顔を上げて、彼女とは視線を合わせない。黒いくせ毛が、長い指に掻き上げられた。

「嫌だね。あんたの足、尋常じゃないほど冷たいんだ。こんな寒い日に俺に近付けるなよ。」

「何よー、いつも冷たいだろうと思って遠ざけてあげるのに、勝手に寄って来るの柳鏡の方でしょ！」

珍しく、彼の方が返答に詰まった。いや、言葉の返し方はいくらでもあるのだが、照れ屋な彼には彼女に真実を告げることができない。

「わあ、柳鏡が大人しくなった！私の勝ち！」

その言葉にむっとして、突き動かされる。

「アホ、あんたの足が冷たいままじゃ可哀想だから、仕方なく温めてやってるんだろ！わかれよ、その位！だからあんたは鈍いつて言うんだよ！」

今度は景華が言葉を紡げなくなってしまう、黙る。勝負あつた。またしても、彼の勝ち。だが、なんとなく気恥ずかしい……。視線を、

廊下の外に向ける。

「頼んでないのに……。大体どうして私が壁側なの？この前、頭ぶつけちゃったじゃない！」

頬を赤く染めながらも、手当たり次第に一生懸命彼に反論する。ここまで来たら、なんとしても一勝位したい。

「ああ、あんたなら寝相が良いからぶつけるかもな。だが、いいか？もし部屋側だったら、壁はない。どういふことになるかわかるか？」

「お、落っこちる……。」

「ご名答。」

彼が鼻で笑う。彼女の寝相は、お世辞にも良いとは言えない。そんな彼女を部屋側に寝せれば、どんな惨事が起こるかは目に見えている……。

「大体、不思議なんだよな。どうしたら寝てるのにあんなにもぞもぞと動けるんだよ？」

「知らないよ……。あ、柳鏡がいるせいで寝心地が悪いのかも！」
「離婚だな。」

「ふえー、やだあー！」

慌ててその腕にしがみつく。今彼に離婚なんてされたら、それこそ生きていけない。

「……決めたっ！」

「何をだよ？」

腕に景華をぶらさげたまま、いかにもだるそうに彼が訊ねた。夕食が用意されているはずの仮部屋の戸を開ける。

「それ、ちよつと貸して！」

そう言つて、柳鏡の懷にしまわれていた紙切れを抜き取った。

「……何するんだ？」

ちようど机上におかれていた墨と筆をとる。それから何事かをさらさらと書き加えて、よし、と言つて顔をあげた。柳鏡の視線が、彼女がたつた今書き加えたものに向けられる。

「……第三十四条、むやみに離婚する、なんて言わない。……アホだなあ、あんなの本気にしたのかよ？」

「したよ！」

そう言つてその頬をぷうつと膨らませて、席に着く。彼女の頬が、風船が萎むように一瞬で戻った。

「わあ、苺！」

夕食の膳に添えられていた苺が、彼女の機嫌を一瞬で直してしまつたのだ。その様子に、思わず笑みがこぼれる。そう言えば、彼女の日記帳の好きな食べ物の欄にはずっと苺、と書かれていた……。さりげなく自分の膳の苺を彼女の膳に移してやりながら、訊ねる。

「そう言えば、あんだ、あの日記帳どうするんだ？ やっぱり取つておくだろ？」

「うーん、あそこまで柳鏡の悪口ばかり書いてあると、申し訳ないなあ……。」「

食事に手をつけるが、なんとなく上の空だ。他の部分も気になつているのかもしれない。

「いや、あの位は予想の範囲内だったぞ？ 考えてもみるよ、あんだの日記帳だぜ？ ろくなことが書いてある訳がない。」「

「失礼ねー！ 今はまともなこと書いてるわ、よ……。」「

彼の片眉が、意地悪く吊り上がった。失言だった。これでは、今も日記をつけているということばらしてしまったようなものだ……。

「今は、ね……。さあ、どこに隠してあるのかな？」

「な、内緒！」

食事に集中しているふりをする。彼の笑顔が、朝と一緒に邪悪なものを含んでいる……。

「さあ、さつさと話しておいた方が身のためじゃないか？」

無視。彼には、死んでも見せられない。

「お兄さんは気が長い方じゃないんだがなあ……。」「

朝も聞いたような台詞。それでも、景華の口は固い……。私は貝、と自分に暗示をかけているから……。また、あの紙切れが出てきた。

「第十七条、隠し事は……。」

「隠し事じゃないもん！内緒事！」

「同じじゃねえか……。」

開き直る彼女にそう言うが、彼女は涼しい顔で食事を続けている。

「そう言えば、破った時には罰則つていうのがあったよな……？あ

あ、そうそう。床で寝る、だっけ？この寒いのに御苦労だなあ……。」

「

ギクリ。彼女の手が止まった。顔色が変わる……。それから、また開き直る。

「い、いいの！内緒事だから、隠し事じゃないもん！」

「無茶苦茶な論理だな……。」

仕方なく諦めて、彼も食事に取り掛かった。いや、本当は諦めてはおらず、いつか見つけてやろうと思っていた。見つけて爆死するのは自分の方だと言うことを、彼は知らない……。

『どこから見つかからない場所に隠さなきゃ……。』

彼女の今の日記帳は、彼らの寝台と壁の隙間に隠してあって、その表紙に月桂樹の葉が飾られている。大会で優勝した柳鏡に被せた、あの冠の一部だ。そして、その中身こそ彼には見せられない。書かれているのが悪口なら笑い事で済ませられるが、彼に対する素直な気持ちがいっぱいいっぱいに綴られているのだから、死んでも見せられないのだ。

「ねえ、柳鏡？」

「何だよ？」

いつもの調子で、面倒そうな返事が返って来た。景華は、それに微笑んだ。

「また、寝る前に一緒に見ようね、日記帳！」

「俺の悪口を書いていない所があるならな……。」

自分と同じ位素直でない彼は、決して素直な言葉は返して来ない。

それでも、その行動には彼の素直な答えが滲み出ている。たとえば今、一瞬彼の手がピタリと止まったのがそうだ。その了承のサイン

に、軽く微笑む。今度は、彼の方が顔を上げた。

「ところであんた、あの部屋何に使う気だよ？空き部屋にはしないだろ？」

彼が気にしていたのは、彼女が部屋を移った後に空いてしまう、今の部屋のことだった。あの部屋には、二人の幼少期からの思い出がいつぱいいつぱいに詰まっている……。

「あ、あの部屋はね、いつ使うことになっても良いように空けておくの。」

その言葉に、彼は不機嫌そうに眉根を寄せた。

「なんだよ、賓客用の客室にでもする気かよ？」

彼にとつて、あの部屋はこの城の中でも特別な場所だった。城に遊びに来た彼を、いつも彼女が待っていたのがあの部屋だったから……。そんな場所だから、他人の手で蹂躪されるのはなんとなく面白くなかった。

「違うよ。……でも、いつでも良いように空けておくの。」

「はあ？だから、何の部屋にするんだよ？」

ほんのりと頬を上気させて俯く彼女に、彼は苛立ちを隠さずに訊ねた。彼女の顔が、勢い良く上げられる。

「もう、わかってよ！柳鏡鈍いつ！」

「だから、さっぱりわからねえよ！大体、あんたに鈍いつて言われるようじゃ終わりじゃねえか！」

「こ・ど・も・部・屋！」

柳鏡が、ピタリとその動きを止めた。まるで、一瞬にして彫像になつてしまったようだ……。彼の顔が、みるみる赤くなつていく……。彼は、またしても彼女が仕掛けた爆弾に被爆してしまった。どうやら、かなり重傷のようだ……。

「……わかった？」

「ああ……。」

目は合わせずに、お互いに自分の手元にその視線を落とす。そう遠くない将来に、彼らも自分たちの子供を持つことになるに違いない。

景華はそうも考えて、あの部屋を移ることに決めたのだ。父親と母親の思い出がたくさん詰まっている部屋で、自分たちの子を育ててやりたい。そんな思いがあった。だが、彼はどう思ったのだろうか……？

「嫌だった……？」

彼の顔色を窺いながら、訊ねる。まだ赤い頬のまま、彼は必死になつて食事を続けていた。相当動揺しているに違いない、彼女が見ている間だけで、二度も箸を取り落としそうになったのだ……。

「ねえ、聞いてる？」

「ああ……。」

返事を促そうと思つて彼にそう言葉をかけるが、はかばかしい返事は返つて来ない……。

「いいんじゃないか……？」

やつと思考回路が回復したらしい、彼から賛成の返事が返つて来た。

「うん！そうでしょ？」

その言葉に嬉しくなつて、思い切り笑顔でそう答えた。彼らがそう決めた部屋に入る最初の住人が誕生するのは、これから一年半も後の話だった……。

景華の日記。

十七歳、十二月二十九日。今日は、片付けをしていて昔の日記を見つけました。柳鏡に見つかったのはまずかったと思います。だって、柳鏡の悪口ばかり書いてあつたんだもの！この日記帳の存在も知られてしまいました。今は死んでも見せられません。恥ずかしいもん！この日記帳は、二人がおじいちゃんとおばあちゃんになつてから見せます。……柳鏡、おじいちゃんになんてなるのかしら？今はこんなにステキだから、信じられません。これで終わ……。

あつ、そうそう。私が使っていた部屋を子供部屋にしたい、って言ったら、柳鏡も賛成してくれました。二人の思い出がいっぱいの大事な部屋だもん、とっておきのことに使いたいよね！あ、夫婦の約

束事は三十四条まで増えました。だって、柳鏡がすぐ離婚だなんて言って脅すんだもの。そんなことされたら、死んじゃう！あと、今日の夕食には苺がついていました。柳鏡がこっそり苺くれたの、本当はちゃんと知っていました。でも、わざとお礼は言わなかったの。柳鏡、照れ屋さんだもんね！日記帳の好きな食べ物の欄に苺、って書いてあったのを見てくれたんだと思います。やったね！今度こそ終わりま……せん。

やっぱり懺悔しておきます。今日って書いてあるけど、この日記は日付が変わってから書きました。ごめんなさい。柳鏡に見つからないようにしたら、日付が変わっちゃったんです。柳鏡のせいです。なんか随分長くなっちゃった。一週間にページの決まりだったのに無理そうなので、今日だけで一ページ書きます。今日は本当に色んなことが書きたかったし、良いよね？せっかく見せるって決めたんだから、柳鏡のことを書こうかな？

柳鏡のどこが好きなの？って訊かれたら、正直言っただえられません。だって、自分でもよくわからないもの！でも、一番好きなのは私のわがママを絶対に叶えてくれる所です。あ、あと、本当は優しい所も。口の悪さで誤魔化しているけど、ちゃんとわかっています。……今は、ね。それと、怒られるかもしれないけど、顔も好きです。

いつも吊り目で機嫌悪そうだけど、目の色は絶対穏やかで優しいです。それに、髪も好きです。黒のくせ毛。切り揃えるのが面倒だからって伸ばしっ放しにしないように、ちゃんと見張ります。あとは……ああ、もう！書ききれないよぉ！……全部！全部好き！よし、書ききった！あ、いい加減じゃないよ！本当に、全部！

それから、最後に。二十九日は、珍しく城にも雪が降りました。結局、一晩中やまなかったみたいです。でも、ちっとも寒くありませんでした。ありがとう、柳鏡。大好き！

外伝 爆弾陛下と龍神 わがまま姫の日記帳（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。異国恋歌く龍神の華く最終話、「爆弾陛下と龍神」をお届けします。今回は主人公二人がこれでもか、と言いたくなってしまう位にイチャイチャしていますが、新婚さんなので、読者様の広いお心をもって見逃してやって下さい。

番外編を含めた全てを無事に完結させることができて安心しているのもありますが、登場人物たちには非常に愛着を感じており、彼らと別れなければならぬということに寂しさも感じています。

最後の最後までお付き合い下さった読者の皆様、本当にありがとうございます。ございました。もしよろしければ、感想、評価、なんでも良いのでいただけないでしょうか。今後の励みにさせていただけたらな、と思います。ここまでお読み下さった皆様に、深く感謝いたします。ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0315k/>

異国恋歌 ～ 龍神の華 ～

2010年10月10日19時58分発行